令和元年度
ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉　川　大　学

大学 FD 委員会

大学院 FD 委員会

は　じ　め　に

—FD の組織的推進をめざして—

玉川大学は、ファカルティ・ディベロップメント（FD）をミクロ、ミドル、マクロの三層の立場から推進しています。ミクロ・レベルの FD の目的は、教員個々の授業と教授法の開発にあります。通常、多くの大学で FD の名のもとに行われるのがこうした活動です。本学でも、大学 FD 委員会が中心になって行う FD 活動はミクロ・レベルが中心です。一方、ミドル・レベルは教務主任等によるカリキュラム・プログラムの開発が目的です。教務委員会や大学院教務委員会における全学カリキュラムの見直しや各学部・研究科の教務担当者会における専門分野のカリキュラム改善のための作業がこれに該当します。さらに、マクロ・レベルは、管理者による大学組織の教育環境および教育制度の開発が目的です。こちらもミドル・レベルと同様に、そのための具体的な FD 研修会等が開催されるわけではありません。現行の大学部長会や大学院研究科長会の一環として定期的に行われる教育研究活動等点検調査委員会などの作業が FD 活動に相当します。

ミドル・レベルとマクロ・レベルの FD 活動は、その性格上、全学的な視点と学部・研究科的な視点が要求されますが、ミクロ・レベルの FD は、長いあいだ各教員の努力義務のように理解されてきました。したがって、ワークショップや講演会の参加についても教員の自主性に委ねられ、学部・研究科や全学が一体となって授業や教授法の開発に取り組んできたとは言い難い状況にありました。しかし、十数年前より、本学では、複数の学部で、また教学部が中心となって積極的に授業改善に取り組んでいます。特に、平成 26 年度以降は文部科学省の教育再生加速プログラム（AP）の採択を受け、アクティブ・ラーニングやルーブリック等に関する講演会やワークショップを開催し、アクティブ・ラーニングの推進と学生の学修成果の可視化に努めてまいりました。令和元年度をもって AP は終了いたしますが、今後も引き続き、個々の教員がファカルティの一員として有機的に FD にかかわれる体制を堅持していきたいと考えています。

大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会委員長
教学部長　中 村 好 雄

目　　次

Ⅰ　大学 FD 活動状況と今後の計画

１．大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会
（１）　委員会の目的 1
（２）　委員構成 1
（３）　今年度の活動計画および課題 2
（４）　活動状況 2
（５）　活動の成果 4
（６）　今後に向けて 5
２．学部の活動 6
３．教師教育リサーチセンターの活動 74
４．ELF センターの活動 77
５．ユニバーシティ・スタンダード科目の「授業評価アンケート」 93

Ⅱ　大学院 FD 活動報告

各研究科の活動 130

Ⅲ　教員研修

新任教員研修会
（１）　研修プログラム内容 140
（２）　配付資料・参考資料 141
（３）　実施の成果 142
（４）　課題と改善点 142

参考資料

１．大学 FD 委員会の議事内容 144
２．大学院 FD 委員会の議事内容 147
３．US 科目「授業評価アンケート」様式 148
４．玉川大学 FD 委員会規程 150
５．玉川大学大学院 FD 委員会規程 152

※本文中の記載内容について
・役職名称は、令和元年度当時の記載とした。

Ⅰ　大学 FD 活動状況と今後の計画

１．大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会

（１）委員会の目的

本委員会は、本学教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的としている。また、FD 活動を行う目的を、以下のとおり明確にしている。

① 玉川大学の教育理念を実現するため。
② 21 世紀の玉川教育を支える教員を育成するため。
③ 大学大衆化時代に対応するため。
④ 競争優位性（受験生の大学選択等）を確保するため。

（２）委員構成

＜大学 FD 委員会＞

委員等	所属・職名	氏名
委員長	教学部長	中村好雄
委員	文学部	長谷川洋二
委員	農学部	宮田徹
委員	工学部	黒田潔
委員	経営学部	長谷川英伸
委員	教育学部	高平小百合
委員	芸術学部	林三雄
委員	リベラルアーツ学部	梶川祥世
委員	観光学部	小林直樹
委員	ＥＬＦセンター	チャイクル，ラサミ
事務担当	教学部事務次長	山崎千鶴
事務担当	教学部教務課長	光森多佳子
事務担当	教学部授業運営課長	島田健二

＜大学院 FD 委員会＞

委員等	所属・職名	氏名
委員長	教学部長	中村好雄
委員	文学研究科人間学専攻	宇井美代子
委員	文学研究科英語教育専攻	工藤洋路
委員	農学研究科資源生物学専攻	有泉高史

委　　員	工学研究科システム科学専攻	加藤研太郎
委　　員	工学研究科機械工学専攻	小酒井正和
委　　員	工学研究科電子情報工学専攻	塩澤秀和
委　　員	マネジメント研究科マネジメント専攻	永井一志
委　　員	教育学研究科教育学専攻	山口意友
委　　員	教育学研究科教職専攻	谷　和樹
委　　員	脳科学研究科脳科学専攻/心の科学専攻	酒井　裕
事務担当	教学部事務次長	山崎千鶴
事務担当	教学部教務課長	光森多佳子
事務担当	教学部授業運営課長	島田健二

（３）今年度の活動計画および課題

Tamagawa Vision 2020 の Action Plan 2019 に沿って取り組んだ。すなわち、

１．各分野の学問分野に応じた教授法の研究開発の開始
アクティブ･ラーニング、また変化する高等教育に沿ったテーマの研修会を開催し、学外にも公開していく。ティーチング・ポートフォリオを全専任教員に活用してもらうための研修会等、方策を考え、実施していく。

２．双方向型授業、問題解決型授業（PBL）の研究会発足
アクティブ・ラーニング ハンドブックを作成し、WEB にて公開する。

３．全授業科目の成績評価分布を公表する
ルーブリック指標による成績評価に関するワークショップに累積として全専任教員が参加する。シラバス作成マニュアルの内容を段階的に明確に、厳格にしていく。

４．FDer の養成プログラムの作成と実施
FDer の役割を明確にする。

５．玉川大学教職員 Credo の草稿の作成
「Tamagawa Vision 100 （2029）」の「教職員の行動指針」を本学の Credo として活用することを検討する。

（４）活動状況

＜令和元年度＞

5 月 17 日	第１回　大学 FD 委員会　開催
5 月 22 日	第１回　大学院 FD 委員会　開催
6 月 28 日	ティーチング・アシスタント研修会　開催
7 月 11 日	第２回　大学 FD 委員会　開催
8 月 8 日	第２回　大学院 FD 委員会　開催
9 月 13 日	第３回　大学 FD 委員会　開催
10 月 29 日	ルーブリック・ワークショップ「ルーブリック評価スタートアップ～評価の

	原則から組織での活用まで～」（講師：高知大学　俣野秀典氏）　開催
11 月 19 日	第 4 回　大学 FD 委員会　開催
12 月 17 日	アクティブ・ラーニング ワークショップ「学習環境・状況間のシームレスな接続を意図した授業デザイン」（講師：東京大学　山本良太氏）　開催
1 月 22 日	第 5 回　大学 FD 委員会　開催
2 月 1 日	玉川大学 AP フォーラム 2019「アクティブ・ラーニングと学修成果の可視化～AP 事業の現状と成果～」　開催 基調講演　「大学教育改革の回顧と展望」 （講師：文部科学省　河本達毅氏） 事例報告①　「玉川大学の AP 事業の現状と成果」 （講師：玉川大学　中村好雄） 事例報告②　「東京都市大学の教育改革」 （講師：東京都市大学　皆川勝氏） 事例報告③　「大阪府立大学の AP 事業の成果と課題」 （講師：大阪府立大学　畑野快氏） パネルディスカッション （パネリスト：文部科学省　河本達毅氏、東京都市大学　皆川勝氏、大阪府立大学　畑野快氏、玉川大学　中村好雄）
2 月 21 日	令和元年度　大学教育力研修　開催 基調講演「全人教育について ―小原國芳と草創期の玉川学園を中心に―」 （講師：玉川大学　佐久間裕之） 分科会①　アクティブ・ラーニング　ワークショップ 「アクティブ・ラーニングを促す授業設計 WS」 （講師：芝浦工業大学　榊原暢久氏） 分科会②　アクティブ・ラーニング　ワークショップ 「実践を通してアクティブ・ラーニングを考える」 （講師：独立行政法人教職員支援機構　宮迫隆浩氏） 分科会③　「改正著作権法第 35 条の施行にむけた大学の対応について」 （講師：山口大学　木村友久氏） 分科会④　ルーブリック・ワークショップ 「ルーブリック評価スタートアップ ～評価の原則から組織での活用まで～」 （講師：高知大学　俣野秀典氏） 分科会⑤・⑥「アクティブ・ラーニングについての各学部事例報告」
3 月 5 日 **～6 日**	令和元年度　非常勤教員研修会 ※新型コロナウイルス感染症対策のため開催延期
3 月 16 日	第 6 回　大学 FD 委員会　開催
3 月 26 日	令和元年度　新任教員研修会　開催

その他、学生による授業評価アンケート、第三者によるシラバス確認など、例年どおりに実施した。授業評価アンケートは、US 科目については教学部教務課が、各学部開講科目については開講学部が実施した。シラバスを A（履修登録に資するために公開するもの）と B（履修登録をした学生のみ見られるもの）に分け、シラバス A については科目開講年度の前年度 1 月～2 月に全科目を確認、シラバス B については、春学期科目は前年度の 3 月、秋学期科目は当該年度の 7 月～8 月に確認している。また、科目の特性により確認する点が異なることから、教育職員免許状取得に関わる科目については教師教育リサーチセンターが、それ以外の科目については教学部教務課が担当した。なお、今年度はシラバス作成のマニュアルを修正し、よりわかりやすく示した。

ルーブリック・ワークショップやアクティブ・ラーニング ワークショップ、玉川大学 AP フォーラム、大学教育力研修は、平成 26 年度に採択された「文部科学省　大学教育再生加速プログラム（AP)」（以下 AP）の取組の一環として実施した。各研修会の成果については後述するが、平成 26 年から開始したルーブリック・ワークショップは、今年度をもって専任教員全員が受講することができた。

非常勤教員のみを対象とした研修会も AP の取組の一環である。当該研修会は平成 27 年度より実施しているものであるが、それまでは本学の教育方針や今後の方向性などは専任教員に対してのみ情報共有が図られてきた。しかし、非常勤の教員であっても本学の教育方針に基づいた教育および授業を行うことを求めており、今の本学の取組について説明する機会を設けている。

しかしながら、3 月に予定していた今年度の非常勤教員研修会については、文学部 FDer を講師として開催準備を進めていたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の対応により、開催を次年度に見送った。

令和 2 年 3 月には、今までに開催した研修会やアクティブ・ラーニングに関する教員調査、各学部におけるアクティブ・ラーニングの事例などをまとめた「アクティブ・ラーニング ハンドブック」を本学ホームページに公開した。

（５）活動の成果

今年度の活動計画に基づき、教員と職員が同じスタンスに立って、教職協働のもと活発な FD 活動を行うことができた。

また、前項のとおり、AP に沿って複数の研修会等を開催した。これらは、アクティブ・ラーニングの活用と学修成果の可視化を目的とするものであり、一定の理解は得られたものと考えている。2 月に開催した大学教育力研修については、玉川の教育の原点でもある「全人教育」をテーマとした基調講演、さらにはアクティブ・ラーニングやルーブリックをテーマとした 6 つの分科会を開催し、教職員及び学外からの参加者を含め約 300 名の参加があった。分科会においては、参加者から「いずれも新しい知見に触れると同時に自らの取り組みを振り返る機会となり、授業に活用したい」という感想が寄せられた。

ルーブリック・ワークショップは、大学教育力研修の分科会を含めて 2 回開催し、10 月には

16 名、2 月には 34 名が参加した。「これからルーブリック指標をもとにした成績評価に取り組むためにはどのようにしたらよいか」を中心とした内容で開催し、参加者からは、「現在の担当科目で使用したい。理解度をみたり、参考文献の有無などもみてみたい」、「答えのない問題に対して、どのような評価基準を考えるかが今後の課題になるかもしれない」などの感想が寄せられ、今後の活用が期待される。なお、本年度をもって、全専任教員が受講を完了した。

FDer の養成については、平成 31 年 2 月 28 日～3 月 2 日開催の FDer 養成研修会を各学部 FD 担当の 8 名が受講し、各学部 1 名以上の FDer を配置することができた。この FDer を中心に、本学及び各学部のアクティブ・ラーニングやルーブリック指標による成績評価の拡充をはじめとした FD 活動を推進していく。

3 月には、本学ホームページ上にアクティブ・ラーニング ハンドブックを掲載した。アクティブ・ラーニングを実施している科目の体系化を行うことで、それぞれの科目でどのようにアクティブ・ラーニングが行われているかを、学生を含めて明示することができた。

（６）今後に向けて

AP は令和元年度をもって採択の期間が満了したが、次年度においても、アクティブ・ラーニングをテーマとしたワークショップ、ルーブリック指標による評価に関するワークショップ、非常勤教員対象研修会等、各種研修会を学内で継続して開催していく。なお、大学教育力研修については次年度以降も学内の教員のみを対象とするだけでなく、学外にも公開する予定である。

また、FDer を各学部に配置することで各学部の FD 活動が一層活発になることも期待できる一方、大学として、今後 FD をどのように進めていくのか、FDer にどのような役割を担ってもらいたいのかを明確にする必要がある。FDer のガイドラインなどを示しながら、これまでの各学部の FD 担当、大学 FD 委員の役割と、新たな FDer の役割の違いを明確にすることについて、引き続き大学 FD 委員会を中心に検討していく。

今年度計画の一つでもあるティーチング・ポートフォリオの活用については、学内ポータルサイトのティーチング・ポートフォリオの導入により全専任教員が作成できる体制は整っているが、その入力率向上、活用の拡大方策については、引き続き検討が必要である。

前項の通り、アクティブ・ラーニング ハンドブックを本学ホームページ上に公開することができたが、今後はアクティブ・ラーニングの事例内容が適切かを再度検討し、必要に応じて内容を更新していく。

シラバスについては、作成マニュアルをよりわかりやすく修正したが、シラバス記載内容の厳格化についてはカリキュラムの内容にあわせた確認が必要であり、今後、どのように確認を行い、厳格にチェックを行うかについて検討する必要がある。

最後に玉川大学教職員 Credo の草稿の作成については、「Tamagawa Vision 100 (2029)」の「教職員の行動指針」を本学の Credo として活用することを計画していたが、「Tamagawa Vision 100 (2029)」の策定が延期となったことにより、次年度も引き続き検討を行う。

２．学部の活動

令和元年度における各学部 FD 活動の状況を一覧にする。

学部	各学部 FD 委員会の構成人数	各学部 FD 委員会の開催回数	学生による授業評価アンケートの実施			学部研修会
			実施時期	専任対象	公表	
文 学 部	6 名	1 回	秋学期終了後	全員	学内外（Web）*1	学内実施
農 学 部	9 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内外（Web）	学内実施
工 学 部	6 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内外（Web） 学内（冊子）*2	各学期終了後 学内実施
経 営 学 部	5 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後 *3	全員	学内外（Web）	学内実施
教育学部（通信教育課程含）	7 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後 （通信教育課程はスクーリングの都度）	全員	学内	学内実施
芸術学部	7 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内	学内実施
ﾘﾍﾞﾗﾙｱｰﾂ学部	5 名	2 回	秋学期終了後	全員	学内外（Web）	学内外実施
観光学部	5 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内外（Web）	学内実施

*1: 文学部における学生によるアンケート結果の公表は英語教育学科で実施する予定である。
*2: 学生による授業評価アンケート結果は、学内外向けには総括内容を大学 HP（Web）で、学内向けには全内容の詳細を冊子として 8 号館玄関ロビーにて、それぞれ公表している。
*3: 対象全科目を春学期、秋学期いずれかで 1 回実施（重複実施はせず）。
※ユニバーシティ・スタンダード科目についての学生によるアンケートは別途実施している。

§　文学部

1　FD 活動への取組理念・目標

大学に対する社会からの期待とニーズの多様化と大学生の学力低下という現実に対応すべく、FD による教育力の向上によって、時代に即した、そして普遍性を兼ね備えた大学教育を実現すべく努力することを文学部の FD 活動への取組理念とする。就労意識の変化に対応した学生へのキャリア教育ないし就職指導も、大学にとって重要性を増しているのに加え、文学部では新設学科への移行期を終え、新しい文学部を発展させるため、FD の重要性はより増している。

このような現状の下、一人ひとりの教員が学部のディプロマ・ポリシーに則り FD 活動に臨み、教員全員が主体的に FD 活動に参加し、組織的な FD 活動を実現することを目標としている。

2　学部における FD 活動の組織構成と役割

文学部長および主任会（教務主任、学生主任、国語教育学科主任、英語教育学科主任）のもとに、文学部 FD 委員と、国語教育学科、英語教育学科の FD 担当（国語教育学科は文学部 FD 委員が兼務、英語教育学科は英語教育学科主任が兼務）の合計 6 名で文学部 FD 委員会を組織している。

3　令和元年度の活動内容

（1）研修会

文学部では以下 2 つの研修会を実施した。

A 「人事部人事課ハラスメント防止研修」

① 概要（目的を含む）

ハラスメントを防止し、働きやすい職場環境をつくるため、必要な知識を身につけることを目的に、令和元年 9 月 26 日（木）、大学教育棟 2014 793 会議室にて実施。所要時間 30 分。

② 到達目標

文学部全専任教員の参加

③ 活動内容

「ハラスメントのない大学に　ハラスメントの防止に向けて」と題した講話を本学園顧問弁護士より聞く。具体的には、1. ハラスメントについて教職員間で共通の認識を持つこと；2. 自分や他者のどんな言動がハラスメントになるのか；3. ハラスメントの影響；4. ハラスメントへの対応の仕方；5. コミュニケーション・職場内の意識の大切さを知ること、について、弁護士の講演から学んだ。

④ 評価

欠席者 2 名（うち、休職者 1 名、体調不良者 1 名）。やむを得ぬ事情による欠席者を除けば全専任教員が研修に参加。目標数値は達成されたものと考える。

B 文学部 FD 研修会

① 概要（目的を含む）

文学部 FD の課題を知り、ディプロマ・ポリシーに掲げる人材育成に貢献することを目的に、令和 2 年 2 月 19 日（水）、大学教育棟 2014 793 会議室にて実施。所要時間 100 分。

② 到達目標

文学部専任教員が所属学部の FD の課題を知り、自らの教育活動を FD の観点から捉え直すことができるようになる。

③ 活動内容

「これからの FD の話をしよう：文学部 FD の課題を知る 1」と題して、前半は、宇井美代子文学部教授による、各種テストのデータ分析報告、後半は 4～5 名程度の班に分かれて文学部 FD の課題に関するグループ討議を行った。

④ 評価

本目的を掲げて実施したものとしては文学部 FD 委員会初の自主企画研修会であったが、やむを得ぬ事情で参加できなかった者を除けば、所属教員のほぼ 100%の参加を得た。会の終了後、参加者からは、会議とは異なる雰囲気の中で、闊達な意見交換ができた、横の繋がりの重要性を実感したなど、研修会に参加した意義を好意的に受け止める感想ばかりが寄せられた。今回のアクションを次年度の活動につなげていきたい。

（2）授業設計・成績評価ミーティング（国語教育学科）

文学部国語教育学科では以下 4 つの科目で授業設計・成績評価ミーティングを行った。

A 「一年次セミナー101」「一年次セミナー102」

① 概要（目的を含む）

複数教員が授業担当をする初年次教育の科目である「一年次セミナー101」「一年次セミナー102」は、まとめ役を座長として授業の計画・内容・成績評価に関する合意形成を目的とした会議を月に 1 度 2 時間程度行った。

② 到達目標

授業担当者間において、科目の教育目標達成のための合意形成を得る。

③ 活動内容

各教員の授業内容の報告とそれに対する意見交換、授業改善の提案、成績評価に関する検討、他科目との連携の可能性の検討などを行った。さらに、授業内容の充実を図るため外部講師を活用したり、授業の成果の一部をコスモス祭で展示・発表するための準備や、文学部及びリベラルアーツ学部の 4 年生（教員内定者、民間企業内定者、大学院進学予定者）を招いてのキャリアについてのワークショップの準備をどのように学生に取り組ませるかなども議論した。

④ 評価

学生による授業評価のアンケートによれば、春学期に関しては、大学、学部・学科、ク

ラスになじむのに効果があったようだ。大学共通カリキュラムを基本に、学科独自の内容へとどのようにアレンジしていくかという点や『大学生活ナビ』の有効な利用方法、授業時に学生たちをいかに主体的に活動させるかという点について、今後もなお検討を要する。

B 「キャリアセミナーA」

① 概要

複数教員が授業を担当する「キャリアセミナーA」については、まとめ役が授業計画・内容・成績評価に関する素案を作成した。その検討と合意形成に関しては、ミーティングを期初・中間・期末に行ったほか、メールでのやり取りを中心とした。

② 到達目標

授業担当者間において、科目の教育目標達成のための合意形成を得る。

③ 活動内容

まとめ役が作成した素案をもとに、授業計画、授業内容、レポート課題、成績評価について、担当者全員で意見交換を行った。実際の授業にあたっては、授業内容ごとに成績評価とリンクさせて到達目標を明確にし、教員間だけでなく学生とも同じものを共有することを重視した。原則として、各回の授業後にメール・口頭で出欠席状況や問題点の共有、意見交換を行った。

④ 評価

成績評価は授業内容ごとに観点を明確にし、5 段階・3 段階等できるだけシンプルなものの累積とすることで教員間の評価のブレを少なくした。学生による授業評価アンケートを Bb で行ったほか、振り返りシートという形式で授業内容の満足度を把握した。

C 「キャリアセミナーB」

① 概要（目的を含む）

複数教員が授業を担当する科目である「キャリアセミナーB」については、まとめ役が授業の計画・内容・ルーブリック・成績評価に関する素案を作成し、その検討と合意形成を目的とした会議を平均月 2 回（各 1 時間ほど）行った。

各回の授業を必ず 2 人以上の教員が担当し、授業前には授業内容について検討し、授業中には相互に講義や学生支援を参観し、それぞれの講義や学生支援に対する意見交換・授業改善の提案を行った。

② 到達目標

授業担当者間において、科目の教育目標達成のための合意形成を得る。

③ 活動内容

授業担当教員全員が意見交換し、授業計画、授業内容の提案・レポート課題作成・ルーブリック作成を行った。最後に、成績評価に関する検討会を開催した。

各回の授業を必ず 2 人以上の教員が担当した。授業前には授業内容について検討し、授業中には相互に講義や学生支援を参観し、それぞれの講義や学生支援に対する意見交

換・授業改善の提案を行い、学生の取り組みなど次の回の授業担当者に口頭やメールで伝達した。また、担当者全員でレポート課題作成・成績評価に関する検討などを行った。

④ 評価

「キャリアセミナーB」はレポート課題に対しルーブリックによる成績評価を行い、最後に全員で確認した。また、授業担当者が相互に授業参観を行っており、FD 活動に基づいていると考えられる。ただし、学生による授業評価のアンケートは行っていない。

（3）学生による授業評価アンケート（英語教育学科）

① 概要（目的を含む）

英語教育学科が開設している授業について、授業評価アンケートを実施した。個々の教員が、担当する授業における学生の学びや感想を振り返り、次年度に改善するための指標を得ることが目的である。

② 到達目標

教員の意図・認識と学生の受け止め方・実態との間にどのような違いがあるかを検証し、次年度の授業改善に具体的に活かす。

③ 活動内容

実 施 時 期：秋学期

対 象 科 目：英語教育学科の教育課程表にある科目のうち、US 科目およびセミナーを除く科目で、実際に開講されたものを対象とした。令和元年度より学科カリキュラムを改訂したことから 100 番台の科目を軸に、200～400 番台についても新カリキュラムで継続されるものを抽出した。最終的な対象科目は 12 科目で、クラス数が 20 クラス、受講者数は 469 名であった。

集　　計：業者に委託して、各クラス別、カテゴリー別、全体の 3 レベルで集計する。集計作業は令和 2 年 3 月末に完了した。

ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ：対象科目の各授業担当者にはアンケート原票、クラス別集計結果およびカテゴリー別集計結果をフィードバックし、全体の集計結果は大学ホームページ上に公開する予定である。

④ 評価

アンケートは予定どおり実施したが、上述のように集計作業が完了したばかりであるため、令和 2 年 4 月以降に総括を行いたい。

（4）海外留学プログラムの英語運用能力に関する効果の検証

① 概要（目的を含む）

英語教育学科では、2 年次秋学期から 3 年次春学期にかけて留学することを卒業要件の一つとして定めている。そこで、留学制度の効果のうち、特に英語運用能力の向上について検証するため、留学前後で IELTS の受験を実施している。IELTS（International English Language Testing System）とは、英国や米国を含む世界 140 か国 10,000 機関が認定する、海外留学に必要な英語運用能力を測定するのに適した英語運用能力判定テ

ストである。IELTS の受験にあたり、平成 30 年度に引き続き、令和元年度も学部等改革推進制度の支援を受けている。

② 到達目標

- 留学前の学修が、留学先大学での学びにどのように役立っているのかを把握する。
- 英語運用能力の 4 技能について、留学前後でどのように変化するのかを客観的な指標をもとに把握する。
- 上記の結果をもとに、英語教育学科の授業およびカリキュラムを改善する。

③ 活動内容

当初は留学からの帰国から間もない 7 月 27 日（土）に IELTS を実施した。その結果をもとに、英語教育学科第 3 期生（平成 29 年度入学生）の留学前と留学後の IELTS スコアを検証した。

④ 評価

第 1 期生、第 2 期生と同様に、第 3 期生も 4 技能別スコアおよび総合スコアの全てにおいて留学後のほうが高いことが分かった。総合スコアの伸びは、第 1 期生よりは低かったものの、第 2 期生よりは高かった。昨年度の調査で浮かび上がった、やや低めの第 2 期生の結果は、留学後少し時間が経ってからの実施であったことに起因している可能性が示唆されている。この点については、第 4 期生の結果も見ながら、さらに慎重な分析が必要である。4 技能別スコアについては、第 3 期生もスピーキングとライティングという産出技能における伸びが大きく、第 1 期生、第 2 期生と同様の傾向を見せた。こうした結果も踏まえながら、留学前後を中心に、カリキュラムの再検討を進めたい。

（5）学外セミナー等への教員派遣

① 概要（目的を含む）

他大学での FD 活動の取組方法やその成果についての情報を収集し、文学部の FD 活動に活かすため、学外で開催されるセミナーに教員を派遣する。

② 到達目標

文学部専任教員の 20%を何らかの学外 FD 研修会に派遣する。

③ 活動内容

1. 第 25 回 FD フォーラム（公益財団法人　大学コンソーシアム京都主催）

開催日：令和 2 年 2 月 29 日（土）・3 月 1 日（日）

派　遣：0 名

※当初 1 名（英語教育学科）派遣を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大に伴いフォーラムがキャンセルとなり、派遣は叶わなかった。

2. 第 26 回大学教育研究フォーラム（京都大学高等教育研究開発推進センター主催）

開催日：令和 2 年 3 月 18 日（水）・19 日（木）

派　遣：1 名（国語教育学科）

④ 評価

第 25 回 FD フォーラムは、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、予定されていた予定

されていた派遣も叶わなかった。

また、第 26 回大学教育研究フォーラムへは当初 5 名（国語教育学科 4 名、英語教育学科 2 名）内 4 名はポスター発表の予定であったが、同じく新型コロナウイルス感染拡大防止のために集会は中止され、オンライン開催となった。国語教育学科から 1 名だけオンラインにより参加し、他は参加を取りやめた。年度末に予定されているフォーラムだけに、キャンセルになると代替となる研修を設定することが困難である。

派遣はやむを得ず中止したが、発表準備とオンライン参加で得た知見を今後学部、学科の FD 活動に還元していきたい。

4　昨年度（平成 30 年度）に提案された予定・課題の達成度について

1）FD 研修会の企画：実施の運びとなり、学部の課題を全所属教員とともに検証する機会となった。

2）国語教育学科授業評価アンケートの実施：授業改善の取り組みの一環として授業評価アンケート実施に向けた取り組みを加速させたが、学科予算、実施までのスケジュール調整、システム上の問題等を理由に実施見送りとなった。実施に至らなかった点では課題を抱えたままだが、費用対効果、実施の簡便性、授業改善へ結びつけていく方法、実施に向けての課題それぞれにおいて知見を深めることができたのは大きな収穫だった。

5　今後（令和 2 年度以降）の予定・課題について

従来の活動の継続とその活性化をさらに推進する。とりわけ次の 2 件を来年度の主要課題としたい。

1　文学部 FD 研修会の機会を設けて、学部の課題を検証することを継続的に行っていきたい。

2　文学部全体での授業評価アンケート実施に向けたシステム構築を行っていく。

§　農学部

1　FD 活動への取組理念・目標

玉川大学の教育理念に基づいた教育を実現するため、学生の学修レベルを農学部教員が理解し、授業の内容および方法の改善、研修会への積極的な参加を、大学 FD 委員会と協調して促進する。農学部では実験実習科目が多いことから、講義科目との連携によって、学生が主体的に学修できる教育環境の充実を考える。専任教員および非常勤講師は学生による授業評価アンケートを実施し、授業改善への意識を高める。さらに授業評価の結果を振り返り、改善方法を検討して教員間で共有できるようにする。学部内では、主任会メンバーを中心に各教員との情報交換を行い、学修環境の向上に努める。これらを通して、教員は自らの教育力向上に対する意識を高め、社会に貢献できる卒業生を農学部として育成するために組織的な FD 活動を推進する。

2　学部における FD 活動の組織構成と役割

農学部長、生産農学科主任、生産農学科副主任、環境農学科主任、先端食農学科主任、学生主任、教務主任、総合農学研究センター副主任および農学部 FD 担当の計 9 名が中心となり、農学部全教職員が目標達成にあたる。

3　令和元年度の活動内容

（1）研修会

① 概要（目的を含む）

農学部では以下の研修会を実施した。

1)「知的財産権・著作権に関する研修会（木村友久先生)」令和元年 6 月 28 日

2)「障害を抱えた学生への指導法（安藤正紀先生)」令和元年 10 月 24 日

3)「SNS トラブル防止に関する研修会（宮川麻子先生)」令和元年 11 月 21 日

全ての研修は農学部、農学研究科全教員を対象とし、大学生、大学院生への研究と教育活動における適切な指導方法、障がいを抱えた学生への配慮や適切な対処、学生の生活環境における注意点について学ぶことを目的に実施した。

② 到達目標

1)については、授業での資料作成など著作権に関する事例に対して、2)については、障がいのある学生への合理的配慮と対応、3)は、学生の生活環境におけるインターネット利用の理解と支援のために行った。

③ 活動内容

1)では、著作権法改正に伴う著作物の教材としての利用方法の変更に関する話を聞いた。著作権法 35 条が改正され、異時公衆送信の権利制限と補償金制度が設けられた。これは平成 30 年 5 月 25 日の公布から 3 年以内に施行される。他人の著作物を使用した教材を学内のサーバー等にアップすること、また学生がダウンロードすることは、クローズな環境であっても権利処理が必要となる。補償金制度としては包括契約と個別権利処

理が想定され、一般社団法人授業目的公衆送信補償金等管理協会が設立されている。

2)は特別支援教育の実務および研究に長年携わっている教職大学院の安藤正紀先生に、昨年に続き障がいを抱えた学生との接し方を話してもらった。学校での学習や行動に困難を感じる学生は、障がいのあるなしに関わらず存在する。障がいの場合には改善をすることが難しいケースが多く、困難な課題に対して苦戦しない環境、状況づくりが必要となる。学生一人一人がもつ独自の課題が教育的ニーズであり、それぞれに応じた働きかけである支援教育を進めることがこれからの学校教育としても大切で、型に当てはめようとするのでなく、多様性のある学生に合わせていく教育の制度、組織づくりが求められる話を聞いた。

3)は、インターネット安全教育を主催する独立行政法人情報処理推進機構（IPA）の事務局から教育ネット宮川麻子先生に講義をしてもらった。学生が様々なかたちでインターネットを利用している中でトラブルも増えている。特にモラルに反する、または違法となる動画を投稿することが社会問題となっており、教員もインターネットの最新技術や利用に関する注意点を理解しておく必要がある。インターネットは誰もが情報を発信でき、それが世界中で見られることから影響力が大きい。インターネットの仕組みや情報モラルを伝達しても、トラブルは減少しない現実がある。それは価値観が多様化し、国や民族によって考えが異なることがあり、インターネットを使う当事者が自分たちで考える判断力を育成することが重要であるようである。そのために IPA では教材を作成しており、一年次セミナーなどで活用できる情報が得られた。

④ 評価

1)については、改正著作権法の施行をひかえ、問題を明確に認識できた。Blackboard を活用して授業を進めている科目が多く、大学全体として対処方法を検討する必要があると感じた。

2)の研修を行い、障がいを抱えた学生への対応は学生支援センターや教学部と共に制度ができてきているが、学生と接する現場として更なる教育ニーズへの対応が求められると考えられた。

3)インターネット利用の注意点や情報モラルについては一年次セミナーで取り扱っているが、上位学年の学生に対しても必要で、様々な教材を活用し自己判断ができる教育をしていかなくてはいけない。学生が知り得た情報モラルについて、高校生やそれ以下の子どもたちに指導する場を設けることによって、危機意識の向上と問題の低下が図れると考えられた。

（2）学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

授業改善のために、農学部開講科目の担当教員（専任および非常勤講師）に協力を求め、講義科目と実験・実習科目の受講生 30 名以上の必修科目を中心に、授業評価アンケートを実施した。

② 到達目標

授業の状況把握により講義技法や情報伝達の仕方、教育設備の向上に活用し、授業改善を達成する。また、大学 HP 上に結果を公開することで受験生および関係者に対し、授業の健全性をアピールする。

③ 活動内容

春学期 49 科目、3,457 名、秋学期 45 科目、3,038 名に対して授業評価アンケートを実施した。

授業評価アンケートを集計後、結果をアンケートの原本とともに各教員に送付した。アンケートの振り返りを行うため、アンケート項目のチェック、改善内容について記載してもらった。さらに、大学 HP に学部、学科単位での集計結果を公開した。

④ 評価

アンケートは各学科の必修科目を中心に講義科目と実験・実習科目で実施した。領域の実験・実習科目は 30 名以下の場合もあった。全体的に授業外での学修時間（設問 2）が、講義科目において低かった。実験・実習科目ではレポート課題があるため、2～3 時間の学修時間が確保されていた。これは例年同様であり、講義科目における授業外の学修時間の確保が課題である。授業の進行速度が速い、難易度が難しいという科目がいくつかあった。教員の授業に対する取組（設問 13～15）は、科目によって低いものもあったが概ね良好であった。分野 III（設問 18～21）および総合評価の分野 IV（設問 22）はいくつかの科目で低いものもあったが、概ね評価が高く、全体として良好であった。新学科のカリキュラムでは選択科目が多く、学生の興味に基づいて履修科目が選択されているので、授業評価は高くなったと考えられた。しかし、100 名を超える大人数の授業では評価にばらつきがあり、学生の能力に応じた授業展開の難しさを表している。全体として講義科目に比べ、実験・実習科目での総合評価が高かった。授業改善に向けた取組として、アンケート結果のチェックと改善内容の記述を教員が行う。授業スピードや課題の量の改善など教員ごとに改善計画が書かれていた。

表．令和元年度の授業評価アンケート集計結果（3 学科のアンケート実施科目すべて）

（春学期-講義科目）

分野	設　問	平均値	強くそう思う 5	ややそう思う 4	どちらとも言えない 3	あまりそう思わない 2	全くそう思わない 1	無効回答数
Ⅰ	1　あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	4.0	24.5%	50.6%	22.0%	2.4%	0.4%	1
	2　あなたがこの授業1回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	2.9	9.1%	17.7%	36.9%	28.6%	7.7%	8
	3　この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	3.6	18.0%	34.7%	38.6%	6.8%	1.9%	4
	4　あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	3.8	22.7%	43.0%	30.0%	3.5%	0.8%	7
Ⅱ	5　授業はシラバスに沿って進められましたか	4.0	29.6%	40.0%	27.2%	2.6%	0.6%	6
	6　授業の進行速度は適切でしたか	3.9	29.6%	37.7%	24.5%	7.4%	0.8%	24
	2)早かった　1)遅かった					82.0%	18.0%	85
	7　授業内容の難易度は適切でしたか	3.7	25.5%	35.2%	27.4%	10.6%	1.2%	39
	2)難しかった　1)易しかった					90.6%	9.4%	117
	8　教員の声や話し方は明瞭で聞き取りやすかったか	4.1	39.8%	36.6%	20.1%	2.8%	0.7%	11
	9　教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.1	40.3%	37.5%	18.9%	2.5%	0.8%	6
	10　映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)や板書が授業の理解に効果的でしたか	4.1	41.5%	35.5%	19.3%	3.1%	0.7%	5
	11　授業内容は系統的によく整理され準備されていましたか	4.1	39.0%	39.1%	20.3%	1.2%	0.5%	15
	12　課題、レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	3.9	31.4%	35.7%	29.3%	2.4%	1.2%	32
	2)多かった　1)少なかった					57.6%	42.4%	48
	13　教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習)を促しましたか	3.9	30.8%	37.0%	26.8%	4.4%	1.0%	5
	14　教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか	4.0	34.0%	37.5%	24.9%	2.7%	0.9%	4
	15　教員は熱意を持って授業していましたか	4.2	42.9%	36.1%	19.5%	1.1%	0.3%	9
Ⅲ	18　この授業の内容をよく理解できた	3.9	26.8%	41.6%	25.6%	4.6%	1.3%	8
	19　この授業の内容に興味・関心が持てた	4.0	34.4%	38.2%	22.3%	4.1%	1.0%	5
	20　自分で調べ、考える姿勢が身についた	3.9	26.6%	39.6%	28.8%	4.3%	0.6%	7
	21　この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた	4.1	36.3%	41.1%	19.7%	2.3%	0.5%	9

総合評価		平均値	強くそう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	全くそう思わない	無効回答数
Ⅳ	22　この授業を受講して有意義であった	4.1	40.5%	36.5%	20.0%	2.2%	0.8%	11

（春学期-実験・実習科目）

分野	設　問	平均値	強くそう思う 5	ややそう思う 4	どちらとも言えない 3	あまりそう思わない 2	全くそう思わない 1	無効回答数
Ⅰ	1　あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	37.5%	48.6%	10.9%	2.5%	0.5%	0
	2　あなたがこの授業1回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	3.4	24.2%	19.8%	32.8%	20.9%	2.3%	2
	3　この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	3.6	17.5%	33.8%	39.4%	7.0%	2.3%	1
	4　あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	3.9	22.4%	48.9%	25.8%	2.6%	0.3%	2
Ⅱ	5　授業はシラバスに沿って進められましたか	4.0	33.5%	36.6%	24.7%	4.4%	0.8%	2
	6　実験・実習内容の量は適切でしたか	3.7	25.8%	37.9%	22.4%	12.6%	1.2%	6
	2)多かった　1)少なかった					95.8%	4.2%	30
	7　実験・実習内容の難易度は適切でしたか	3.7	23.7%	37.8%	26.0%	11.2%	1.2%	12
	2)難しかった　1)易しかった					96.5%	3.5%	33
	8　実験や実習の方法や作業の説明は明瞭で分かりやすかったか	4.0	30.1%	43.3%	22.9%	3.5%	0.1%	0
	9　教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.1	35.6%	43.8%	19.0%	1.5%	0.1%	3
	10　映像視覚教材(パワーポイントなど)や実験材料が授業の理解に効果的に活用されていましたか	4.0	33.3%	41.6%	21.4%	2.6%	1.1%	1
	11　実験・実習がスムーズに進められるよう、材料や器具が十分準備されていましたか	4.2	46.1%	33.9%	16.7%	2.6%	0.7%	3
	12　課題、レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	3.7	21.6%	38.7%	26.3%	10.8%	2.6%	15
	2)多かった　1)少なかった					95.5%	4.5%	31
	13　教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習、実験・実習への取り組み)を促しましたか	4.1	32.6%	43.2%	22.1%	1.9%	0.1%	1
	14　教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか	4.0	31.4%	44.7%	21.3%	2.3%	0.3%	2
	15　教員は熱意を持って授業していましたか	4.2	40.1%	39.2%	19.4%	1.4%	0.0%	1
Ⅲ	18　この授業の内容をよく理解できた	3.9	23.1%	51.2%	22.1%	3.1%	0.4%	2
	19　この授業の内容に興味・関心が持てた	4.0	31.3%	43.4%	21.2%	3.7%	0.4%	2
	20　自分で調べ、考える姿勢が身についた	4.0	30.7%	42.8%	23.5%	2.6%	0.4%	2
	21　この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた	4.2	38.4%	42.6%	17.1%	1.8%	0.1%	4

総合評価		平均値	強くそう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	全くそう思わない	無効回答数
Ⅳ	22　この授業を受講して有意義であった	4.2	39.0%	40.1%	18.6%	1.8%	0.4%	4

（秋学期-講義科目）

分野	設　問	平均値	強くそう思う 5	ややそう思う 4	どちらとも言えない 3	あまりそう思わない 2	全くそう思わない 1	無効回答数
Ⅰ	1　あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	3.9	22.0%	46.5%	28.0%	2.9%	0.7%	4
	2　あなたがこの授業1回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	2.9	9.1%	16.8%	38.3%	27.3%	8.6%	4
	3　この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	3.6	15.9%	36.9%	40.1%	5.3%	1.7%	8
	4　あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	3.8	20.3%	42.5%	32.5%	3.7%	0.9%	7
Ⅱ	5　授業はシラバスに沿って進められましたか	3.9	26.1%	41.4%	29.8%	1.9%	0.7%	6
	6　授業の進行速度は適切でしたか	3.8	26.1%	38.3%	26.8%	7.7%	1.1%	25
	2)早かった　1)遅かった					88.8%	11.2%	78
	7　授業内容の難易度は適切でしたか	3.6	22.0%	35.9%	28.4%	12.0%	1.8%	32
	2)難しかった　1)易しかった					95.5%	4.5%	133
	8　教員の声や話し方は明瞭で聞き取りやすかったか	4.0	33.2%	37.9%	24.4%	3.7%	0.8%	7
	9　教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.0	35.9%	36.9%	23.2%	2.8%	1.2%	10
	10　映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)や板書が授業の理解に効果的でしたか	4.0	35.5%	36.2%	23.5%	3.6%	1.3%	5
	11　授業内容は系統的によく整理され準備されていましたか	4.0	34.3%	39.1%	23.4%	2.5%	0.7%	13
	12　課題、レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	3.9	28.0%	35.8%	32.4%	3.0%	0.8%	29
	2)多かった　1)少なかった					59.5%	40.5%	43
	13　教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習)を促しましたか	3.8	26.5%	37.1%	29.8%	5.1%	1.5%	5
	14　教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか	4.0	30.5%	38.9%	26.5%	3.4%	0.8%	5
	15　教員は熱意を持って授業していましたか	4.1	39.6%	36.0%	22.6%	1.2%	0.6%	9
Ⅲ	18　この授業の内容をよく理解できた	3.8	23.2%	39.7%	30.5%	5.1%	1.5%	10
	19　この授業の内容に興味・関心が持てた	3.9	29.0%	39.1%	25.9%	4.5%	1.5%	9
	20　自分で調べ、考える姿勢が身についた	3.8	24.9%	38.5%	31.6%	3.6%	1.4%	11
	21　この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた	4.0	32.0%	39.8%	25.0%	2.3%	0.9%	10

総合評価		平均値	強くそう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	全くそう思わない	無効回答数
Ⅳ	22　この授業を受講して有意義であった	4.0	33.3%	38.4%	24.3%	2.5%	1.5%	16

（秋学期-実験・実習科目）

分野	設　問	平均値	強くそう思う 5	ややそう思う 4	どちらとも言えない 3	あまりそう思わない 2	全くそう思わない 1	無効回答数
Ⅰ	1　あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	38.5%	47.8%	12.4%	1.2%	0.1%	1
	2　あなたがこの授業1回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	3.6	28.6%	21.5%	30.8%	16.8%	2.2%	1
	3　この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	3.7	21.3%	37.3%	34.3%	4.9%	2.2%	1
	4　あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	4.0	27.5%	45.4%	25.1%	1.6%	0.4%	2
Ⅱ	5　授業はシラバスに沿って進められましたか	4.1	36.1%	39.6%	22.4%	1.8%	0.1%	1
	6　実験・実習内容の量は適切でしたか	3.7	25.4%	37.6%	24.8%	10.5%	1.7%	7
	2)多かった　1)少なかった					98.1%	1.9%	28
	7　実験・実習内容の難易度は適切でしたか	3.7	23.1%	38.2%	28.8%	8.8%	1.0%	5
	2)難しかった　1)易しかった					97.6%	2.4%	25
	8　実験や実習の方法や作業の説明は明瞭で分かりやすかったか	4.0	32.3%	40.4%	23.8%	2.7%	0.7%	1
	9　教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.1	34.5%	44.0%	19.9%	1.3%	0.3%	2
	10　映像視覚教材(パワーポイントなど)や実験材料が授業の理解に効果的に活用されていましたか	4.0	32.6%	43.3%	20.2%	3.4%	0.4%	3
	11　実験・実習がスムーズに進められるよう、材料や器具が十分準備されていましたか	4.2	46.3%	34.2%	16.9%	2.1%	0.4%	3
	12　課題、レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	3.8	26.2%	36.8%	26.5%	8.6%	1.8%	12
	2)多かった　1)少なかった					97.3%	2.7%	32
	13　教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習、実験・実習への取り組み)を促しましたか	4.1	33.2%	42.4%	21.7%	2.2%	0.4%	0
	14　教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか	4.1	34.5%	41.6%	20.4%	2.7%	0.7%	2
	15　教員は熱意を持って授業していましたか	4.2	39.8%	38.0%	20.6%	1.2%	0.4%	3
Ⅲ	18　この授業の内容をよく理解できた	4.0	25.4%	48.4%	24.3%	1.6%	0.3%	0
	19　この授業の内容に興味・関心が持てた	4.0	30.6%	44.1%	23.1%	1.3%	0.9%	1
	20　自分で調べ、考える姿勢が身についた	4.1	36.1%	40.8%	22.1%	0.7%	0.3%	1
	21　この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた	4.2	41.4%	41.4%	16.3%	0.6%	0.3%	3

総合評価		平均値	強くそう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	全くそう思わない	無効回答数
Ⅳ	22　この授業を受講して有意義であった	4.1	39.3%	38.5%	20.4%	0.9%	0.9%	1

※設問２　５：３時間以上、４：２時間以上３時間未満、３：１時間以上２時間未満、２：１時間未満、１：全くしていない

各学科の授業評価アンケート結果は、玉川大学 FD 活動のホームページで見ることができる。(https://www.tamagawa.jp/university/introduction/outline/u-fd/questionary/report_agr)

（３）教職員を対象とした公開授業

① 概要（目的を含む）

教員の講義力・教育力向上を目指し、授業参観を実施した。今年度は秋学期の全科目を対象とした。

② 到達目標

公開授業の実施意義を各教員が理解するとともに、教授方法などを参考とする。授業内容や授業規模に対する設備施設活用を考える。

③ 活動内容

教員相互の授業参観を実施すべく、全学の専任および非常勤の教員に対して授業を公開した。

④ 評価

授業参観への参加は、まったくなかった。教員相互の啓蒙的意識を高めることが必要であり、参加方法の検討が求められる。

４　昨年度（平成 30 年度）に提案された予定・課題の達成度について

農学部では今年度「知的財産権・著作権に関する研修会」「障害を抱えた学生への指導法」「SNS トラブル防止に関する研修会」を実施した。参加率は全ての研修で約 90%であった。今年度は例年行っているハラスメント防止研修は実施せず、新しいテーマの研修会を企画した。

知的財産権・著作権に関する研修会では、授業における教材づくりへの対応が必要であると理解出来た。また、SNS トラブル防止に関する研究会は、近年の学生が起こす SNS での炎上問題を取り上げた。学生を指導する上で教員にとっても、インターネットの利用と危険性を理解しておく必要がある。学生に危険性を周知し問題を起こさないようにするのは難しく、様々な教材を利用して常に意識づけを行っていくことが重要であることが分かった。

障がいを抱えた学生への学修支援は、配慮要請に基づいて科目毎に対応する仕組みができている。農学部では実験実習の授業もあり、今後実習科目での支援方法を検討する必要があると考えられた。

学生による授業評価アンケートは、春学期および秋学期の学期終了時に実施した。学生の授業外での学修時間が、講義科目において低かった。授業内容が難しいと回答する科目がいくつかあった。総合評価は全体的に良好であった。担当教員は授業評価アンケートの集計結果をチェックし、授業改善について振り返りを行った。アクティブ・ラーニングを取り入れる、課題の量と質について見直すなどの意見があった。授業環境について改善を要望する教員もいた。

今年度から秋学期の全科目を授業参観対象科目にしたが、授業参観への参加数は極めて低い。日頃の研究と教育活動であまり時間がとれないのが実情であると思われるが、授業参観に参加することのメリットを学部全体で考え、参加の仕組みを構築する必要がある。

５　今後（令和 2 年度以降）の予定・課題について

- FD に関する各種研修会（学内、学外）への参加の啓蒙的活動
- 基礎学力不足の学生の把握と分析
- 障がいのある学生、メンタルケアを必要とする学生の適切な指導対応
- 新カリキュラムの適切な運営と点検
- 授業評価アンケートの授業への還元方法の検討
- 教員相互の授業参観の組織的な取組
- 大学院 FD 委員会との連携強化

§　工学部

1　FD 活動への取組理念・目標

「全人教育の下、人間力を備えたモノつくりの実践的技術者を育成する」との工学部の理念・目標に向けて、教育内容・教育環境の向上をはかることを従来通り継続している。

上記に従い、工学部の FD 活動は継続的に実施されており、以下に記載する「FD 活動への取組理念・目標」に関しても、昨年度まで報告している内容と同等である。

平成 25 年度入学生から 16 単位キャップ制および GPA による警告制度・卒業要件が適用され、さらに、平成 26 年度入学生に適用されたカリキュラムでは開講科目数が削減された。また、平成 27 年度にはエンジニアリングデザイン学科が、平成 29 年度には情報通信工学科が新設され、学部 5 学科体制（一部教員は学科併任）となった。

学科の新設やそれに伴うカリキュラム数の増加、また各年度に更新されたカリキュラム更新という複雑な状況下において、工学部全教員がそれぞれの責任において、担当する学生の学修の現状を適切に理解し対応することが、工学部全体としての FD 活動への取組理念・目標である。さらに言えば、16 単位キャップ制、および GPA 警告制度における学生の学修状況の分析、その結果と課題の把握と共有、そして次期へ向けてより効果的で充実した指導の在り方の議論・検討等は、工学部の FD 活動への取組理念・目標の継続的再検討に必須である。これらを適切に議論・検討することは、工学部の過去と現在と未来において最重要課題である。この課題解決のための工学部 FD 活動は、「工学部 FD 研修会」、「授業評価検討会」、「授業評価アンケート」、および各学科や各専門科目担当教員間で 1 年を通して頻繁に行われている様々な会議体等において恒常的になされている。

2　学部における FD 活動の組織構成と役割

前述したように、以下に記載事項は昨年度まで報告している内容と同等である。

工学部 FD 活動の多くが ISO9001 教育クォリティマネジメントシステムの運用・継続によるものである。平成 27 年度にはエンジニアリングデザイン学科が、平成 29 年度には情報通信工学科が新設されたことにより、ISO9001 運用は学部 5 学科へと拡張され、平成 29 年 10 月に全学科が ISO9001 認証継続を受けた。

ISO9001 教育クォリティマネジメントシステム運用は平成 15 年度より継続され、工学部所属教員の意識も高まり、その FD 活動はほぼシステム化されている。各学科主任と教務担当を中心としてそのような自己点検がほぼ完全に周回してきたことは、ISO9001 が滞りなく認証されたことにより明らかである。そこで、平成 29 年 10 月に全学科が ISO9001 認証継続を受けたことを最後に、日本規格協会による ISO9001 審査・認証を一旦停止し、ISO9001 運用により培われた工学部独自の自己点検を実施することとなった。即ち、ISO9001 運用に依っていた工学部の FD 活動の組織構成と役割について、重要と思われるマネジメントシステムを残した上で、教育クォリティマネジメントシステムとその自己点検実施を運用・継続中である。

以上のように、工学部では全学科において ISO9001 運用とその自己点検実施の流れの中で

FD 活動の多くが実施・継続されている。そこでは、学生による授業評価アンケート、教員による授業改善計画・実行・点検、授業参観、工学部 FD 研修会の実施などが、各学科会、各学科授業評価検討会、教務担当者会、工学部授業評価総合検討会、主任会、教授会等の組織構成によって相互に確認・補完し、運営されている。

現状では、昨年度同様、カリキュラム改定、16 単位キャップ制・GPA 警告制度・新学科学生動向等、教育システム上見逃せない課題が多いため、工学部全専任教員参加による工学部 FD 研修会の年 2 回開催を平成 24 年度以来継続しており、このことが工学部の最重要の FD 活動となっている。

３　令和元年度の活動内容

令和元年度工学部 FD 活動計画にそって、その詳細について以下のように記述する。

（3－1－1）工学部 FD 研修会

①　概要

工学部最重要 FD 活動の一つであり、春学期（第 1 回）・秋学期（第 2 回）に開催される。会当日に配付されるまとめ冊子（工学部長・各学科主任・教務主任・学生主任・FD 委員において保管）の目次を図 1 および図 2 に示す。

春学期（第 1 回）と秋学期（第 2 回）の工学部 FD 研修会の大きな違いは、学習状況分析結果報告が、春学期（第 1 回）は学部全体・各学科・数学/物理学であるが、秋学期（第 2 回）は学部全体・各学科・専門科目となることである。

報告担当になった教員の話す内容の設定は自由である。型にはまった内容ではなく、各教員が自らの考えるところを創造的に自由に報告し、そこから活発な議論が生まれることが期待されている。

② 到達目標

工学部教員団が、全学科の学生成績および学生への対応方針を共有し、各学科の今後の組織的展開と、学生への教科指導に効果的に反映できるようになること、教員の自己省察に資する内容となること、そして、工学部としての将来の発展のための活発な議論が生まれること、である。

③ 活動内容

報告内容はまとめ冊子に詳しいが、ここでは各報告の概要について簡単に記述する。

第 1 回

1. 本年度春学期学習状況分析結果報告（GPA・単位取得率・経年比較　等）

（1）機械情報システム学科/情報通信工学科：平成 30/令和元年度入学生春学期 GPA/修得単位数/単位修得率/成績/警告者数比較・最近 7 年間の傾向

（2）ソフトウェアサイエンス学科：平成 28～令和元年度入学生春学期 GPA 比較・数学プレースメントテストと GPA の関係・数学プレースメントテストとプログラミング I の関係・平均 GPA と平均単位取得率・警告者数の推移

（3）マネジメントサイエンス学科：初期試験平均と GPA 平均と警告者数等の相関関係

2019 年度　第 1 回　工学部 FD 研修会

【解説／まとめ付】

日時：2019 年 9 月 19 日（木）9 時 00 分～9 時 55 分
場所：8 号館 第 2 会議室

テーマ　：GPA・単位取得率による成績動向の把握による教員の指導方針共有
目　的　：①　１年生においては GPA・単位取得率による成績の過去との比較
②　２年生以上においては主たる専門科目の成績動向の過去との比較
③　以上により、教員団が工学部生の成績に対し従来との比較を鑑みつつ、現状に関する共通の認識を持って教科指導の充実をはかること
内　容　：①　学習状況分析結果報告（学部・各学科・数学/物理学・各学科専門科目）
②　授業評価アンケート結果報告
到達目標：全学科の学生成績および学生への対応方針を共有し、工学部各学科の今後の組織的展開と、学生への教科指導に効果的に反映できるようになること。

プログラム

1．　本年度春学期学習状況分析結果報告

（1）機械情報ｼｽﾃﾑ学科/情報通信工学科　教務担当　宮田 成紀
（2）ソフトウェアサイエンス学科　教務担当　大竹 敢
（3）マネジメントサイエンス学科　学科主任　佐藤 健治
（4）エンジニアリングデザイン学科　教務担当　川森 重弘
（5）数学系　マネジメントサイエンス学科　成川 康男
（6）物理学系　エンジニアリングデザイン学科　水野 貴敏
（7）学部全体の状況　教務主任　山崎 浩一

2．　授業評価アンケートの結果から　FD 委員　黒田 潔

○　解説／まとめ　（各報告の最終頁付記）

以上

図 1　令和元（2019）年度春学期開催工学部 FD 研修会プログラム

2019年度　第２回　工学部FD研修会

【解説／まとめ付】

日時：2020年3月12日（木）9時00分～10時00分
場所：8号館 第2会議室

テーマ　：GPA・単位取得率による成績動向の把握による教員の指導方針共有
目　的　：①　１年生においてはGPA・単位取得率による成績の過去との比較
②　２年生以上においては主たる専門科目の成績動向の過去との比較
③　以上により、教員団が工学部生の成績に対し従来との比較を鑑みつつ、現状に関する共通の認識を持って教科指導の充実をはかること
内　容　：①　学習状況分析結果報告（学部・各学科・数学/物理学・各学科専門科目）
②　授業評価アンケート結果報告
到達目標：全学科の学生成績および学生への対応方針を共有し、工学部各学科の今後の組織的展開と、学生への教科指導に効果的に反映できるようになること。

プログラム

1．　本年度秋学期学習状況分析結果報告

（1）機械情報ｼｽﾃﾑ学科　教務担当　大森 隆司
（2）情報通信工学科　教務担当　宮田 成紀
（3）ソフトウェアサイエンス学科　教務担当　大竹 敢
（4）マネジメントサイエンス学科　教務担当　三木 秀夫
（5）エンジニアリングデザイン学科　教務担当　川森 重弘
（6）学部全体の状況　教務主任　山崎 浩一

2．　最近の専門科目受講者動向

（7）情報通信工学科　「ｲﾝﾃﾘｼﾞｪﾝﾄﾃﾞﾊﾞｲｽ門」　早川 博章
（8）ソフトウェアサイエンス学科
「基本情報技術者試験午前試験免除講座」　佐々木 寛
（9）マネジメントサイエンス学科　「幾何学Ⅰ」　佐藤 健治
（10）エンジニアリングデザイン学科　「原価計算」　山田 義照

3．　授業評価アンケートの結果から　FD委員　黒田 潔

○　解説／まとめ　（各報告の最終頁）　以上

図2　令和元（2019）年度秋学期開催工学部FD研修会プログラム

（4）エンジニアリングデザイン学科：平成 29/30/令和元年度 1 年生春学期の GPA/修得単位数/単位修得率/成績状況比較・平成 27～令和元年度数学/物理初期試験比較
（5）数学研究室：新入生数学確認テストの動向
（6）物理研究室：各学科の過去 4 年間の初期試験の得点分布と各データの推移・初期試験の平均点と高校物理の履修率・初期試験の結果（物理 vs 数学）・初期試験と物理入門の結果令和元年度 / 平成 30 年度・物理学入門の履修時期
（7）学部全体の状況：教務主任：警告者の経過動向と今後の指導方針　－ 学部全体の状況 －・1 年生の春学期警告受理状況・3 セメスター終了時警告受理学生数の推移・5 セメスター終了時までに警告を 1 回以上受けた学生数・平成 29 年度入学生 5 セメスター終了時累積 GPA・警告 3 回退学留保制度の効果・4 年間で卒業できる学生の割合・再入学生の動向

2. 授業評価アンケート結果：授業評価アンケートの全体結果報告（後述、図 5）

第 2 回：新型コロナウイルス感染症拡大防止対応に基づき、本会の実施は見送り、下記報告パワーポイントスライド、およびまとめ用紙を全教員に配付することで、本会の報告は成立するものとした。

1. 本年度秋学期学習状況分析結果報告（GPA・単位取得率・経年比較　等）
（1）機械情報システム学科：機械情報システム学科の概要、入学年度・年次ごとの除籍・退学・卒業数の一覧、入学年度ごとの特徴の可視化
（2）情報通信工学科：平成 30 年度、令和元年度入学生の 1 年生の以下の比較：秋学期における当該学期 GPA、春・秋学期における当該学期 GPA、秋学期における累積 GPA、秋学期における修得単位数、秋学期における単位修得率、秋学期における成績、平成 29 年度入学生（現 3 年生）の累積 GPA の推移
（3）ソフトウェアサイエンス学科：令和元年度秋学期 入学生の分析と警告者の動向、秋学期 GPA の比較（平成 28~令和元年度）、春・秋学期 GPA の比較（平成 29 年度）、数学プレースメントテストと累積 GPA の関係、GPA と平均単位取得率、警告者数の推移
（4）マネジメントサイエンス学科：平成 28～令和元年度 1 年生秋学期当該および累積 GPA 比較、教職学生と教職以外学生の 1 年生秋学期累積 GPA 比較、平成 28 年度入学生に関するデータ、平成 28 年度入学生の教職に関するデータ
（5）エンジニアリングデザイン学科：1 年生秋学期 GPA、1 年生累積 GPA、1 年生秋学期修得単位数、1 年生秋学期単位修得率、平成 29～令和元年度 1 年生秋学期成績状況
（6）学部全体の状況：教務主任：6 セメスター終了時の警告受理状況、2 セメスター終了時の累積 GPA 分布、4 セメスター終了時の累積 GPA 分布、令和元年度秋学期終了時の累積 GPA 分布－警告受理回数別－、再入学者の累積 GPA の推移

2. 最近の専門科目受講者動向
（7）機械情報システム学科/情報通信工学科：「インテリジェントデバイス入門」の授

業について、位置づけと主な学修内容、学修環境、講義の流れ、年度ごとの比較、期末試験の分析結果

(8) ソフトウェアサイエンス学科：基本情報技術者試験午前試験免除講座」について、基本情報技術者試験、基本情報技術者試験、基本情報技術者試験、基本情報技術者試験、基本情報技術者試験

(9) マネジメントサイエンス学科：「幾何学Ｉ」の授業について、平成 19～令和元年度の授業の内容の表、平成 19～令和元年度の授業の内容説明、平成 19～令和元年度の成績分布、平成 22～30 年度の授業評価アンケートの自由

(10) エンジニアリングデザイン学科：「原価計算」の授業について、2 つの学科にまたがる専門科目、授業概要、授業の流れ、最近の受講者動向：平均点の推移、最近の受講者動向：成績評価の構成割合と考察

3．授業評価アンケート結果：授業評価アンケートの全体結果報告（後述、図 6）

④ 評価

昨年度までの報告と同様に、各学科の総合的学修状況分析結果、専門科目学修状況分析結果、および対応方針を共有し、指導に効果的に反映できた。FD 研修会時に配付される「発表資料＋発表者による解説」には詳細なデータが記載されている。工学部 FD 研修会は教授会の開始 1 時間前から開催されるため、教授会メンバーはほぼ全員が出席している。

教務主任による全体総括では、以下の事項が春・秋学期それぞれ報告された。

・春学期：

平成 26 年度から令和元年度までの春学期で警告を受けた 1 年生の人数について、これまで当該学期 GPA1.8 未満であった警告の判定基準が、平成 29 年度入学生より累積 GPA2.0 未満に変更されたが、工学部全体でみると警告制度の変更の前後で 1 年生の春学期警告受理者数に大きな変化は見られない。

3 セメスター終了時警告受理学生数の推移について、3 セメスターよりほとんどが専門科目となるため、多くの学生は 3 セメスターで GPA を大幅に下げる。その結果、当該学期 GPA が警告判定基準であった平成 29 年度以前では、多くの学生が初回の警告を受けている。一方、累積 GPA となった平成 30 年度以降では、1、2 セメスターで高い GPA を取得していた学生はその恩恵のため 3 セメスターで低い GPA をとっても救われている。3 回連続警告受理者数は警告制度の変更前後で大きな変化は見受けられない。

平成 27 年度から平成 29 年度までの入学生で 5 セメスター終了時までに警告を 1 回以上受けた人数について、GPA で警告判定を行う旧制度では、4 割以上の学生が受理していたのに対し、累積 GPA で判定するようになった平成 29 年度は 3 割弱に減少した。

平成 29 年度入学生 5 セメスター終了時累積 GPA について、5 セメスター終了時における平成 28 年度と平成 29 年度入学生の累積 GPA は警告制度の変更の前後において大きな変化は見られない。

平成 30 年度より、卒業見込みの出た 4 年生は、3 回目の警告が出ても退学とならず留保される制度に変更された。平成 30 年度、令和元年度の 4 年生で 3 回目の警告を受けた

学生の半数以上は退学を免れ、制度変更の効果は大きいと考えられる。

入学後の 4 年間で卒業できる学生の割合および在学率の平成 28 年から令和元年までの推移について、在学生数比は大きく変化していないが、入学生数比は大きく改善している。これは在籍率の増加の影響が大きい。

新しい警告制度となってから再入学した 2 名の学生であるが、ともに再入学後、連続して警告を受けており、卒業は困難と思われる。

・秋学期：

平成 27 年度から令和元年度入学生の 6 セメスター終了時の警告受理状況（令和元年度、平成 30 年度入学生はそれぞれ 2、4 セメスターまで）をまとめた結果、新制度となってからの特徴として以下の点が明らかになった。

・2 セメスター終了時の警告受理者は平成 27 年度から順に 76 名、59 名、60 名、73 名、42 名であり、年度によるばらつきはあるものの 1、2 セメスターでの警告受理者数には制度による大きな違いは見られない。

・3 セメスターでの警告受理者が大幅に減少した。3 セメスターより専門科目が増え、多くの学生が当該学期 GPA を落とす。その結果、旧制度では警告を受ける学生が多数いた。しかし、累積 GPA になってからは 2 セメスター終了時までにある程度の GPA を取っている学生は、3 セメスターの GPA が低くても、累積では 2 を上回り、警告を受けない。

・平成 29 年度入学生は 4 セメスター終了時までの警告受理者が減った。

・6 セメスター終了時までの警告制度による退学処分者が大幅に減った。しかし、4 セメ終了時の退学処分者数については、平成 30 年度入学生が、旧制度対象学生を上回っている。

平成 28 年度から令和元年度入学生の 2 セメスター終了時の累積 GPA のヒストグラムによると、この時点では、GPA が非常に低い学生も在籍しており、警告制度に依らず、概ね同様の分布をしている。累積 GPA が 2.0 未満の学生数にも大きな違いはない。

平成 27 年度から平成 29 年度入学生の 4 セメスター終了時の累積 GPA のヒストグラムによると、この時期になるとどの年度の入学生も GPA1.0 を下回る学生はほとんどいない。1 年次で GPA が低い学生は退学、あるいは評価 C、F 科目の再履修による GPA の改善の効果が大きい。

平成 29 年度入学生を対象として、警告回数別に、各学年の秋学期終了時の累積 GPA 分布によると、1、2 年生では、GPA2.0 未満学生数が多いとともに、かなり低い値の学生が多数いるが、学年が上がるに連れ、低い GPA の学生が減少している。

平成 29 年度の警告制度変更以降に再入学した 3 名の学生の再入学後の累積 GPA の推移を見ると、どの学生も、累積 GPA が 2.0 を上回ることは無く、再入学後の全セメスター終了時に警告を受けている。退学勧告あるいは退学処分により退学した学生が再入学して卒業することは非常に困難な状況である。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算に計上し、項目は「資料印刷費等」であった。

（3－1－2）社会発信手法研修会

① 概要（目的を含む）

3 年連続で開催しており、研究・教育を広報に繋げること、高校生の志願者分析と広報に関して、私大工学部における優秀人材確保（アドミッション）の戦略を共有することが目的である。

② 到達目標

本学工学部の今後の人材確保のあり方について理解を深める。

③ 活動内容

10 月 24 日（木）17：30～18：30 に、PR クエスト株式会社 菊池 泰功 氏により講演題目「今大学が求められるもの、発信するもの」として実施された。教職員（含入試広報等職員）約 40 名が参加した。

④ 評価

高校生にとって、本学工学部が他学と比して魅力的な存在となるための方策に関する意識が向上したと考えられる。その一例として効果的な広報活動の充実が求められるが、この実働は大学教員の本務から逸脱する可能性があり、担当部署との綿密な連携活動が今後重要になることは論を待たない。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上し、項目は「FD 研修会講義料・FD 研修会講義料源泉税・FD 研修会交通費・FD 研修会交通費源泉税」であった。

（3－1－3）知的財産権と教育研究倫理に関する FD 研修会

① 概要（目的を含む）

過去数年間、知的財産権の中で現代の教育に必須である著作権に関する知識を FD 研修として扱ってきた。今年度は、工学系研究教育を担う工学部として、産業財産権（特許・意匠・商標）について、初心に戻って考察する機会とする。

② 到達目標

知的財産創造性の重要性を理解し、教員・学生ともに創造性を涵養すべく認識を持つ。

③ 活動内容

7 月 25 日（木）17：30～18：30 に、本谷国際特許事務所 弁理士 本谷 孝夫 氏により講演題目「知的財産セミナー 知的財産が必要な理由」として実施された。教員約 40 名が参加した。

④ 評価

最近の特許案件の話題（下町ロケット・カップラーメン）や判例等における権利解釈に関する事例をご紹介いただいた。特に権利範囲を請求するときのクレームの書き方などは、これから製造業等に就職する学生にとっても有用な知識であり、工学教育上、教員に必須の知識である。知的財産創造性の重要性を理解し、創造性涵養の認識を新たに

したと考えられる。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上し、項目は「特別講義料・特別講義料源泉税・講師交通費・講師交通費源泉税」であった。

(3－1－4) 改正著作権法第 35 条施行への対応に関する FD 研修会

① 概要（目的を含む）

令和元年度工学部 FD 活動計画に記載はないが簡単に記述する。Bb などへの他人の著作物の掲示には、改正著作権法第 35 条により補償金の支払いが必要になることについて、概要を理解する機会とする。特に最近、著作権法は改正が多く、大学は他者の著作物を扱う場合が多いため、注意を要する事項を理解することは重要である。

② 到達目標

著作権法の意義を理解し、無用なトラブルを引き起こさない認識を持つ。

③ 活動内容

7 月 25 日（木）18 : 30～18 : 45 に、工学部 FD 委員 黒田 潔 氏により講演題目「改正著作権法第 35 条施行への対応」として実施された。教員約 40 名が参加した。

④ 評価

他人の著作物を授業時に直接的に使用する以外の使用は現状の著作権法においても認められてはいない。しかし、国内においては、特に高等教育機関では違法使用が横行しており、権利者団体からは「高等教育機関はもはや著作権無法地帯」という指摘も受けている。現段階では、本学としての補償金制度に対応する方針も決まっておらず、状況説明のみ報告されたが、今後、方針が決すれば再度周知徹底する必要があると思われる。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上しておらず、実際の使用もない。

(3－2－1) 授業評価検討会および工学部授業評価総合検討会

① 概要（目的を含む）

昨年度報告と同等である。セメスター末の学科ごとの会議体において、各授業の授業評価アンケート結果と、教員が授業ごとに作成している「授業実施チェックシート」（ISO9001 運用上の教育クォリティ記録･様式 No.7301-05・平成 30 年度報告書に提示）と授業に関する評価事項を集計した結果表（平成 30 年度報告書に提示）等を基に、学科ごとに「授業評価検討会」を実施する。ここでは主に授業上の不具合を抽出し、次期への課題を考察する。

セメスター末の教務担当者会では、学科ごとの「授業評価検討会」においてなされた報告を各学科教務担当が持ち寄り、学部として「授業評価総合検討会」を実施する。「授業評価総合検討会」は「工学部授業評価総合検討会」と同義である。ここでは各学科からの報告を基に不具合や課題が議論される。その結果は、学部としての次期への授業改善の実施施策として各学科へフィードバックされ、各学科の改善の実施に寄与させる。

② 到達目標

授業評価と授業実施チェックシートを基にした継続的な授業改善に資する。さらに、学科の授業カリキュラムの継続的検討を維持する。

③ 活動内容

工学部授業評価総合検討会実施日：春学期　9 月 26 日（木）
秋学期　3 月 19 日（木）

④ 評価

学生による授業評価アンケート・教員による授業チェックシート・ISO9001 運用上の科目別教育クォリティ目標一覧表 評価（様式 No.7301-04）・各学科による授業評価検討会によって、授業改善サイクルが定着している。

授業評価検討会は、各学科会で開催され、授業評価アンケート・授業チェックシート・ISO9001 運用上の科目別教育クォリティ目標一覧表を用いて議論された。

工学部授業評価総合検討会では、各学科で議論された内容が ISO9001 運用上の科目別教育クォリティ目標一覧表評価（様式 No.7301-04）・ISO9001 運用上の授業評価検討会議事録（様式 No.7302-05）等を用いて説明され、その内容を構成員である教務主任、各学科教務担当、および工学部 FD 担当が議論した。春学期に関して議論された内容を図 3 に、秋学期に関して議論された内容を図 4 に示す。ここでの検討項目は、再び各学科へフィードバックされ、次期の授業展開へ資することとなる。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上したが、実際の使用はない。

（3－2－2）研究授業（参観授業）

① 概要（目的を含む）

春学期と秋学期に各学科 1 名の教員が各自の担当科目に関して参観授業を実施する。担当授業は全学 US 科目･他学科科目でも問題としない。春学期は工学部教員に公開、秋学期は全学教職員に公開している。各学科教員数は 8～9 名であるため、4～5 年で一巡する。本項目の実施目的は、学生による授業評価アンケートとは別の視点で、参観者（各学科教員または全学教職員）からの評価を授業改善につなげることにある。

② 到達目標

参観者（工学部教員/全学教職員）の評価を基にした授業改善を継続的に検討する。

③ 活動内容

今年度の実施授業について表 1 に示す。

参観者が工学部教員である場合、「工学部教員授業参観者チェックシート」（平成 29 年度 FD 活動報告書に提示）を参観しつつ記入した。その評価を受けて、「研究授業（科目担当者票）」（平成 29 年度 FD 活動報告書に提示）を参観授業実施者が記入し工学部 FD 委員に提出する。「工学部教員授業参観者チェックシート」は授業担当者が保管し、「研究授業（科目担当者票）」は授業担当者と工学部 FD 委員が保管する。

④ 評価

「研究授業（科目担当者票）」記載の「今後の対処計画」について表 2 に示す。このように授業改善が継続的に実施されており、授業の質が大きく向上すると考えられる。

一方、参観者の増加が見込めないことはここ数年の課題である。そこで令和 2 年度より、春秋学期ともに日程を決めて全学教職員に公開し、且つ、全学教職員から要望があれば、その日程に関わらず参観可能とすることに変更する。ただし、要望する教職員と授業担当教員の間で、事前に日程を打ち合わせることとしたい。

令和元年度春セメスター工学部授業評価総合検討会議事録

日時：令和元年９月 26 日，17:00～17:45
場所：大学８号館第一会議室
出席者：宮田（情報通信工学科教務担当），大森（機械情報システム学科教務担当），大竹（ソフトウェアサイエンス学科教務担当），三木（マネジメントサイエンス学科教務担当），川森（エンジニアリングデザイン学科教務担当），黒田（工学部 FD 担当），山﨑（教務主任）
議事録作成：山﨑

資料：2019 年度春学期 授業評価検討会議事録（IT，IMS，SS，MS，ED）
2019 年度春学期 授業評価集計結果（IT，IMS，SS，MS，ED）
2019 年度春学期 科目別教育クオリティ目標一覧表評価（IT，SS）
※ IT：情報通信工学科，IMS：機械情報システム学科，
SS：ソフトウェアサイエンス学科，MS：マネジメントサイエンス学科，
ED：エンジニアリングデザイン学科

各科で実施した授業評価検討会における検討結果に基づき，本セメスターにおける各科の取組みについて報告が行われた．全学科，不満足授業は無かった．

各科からの報告内容を以下に記す．

・IT，IMS：全体としてはおおむね良好である．チェックシートを提出していない科目については今後提出してもらう．IT で，B 以上が 60%未満の科目が２科目あった．その一つである物理学Ｉでは，B 以上の学生は 7%であった．ほとんどの受講生は物理学入門の単位を取っているが，初期テストの結果がよくない．もう一つのセンサ工学では，試験前日に補習をやったが，学生がモノを知らなすぎることが原因である．機械情報システム学科では，直流回路などはよいがソフトウェア関連がよくない．学生の質は，情報通信工学科になってからとても悪くなった．

・SS：２科目で B 評価以上の学生が 60%を下回った．その一つのプログラミングＩでは，数学のプレースメントテストの点数が悪い学生が対象のクラスであることと学科の重要科目であり，厳しく評価していることが主な原因である．もう一つのプログラミングIIは再履修クラスであることと多くの受講生が課題をやってこないことが主な原因である．他の多くの科目で，授業外の学修が不足している．フーリエ変換を扱ういくつかの科目は学生にとって厳しい．また，コミュニケーション力が弱い学生はグループ作業で取り残される傾向が強い．

・MS：統計的方法は二クラス開講したが履修者は合わせて７名であったため，一クラスにまとめた．来年度は一クラス開講とする．シラバスは一部の科目で学期初めに表示されなかったが全科目で用意された．ビジネスコンテンツの「説明」が２点代である．この科目については学生から内容が難しかったとの意見があった．次年度の内容を再検討する．

・ED：春学期の B 以上 60%以上の条件を満たさない科目数は，昨年度が８科目だったのに対し，今年度は３科目に減少した．その一つである，モデリングとシミュレーションは今年度から担当が変わっている．シラバス登録については１科目が半登録であったが，次年度は全科目登録する．

以上

図 3　令和元（2019）年度春学期工学部授業評価総合検討会議事録

令和元年度秋セメスター工学部授業評価総合検討会議事録

日時：令和２年３月 19 日，11:00～11:45
場所：大学８号館第一会議室
出席者：宮田（情報通信工学科教務担当），大森（機械情報システム学科教務担当），大竹（ソフトウェアサイエンス学科教務担当），三木（マネジメントサイエンス学科教務担当），川森（エンジニアリングデザイン学科教務担当），黒田（工学部 FD 担当），山﨑（教務主任）
議事録作成：山﨑

資料： 2019 年度秋学期 授業評価検討会議事録（IT，IMS，SS，MS，ED）
2019 年度秋学期 授業評価集計結果（IT，IMS，SS，MS，ED）
2019 年度秋学期 科目別教育クオリティ目標一覧表評価（SS）
※ IT：情報通信工学科，IMS：機械情報システム学科，
SS：ソフトウェアサイエンス学科，MS：マネジメントサイエンス学科，
ED：エンジニアリングデザイン学科

各科で実施した授業評価検討会における検討結果に基づき，本セメスターにおける各科の取組みについて報告が行われた．全学科，不満足授業は無かった．
各科からの報告内容を以下に記す．

・IT，IMS：IT で，B 以上が 60%未満の科目が３科目あったが，アンケートを実施した２科目については，授業理解度は 3.5 以上で，概ね良好であった．電磁気学の理解度が 2.82 と低かった．電磁気については，４セメスターに開講される１科目で静電界から電磁界まで取り扱う必要があり，学生に教授する内容に対し，授業時間が少ないことに重ねて数学の知識が不十分であることが大きな問題である．学期毎の 16 単位の制限下では，これ以上科目数を増やすことはできず，抜本的な改善は困難である．
・SS：４科目で B 評価以上の学生が 60%を下回った．その一つのプログラミングⅠは，学科の重要科目であり，厳しく評価していることと再履修クラスであることが主な原因である．また，コンピュータアーキテクチャでは，B 以上が 60%を下回るとともに理解度が３未満であった．論理回路など複雑になると回路の動作を理解できない学生が少なからずいる．本科目は今年度が初めてであり，今後の改善が期待される．取消しの多い科目については，内容の難しいものと自身の履修状況を確認せず，履修モデルに従って履修した結果，必要な科目の単位を修得せずに履修した学生がいることなどが主な原因である．アンケートの理解度について，課題を増やすと点数が下がり，減らすと上がる傾向がある．
・MS：アンケート結果の理解度が３点未満の科目が２科目ある．そのうちの一つである解析学Ⅰは，昨年の理解度も低いが，授業で昨年度はマイクを使用し，今年はプロジェクタを使うなど毎年改善が行われており，数値の増加が期待される．もう一つの複素解析Ⅰは学生の評判がよくない．今後の担当者変更も検討している．プロジェクトマネジメントでは履修者の 19.2%が履修取り消しをした．厳しいことがその要因であり，理解度は 4.55 と高く，問題は無い．
・ED：B 以上 60%以上の条件を満たさない科目が３科目ある．その一つである原価計算では，授業中の演習をすれば期末試験が解けるように設定されているが，授業を欠席したり，授業中に内職をしていて演習に取り組まない学生が少なからずいることが原因である．もう一つの数値解析プログラミングについては非常勤の科目担当者にその原因を確認したがうまく連絡が取れていない状況である．来年度より科目担当が変更される．チェックシートを提出していない科目については，今後の提出を依頼した

以上

図４　令和元（2019）年度秋学期工学部授業評価総合検討会議事録

表 1　令和元（2019）年度工学部研究授業（参観授業）実施概要

	対象科目	担当教員所属学科	担当教員	開催日時限	教室
春学期	データ処理	機械情報ｼｽﾃﾑ学科 情報通信工学科	政田 元太	7 月 4 日(木) 3･4 時限	8 号館 321
	情報科学入門	ｿﾌﾄｳｪｱｻｲｴﾝｽ学科	佐々木 寛	6 月 18 日(火) 7･8 時限	8 号館 324
	代数学Ⅱ	ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄｻｲｴﾝｽ学科	佐藤 健治	7 月 4 日(木) 7･8 時限	8 号館 420
	科学入門	ｴﾝｼﾞﾆｱﾘﾝｸﾞﾃﾞｻﾞｲﾝ学科	川森 重弘	6 月 14 日(金) 7･8 時限	8 号館 218
秋学期	物理学入門	機械情報ｼｽﾃﾑ学科 情報通信工学科	宮田 成紀	10 月 21 日(月) 1･2 時限	8 号館 221
	データ通信	ｿﾌﾄｳｪｱｻｲｴﾝｽ学科	大崎　正雄	10 月 24 日(木) 7･8 時限	8 号館 324
	解析学Ⅰ	ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄｻｲｴﾝｽ学科	日下 芳朗	10 月 16 日(木) 7･8 時限	8 号館 422
	エンジニアリングデザイン演習	ｴﾝｼﾞﾆｱﾘﾝｸﾞﾃﾞｻﾞｲﾝ学科	阿久津 正大	12 月 4 日(水) 5･6 時限	8 号館 220

表 2　参観授業実施者が記述した今後の対処計画

授業開始時に説明をしている際に、TA に教室内を巡回してもらい、問題のある学生には注意をしてもらうようにした。その結果、若干ではあるが、一度説明をした内容に関して、繰り返し質問してくる学生が減ったように思う。
表示が小さいと思われるポップアップウィンドウ等の表示を大きくする工夫をするか、事前に該当箇所のスクリーンショットを作成し、それを提示するなどの策を検討する。
ファイルのダウンロードを事前にしておくよう指導を徹底し、必要に応じて授業前にアシスタント教員によりダウンロードするよう促す。
方針の説明を付加する。
実験の説明の時に語尾を聞き取りやすくする。
試料や器具の取り扱いおよび実験の注意事項を明確に指示する。
熱湯を用いるので、学生が火傷をしないよう万全な対応をする。
スライドにおける図と文字、あるいは数式のバランスを考える。
一部板書を併用する。
文字を大きくする。
式を用いて思考ができるようになって欲しいが、その助けとなる図などを、より多く教科書に載せる努力をする。
現行の教科書で演習問題としている部分を減らし、より基礎的な部分の演習に特化する。
ざわざわしていて問いていない学生が数名いたという指摘については、私も承知している事項である。学生個々の特性に関係する問題であるものの、意識して該当学生に話しかけたりしているが、受講者が 40 名と多いこともあり、完全にコントロールできていない。
プロジェクタの表示が傾いていたという指摘については、プロジェクタの設置位置を修正すれば、解決できる。ppt データにして据え付けのプロジェクタを使えば完璧に解決できる。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上したが、実際の使用はない。

（3－2－3）ISO9001 教育クォリティマネジメントシステム運用と審査停止

① 概要（目的を含む）

令和元年度工学部 FD 活動計画に記載はないが、昨年度と同様の事項を簡単に記述する。ISO9001 による教育クォリティマネジメントシステム審査は平成 29 年度 10 月まで実施され、その審査による認証は平成 30 年度 10 月まで有効であった。その後、審査要請はせず、ISO9001 認証は平成 30 年度 10 月に無効となった。しかし、前述したように、長年の ISO9001 教育クォリティマネジメントシステムの運用・継続により、工学部所属教員の意識も高まり、その FD 活動はほぼシステム化されている。各学科主任と教務担当を中心としてこのような自己点検がほぼ完全に周回してきたことは、ISO9001 が滞りなく認証されたことにより明らかである。そこで、ISO9001 運用に依っていた工学部の FD 活動の組織構成と役割は重要と思われるマネジメントシステムを残した上でそのまま継続することとし、令和元年度においても自己点検実施は運用・継続中である。

② 到達目標

PDCA サイクルを循環させ、教育改善を継続する。

③ 活動内容

各種会議体活動等で自己点検実施を運用・継続中である。

④ 評価

教授会・主任会・学科会・教務担当者会等の活動により、自己点検実施は有効に運用・継続中である。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上せず、実際の使用もない。

（3－3）学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

授業内容・方法・スキルの向上等の授業改善を具体化することを目的として、平成 12 年度秋学期より学生による「授業評価アンケート」を春学期と秋学期の定期試験前の授業において実施している。

② 到達目標

工学部全開講科目について担当教員の専任・非常勤の区別なく実施し、継続的な授業改善およびカリキュラム改善の検討に役立てる。学科および学部の授業評価検討会および工学部授業評価総合検討会における評価検討を通じた授業改善、カリキュラムの変更・改定に役立てる。

③ 活動内容

例年通りの方法で春学期と秋学期の定期試験前の授業において実施した。授業評価アンケート用紙の体裁等は昨年度までの報告と同一である。

集計結果は科目ごとのデータおよび全体集計データとともに専任・非常勤の区別なく科目担当者に届けられた。集計結果は、科目担当者が作成した「授業実施チェックシート」と併せて、科目ごとおよび学科ごとに次期の授業に反映されるよう、PDCA を継続中である。

具体的には以下のような流れで実施される。

1. アンケート実施後 1 か月程度で、集計結果のデータ表が各教員に配付される。
2. まとめられた全てのデータを各学科で「授業評価検討会」とし授業て改善のために議論をし、議事録は保管される。
3. 各学科の検討を踏まえて、教務担当者会において、「工学部授業評価検討会」として改善のための議論をし、議事録は保管される。
4. 各教員は、評価結果を踏まえ、授業内容の課題および改善点等を集計結果のデータ表内の「(3) 今期の総括と今後に向けて」に記入し、教務担当・教務主任を通じ、FD 委員に提出する。
5. FD 委員は「(3) 今期の総括と今後に向けて」が記入された集計結果のデータ表をまとめて冊子として印刷する。

学内外向けには総括した内容を以下の大学 HP、
http://www.tamagawa.jp/university/introduction/outline/ufd/questionary/report_eng/で公開し、学内向けには各科目の詳細な内容を冊子体である【玉川大学 工学部「学生による授業評価」報告書 38】、および【玉川大学 工学部「学生による授業評価」報告書 39】として大学 8 号館玄関ロビー等で閲覧公開している。

春学期は 180 科目、参加学生延べ人数約 5,200 名、秋学期は 163 科目、参加学生延べ人数約 4,200 名であった。

④ 評価

前述したように、集計結果のデータ表内の「(３) 今期の総括と今後に向けて」の記入返却は、教務主任・教務担当を通じて各教員に依頼されるが、その過去数年の記入率の推移を表 3 に示す。強く依頼を開始したのが平成 29 年度秋学期からであるが、記入率が向上したことが伺える。春学期は 77%程度、秋学期は 72～74%程度で推移していることがわかる。しかしこの記入率は低いというのが我々の認識であり、最低でも 90%程度を超えるというのが次期以降の目標であろう。

過去 3 年間の授業評価アンケートの参加状況について、春学期については図 5、秋学期については図 6 に示す。アンケート集計後、アンケート用紙そのものを科目担当者に返却し、自由コメント欄を含めて授業改善に役立ててもらっている。

工学部 FD 研修会記録冊子「発表資料＋発表者による解説」に記載された授業評価アンケートに関する評価は以下のとおりである。

表 3　平成 29 年度～令和元年度の「（３）今期の総括と今後に向けて」記入率の推移

年度	学期	記入率 (%)
平成 29 年度	春	54.1
	秋	72.8
平成 30 年度	春	77.0
	秋	72.5
令和元年度	春	77.2
	秋	74.4

・春学期授業評価アンケート（図 5）

項目「１.」より、各学科専任教員は全員が参加している。非常勤講師は、前年同期より 6%上昇し 94%の参加率であり、十分な数値と考えている。

項目「２．３．４.」より、各質問項目の総合平均値も例年と大きな変化はないが、一部科目が評価 5 点中 3 点以下となった。

項目「５.」より、質問項目に関して大きな変化はない。一方、評価 4 点弱程度は「ややそう思う」を意味し、さらなる向上が望まれる。ただし、卒研設備の満足度はすべての項目の中で常に評価が高い。卒研の重要性が伺える。

項目「６.」より、今回は 2.67 点で例年より若干低下しており、向上させる必要がある。

項目「７.」より、参加科目数について増加しているが、これは前述通り学科による複数回計上が影響している。

・秋学期授業評価アンケート（図 6）

項目「１.」より、各学科専任教員は全員が参加している。非常勤講師は、96%の参加率である。これは十分な数値と考えてもよいと思われる。

項目「２．３．４.」より、各質問項目の総合平均値も例年と大きな変化はないが、2 科目が評価 5 点中 3 点以下となった。是正すべき問題であると考えられる。

項目「５.」より、質問項目関して大きな変化はない。一方、評価 4 点弱程度は「ややそう思う」を意味しており、多くの項目でさらなる向上が望まれる。ただし、卒研設備の満足度はすべての項目の中で常に評価が高く、卒研の重要性が伺える。また実験設備が例年に比べ充実したようである。

項目「６.」より、例年と大きな変化はない。

項目「７.」より、参加科目数について過去 3 年で大きな変化はない。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上し、項目は、授業評価アンケート実施に伴う費用として「マークシート印刷費・マークシート読取費・印刷製本費・通信運搬費等」であった。

（3－4）学外セミナー・現況調査等への教員派遣

① 概要（目的を含む）

学生教育に関する課題、あるいは今後の教務上の改正にかかわる課題に関する知見を得るため、学外のシンポジウムや研修会に参加して、その内容を FD 活動に活用する。

② 到達目標

参加研修等の内容を本学工学部の学生学修指導に効果的に活用できるよう、その方策を検討する。

③ 活動内容

過年度に参加が多かった、「大学コンソーシアム京都主催 FD フォーラム」・「京都大学高等教育研究開発推進センター主催大学教育研究フォーラム」等であるが、今年度は都合がつかず、教員派遣を断念した。

一方、工学部長参加の学外研修は以下のとおりである。

・8 月 6 日：令和元年度教育改革 FD/ICT 理事長・学長等会議

・10 月 3 日：「Society5.0 時代の PBL 型教育促進タスクフォース」第 2 回会合

④ 評価

学外セミナー等については今年度も都合がつかず、教員派遣を断念した。

工学部長参加の学外研修については、今後の学部運営等に関する情報収集が行われた。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算に計上し、項目は、「諸会費支出・旅費支出」であった。

4　昨年度（平成 30 年度）に提案された予定・課題の達成度について

（1）工学部の理念・目標に関する課題

16 単位キャップ制、および GPA による警告制度・進度チェック・卒業要件の下、対応する改定カリキュラムにおける、指導上の問題点の認識や結果の評価を継続し、効果的な改善を継続する。実際には、改善は継続的に実施され、さらに問題点も循環的に発見されているため、この実施自体が実行すべき課題であり、これは達成されている。

（2）現状における課題

継続的課題として、昨年度は

(1) 入学生の学力不足対応の充実化

(2) 基礎力を保持しているような学生の能力を伸ばす対応

(3) 高学年学生が能動的自主的に学修していく精神を涵養させる環境づくり

を挙げた。

特に(1)に関しては、学生はそもそもなぜ大学で学ぶのか？、という学ぶことの根源的意味を学生と教員がともに議論し、充実させていくことが重要であるとした。しかしながら、本案については一朝一夕に答えが出る問題でもなく、各教員がぞれぞれの理想の基に日々邁進しているのが現状であろう。しかし、教員の「想い」だけでは事態は改善せず、学生と学問に対して真摯に向き合い議論する過程の中で醸成されていくものである。このことを最も明らかに体現できるのは卒業研究である。しかしながら、その時点で学生は卒

2019/9/19

2019年度　春セメスタ 学生による授業評価アンケート 集計結果

工学部授業評価検討会

1. 参加状況

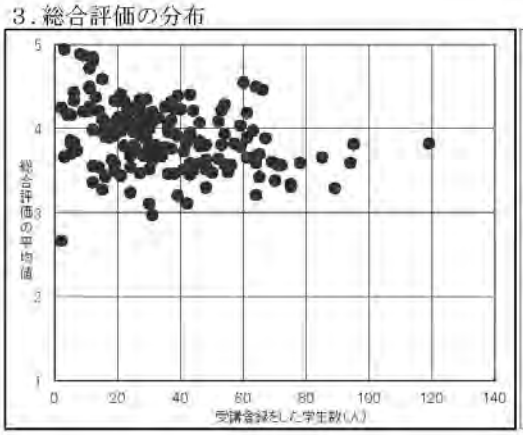
教員所属学科	参加科目数												参加教員数											
	2018年度秋		2017年度春		2017年度秋		2018年度春		2018年度秋		2019年度春		2018年度秋		2017年度春		2017年度秋		2018年度春		2018年度秋		2019年度春	
情報通信工学科	－	－	24	92%	20	100%	33	94%	30	97%	35	97%	－	－	9	100%	8	100%	9	100%	9	100%	9	100%
機械情報システム学科	22	100%	3	100%	10	100%	2	100%	2	100%	－	－	8	100%	1	100%	3	100%	1	100%	1	100%	－	－
ソフトウェアサイエンス学科	23	96%	25	100%	21	100%	29	100%	26	96%	27	100%	8	100%	8	100%	8	100%	8	100%	8	100%	8	100%
マネジメントサイエンス学科	28	100%	29	97%	25	93%	32	100%	26	96%	37	100%	9	100%	7	100%	8	100%	8	100%	8	100%	8	100%
エンジニアリングデザイン学科	31	100%	30	100%	33	97%	28	100%	31	100%	29	100%	8	100%	10	100%	9	100%	9	100%	9	100%	10	100%
その他学科・非常勤	32	80%	38	84%	31	89%	49	86%	31	89%	52	87%	23	82%	26	87%	25	96%	23	88%	23	96%	30	94%
合計	136	94%	149	94%	140	95%	173	95%	146	95%	180	95%	56	92%	61	94%	61	98%	63	94%	58	98%	65	97%

開講学科	2018年度秋 参加科目数								2019年度春 参加科目数							
	常勤		他学科常勤		他学部常勤		非常勤		常勤		他学科常勤		他学部常勤		非常勤	
US工学部共通	－	－	2	100%	－	－	3	100%	－	－	1	100%	1	100%	2	100%
工学部共通	－	－	－	－	－	－	1	100%	－	－	－	－	－	－	2	100%
情報通信工学科	21	100%	4	100%	－	－	2	100%	22	96%	7	100%	1	100%	5	83%
機械情報システム学科	2	100%	6	100%	－	－	6	100%	－	－	8	100%	－	－	4	100%
ソフトウェアサイエンス学科	25	96%	2	50%	1	100%	3	50%	26	100%	7	100%	4	80%	9	90%
マネジメントサイエンス学科	23	100%	8	100%	1	100%	9	90%	27	100%	5	100%	3	75%	6	75%
エンジニアリングデザイン学科	22	100%	3	100%	－	－	5	100%	21	100%	4	100%	3	100%	11	85%
合計	93	99%	22	92%	2	100%	29	88%	96	99%	32	100%	12	86%	40	87%

2. 各質問項目の平均

	学生について		教員について			講義	実験について		卒研	科目
質問	意欲	自習	興味	理解	説明	教具	設備	指導書	設備	平均
平均	4.03	3.72	3.89	3.74	3.85	3.83	4.09	3.70	4.31	3.91
標準偏差	0.87	1.02	0.98	0.98	1.05	1.03	0.94	1.12	0.91	0.99

3. 総合評価の分布



4. 科目ごとの総合評価の平均値

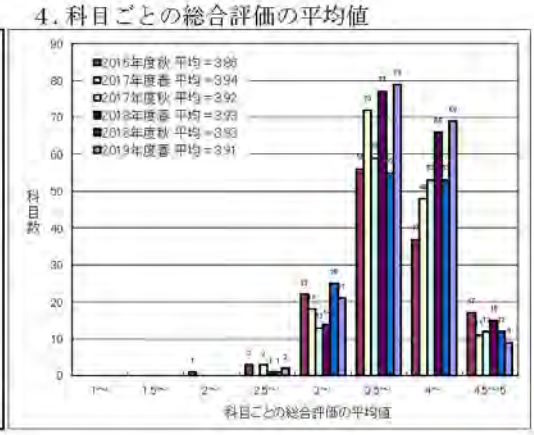
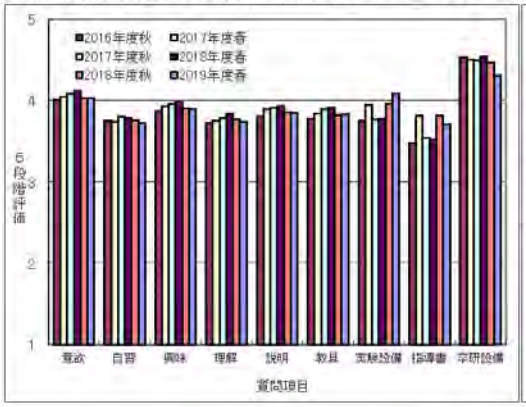
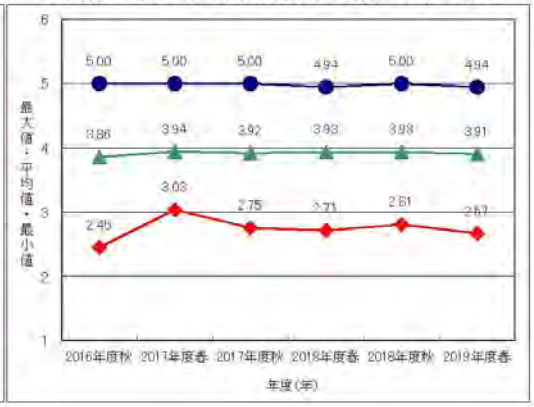


図 5 その 1　令和元（2019）年度春学期学生による授業評価アンケート集計結果

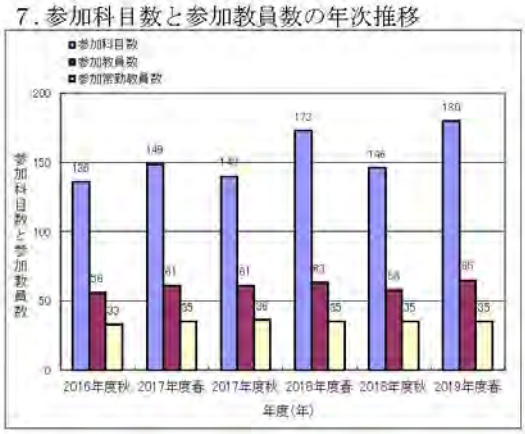
5．全科目を通して回収されたアンケートの平均



6．授業評価の平均値、最大、最小の年次推移



7．参加科目数と参加教員数の年次推移



8．質問項目と評価方法

学生の取り組み
1　授業には意欲的に取り組んだと思いますか(意欲)
2　授業に向けて予習・復習はしましたか(自習)

科目の内容
3　授業内容に興味は持てましたか(興味)
4　授業内容は理解できたと思いますか(理解)

指導方法
5　教員の説明(話し方など)は分かりやすかったですか(説明)

A　講義・演習
6　教具(OHPなど)・板書は見やすかったですか(教具)

B　実験科目
7　実験設備は整っていましたか(実験設備)
8　指導書は分かりやすかったですか(指導書)

C　卒業研究
9　研究設備は整っていましたか(卒研設備)

評価方法
5：強くそう思う(非常に良い)
4：ややそう思う(良い)
3：どちらとも言えない(普通)
2：あまりそう思わない(あまり良くない)
1：全くそう思わない(良くない)

図 5 その 2　令和元（2019）年度春学期学生による授業評価アンケート集計結果

2020/3/12

2019年度　秋セメスタ 学生による授業評価アンケート 集計結果

工学部授業評価検討会

1. 参加状況

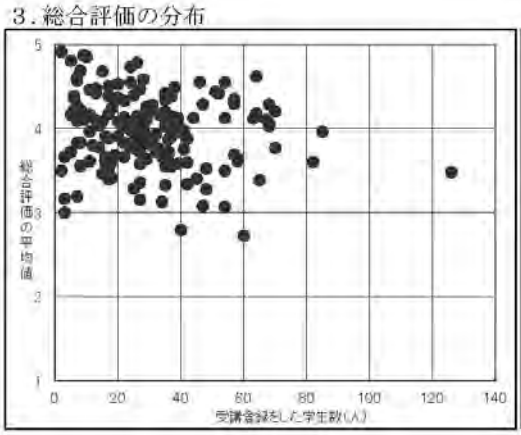
教員所属学科	参加科目数												参加教員数											
	2017年度春		2017年度秋		2018年度春		2018年度秋		2019年度春		2019年度秋		2017年度春		2017年度秋		2018年度春		2018年度秋		2019年度春		2019年度秋	
情報通信工学科	24	92%	20	100%	33	94%	30	97%	35	97%	36	95%	9	100%	8	100%	9	100%	9	100%	9	100%	9	100%
機械情報システム学科	3	100%	10	100%	2	100%	2	100%	–	–	–	–	1	100%	2	100%	1	100%	1	100%	–	–	–	–
ソフトウェアサイエンス学科	25	100%	21	100%	29	100%	26	96%	27	100%	27	100%	8	100%	8	100%	8	100%	8	100%	8	100%	8	100%
マネジメントサイエンス学科	29	97%	25	93%	32	100%	26	96%	37	100%	28	100%	7	100%	8	100%	8	100%	8	100%	8	100%	8	100%
エンジニアリングデザイン学科	30	100%	33	97%	28	100%	31	100%	29	100%	28	100%	10	100%	9	100%	9	100%	9	100%	10	100%	9	100%
その他学科・非常勤	38	84%	31	89%	49	86%	31	89%	52	87%	44	86%	26	87%	25	96%	28	88%	23	96%	30	94%	23	96%
合計	149	94%	140	95%	173	95%	146	95%	180	95%	163	95%	61	94%	61	98%	63	94%	58	98%	65	97%	57	98%

開講学科	2019年度春 参加科目数								2019年度秋 参加科目数							
	常勤		他学科常勤		他学部常勤		非常勤		常勤		他学科常勤		他学部常勤		非常勤	
US工学部共通	–	–	1	100%	1	100%	2	100%	–	–	2	100%	–	–	1	100%
工学部共通	–	–	–	–	–	–	3	100%	–	–	3	100%	–	–	1	50%
情報通信工学科	22	96%	7	100%	1	100%	5	83%	29	97%	5	100%	–	–	6	86%
機械情報システム学科	–	–	8	100%	–	–	4	100%	–	–	4	80%	–	–	3	75%
ソフトウェアサイエンス学科	26	100%	7	100%	4	80%	9	90%	26	100%	5	100%	1	100%	9	82%
マネジメントサイエンス学科	27	100%	5	100%	3	75%	6	75%	15	100%	5	100%	–	–	14	93%
エンジニアリングデザイン学科	21	100%	4	100%	3	100%	11	85%	22	100%	3	100%	–	–	9	90%
合計	96	99%	32	100%	12	86%	40	87%	92	99%	27	96%	1	100%	43	86%

2. 各質問項目の平均

	学生について		教員について			講義	実験について		卒研	科目
質問	意欲	自習	興味	理解	説明	教具	設備	指導書	設備	平均
平均	4.08	3.84	3.96	3.81	3.92	3.88	4.08	3.90	4.51	4.00
標準偏差	0.88	1.00	0.99	1.01	1.05	1.06	0.93	1.00	0.78	0.97

3. 総合評価の分布



4. 科目ごとの総合評価の平均値

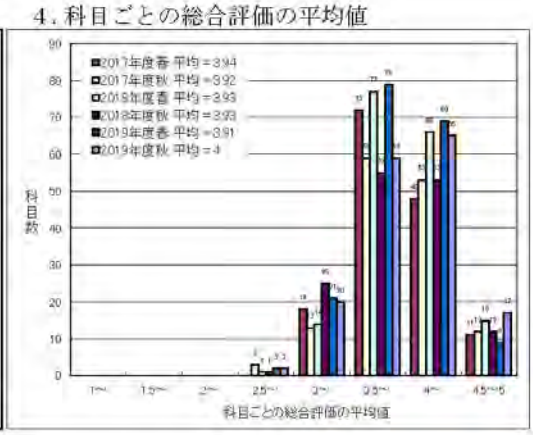
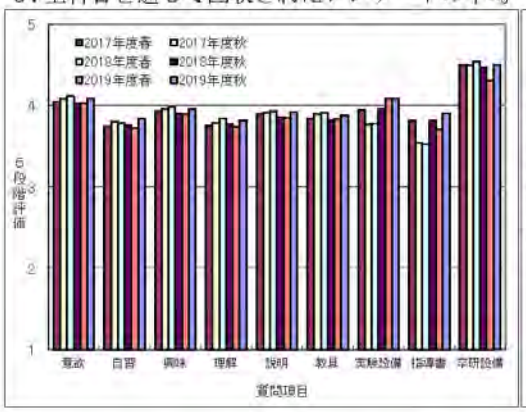
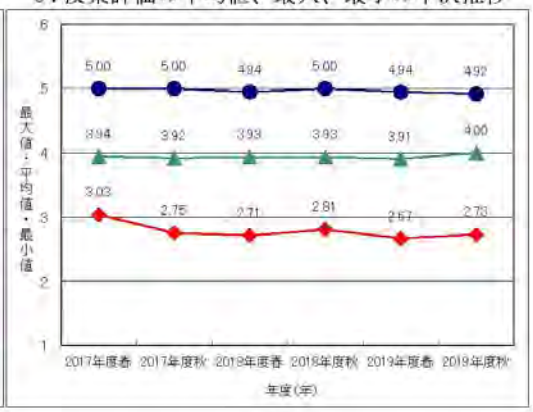


図 6 その 1　令和元（2019）年度秋学期学生による授業評価アンケート集計結果

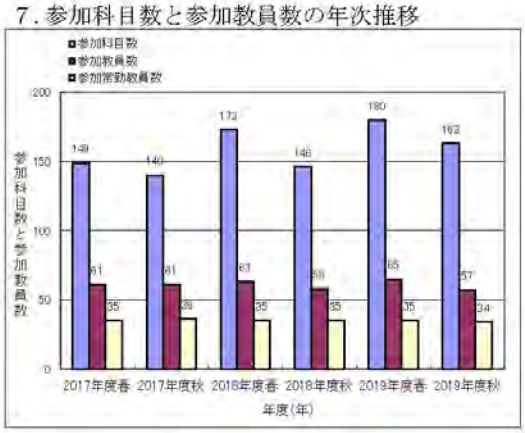
5．全科目を通して回収されたアンケートの平均



6．授業評価の平均値、最大、最小の年次推移



7．参加科目数と参加教員数の年次推移



8．質問項目と評価方法

学生の取り組み
1　授業には意欲的に取り組んだと思いますか(意欲)
2　授業に向けて予習・復習はしましたか(自習)

科目の内容
3　授業内容に興味は持てましたか(興味)
4　授業内容は理解できたと思いますか(理解)

指導方法
5　教員の説明(話し方など)は分かりやすかったですか(説明)

A　講義・演習
6　教具(OHPなど)・板書は見やすかったですか(教具)

B　実験科目
7　実験設備は整っていましたか(実験設備)
8　指導書は分かりやすかったですか(指導書)

C　卒業研究
9　研究設備は整っていましたか(卒研設備)

評価方法
5：強くそう思う(非常に良い)
4：ややそう思う(良い)
3：どちらとも言えない(普通)
2：あまりそう思わない(あまり良くない)
1：全くそう思わない(良くない)

図 6 その 2　令和元（2019）年度秋学期学生による授業評価アンケート集計結果

業を控え時間はない。出来うるならば、初期の段階から常に学生にそのことを問いかけていく授業であったり、機会のようなものを構成していく必要がある。即ち、本案については道半ばである。

(2)(3)に関しては、学部横断的な学生支援体制が必要であるとした。本案に関しては、各教員が各種コンテスト・大会等へ学生参加を促したり、学生や教員の所属学科にとどまらない枠を超えた共同活動が数多く実施されたりしていることから、一定程度達成されていると考えられる。しかし、組織的な活動という意味では未だ不十分である。

（３）FD 活動の在り方に関する課題

昨年度報告では、工学部 FD 研修会について、学生の学修状況についてはこれまでと同様の把握を努めつつ、それとは別に、学生要覧に書かれた内容を超えて、どのような学生を育てるべきか、つまり学問として若者は何を学ぶべきか、そのことが我が国と世界の持続的で平和的な発展にどのように資するのか、という教育の根本に立ち返った議論ができるよう、内容の再検討をすべきとした。

しかし、FD 活動の実態は昨年度同様であるため、本案に関しては大きく改善されていない。通常業務としての学生対応に多くの力が当てられているため、セメスターごとの学生成績等の現状把握と、特に成績不振者への対応で精いっぱいである。しかしながら、学生への見本となるべき教員の研究活動自体がしっかりと確立され、学問への向き合い方を議論すべきことは、やはり高等教育の理想である。出来うるならば、セメスターごとの FD 研修会以外に、余裕を持った理想に満ちた議論の機会を計画すべきであったと考える。

さらに、昨年度報告では、FD 活動のそもそもを理解する機会が減少してきており、再認識する機会を設けたいとした。そのために、例えば、「FD 活動の分類」・「設置基準との関係」・「職業と業務としての FD・SD」・「TP との関係」・「カリキュラム改善のための FD」などの項目を考えた。

本案に関しても、1 つ目の課題と同じく、大きく改善されなかった。理由も同様である。全く反省すべき点である。

それ以外に、参観授業に関して、参加者が極めて少ない状況は依然として続いており、なかなか改善せず、検討継続予定である。

学生による授業評価アンケートに関しては、質問項目を検討すべき時期に来ているとしたが、工学部 FD 委員と教務主任で議論を継続中である。これまでの質問項目は長年継続されてきており、それらの項目を外すのは惜しい。そうなると質問項目の追加となるが、学生は各授業でアンケートを強いられており、多くの質問事項にするとよく考えずに回答するとこが危惧され、ジレンマである。継続的に議論したい。

５　今後（令和 2 年度以降）の予定・課題について

（１）現状における課題

昨年度と同じ以下の課題は継続的に実施されるべきである。

(1) 入学生の学力不足対応の充実化

(2) 基礎力を保持しているような学生の能力を伸ばす対応

(3) 高学年学生が能動的自主的に学修していく精神を涵養させる環境づくり

それぞれの課題の設定理由は、前頁に記述した昨年度の内容と同じである。学ぶということの根源的意味を学生と教員がともに議論し充実させていくことと、学科の枠内にとどまらない全学部横断的に学生を支援できる体制づくりが重要である。

工学部 FD 担当は令和元年度でその任について 5 年目となる。令和 2 年度も担当することが決定しているが、実施内容がマンネリ化してきている。新しい視点による実施が求められてきている。

FD 活動のもっとも大きな問題点は、ただこなす意識化、である。これはアンケートをすればよい、研修会を開けばよい、という意識である。FD 活動は教員自ら、あるいは教員団として教育改革を継続することである。その手法はいろいろあるし、教員各自でも異なることが多い。研究の手法に似ていることが多く、そういう意味で、多様である。教員に教育改善の意識が全くないのは論外であるし、そのような教員はいないと確信される。その多様な教育改善を虚心に教員団として共有するという認識には温度差があることは否めない。実際に対面する学生を重視することは非常に重要で、全くなくせない事項ではあるが、工学部が発展するための前進的全体活動はもう少し活発化していい。昨今流行りの多様性を認め、否定ではなく肯定から議論を推進していくことが肝要である。

（2）FD 活動の在り方に関する課題と予定

昨年度挙げた課題の継続的検討が必要である。

工学部 FD 研修会は学生の学修すべき内容自体について深く考察する時期であると考えられる。学生の学修状況はこれまでと同様の把握を努めつつ、それとは別に、学生要覧に書かれた内容を超えて、どのような学生を育てるべきか、つまり学問として若者は何を学ぶべきか、そのことが我が国と世界の持続的で平和的な発展にどのように資するのか、という教育の根本に立ち返った議論ができるよう、内容の再検討をすべきであると考えられる。

FD 活動のそもそもを理解する機会が減少してきており、再認識する機会を設けたい。例えば、「FD 活動の分類」・「設置基準との関係」・「職業と業務としての FD・SD」・「TP との関係」・「カリキュラム改善のための FD」などの項目については、もう一度共通認識を持つ必要がある。FD 活動のそもそもを理解・共有した後、各教員が工学部で自律的に実施すべきことが把握され、その統合と議論が今後の効果的な学生教育組織の課題解決に資することが予想される。

授業評価検討会および工学部授業評価総合検討会は、学科内および学科間での教員のコミュニケーション体制として重要であり、従来どおり継続する。

学生による授業評価アンケートに関しても従来どおり継続するが、質問項目の検討をすべき時期に来ていることにも留意する。

参観授業については参観者の増加が見込めないことはここ数年の課題である。そこで前述したように、令和 2 年度より、春秋学期ともに日程を決めて全学教職員に公開し、且つ、全学教職員から要望があれば、その日程に関わらず参観可能とすることに変更する。ただし、要望する教職員と授業担当教員の間で、事前に日程を打ち合わせることとしたい。

FD 研修会は学生の成績に関する事項が大きな重みを占めているが、教員の健康なくして教育研究活動が成り立たないことは論を待たない。教員の高齢化が進んでいることを鑑みて、いわゆる健康に関する FD 研修会の開催を計画したい。特に運動不足による成人病や、校舎移転に伴う過重負担に起因する精神的ストレス等について話題としたい。命あっての物種である。

令和 2 年度は STREAM Hall 2019 が、令和 3 年度には Consilience Hall 2020 が新築される。これに伴い、座学による授業や、工学的実験の授業、あるいは卒業研究など、これまでと大幅な変化がみられることは否定できない。したがって、令和 2 年度 FD 研修会では、新校舎利用に伴う旧校舎と比較した良い点・悪い点を教員団が共有すべきであると考えられる。この問題点共有は、せっかくの新校舎による今後の工学部の教育研究活動に資する内容であることは特筆すべきことであろう。

§　経営学部

1　FD 活動への取組理念・目標

（1）質の高い卒業生（経営学部のミッション･ステートメントを体現し得る卒業生）を輩出する。

（2）玉川の教育理念を基盤とした経営学教育を実現する。

（3）21 世紀社会に生き残ることのできる経営学部－少子化時代･大学全入時代にあって、運営を維持しうる体力をもった学部を形成する。

（4）玉川学園および玉川大学全体の評価を高める学部を構築する。

2　学部における FD 活動の組織構成と役割

経営学部長、国際経営学科主任、教務主任、学生主任、FD 担当が中心となって FD 活動を実施する。教務主任と FD 担当は連携して活動計画を取りまとめ、主として研修会の運営にあたる。

3　令和元年度の活動内容

（1）研修会（令和元年 6 月 13 日（木））

① 概要（目的を含む）

コース学修の進捗状況の共有と支援体制の整備･強化を目的として研修会を実施した。

② 到達目標

学生がコース目標を達成するための具体的な支援方法を示す。

③ 活動内容

平成 27 年度入学生から実施している教育課程で初の卒業生を輩出したため、英語及びコース専門分野の学修成果を共有するために、各コースにおける学修の状況、検定試験ならびに TOEIC IP の結果を経営学部の教員間で話し合った。その後、コースごとに教員が分かれて、コース代表の教員をまとめ役として、支援体制の整備・強化の方向性を議論した。

④ 評価

昨年度からの DLP（Dual Language Program）における実践を通してスコアの向上は見受けられた。しかし、コース間でスコアの平均点が異なり、各コースが掲げる目標値に到達していない学生も少なくなかった。コースの共通課題として、3 年次秋学期から 4 年次春学期は就職活動と重なることから、十分な学修時間を確保できていない学生が多いことが考えられる。

今回の研修は、学部全体で学生の学修状況を共有することができる良い機会となっている。プログラム開始によって TOEIC のスコア上昇が見られるものの、既述しているとおり、学部全体で目指すスコアに到達している学生の割合は十分とはいえない水準である。TOEIC のスコアの上昇させる支援策について、より良い方策が固まっておらず、今後も話し合っていきたい。

（2）研修会（令和元年 11 月 7 日（木））

① 概要（目的を含む）

6 月実施の研修会と同様に、コースプログラムによる学修の進捗状況の共有と支援体制の整備・強化を目的として研修会を実施した。また、今回は講義内容の改善方法について検討することとした。

② 到達目標

学生がコース目標を達成するための具体的な支援方法、講義内容の改善に関する活用方法を示す。

③ 活動内容

6 月に続いてコースプログラムの成果拡大に向けた今年度 2 回目の研修会である。各コースに教員が分かれて、コース内の 4 年生における TOEIC の成果を共有した。スコアが高い学生の中には、留学以外で国内学修のみで十分に成果をあげている者もいた。また 3 年生の TOEIC IP の結果を共有した。

また、講義内容の改善については、例えば、①毎回 PPT で説明を行うのではなく、数式を説明する場面ではホワイトボードのみを使い、理解を高める、②試験では自筆のノートを持込可とし、授業中にノートをとる習慣をつけさせる、③時間内にグループで練習問題を解かせ、互いに学び合い、一人で落ちこぼれないようにする、といったさまざまな意見を抽出することができた。

④ 評価

各ゼミナールの運営方法がコース目標に見合った形となっているかについては、多少の差異が存在しており、検討の余地がある。8 月には春学期の成績評価に際して、コース代表者から経営学部長に各ゼミナールの使用教材や授業方法が報告されている。コースプログラムを発展的に継続するために、教員間の考え方を共有し、足並みを揃えていくことが重要となる。

また、講義内容の改善であるが、積極的に行っている教員がいる一方、消極的な教員も少なくない。講義内容の改善についての意義等を改めて説明する機会を設けていく必要がある。

（3）学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

例年、各科目の継続的な授業改善に役立てることを目的として授業評価アンケートを実施している。今年度も春学期、秋学期ともに実施した。

② 到達目標

学生の学修状況を把握するとともに、各教員のさらなる資質向上を図る。

③ 活動内容

独自の方法で実施している英語科目（ESS A/B、Business English A/B、EPS A/B）及び各コースゼミナール C/D を除く経営学部開講科目でマーク式、記述式の授業評価アンケートを実施した。マーク式の集計は外部業者に依頼し、その結果を科目担当者別に配

付している。記述式は科目担当者が個別に活用している。

④ 評価

ほぼすべての開講科目で実施できている。評価結果のまとめをWeb上で公開している。今後、学生の成果拡大につなげるアンケートの活用、全学的な課題である学生へのフィードバックについて、学部全体で検討したい。

（4）学外セミナー等への教員派遣

大学コンソーシアム京都主催の FD フォーラムに木内正光准教授が参加する予定であったが、新型コロナウイルスの影響で中止となった。次年度以降に参加していただく予定である。

4　昨年度（平成 30 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に予定した活動はすべて実施できている。コースプログラムの運用に関する取り組みを継続的に推し進めている。今年度よりコースごとのゼミナール科目においてTOEIC のスコアを評価基準に組み込んでおり、学生の動機付けに役立っている。英語だけではなく、専門分野の成果については、経営学検定、販売士、BATIC（国際会計検定）®等の資格取得に向けた支援策も強化していく必要がある。学生には資格試験を自身の学習成果と連動させながら、DLP の修得に向けた学習スタイルを身につけてほしい。

全学的に令和 2 年度へ向けての検討が進んでいるなかで、随時ゼミナールの評価に関して経営学部長、コース代表者による会合を開催している。各コース 2 年次、3 年次のゼミナール科目（国際会計コースの専門基礎ゼミナール A と国際会計ゼミナール A を除く）において、TOEIC の評価基準を厳格に運営していくことが確認された。

この他、本法人の顧問弁護士を講師とした、ハラスメント防止研修会に参加した。

5　今後（令和 2 年度以降）の予定・課題について

これまでの活動を継続するとともに、DLP による教育効果の検証を踏まえて、課題等を明らかにし、FD 活動をより強化していく予定である。次年度以降は 1・2 年次からDLP に関する動機づけと働きかけを促し、経営学関連の専門性を身につけさせるプログラム運用の強化を図り、学生の成長を支援したい。

§　教育学部

1　FD 活動への取組理念・目標

本年度の FD 活動への取組理念・目標は、令和元年度の内容を継続し、以下の通りである。

「本学部では学校教育はもとより生涯教育、社会教育の諸分野で貢献できる教育プロフェッショナルの育成を目指し、指導に当たる教員が自らの資質と能力を向上させることにある。」

2　学部における FD 活動の組織構成と役割

教育学部長、教育学科・乳幼児発達学科の両主任、教務主任、学生主任、及び FD 委員、通信教育課程主任の 7 名で構成する。

教育学部長を委員長とし、FD 委員会が学部における FD 活動計画（企画・運営）の策定、FD 活動の年度総括などを審議する役割を担っている。また委員会決定事項については教授会で議案提起を行い、FD 活動の推進に努めている。

3　令和元年度の活動内容

（1）研修会等

【通学課程】

① 概要（目的を含む）

前年度に引き続き、教員養成における課題や展望を再認識した上で日常の指導、教育実践に取り組むことを目的とし、研修会に参加した。

② 到達目標

今日の教育実践における先進的な取組や課題に触れ、研究活動および日々の授業実践に活かしていく。また日本の教育の課題と展望について学び、教員養成における指導や教育実践に活かし、また参加者同士のネットワークを築くことを目標とする。

③ 活動内容

令和元年度は、教員の ICT 化による授業の効率化やアクティブ・ラーニングの促進化のために、「教育現場で電子黒板の活用促進」について全体研修を行った。「ハラスメント講習会」は、講師との日程調整がかなわず、研修を見送ることとなった。

研修名　:「電子黒板を全ての大学生に：教育現場で電子黒板の活用を促進させるための方策」
講　師　：教育学部 教育学科 教授：富永 順一 先生
実施日　：令和元年 9 月 18 日（水）
場　所　：大学研究室棟 B104 会議室
時　間　：17：00～17：30（約 30 分）

④ 評価

電子黒板研修会については、初めての試みであり、新しい授業のやり方について学ぶことができた。特にネット上の情報を取得し活用して、授業に活かし、学生の相互理解や自ら考える力を養うためにどのような方法があるかなどの知識を得ることができた。

（2）学生による授業評価アンケート

【通学課程】

① 概要（目的を含む）

学生による授業評価（教育学部では「リフレクションシート」と称す）を全授業で実施する。集計結果は学部全体の平均と比較できる形として各授業担当者にフィードバックされ、新学期に向けて授業改善につなげるものとする。また学部・学科・学年別の集計結果の傾向や課題を学部全体で共有することを目的とする。

② 到達目標

専任教員、非常勤講師が担当するすべての授業において学生によるリフレクションシートを実施する。例年は、受講者が 10 名未満のゼミなどについては実施しなかったが、今年度から 10 名未満のゼミや授業であっても実施する。実施した授業評価の集計はデータ分析と集積を行い、教員の授業改善および学生の傾向や課題の共有につなげる。

③ 活動内容

専任教員、非常勤講師が担当する教育学部すべての授業において、授業評価アンケート（リフレクションシート）を実施した。

④ 評価

授業評価のアンケート結果は各授業のみならず、学部全体の平均値と比較できるようにし、学生の傾向や課題を各教員が共有することができた。また教育学部における授業評価のアンケート結果は各設問とも概ね高い評価を得ることができた。この結果は各教員の日頃の授業改善の賜物ではあるが、実施するアンケート内容の周知により、明確な評価基準として、教員の意識改革につながり、さらなる授業改善につながったと言える。

一方、前年度に引き続いて予習・復習の時間に関しては他項目よりも低くなっている。ただし、あくまでも平均であり、個々の授業特性および学生の予習や復習に対する時間的な意識の違いがあることも考慮した上での評価と考えるべきである。この点に関してはアンケート設問内容の改善や設問に対する説明を加えるなど検討したい。また、この項目が高い教員の実施方法などを共有し他の教員の参考にしていきたい。

【通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

スクーリング授業において、学生による授業評価を全教員が実施し、集計結果は各授業担当者にフィードバックするとともに、補助教材『玉川通信』で学生に公表する。目的は、各授業担当者が新年度に向けて授業改善することにある。

② 到達目標

・専任教員、非常勤講師を問わず、すべての授業において学生による授業評価アンケートを実施する。
・実施した授業評価の集計を外部委託し、データ分析と集積を試み、教員の授業改善、また学生の傾向や課題を共有する。

③ 活動内容

・夏期スクーリング（8 月 3 日～8 月 23 日）において、専任教員、非常勤講師の全教員が、担当する全ての授業（一部の実技系科目を除く 91 科目）について、授業評価アンケートを実施した。回答数は延べ 2,353 名。
・質問内容は、前年度と同一のものを使用した。

④ 評価

各授業の結果は、全教員の結果をグラフ化したものと比較できる形で、通信教育課程の全教員を含む夏期スクーリングの担当教員本人に配付し、結果と課題を共有することができた。また、『玉川通信』で結果の概要を学生に公表した。

授業評価の内容であるが、各設問とも概ね高い評価を得ている。今年度は設問中「授業全体の目標は明確であった」という項目について肯定的（「とてもそう思う」＋「そう思う」）に答えた人の比率が 91.3%と最も高かった。次いで、「教員の話し方や声量は適切であった」「教員の、学生への対応や配慮（質問への対応、コミュニケーション、学修する雰囲気作りなど）は適切であった」など、授業担当者の授業力にかかわる項目の評価が高かった。

前年度に比べて肯定的評価の伸びが多かった設問には、「授業で用いたテキスト・配付資料などは適切であった」（+2.47 ポイント）、「授業時間内に自分の考えや意見をまとめたり、学びを深めたりする機会や時間が適切に与えられた」（+2.26 ポイント）など、授業の進行に関わる項目が上位にきており、授業の進め方を受講者が比較的高く評価しているといえる。

若干低めの評価となった項目としては、「学修目標を達成」「授業時間内に自分の考えや意見をまとめたり、学びを深めたりする機会や時間が適切」「各回の授業の学修量」といった項目があった。6 日間短期集中型という学修形態のため、必ずしも十分な予習・復習の時間が確保できないという制約の中で、授業時間内にいかにして学修内容の定着・深化を図り学修目標を達成するかという課題が浮き彫りとなった。ただし、昨年に比べるといずれも数値の改善が見られた。

また、クロス分析を試みた結果、「自分は積極的に授業に取り組んだ」に対する回答とそれ以外の各設問への回答との間には、明確に相関関係（積極性の高い学生ほど、各設問に対しても前向きな回答をするという傾向）があった。これは予想されたところではあるが、授業者には積極的に参加したくなるような授業が求められているといえよう。

（3）教職員相互の授業公開と参観

【通学課程】【通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

教員相互の授業参観を実施し、各自の教授法、教授内容についての振り返りを行い、授業改善につなげる。また関連する科目の教授内容の調整を検討する機会とする。

② 到達目標

大学 FD 委員会の提案に合わせ、通学課程は 3 名、通信教育課程は最低 1 名の教員が授業参観を行う。公開した教員の教育内容の振り返り、教授法の改善を図るとともに、参観した者の授業改善へ寄与することとする。

③ 活動内容

通学課程は教員 3 名の協力を得て、3 つの授業の授業公開と参観を行った。

通信教育課程は今年度は実施に至らなかった。

④ 評価

通学課程は今年度、誰のどの授業を参観したいか、アンケート調査を行い、希望者があった授業を公開していただくように担当教員にお願いした。そのため、若手は中堅および熟練者の授業参観を実施することができた。実施においては、多忙な大学教員の業務を考慮し、全 100 分の参観でなくとも良いこととした。今回は、教員の希望を聞いて、参観したいという希望者がいた先生方にお願いしたために、例年よりも参加者は多少多かったが、それでも少ないことには変わりがない。そのため、参観期間に限らず、気兼ねなく教員同士がいつでも授業を参観できる環境・雰囲気を作るようにした。その結果、特に関連する科目や共通科目が主ではあるが、教員間の教授法、教授内容についての意見交換が行われるようになったことは、授業公開を実施することの意義や成果の一つとして挙げられる。また、非常勤教員からの参観への参加があったことも意義深いと思われる。

通信教育課程は、昨年度の周知不足の反省を踏まえて積極的に授業公開への参加を呼びかけたが、結果的には公開に至らなかった。ただ、公開時期が秋学期だったので、春学期の授業なら公開したいという声も毎年聞こえており、広報の方法と併せて今後の課題としたい。

（4）FD 研修

【通学課程】

1）香川研修

① 概要

玉川学園創設者小原國芳の小原國芳先生縁の場所を訪ね、理解を深め、参加した教員同士が学び合い、各自が今後の教育活動、研究活動の活性化を図ることを目的とした教員自主企画および学部企画の学外（香川県）FD 研修「玉川学園の歴史および玉川の教育の背景」を 2 月 10 日に実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染防止のためにやむなく中止とした。

【通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

本課程では、教員数が少なく独自の FD 研修を実施するのが難しいため、随時各種の学外 FD 研修の情報を提供した。

② 到達目標

本校の全学で行われる FD 研修のほかに、専任教員の各自の問題意識にあった学外 FD 研修に参加することで、日々の教育活動の向上を図ることを目的とする。

③ 活動内容

残念ながら今年は学外 FD 研修への参加はみられなかった。

④ 評価

例年京都地区で行なわれる「FD フォーラム」に 1 名参加していたが，本年度は新型コロナウイルス感染症対策のため，同フォーラム自体が中止となってしまった。次年度も引き続き積極的な参加を呼びかけると共に、よりきめ細かに情報提供を行っていきたい。

4　昨年度（平成 30 年度）に提案された予定・課題の達成度について

【通学課程】

授業評価アンケートの全科目（専任・非常勤）実施を目標にしていたが、US 科目との重複が春学期にあり、特に非常勤教員や数名の専任教員からどちらで実施すべきかわからないとの問い合わせがあった。その後、授業運営課とのメールでの確認により、秋学期には、それが改善された。

教育学部は、学部独自の教育課題を追及する学部企画 FD 研修を行っているが、新型コロナウイルス感染防止のために実現できなかったことは残念である。令和 2 年度の計画で実施したいと考えている。

【通信教育課程】

スクーリングの授業評価アンケートは、授業者の多寡によらず原則として全科目で実施することができた。また、設問の内容を通学課程や他学部のものを参考に見直してから 5 年連続で同一項目でデータを取っているので、経年変化の分析や、通学課程や他大学などの授業評価とある程度の比較は可能になったが、今年度は実施できなかった。次年度以降の課題としたい。

テキスト学修科目のアンケートについては、平成 28 年度に見送りを決めて以降、特段の進展はなかった。

5　今後（令和 2 年度以降）の予定・課題について

【通学課程】

前年度に引き続き、日常の教授内容や方法の更なる検討と研鑽を重ね、本学の建学の理念に基づき、今日の社会の要求に応じることのできる人材育成に取り組むことが重要である。授業評価アンケートにおいては、項目内容の改善として全授業に当てはまる項目の設定は困難ではあるものの、実習や演習、アクティブ・ラーニング、少人数の授業など授業体系に応じた項目を加えるなども今後の課題の一つである。

教員の重要な職務である研究活動の活性化のために、共同研究などの勉強会を令和 2 年度も開催していきたい。

FD 研修の一つである香川研修において学部教員が創立者の縁の地である香川県を訪れ、その教育者としての原点に触れることは大きな意義がある。とりわけ私学においては創立者の建学の精神を教育の出発点としているため、その精神を教職員や学生が共有することが大学教育の成果にも大きく影響すると考えられ、昨今「自校史教育」の重要性が強調されている。さらに教育学部では学生たちが創立者・小原國芳の教育精神を学ぶ機会を授業や行事など多数設けており、今後もその充実が求められている。そのため今後の大学における教育活動に大きく寄与する香川研修は今後も引き続き行っていく予定である。特に新任教員には学外出身者も多く、このような研修の機会を設けることは玉川教育の精神を全教員間で共有するためにも必要であると考えられる。

【通信教育課程】

スクーリング科目については引き続き授業評価アンケートを実施する。通学課程や他大学などの授業評価との比較や、同一科目・同一教員の経年経過の分析も試みてみたい。また、テキスト学修科目についても、学生のニーズをすくい上げることができ、なおかつ教員の指導方法や授業の改善にもつなげられる何らかの方法を検討したい。

§　芸術学部

1　FD 活動への取組理念・目標

芸術学部のミッションは「芸術による社会貢献の実践力を育成する」であるが、現代の社会は経済を中心とするグローバル化や少子高齢化、情報化、新技術の進展といった社会の変化が労働市場や産業・就業構造の流動化となって急速に進行している。このような時代にあっては、我が国の人口動態も踏まえつつ、変化する社会の捉え方と貢献の仕方を常に検討して柔軟に対応していく必要がある。新聞社の全国世論調査によると、「世界に通用する人材や、企業や社会が求める人材を大学は育てているか」の質問に 6 割を超える国民が否定的な回答をしているように、人材養成や研究の目的が社会の要求と乖離していると指摘されている。特に芸術分野は新産業分野でも期待される感性や創造力などの育成と深くかかわり、芸術学部の人材養成が社会の発展や改善に貢献できると確信している。

そのためには、従来の教育や福祉はもとより、現代は芸術と産業分野との関連性と活用が高まっているように、常に社会とのかかわりを意識しながら、ESTEAM 教育の推進をはじめ教員養成課程の充実など、カリキュラムや教授法の改善・開発を行う必要がある。また、入学生の資質や能力などの動向も踏まえた学修支援体制の構築や、学生を主体とした授業方法の研究および総合的な学修環境を形成するプロジェクト型授業や外部機関との連携授業を推進することも重要である。そのためには多様化する社会の要請に応えうる柔軟性や機動性をもった組織として教員団を編成しなければならない。教員団が目標や課題を共有し、協働して教育活動を推進・改善できるチーム力形成が重要である。

2　学部における FD 活動の組織構成と役割

芸術学部長を中心とした主任会の構成員及び FD 委員が FD 活動の中核メンバーである。定期開催の主任会と主任研修会が中心となり教育課題の共有や分析を行い、目標や課題の設定および改善方策などの基本方針を検討する。そして、中核メンバーはもとより、課題ごとの担当教員が報告や成果及び方策等を拡大教授会で報告することなどを通じて、全学部教員が目標や課題を共有し、組織的な取組とする仕組みを構築している。また、各学科の主任は学部 FD の中核メンバーであるので、学科内の取組をまとめることや推進する役割を担い、教授会と学科会が連動して FD 活動を推進させている。主任会構成員および大学 FD 委員は、全学的な課題や情報の収集と伝達及び他学部・他大学における FD 活動の情報収集を行うと共に、学部内の情報共有を図り、FD の組織的活動が円滑に行われる役割を担っている。

3　令和元年度の活動報告

（1）授業アンケートの実施と授業成果報告書の作成

① 概要・活動内容（目的を含む）

令和元年度は、予定通り春学期、秋学期として年 2 回の授業アンケートが芸術学部で開講されている全ての授業（専任、非常勤講師とも）について実施された。個々の科目に関するデータおよび統計的データの全てを、Blackboard を通じて学部内の全学生およ

び学部内の全教員に公開する。また、個々の科目についてのデータは伏せつつ、統計的データを、持ち出し不可の冊子として一般の閲覧に供する。さらに、各学科の専門科目の担当者が授業概要と授業成果をまとめた授業成果報告書などを作成している。

② 到達目標

芸術学部 FD 委員会においては、授業アンケートのデータを分析し、学部運営に活かすと共に今後の FD 活動の方向性を考える手がかりとする。また、各科目担当者はそれぞれのアンケート結果を参照し、授業の内容と養成人材像との妥当性について点検する。授業成果報告書は各学科の専任・非常勤教員に配付し、全ての教員が専門科目の概要を把握することによって、より緊密な連携を可能とする。

③ 評価

本年度も昨年度に引き続き 2 年次以降の専門科目に関して授業報告書を作成し、様々な情報を共有しつつ、今後の教育方針に関する議論の土台を築くことができた。また、授業アンケートの結果に関しては、芸術学部の拡大教授会において、その結果を報告するとともに、学生の学修状況、その傾向などについての情報を共有することが出来た。

（2）学外セミナー等への教員派遣

1）

① 概要

全国高等学校美術工芸教育研究大会（令和元年 8 月 22 日東京・御茶ノ水ソラシティカンファレンスセンター）へ椿敏幸教授を派遣。全国から集まる高等学校教員による研究授業紹介およびワークショップ、生徒の作品展開催。

② 到達目標

高等学校での美術科、工芸科指導の現状の掌握と問題点の収集。学部での教員養成の在り方を検証するための手がかりとする。

③ 活動内容

「MITE Movement image Technique Expression」のテーマにて全体会、分科会での情報収集。研究授業やパネル展示、情報交換会にて高等学校教員との意見交換。

④ 評価

今年の大会では、「2030 年を担う生徒たちに美術、工芸の学びは必要か」、「なぜ人は美術を求めるのか、人間の成長に美術、工芸の学びはどのような意味をもたらすのか」など、基調講演および各分科会にも、異分野からのゲスト（有識者）を多く招き、積極的に美術、工芸の役割についての発表や議論がされていた。また、スマートフォンや Web を利用したディスカッション機能などを活用し、リアルタイムでの意見交換などの実験的な取り組みが印象的だった。教育現場での諸問題について、学部での教員養成推進の情報と課題を収集することができた。

２）

① 概要（目的を含む）

全日本音楽教育研究会全国大会東京大会（総合大会）全日本音楽教育研究会発足 50 周年記念　令和元年 10 月 31 日～11 月 1 日　（場所：武蔵野音楽大学 ほか）に芸術教育学科の教員複数名が参加した。音楽教育に関する研究を推進し、わが国音楽教育の向上発展に寄与することを目的とする。教員養成課程に携わる教員にとって重要な情報を収集し、学部・学科の教員と情報共有することで、授業運営や各授業の質の向上に役立てる。

② 到達目標

芸術教育の過程において演奏家あるいは研究者としての側面と教育者としての側面を伸ばすべく、この大学部会の内容を教員養成課程の授業運営及び授業の質的向上、授業改善に活かす。

③ 活動内容

今年度は東京が会場となり、大学部会事務局長として小佐野圭教授が任務にあたり、事務局次長として中村岩城教授が事務的業務に関わった。

・大学部会大会（武蔵野音楽大学）テーマ「社会に生きる音楽の学び」：渡辺明子准教授が「音楽科教員養成課程における声楽初学者への指導法　-学生へのインタビューと実践記録より-」と題して研究発表を行った。

・シンポジウム　テーマ「これからの音楽教育をデザインする」東京地区の音楽系 7 大学から総勢 20 名の学部生・大学院生が参加して協働研究を行った。玉川大学からは 4 名の学生が参加した。小佐野圭教授、清水宏美教授が指導及び研究に携わった。

・中学校部会（府中の森芸術劇場）：ワークショップとして野本由紀夫教授が「鑑賞指導から表現指導へ：『フーガ　ト短調・バッハ』として、教材分析とともに会場のパイプオルガンを使って楽器の仕組みや鑑賞のポイントをつかみ、鑑賞から表現につなげる方法を教授した。オルガン演奏：中村岩城教授。

・清水宏美教授が中学校公開授業の助言者として参加した。授業主題「日本のいろいろな民謡の良さを味わおう」。

・秋元みさ子非常勤講師が小学校公開授業の助言者として参加した。授業主題「旋律の重なり合うひびきを感じ取ろう」。

④ 評価

大会全体の中で玉川大学教員による研究発表・演奏などが多く行われたが、中でもこの度の研究大会で、学生協働チームによる研究を行ったことは、この研究から得られた新しい知見の獲得と同時に、小・中・高・大の教員の日頃の研究の姿、全日音研の活動に対して直に接する機会を設けたことで、次代を担う若き教員や研究者の育成に結びつけることができたとの感想が得られた。

（３）研修会

１）

① 概要（目的を含む）

講演およびワークショップ「Gerontology and STREAM Learning Workshop 老齢学を STREAM で考える」令和元年 9 月 13 日 17：30-19：00（場所：大学教育棟 2014 517 教室）講師：クリスティーン・ムルホーン教授（米国フィラデルフィア、ドレクセル大学保険行政科長）。藤枝由美子教授、村山にな准教授による企画。平成 25 年より 9 月に 9 日間の共同授業を玉川大学とドレクセル大学で交互に行ってきた。今年度は学生の交流だけでなく教員同士の研修としてムルホーン教授に「老齢学」のテーマで老齢者介護におけるロボット支援などの状況を日米の対比を含めて講演していただき、参加者によるディスカッションを行った。

② 到達目標

老齢者介護の現状と未来の展望を知見し、ディスカッションを通して教員同士の国際館での交流を行い、今後の両校の繋がりを深める。老齢介護というキーワードから工学系、芸術系、医療系など分野横断的な課題への取り組みを考える。

③ 活動内容

今年度のドレクセル大学との学生国際交流のテーマを「老齢学」としてその分野の研究者であるムルホーン教授に講演をお願いした。学生の研修活動として国内の介護施設などを見学した内容を含め、アメリカでの介護現場における問題点やロボット介護の状況などを講義していただいた。その後、参加者によるディスカッションを行った。参加者は芸術学部から小佐野圭教授、藤枝由美子教授、村山にな准教授、林三雄教授、長裕二教授、中村岩城教授、教育学部 大谷千恵教授、リベラルアーツ学部 髙城宏行准教授、ドレクセル大学からムルホーン教授、吉永朱子教授。

④ 評価

国際交流の機会として学部内に留まらず他学部からの参加もあり有効であった。我々にとって避けられない老齢化や介護の未来について活発なディスカッションが行われた。介護ロボットという視点から STREAM という言葉をタイトルに挙げたが、学部会議等の都合で工学部からの参加が得られなかったのが残念な点であった。

２）

① 概要（目的を含む）

研修会「組織におけるブランディングの役割」講師：大島由久氏（ランドーアソシエイツ東京オフィス代表、クリエイティブディレクター、玉川大学非常勤講師）（9 月 18 日、場所：ランドーアソシエイツ東京）。ドレクセル大学の吉永朱子教授からの要望でブランディングの国際的企業の東京代表である大島氏にブランディングとは何か、組織づくりに欠かせないイメージづくりの重要性などの内容で講座をお願いした。メディア・デザイン学科のグラフィック・デザイン関連の教員と大学・学部での組織づくりという観点から小佐野学部長、教育学部の大谷教授の参加を得た。

② 到達目標

企業や大学などの組織を対外的にアピールする中でのブランディングの考え方を学び授業や組織改善のために活用できるようにする。

③ 活動内容

メディア・デザイン学科の非常勤講師でもある大島由久氏から勤務先のランドーアソシエイツ事務所にてブランディングの講義を受けた。大島氏は玉川大学の卒業生でもあるため、大学時代から海外での仕事の体験を含め、どのような生き方で現在の仕事にたどり着いたのかという内容に始まり、組織の中でのブランディングはマークや広報、企業イメージの対外的な要素だけではなく、組織内の意識高揚にも十分に機能するものであることを説明していただいた。参加者は小佐野圭教授、橋本順一教授、藤枝由美子教授、小北麻記子教授、村山にな准教授、林三雄教授、非常勤講師の渡辺恵理子氏、坪沼真理氏、教育学部 大谷千恵教授、ドレクセル大学からムルホーン教授、吉永朱子教授。

④ 評価

1 時間半という予定時間を上回り、実りのある内容での講義をいただいた。研修受講者には学部長、学科主任など学部運営を担う立場の方も参加されていたため、内容的にふさわしいものであった。ブランディングの重要性を改めて感じることができた。

（4）調査・研究など

1）

① 概要（目的を含む）

5 月 26 日（日）にメディア・デザイン学科の 1 年次キャリア研修として「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」での体験型プログラムが行われた。この内容を次年度も継続して行うことを前提に教員自らもその内容を体験する目的で志村雄逸教授、藤枝由美子教授、林三雄教授の 3 名の教員が参加し、その評価を行った。

② 到達目標

研修内容の確認とその効果について確認し、次年度からの 1 年次研修に活用できるのか評価する。

③ 内容

「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」は学生を 8 名程のグループにわけ、全盲のインストラクターにより完全な暗闇の空間でおやつを食べる、粘土細工をするなどの行動を通して視覚に頼らないコミュニケーション体験をするもの。新入生同士が深い絆を感じることを目的とした研修である。この体験を学生と共に行うことで研修としての効果を確認した。

④ 評価

普段体験したことのない暗闇での体験を通して、周りとの協力の大切さや声を出してコミュニケーションをする大切さ、リーダーシップ育成への足掛かりとなる効果が期待される。また、盲人・隣人に対する優しさなどを育むなどの効果が得られた。

1年次研修としては良い効果があると実感できたが、少人数でのグループ体験のため、100 名を越す学生数となると実施が困難な点も感じた。次年度での実施は要検討と考えられる。

２）

① 概要（目的を含む）

2 月 6 日、7 日に沖縄科学技術大学院大学 OIST（沖縄県恩納村）の施設見学視察を行った。次年度から本格的にスタートする STEAM 教育、STREAM Hall 2019 運用を前に、工学部系の領域と芸術とのつながりを考える上で STEM 教育の最先端である OIST を見学視察した。視察時期には沖縄県立芸術大学大学院生の作品展も行われていたことから、工学系とアートの関わりを主な視察内容とし、OIST 広報担当者からの聞き取りも行う。メディア・デザイン学科からは橋本順一教授（学科主任）、藤枝由美子教授（教務主任）、林三雄教授、赤山仁准教授、芸術教育学科からは中島千絵教授（学科主任）、椿敏幸教授（学生主任）が参加した。

② 到達目標

各学科主任、主任会、FD 委員のグループによる将来計画、新学科体制の考え方に視察内容を生かす。視察の内容について拡大教授会で報告し、専任教員間において学部の中で活用できる内容について情報を共有し STEAM 教育のあり方を探る。

③ 内容

沖縄科学技術大学院大学の広報ディビジョンスタッフの森田洋平氏（理学博士・準副学長）、照屋友彦氏（広報・地域連携セクション・マネージャー）から大学の設立目的や組織・施設のこと、学修のシステム、特別な取り組みのプロジェクトなどについて説明を受け、質疑応答を行った。ギャラリーによる沖縄県立芸術大学の作品展を見学し、同スタッフの案内で研究施設、教室、研究室などを案内していただいた。

④ 評価

OIST では研究領域の壁をなくすことが研究テーマにおいてだけでなく、研究施設の空間的な使い方などを垣根のないものとして取り組んでいく姿勢が特徴と見られた。この点においては STREAM Hall 2019 での空間の使い方でも十分参考になる内容を確認できた。お互いの研究内容について広くアピールすることにより分野を超えた研究や教育活動ができるという状況を確認できた。

科学技術分野と芸術の関わりとしては、お互いにクリエイティビティという視点でアートとの共通性を見出すことに価値があるとの重要性を示唆していただいた。「アート・ミーツ・サイエンス」というテーマは STREAM Hall 2019 においても実践していきたい。

4　昨年度（平成 30 年度）に提案された予定・課題の達成度について

今年度は全日本音楽教育研究会への取り組みで大きな成果が得られた。また、新たな取り組みとして、海外の大学との教員同士の幾つかの研修が行われたところに成果があった。教員養成改革、教育制度改革の進行及び次世代人材養成へ対応が求められる状況で、社会の要求を踏まえた学部の運営や教育計画の実行に有効であった。

５　今後（令和 2 年度以降）の予定・課題について

芸術学部は 2021 年の改組にむけて、より新たな教育環境を作る時代となっている。STREAM Hall 2019 や Consilience Hall 2020 などの新たな施設の利用と教育内容の改善が目される。

次年度の取り組みの重点的なものとして、提携校であるドレクセル大学との交換留学を見据えて英語・日本語によるバイリンガル型の授業運営を目指す取り組みがある。その目的のために、「日本語と英語でどのようにしてクラスマネージメントをするか」というテーマのもと、科目担当教員数名を対象に研修会を数回行う計画である。

また、改組に対する教員全体の意識向上や新規教育施設での新しい教育活動に向けて各学科の取り組みや各プロジェクトの横断性を学部を超えた連携はもとより、社会との連携を図り、理論と実践の往還による教育体制を推進し、現代ニーズに適合した人材養成機関と研究機関としての機能を高めるためにも、積極的かつ継続的に教員の資質能力やチーム力の向上努力を一層推進する。

§　リベラルアーツ学部

1　FD 活動への取組理念・目標

本学部では、①学士課程教育の質保証、②学部・学科設置の趣旨と教育目標、③実効的なリベラルアーツ教育の実現、という観点から日頃の教育研究活動の改善へ向けた FD 活動を展開することを目標としている。

2　学部における FD 活動の組織構成と役割

本学部における FD 活動の組織構成・役割は以下の通りである。

学部長・各主任…学部における FD 活動の方針について提案・助言する。

FD 担当　　…学部における FD 活動全般をコーディネートする。また大学 FD 委員会で審議・報告された内容を拡大教授会にて報告する。
学部で実施される専任教員向けの FD 研修会についてコーディネートする。

※この他、所属教員全員が主体的に FD 活動に取り組む体制がとられており、教育内容・方法に関する情報交換は教員間で日常的に行われている。

3　令和元年度の活動内容

（1）初年次教育の方向性に関する研修

① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部の人材育成に資する、より効果的な 1 年次研修・初年次教育を実践するために、今年度の実施結果を共有し、その振り返りをもとに次年度以降の 1 年次研修の具体的プランを検討する。また、研修と連動した初年次教育のあり方についても意見交換を行う。

② 到達目標

次年度以降の 1 年次研修および初年次教育カリキュラムを改善することができる。

③ 活動内容

1 年次研修の 2 日目に湯本富士屋ホテルにて実施した。参加者は 1 年生担任教員、学部長、各主任であった。具体的には以下の各項目について検討を行った。

・一年次セミナーのクラス運営と大学生としての学修・生活に関する早い段階での教育および指導方法
・次年度以降の新入生研修のあり方
・新入生研修の成果のまとめとアウトプット方法
・秋学期「一年次セミナー102」のスケジュールと内容

④ 評価

一年次セミナーは 1 年生全員（約 190 名）を複数クラスに分けて実施するため、クラス間の授業内容や学生指導、クラス全体の状況については、担任間で共有し連携をはかっていくことが重要である。入学後 2 ヶ月を経てクラスの様子を把握できてきた時期に、

現状のまとめと今後への意見交換を行うことで、効果的な 1 年次研修および初年次教育カリキュラム改善へ向けた準備を整えることができた（令和元年度学生授業評価「意欲的に取り組んだ」とても／ややそう思う 91%、自由回答での否定的意見 6%）。この点から、目標を達成できたと評価できる。

（2）「二年次セミナー」の教育内容と方法の改善に関する研修

① 概要（目的を含む）

本学部 2 年生必修科目「二年次セミナー201」および「二年次セミナー202」の教育内容と教育方法を検討し、望ましい二年次教育のあり方を考える。

② 到達目標

この科目の教育内容・方法を具体的に改善することができる。

③ 活動内容

春・秋学期中に担任会を開催し、2 年生各クラス担任が参加し、教育内容・方法を改善するためのディスカッションと研修を実施した。特に今年度は以下の点を中心に検討を行った。

・3 年生以降のリベラルアーツセミナーおよびプロジェクト（ゼミ）の学修へ繋げるための基礎力として、2 年生でアカデミックリーディングおよび要約、ディスカッションのさらなるスキルアップの方法。この教材の一つとして労働に関する評論を取り上げ、キャリア教育と連動させる。また学部の特色である多角的な視点からの分析方法や議論を知り、リベラルアーツの学修態度を涵養するための、文献を複数活用したグループディスカッション・プレゼンテーションの形態および指導方法。

・二年次の学内・学外研修のあり方。内容とアウトプット方法。

・学内にとどまらない多様な学びや経験に触れるための情報提供のあり方。特に海外留学やボランティアについて。

④ 評価

二年次教育のあり方に関して教員間で問題意識を共有し、実際の教育内容と方法の改善を進めることができた。また、学生の大学での学びと社会に向けた自らの態度姿勢に対する意識を高め（令和元年度学生授業評価「将来に役立つ能力が高まった」とても／ややそう思う 89%、「知識が深まった」とても／ややそう思う 88%、「意欲的に取り組んだ」とても／ややそう思う 97%）、教育効果をさらに上げることができたと考えられる。

（3）学部将来構想の観点からの学部運営改善に関する研修会

① 概要（目的を含む）

学部運営改善の方針と具体案を検討する。

② 到達目標

部将来構想に基づく学部運営改善の方針と具体案を策定する。

③ 活動内容

現代の社会状況の中でリベラルアーツ学部はどのような理念を掲げるべきなのかを議

論するとともに、学部の教育システムを時代に即した形にアップデートするための方策について検討した。

④ 評価

検討の結果、カリキュラムの見直しにくわえて、研究分野や専攻分野（メジャー）のあり方の再検討が必要であることが確認された。学部運営改善のために解決すべき問題点が明らかになった点において大変有意義であった。

（4）教育現場におけるハラスメント防止に関する研修

① 概要（目的を含む）

学部専任教員のハラスメントに関する意識を高めると同時に、現在起こりうるハラスメント問題を防止・的確に対処するために必要な知識を身につける。

② 到達目標

教育・研究現場において、ハラスメント問題に対する防止・抑止のための行動、また発生時の的確な対処ができるようになる。

③ 活動内容

令和元年 11 月 21 日（木）17：00～17：30、大学教育棟 2014 793B 会議室にて実施した。

④ 評価

専任教員全員が出席して、必要事項を確認すると共に、ハラスメント問題の防止・対処方法を具体的に理解することができた。到達目標は概ね達成されたと評価できる。

（5）令和元年度リベラルアーツ学部 FD 研修会

① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部教育活動の点検、本学部共同研究報告、新年度教育計画、学部改組に関する検討等を行う。学部教育目標や教育内容・方法、研究活動のあり方について教職員間で認識を共有することができる。

② 活動内容

令和 2 年 2 月 13 日～14 日に湯本富士屋ホテルにおいて専任教員による研修会を実施し、以下の各項目について集中的に検討した。

（ア）リベラルアーツ学部の今後の教育カリキュラム改革へ向けて

（イ）共同研究中間報告

「歩行と都市空間の相互作用がはぐくむ固有の想像力に関する学際的研究」

（下村恭広准教授）

「台湾における日本語教育に関する実践的研究」

（船戸はるな助教）

（ウ）特別講演

「ともに学ぶ。考える。インターネット安全教室」

（古賀大吉氏　IPA インターネット安全教室事務局（株）教育ネット研究所室長）

（エ）令和元年度教育活動の振り返りと次年度教育計画

（オ）次年度「一年次セミナー」および「二年次セミナー」の内容

③　評価

（ア）本学部の人材養成目標を確認し、それを実現するためのディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーについて教員間で共通認識を深めた上で、4 領域 7 メジャーという専門分野を位置づける構造の維持あるいは改変に向けて議論を行った。またゼミ（リベラルアーツセミナー）での学修のあり方、指導の実際についても意見交換が行われ、今後の教育カリキュラムおよび内容について有意義な議論を行うことができた。

（イ）共同研究中間報告 1 件目「歩行と都市空間の相互作用がはぐくむ固有の想像力に関する学際的研究」では、数年間継続されてきた学際研究手法の探究に基づき、今年度新設された学際科目「Japan Studies Overseas」の理念やコース設計に関する詳細な説明と経過報告がなされた。本コースでは、台湾台北市での老朽建造物の再利用による近年の都市構造変化に着目し、その歴史的背景や現状について、社会学的・文化人類学的視点に立った調査分析を実施している。今回の報告では、テーマの学問的意義やフィールドワークに選定された地域（台北市と東京）と選定理由を参考にしながら、本学部における学際的教育の展開に資する議論を行うことができた。

もう 1 件の報告「台湾における日本語教育に関する実践的研究」では、台北市にて、幼少期に日本統治下で日本語教育を受けたインフォーマントへの聞き取り調査を行い、日本語・中国語・台湾語の習得経緯や使用状況に加え、アイデンティティーとナショナリティーの認識や多言語使用の特徴について、言語学的な分析を行った研究成果が報告された。さらに学部教員のそれぞれの専門的立場からの熱心な質疑により、海外での日本語教育の歴史や状況について理解を深めることができた。

（ウ）古賀大吉氏による特別講演では、インターネット利用の問題点、児童～青年期のインターネット利用の現状（低年齢化、機器普及率の高さ、LINE と動画共有の利用率の高さ、授業受講手段としての動画視聴、SNS による交流範囲の拡大）、指導留意点（威圧的に禁止せず学生が相談できる窓口になることが重要など）、コミュニケーショントラブルの特徴（揚げ足とり、言い逃れするための曖昧な表現、誤解の生じやすさ）、保護者の対応（親所有であることの明確化、ルール作り、フィルタリング、使用用途の把握）、学校現場での教育（日常モラルと仕組みの理解（公開性、記録性、信ぴょう性、公共性、流出性））を解説していただいた。（株）教育ネットでは、指導教材を作成・配布していることも紹介され、今後の学生指導に向けて重要な情報を多く得られた講演会であった。現状は小学校～高校での知識普及に努めている段階であり、インターネット普及は 100%近くまで達しているのに対し、知識浸透にはまだ時間がかかることが窺えた。こうした現状を受けて、生活形態が高校生までとは大きく異なる大学生に対してどのような指導を

していくべきか、各教員が改めて考え議論する機会を持つことができた。

（エ）令和元年度の学部教育活動の振り返りから、問題点、改善点を教員間で共有し、令和 2 年度に予定される教育活動に関する検討を行った。

（オ）「一年次セミナー」「二年次セミナー」「リベラルアーツ基礎」「ブリッジ講座」およびその他学科専門科目に関して、授業評価アンケートおよび授業改善計画に基づき、今年度の授業運営について振り返りを行い、教材やスケジュール、グループワークの指導方法など、具体的な教育計画を立案することができた。

以上のように、学部専任教員が一同に会し学部教育・研究に関して集中的に議論する機会を持ったことは、学部教育に関する問題意識と目標の共有に加え、教員間連携の円滑化という点においても大変有意義であった。

（6）学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

学部科目のうち複数教員が担当する科目を中心に、学生による授業評価アンケートを実施し、教員間で授業運営の効果や問題点に関する認識を共有し、改善計画を議論し方策を立てる。

② 到達目標

現在の学部生の授業に対する意識を把握し、学部の教員間でアイデアを提供し合い、より良い改善に向けた授業運営計画を立てることができる。

③ 活動内容

令和 2 年 1 月 20 日～2 月 1 日に Blackboard を使用し、学部 1～4 年生を対象に授業評価アンケートを実施した。1・2 年生には、授業内で説明を行った後に 10～15 分間の回答時間を与えた。3・4 年生には、Blackboard 掲示およびメールにより回答を指示した。1 年生 176 名（回答率 93%）、2 年生 173 名（回答率 91%）、3 年生 46 名（回答率 27%）、4 年生 35 名（回答率 20%）の回答を得た。

質問項目は、①複数教員が担当する科目（一年次セミナー、リベラルアーツ基礎、二年次セミナー、ブリッジ講座、リベラルアーツセミナー、プロジェクトセミナー）から各学年 2 科目、②US 科目（1 年生）または学科専門科目（2～4 年生）から 1 科目、以上の各科目につき評価 5 項目（意欲的に取り組んだ、授業以外によく予習復習した、知識が深まった、学習能力が高まった、将来に役立つ能力が高まった）と自由回答、③授業全体に対する自由回答であった。

評価 5 項目の科目ごと集計結果および全自由回答を報告書にまとめ、令和 2 年 2 月 14 日の学部 FD 研修会にて参加者（今年度かつ次年度授業担当全員）に配付し、授業評価項目および授業評価アンケートの実施方法について意見交換を行った。このアンケート集計結果を踏まえて、授業改善計画書に各教員が記入し FD 担当が回収すると共に（後日も含め提出率 80%）、同日に授業運営に関するミーティングを行った。

④ 評価

本学部ではこれまで各授業内で学生評価が行われていたが、今年度は共通のアンケー

トを実施したことにより、教員間の授業の効果や問題に関する認識共有をより顕在化することができた（FD 研修会での意見交換、授業改善計画書の Blackboard での共有）。これにより、授業改善計画も該当授業のみにとどまらず学部生の全体的傾向への配慮が反映されたものとなり、授業間で応用可能な内容が盛り込まれた（授業参加の積極性を高める方法など）。以上から今年度の到達目標は概ね達成されたと評価できる。実施要領については次年度以降見直しを行い改善していく。

（7）学外 FD セミナーへの参加

① 概要（目的を含む）

外部機関が主催する FD セミナーに本学部教職員が参加し、FD に関する研修を受けるとともに、大学教育や FD 活動に関する最新の情報や研究動向を把握し、それを今後の FD 活動に活かしていく。

② 到達目標

学外の FD セミナーに参加し、FD に関する最新の情報を得ることができる。

③ 活動内容

令和 2 年 3 月 18 日～19 日に、京都大学高等教育研究開発推進センター主催「第 25 回大学教育研究フォーラム」（於：京都大学）へ学部 FD 担当（梶川）が参加予定であったが、実施中止となり参加が叶わなかった。

④ 評価

大学教育と FD に関する最新動向や知見、他大学の活動状況を把握することを目的としていたが、今回は参加ができなかった。

4　昨年度（平成 30 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に提案された予定・課題は以下の通りであった。

①　これまで以上に、各教員の FD に対する意識をより高めるため、多くの教員が参加しやすい FD 活動の機会を多く設け、本学部教員の資質向上を図る。教員の研究活動を教育にも生かせるような科目のあり方を議論していくと共に、多様性がキーワードとなる現代に適応した大学生を育てる教育力と研究力をさらに高めていく。

②　各科目や教員の教育成果や課題を学部内で共有し、互いの教育に活用していくため、電子ファイルあるいは文書など恒常的に入手閲覧の可能な情報として、保管し蓄積する仕組みを検討する。

③　学部全体として科目共通の学生対象授業アンケートの実施を検討する。今年度の回答状況は良好で自由記述にも多くの建設的な回答が寄せられた。これまでリアクションペーパーや独自の授業アンケート等により、各教員が授業評価を実施し一定の成果を挙げてきているが、共通アンケートにより②の課題でもある成果や課題の共有や活用が見込まれる。

以下、それぞれの達成度について振り返る。

①　FD 研修会の実施、1・2 年担任ミーティング、その他教員相互の情報交換などにより

FD に対する意識が高まり概ね実践されてきたと評価できる。今年度は特に FD 研修会のなかで、近年増加しているインターネット（SNS 等）使用において生じる問題とその防止策について外部講師による講演会を開き、防止のための指導力を強化することができた。

② 一年・二年次セミナーなど一部の科目では教員間で資料や成果の共有が行われており、Blackboard 上で閲覧できる資料も増加しつつある。一方で、こうした情報共有を拡大する必要性や共有方法について、今年度は十分に議論を展開できなかったため、次年度以降主任会や教授会を中心として検討を進めていく。

③ 複数教員が担当する科目を中心に、学生による授業評価アンケートを科目間共通の形式で秋学期末に実施した。教員間での授業運営に関する議論や授業改善計画作成に際して、有用な参考資料を提供することができたと考えられる。今年度のアンケートはインターネット（Blackboard）を使用したため、一部の回答率が低かったことから、回答率の引き上げが今後の課題として挙げられる。

５ 今後（令和 2 年度以降）の予定・課題について

初年次教育・二年次教育に関する研修（一年・二年次セミナー担当者会議）、FD 研修会、防災訓練など講習会は、学部教員の FD に対する意識を高めると共に具体的な教育活動改善の重要な機会となっていることから、次年度も継続する。さらに学部新構想に向けた教育カリキュラム、特に学問分野や領域の再構成、また卒業プロジェクト（論文執筆等）の制作・作成の指導（ゼミのあり方）についての議論を継続し、本学の特色を生かしたリベラルアーツ教育のより効果的な実践をめざし、教員間の連携を深める。

また今年度新たにスタートした学部の科目共通の学生対象授業評価アンケートを、項目や実施方法などの問題点を修正しつつ継続する。結果の開示方法や授業改善計画書との関連づけ、授業資料や成果の共有方法等と併せて、授業内容の改善に向けより効果的な活用方法を検討する。

§　観光学部

1　FD 活動への取組理念・目標

観光学部では、現在における観光の意義と役割、現状と課題を的確に理解し、適切な情報収集とその分析および異文化に対する理解を基礎に、高度な英語運用力を駆使してグローバル時代の観光ビジネス、地域活性化に貢献できる人材を養成する。

目標とする人材育成にあたり、教員全員が観光学部の理念、教育目標、そして、問題意識を共有することを目標とする。

2　学部における FD 活動の組織構成と役割

観光学部長、観光学科主任、教務主任、学生主任、FD 担当教員が中心となって FD 活動を実施する。学部の担当教員と大学 FD 委員は連携して活動計画を取りまとめ、主として研修会・ワークショップの運営にあたる。

3　令和元年度の活動内容

（1）　ワークショップ　「観光学部 FD 検討会」

実施日　：　令和元年 4 月 25 日（木）教授会終了後

場　所　：　大学研究室棟 B107

① 概要（目的を含む）

例年の観光学部 FD 活動は、学部教員全員の希望を反映させたものとは言い切れない現状にある。そこで、学部教員一同を募り、学部として取り組みたい、または、取り組むべき FD 活動を検討する。

② 到達目標

観光学部 FD 活動への理解と取り組むべき活動を把握する。

③ 活動内容

4 月の第 2 回の教授会にて当該年度の FD 活動として､何に取り組むべきか検討した。

④ 評価

本来であれば、年度の FD 活動の検討のみならず、過年度の学部 FD 活動をも振り返り、PDCA を検討するべきではあるが、本ワークショップの開催時期については次年度以降の検討課題としたい。

（2）研修会　「ハラスメント講習会」

実施日　：　令和元年 7 月 25 日（木）16：30～17：00

場　所　：　大学研究室棟 B107

本学の顧問弁護士からご講演いただいた。「ハラスメント講習会」の目的は諸々のハラスメントを理解し、その防止のためにどうするべきかを自覚することである。

① 到達目標

諸々のハラスメントを理解し、その防止のためにどうするべきかを説明できるように

なる。

② 活動内容

ハラスメントの諸々をご解説いただき、大学での事例をいくつかご紹介いただきながら、教員が加害者にならないための心構えをご教示いただいた。

③ 評価

数年に 1 度のペースで開催される全学的研修会ではあるが、開催のたび、普段の教育活動を振り返る良い機会となっている。あくまでも教員の価値観で考えるのではなく、教育を受ける側を尊重する姿勢が大切であることを再認識できたのではないだろうか。

（3）講演会「通年採用におけるキャリア支援のあり方」

実施日　：　令和 2 年 1 月 28 日（火）　教授会終了後　18 : 00～19 : 00（質疑応答含）

講　師　：　キャリアセンター長　大槻 利行 氏

場　所　：　大学研究室棟 B107

① 概要（目的を含む）

本学キャリアセンター長 大槻利行氏より、通年採用への移行に際し、企業側の予想される採用活動とそれに伴う学生の就職活動の変化についてご解説いただく。また、それら状況が大学教育へ与える影響および我々教員として、学生にどのようなキャリア支援をしていくべきか、そして、学生がどのようなアプローチ・対策を取ればよいのか、ご教示いただく。

② 到達目標

通年採用に伴って予想されるキャリア指導の変化を理解し、学生がとるべき就職対策を指導できるようになる。

③ 活動内容

本学キャリアセンター長 大槻利行氏より、通年採用における企業側の予想される採用活動とそれに伴う学生の就職活動の変化についてご解説いただいたのち、質疑応答が活発になされた。

④ 評価

大槻氏によると、通年採用による学生の就職活動は早まるという。これは、本来、経団連が意図していた「4 年の学修を終えた（専門性を高めた）学生」が卒業後に就職活動をするという流れからの逸脱である。就職活動の早期化の原因として、大手就職支援サイトをはじめとするプラットフォーマーが通年採用を就職の後倒しではなく、むしろ前倒をしてビジネスチャンスを拡大しているためと指摘していただいた。そのほか、本学の学生によく見られる傾向として、内向きな就職活動をご指摘いただき一方で、大手の就職支援サイト以外にも同業他社が多数乱立していることをご教示いただき、非常に勉強になった次第である。

（4）講演会「2020 年度の教育改革に伴う大学教育のあり方」

実施日　：　令和元年 11 月 21 日（木）　教授会終了後　18 : 00～19 : 00（質疑応答含）

講　師　：　朝日新聞社　販売局　顧客開発プロモーション部専任部長　兼　令和 2 年入試改革アドバイザー　森田 明子 氏

場　所　：　大学研究室棟 B107

① 概要（目的を含む）

令和 2 年入試改革における学修内容の変化と今後の大学に求められる教育を理解する。

② 到達目標

令和 2 年入試改革における学修内容の変化と今後の大学に求められる教育を理解し、担当授業で検討できるようになる。

③ 活動内容

朝日新聞社で令和 2 年入試改革アドバイザーである森田氏から令和 2 年度の教育改革について、ご解説いただいたのち、本教育改革に伴う学修変化に対して、大学に求められる教育、ひいては社会が求める人材を輩出するために何が必要かをご教示いただいた。

④ 評価

森田氏によると、令和 2 年入試改革ではこれまでの教育改革の中で最も影響が大きいと予想されるという。講演の中では、具体的な入試問題を紹介され、読解力がこれまで以上に求められることをご説明いただいた。そうした中で、新聞が果たす役割が時事を知ることのみならず、読解力の向上と就職活動にも資することをご教示いただいた。

（5）教職員相互の授業公開と参観

① 概要（目的・到達目標を含む）

教員相互で授業を参観し、各教員の教授法、教授内容について授業改善を行う。

② 活動内容

春秋学期にすべての授業を対象に参観授業を行い、授業改善につながるよう担当教員と参加教員による振り返りを行う。

※ただし、諸事情により参観を断る場合もある。

③ 評価

今年度より、対象授業を大幅に拡大したものの、残念ながら参観した教職員はいなかったため、次年度は参観教員数を増やすよう年 1 回の参観授業をお願いするなどの検討の余地はある。

（6）学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

観光学部観光学科の科目において、授業改善を目的とした授業評価アンケートを実施した。

② 到達目標

学生の学修達成度を測り、改善点を踏まえて今後の授業運営に資すること。

③ 活動内容

観光学部開講科目でマーク式、記述式の授業評価アンケートを実施した。データの集計結果は科目担当教員に配付し、活用している。

④ 評価

観光学部授業評価アンケートの結果は下記の通りである。

春学期授業評価アンケート回答数は昨年度984に対して、今年度は1,066と増加した。主な原因は、1 年次学生数の大幅増加に伴う授業評価アンケートの回答数の増加と思われる。なお、19ある質問項目のうち昨年度と比較して19項目すべてが減少していた。

秋学期授業評価アンケート回答数は昨年度 510 に対して、今年度は 649 と増加した。相変わらず、授業評価アンケートの未提出等の人為的なミス等があったものの、変化もわずかとその原因の特定には至らない。2項目に変化はみられず、17項目が減少していた。春学期と同様に減少傾向にあると思われる。

【春学期授業評価アンケート全体結果】

分野	設　　問	平均値	3時間以上	2時間～3時間未満	1時間～2時間未満	1時間未満	まったくしていない	無効回答数
Ⅰ	1 1回分の授業外の学習（予習、復習、課題など）にかけた時間	2.4	5.5%	6.8%	28.0%	44.1%	15.6%	3
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.2	3.8%	5.2%	23.5%	45.8%	21.7%	19
		この授業の平均値	よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない	無効回答数
			5	4	3	2	1	
Ⅱ	3 この授業に積極的に参加した。	4.0	33.5%	40.9%	20.3%	4.8%	0.6%	5
	4 シラバスは受講に役立った。	3.6	22.5%	32.6%	28.9%	9.9%	6.0%	8
Ⅲ	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	39.2%	37.1%	16.7%	5.1%	1.8%	8
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.2	42.8%	36.4%	16.1%	3.2%	1.5%	8
	7 映像視覚教材（ビデオ、書画装置、パワーポイントなど）や板書が授業の理解に役立った。	4.1	42.8%	34.5%	17.5%	3.7%	1.4%	6
	8 教員は、効果的に学生の授業参加（質問、意見など）を促していた。	4.0	36.9%	35.2%	20.6%	5.8%	1.6%	8
Ⅳ	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	39.5%	36.6%	18.9%	3.5%	1.5%	6
	10 基本的知識が得られた。	4.2	43.8%	36.4%	16.3%	2.4%	1.1%	9
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	35.6%	38.1%	21.2%	3.5%	1.6%	7
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.0	33.3%	37.5%	22.3%	4.8%	2.1%	6
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	34.9%	37.0%	21.1%	5.1%	1.9%	9
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.0	35.8%	35.8%	21.2%	5.1%	2.1%	6
Ⅴ	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	41.5%	35.4%	17.6%	3.6%	1.9%	8
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.1	41.9%	33.9%	19.6%	2.9%	1.7%	8
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.0	38.8%	31.2%	22.3%	4.5%	3.2%	7
Ⅵ	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	50.4%	29.8%	14.3%	3.5%	2.1%	8
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.2	49.9%	29.7%	15.1%	3.4%	1.9%	8

回答数：1,066

【秋学期授業評価アンケート全体結果】

分野	設　　問	平均値	3時間以上	2時間～3時間未満	1時間～2時間未満	1時間未満	まったくしていない	無効回答数
Ⅰ	1 1回分の授業外の学習（予習、復習、課題など）にかけた時間	2.5	3.0%	7.9%	34.0%	43.5%	11.6%	5
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.3	2.0%	7.4%	24.8%	49.2%	16.6%	11
		この授業の平均値	よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない	無効回答数
			5	4	3	2	1	
Ⅱ	3 この授業に積極的に参加した。	4.1	31.9%	44.7%	20.5%	2.6%	0.3%	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.7	24.1%	35.7%	30.6%	7.3%	2.3%	2
Ⅲ	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.2	40.7%	44.7%	12.0%	1.8%	0.8%	0
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.3	47.2%	37.8%	11.3%	2.8%	0.9%	1
	7 映像視覚教材（ビデオ、書画装置、パワーポイントなど）や板書が授業の理解に役立った。	4.3	46.7%	37.1%	12.5%	2.9%	0.8%	0
	8 教員は、効果的に学生の授業参加（質問、意見など）を促していた。	3.9	28.6%	40.8%	23.2%	5.6%	1.9%	2
Ⅳ	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	35.9%	45.6%	15.9%	2.0%	0.6%	0
	10 基本的知識が得られた。	4.3	47.0%	41.8%	9.9%	0.9%	0.5%	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.1	35.4%	42.8%	18.8%	2.0%	0.9%	0
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	29.6%	41.9%	22.2%	5.1%	1.2%	0
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	31.3%	44.6%	19.4%	3.7%	0.9%	1
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.0	35.2%	41.7%	17.7%	3.7%	1.7%	1
Ⅴ	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.3	45.7%	37.7%	13.9%	2.0%	0.8%	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.2	44.4%	39.6%	12.6%	2.9%	0.5%	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.2	42.7%	38.4%	14.2%	2.9%	1.8%	0
Ⅵ	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	50.7%	32.8%	11.1%	4.6%	0.8%	0
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	49.1%	34.9%	11.6%	4.0%	0.5%	1

回答数：649

４　昨年度（令和元年度）に提案された予定・課題の達成度について

令和 2 年度の教育改革に伴う大学教育のあり方について、大学教員として今後の学生が大学入学までにどのような教育を受けてくるのかを知る良い機会となった。通年採用におけるキャリア支援のあり方について、5 年分ぶりとなる大槻利行キャリアセンター長にご講演いただいた。5 年前は就職戦線において観光学部生をどう売り込むべきかについてご講演いただいたが、この 5 年間で就職戦線では様々な変化があったことを改めて知る良い機会となった。

参観授業については、春秋と全授業を対象としたが、残念ながら参加者がおらず、次年度以降に課題を残す結果となってしまった。また、当初予定していた「アクティブラーニングに係る Excel スキルの修得」については、夏または春の授業がない時期での開催を計画していたものの、その機会を逸してしまったため、次年度以降に改めて開催を検討することとしたい。

また、一昨年度から学部で本格始動させた「授業改善計画書」の運用は大いに改善の余地がある。春秋ともに、授業評価の良し悪しを問わずに 1 授業の提出を求めたものの、3-4 割程度の提出しかない。授業の PDCA を実現させるためにも、FD 担当としてもっとアピールをしていく必要がある。

５　今後（令和 2 年度以降）の予定・課題について

令和元年度と同様に、学部 FD 研修会、講演会、参観授業、授業評価アンケートを実施する。昨年度末に際し、FDer の養成講座を受講したのをきっかけに、学部として取り組むべき FD とは何か、大学として教員に何ができるようになって欲しいのか、などを議論できる観光学部 FD 検討会は今後の継続は必須と思われる。

今年度からの改善として、参観授業については、原則すべての観光学部科目をその対象としたが、参加者がいなかったため、令和 2 年度には、1 教員 1 つ以上の参観授業への参加必須を検討し、授業改善計画の実行と授業の PDCA の円滑運用を図っていきたい。

３．教師教育リサーチセンターの活動

１　教職課程 FD・SD 活動への取組理念・目標

本センターは、大学における教職課程を運営するため、大学附置機関として設置された。主な業務内容としては、教職課程における学生支援と、教職に関する研究活動支援がある。研究活動支援の中には、教員養成における教職課程 FD・SD 研修も含まれており、教員養成の質を向上させることを理念・目標としている。

２　教師教育リサーチセンターにおける教職課程 FD・SD 活動の組織構成と役割

センター長、次長、課長及びリサーチフェローを中心に教職課程 FD・SD 活動を計画し、課長補佐以下職員で研修会開催の実務を担当している。

３　令和元年度の活動内容

（１）　教師教育フォーラム

①　概要（目的を含む）

学校現場においては、社会の変化に対応するため、新しく英語やプログラミングなどの内容を教える必要が生じている。また、学校現場のみならず、その周辺で起こる様々な事例にも的確に対応することが教員としての責務となってきている。

現在、これらに対応すべく、養成・採用・研修の一体的改革は最も重視されてきており、教員養成機関である大学としても、教職課程の質保証が、教員養成における重要課題となっている。

なお、今年度の「教師教育フォーラム」は、玉川学園創立 90 周年を記念し、また、養成・採用・研修の一体的改革を担う中核拠点でもある独立行政法人教職員支援機構玉川大学センターとしての機能を持つこととなった記念として「教師教育フォーラム」を開催した。

これらを踏まえ、教育委員会との連携を強化することも重要と考え、メインテーマの内容について講演者、出席者がともに考えるフォーラムとして開催した。

②　到達目標

200 名以上の出席者を目標に掲げた。

③　活動内容

日　時：令和元年 10 月 27 日（日）10：00～16：30　於：大学教育棟 2014

テーマ：『養成・採用・研修の一体的改革を踏まえた、教職課程の質保証』

【プログラム】

午前の部：

1.講演「養成・採用・研修の一体的改革の方向性」

独立行政法人教職員支援機構理事長　髙岡 信也 氏

2.リレー講演

■「養成・採用・研修の一体的改革に向けた玉川大学の取り組み」

・玉川大学教師教育リサーチセンターリサーチフェロー/教育学部教授　森山 賢一

■「養成・採用・研修の一体的改革を踏まえた教育委員会の取り組みと養成大学への期待」

・東京都教職員研修センター　研修部長　石田 周 氏

・神奈川県立総合教育センター　所長　田中 俊穂 氏

・横浜市教育委員会事務局教職員人事部 教職員育成課　課長　山本 朝彦 氏

・川崎市総合教育センター　所長　小松 典子 氏

■「養成・採用・研修の一体的改革に向けた養成大学の役割」

・玉川大学学長　小原 芳明

午後の部：

3.分科会（教職大学院主催）　①プログラミング　②道徳

④ 評価

平成 31 年 3 月に独立行政法人教職員支援機構（NITS）と本学の間で「連携・協力に関する協定書」を締結し、令和 2 年度より「養成・採用・研修の一体的改革」を踏まえた研修拠点「玉川大学センター」として、全国で 6 番目の NITS 地域センターの活動をスタートさせる。

これに先駆けて、NITS の理事長より直接、本学内での研修活動につき期待を寄せられたこと、さらに、各教育委員会の担当者にご登壇頂き、これまで教育委員会が取り組んできている一体的改革を踏まえた活動について知ることができたことは、貴重な機会となった。

午前の部の参加者 130 名、分科会 35 名、延べ 165 名の出席者を迎え、盛況のうちに終了した。

（2） 令和元年度教職課程 FD・SD 研修会（新型コロナウイルスの影響を鑑みて中止）

① 概要（目的を含む）

1.「教員養成・採用・研修の一体化に向けた地域センターの役割と玉川大学センターに期待すること」2.「教職課程・教員養成の今後の動向について」の 2 つのテーマを設定し、研修会の開催を予定。

各学部長、学科主任、教務主任、教務担当、教職担当は原則出席とし、関係部署所属の教職員にも出席を促した。

② 到達目標

以下活動内容の「内容（目的）」に示すように、新たに設置された「独立行政法人教職員支援機構玉川大学センター」の役割とその活動につき、関係者一同に理解と支援協力を促す。加えて、平成 27 年 12 月 21 日に示された中央教育審議会答申以降、教育職員免許法・施行規則の改正・一部改正に関わる省令公布を受け、教員養成大学としての具体的な役割について共通認識を持つ。

③ 活動内容

日　時：令和 2 年 3 月 3 日（火）10：00～11：30

場　所：大学研究室棟 B104

対　象：全学教職員

内　容（目的）：（予定）平成 31 年 3 月、独立行政法人教職員支援機構（NITS）と「連携協力関する協定書」を締結し、令和元年 10 月に「独立行政法人教職員支援機構玉川大学センター」を開設し、令和 2 年度より「養成・採用・研修の一体的改革」を踏まえた研究拠点としての活動がスタートする。その「玉川大学センター」の具体的な役割と活動につき、機構の理事よりお話を伺う。

さらに、「教育職員免許法」の改正、「同施行規則」の一部改正に関わる省令公布により、より質の高い教員の養成・採用・研修についての具体的方策が示された。また、小・中・高等学校における新学習指導要領に基づく授業も順次始まり、現在も質の高い教員の養成を目指した手法は、次のステージに向けて、様々な事項につき検討が行われている。本研修では、これらを踏まえながら、最新の動向について途中経過も含め報告し、共有することで、より質の高い教員養成を担う者としての意識向上を図る。

【プログラム】

1.開会挨拶　高橋 正彦（教師教育リサーチセンター長）

2.講　　演　・「教員養成・採用・研修の一体化に向けた地域センターの役割と玉川大学センターに期待すること」
大路 正浩（独立行政法人教職員支援機構 理事）

・「教職課程・教育養成の今後の動向について」
森山 賢一　（教師教育リサーチセンター リサーチフェロー、教育学部教授）

④ 評価

新型コロナウイルスの影響を鑑み、次年度開催に延期となった。

4　昨年度（平成 30 年度）に提案された予定・課題の達成度について

平成 30 年度の「教師教育フォーラム」は諸事情により開催を中止し、「教職課程 FD・SD 研修会」を 1 回（平成 31 年 3 月 5 日）開催した。「教師教育フォーラム」は中止となったが、「教職課程 FD・SD 研修会」は計画通り実施することができ、目標も達成することができた。

5　今後（令和 2 年度以降）の予定・課題について

「教師教育フォーラム」及び「教職課程 FD・SD 研修会」各 1 回を開催するように計画したい。「教師教育フォーラム」は、引き続き「教職大学院」との共催により、大学全体としての教員養成への取組をふまえた内容で開催を予定している。

なお、独立行政法人教職員支援機構「玉川大学センター」としての研修等についても、今後は FD 活動として報告をしていきたい。

以上

４．ELF センターの活動

１　FD・SD 活動への取組理念・目標

文部科学省における外国語教育についての「国際共通語としての英語力の向上のための５つの提言と具体的施策」（平成 23 年 6 月 30 日、「外国語能力の向上に関する検討会」）を受けて、玉川大学の 国際共通語としての英語 「English as a Lingua Franca： ELF」プログラムは、文部科学省の語学目標における方針を満たすための適切なプログラムであり、個性豊かで多様な教員がいるため、平成 27 年度から毎年玉川大学の学生 2,000 名以上（令和元年度約 2,800 名）は国際的な国際共通語としての英語（ELF）を学べる非常に良い学修環境が整っている。

ELF プログラムの成果にとって重要なことは、各教員の教育の質である。したがって教員の資質向上が本プログラムの向上に必須であるというのが ELF センターの基本的な理念である。多くの ELF の授業が非常勤講師によって担当されているため、ELF センターは専任教員だけでなく非常勤講師の資質向上にも力を入れてきた。ELF センターには世界初の共通語としての英語を学ぶ ELF（English as a Lingua Franca）プログラムに誇りを持つ、さまざまな言語的・文化的背景を持つ教員がいる。 令和元年度は 59 名の外国語の学習と教育に豊富な経験を持つ資格のある ELF 教員が授業を担当した。彼らの出身国は、21 ヶ国（アイルランド、アメリカ、イギリス、インド、エジプト、オーストラリア、カナダ、タイ、中国、ドイツ、日本、ニュージーランド、フィリピン、フィンランド、フランス、ブラジル、ブルガリア、ベトナム、ポーランド、マケドニア、ロシア）からなり、FD 活動は彼らにとって互いの知識や経験から広く学ぶことができる有意義な機会と捉えている。

２　ELF センターにおける FD・SD 活動の組織構成と役割

ELF センターの FD 活動の告知や内容は ELF センター会によって決められている。予算やサポート等もこの会議で審議される。FD 活動の内容が決定された後、大学 FD 担当を中心に、ELF センターの作業部会の専任教員がその企画と実施を担当する。指導法、評価、e-learning など作業部会内にさまざまな分野に特化した教員のグループが存在し、CELF Journal, CELF Forum, Research, CELF Orientation Meeting, Blackboard や ELF ワークショップなどの FD 活動を担当する。

３　令和元年度の活動内容

（１）講演会・ワークショップの開催

1) CELF-ELTama Forum for English Language Teaching

①概要

ELF センターは令和元年度も ELTama と合同で CELF-ELTama Forum for English Language Teaching を開催した。

②達成目標

・ELF 教員が授業で活用できるリソースを共有する。
・それぞれの FD 活動において非常勤講師に参加を促す。
・学園内の英語教員を集める。
・これらの活動により ELF センターと英語教育関係の学会との関係、および教員同士のつながりを強める役割を果たす。
・玉川大学卒業生の中・高の英語の教員と言語学研究者の間の情報交換の場を提供する。
・これらの活動によって ELF センターの教員が一堂に会し、より良い教育実践に関する考えや研究成果を共有する機会とする。
・玉川大学 ELF センターの国際共通語としての英語（ELF）教育の研究や教育法を広める。

③活動内容

以下のワークショップや発表大会が玉川大学の ELF Study Hall 2015 で開催された。

・令和元年 8 月 23 日（火）CELF-ELTama Forum for English Language Teaching フォーラム

④CELF-ELTama フォーラムの評価

令和元年度の CELF-ELTama フォーラムは、参加者が増えて 80 名程になり、ELF センター所属の教員に日常の研究・教育の成果を発表する機会を与え、その内容を共有することができた点では有意義な会であった。今年度の発表件数は 11 件で、昨年度より ELF 非常勤講師の発表が増え、ゲストスピーカーの発表も素晴らしく、また学内の英語教員達が協力できたことが非常に良かったとの感想をいただいた。CELF-ELTama フォーラムの参加者増の要因は、昨年度より今年度のほうが広報について努力をした点にあったと考えられる。

・開催 2 ヶ月前にはイベントのポスターを完成させ、昨年度より早めに広報を始めることができた。
・インターネット上でさまざまなホームページ（玉川大学のホームページ、JACET SIG、ELT Calendar）にイベントの広報ができた。
・E メールリスト（CELF Mailing List, JACET SIG Mailing List）に CELF-ELTama フォーラムのイベントの広報ができた。

今年度の CELF-ELTama フォーラムには 59 名の ELF 教員中、19 名が参加した。この中の 8 名が非常勤講師だった。 昨年度よりは増えたものの、次回は非常勤講師の参加人数を増やすことが今後の課題である。最後に、昨年度の発表者は、自らの発表論文を『The Center for ELF Journal』へ投稿する機会が少なかったため、今年度は両方可能な仕組みを検討した成果が表れた。

2） 講演会、CELF Special FD 特別講演会

①概要

ELF センターは令和元年度に引き続き CELF Special FD 特別講演会を開催した。昨年度より多く、令和元年度は 25 回開催した。外国語教育、英語教育、ELF 教育、言語政策、社会言語学など、さまざまな研究分野の研究者や教員を CELF Special FD 特別講演会に招待した。

②達成目標

・ELF 教員の国際共通語としての英語（ELF）教育の研究や教育法を高める。
・ELF 教員や学園内の英語教員を集める。
・それぞれの FD 活動において非常勤講師に参加を促す。
・これらの活動により ELF センターと英語教育関係の学会との関係、および教員同士のつながりを強める役割を果たす。
・これらの活動によって ELF センターの教員が一堂に会し、より良い教育実践に関する考えや研究成果を共有する機会とする。
・国際共通語としての英語（ELF）研究、言語政策、言語教育への応用に関する知識を深める。

③活動内容

1)特別講演会の開催

・ELF Special FD 特別講演会①
講演：ELT Policies in Japanese Formal Education and Possibilities of ELF
実施日：令和元年 5 月 14 日（火）17：00～18：00
講師：鈴木 彩子　文学部英語教育学科准教授

・CELF Special FD 特別講演会②
講演：Struggling for International Publication: The Potential Rhetorical Problems for Indonesian Scholars in Social Sciences and Humanities when Writing in English
実施日： 令和元年 7 月 9 日（火）17：00～18：00
講師：Prof. Safnil Arsyad, University of Bengkulu

・CELF Special FD 特別講演会③
講演：Towards Cross-fertilization of English as a Lingua Franca and Study Abroad
実施日：令和元年 11 月 6 日（水）17：00～18：30
講師：木村 大輔　東京大学教養学部特任講師

・CELF Special FD 特別講演会④
講演：Applied Linguistics Beyond ELT: A Diachronic view
実施日：令和元年 12 月 10 日（火）17：00～18：30
講師：小田 眞幸　ELF センター長・文学部英語教育学科教授

2)講演会の開催

・ELF Research 講演会（2 回）

講演：多言語主義における国際共通語としての英語（EMF）認識

実施日：令和元年 6 月 21 日（金） 24 日（月）17：00～18：00

講師：石川 友和　ELF センター助教

・Research Forum Faculty Development seminar ①

実施日：令和 2 年 1 月 7 日（火）17：00～18：30

講演 A：Explicit listening strategy training for lower-proficiency learners: Is it worthwhile?

講師 A：ミリナー，ブレット　ELF センター准教授 、ディモスキ，ブラゴヤ　ELF センター助教

講演 B：Video-based learning exercises for the classroom.

講師 B：　ラーソン，ドリュー　ELF センター非常勤講師

・Research Forum Faculty Development seminar ②

実施日：令和 2 年 1 月 8 日（水）17：00～18：30

講演 A：Explicit listening strategy training for lower-proficiency learners: Is it worthwhile?

講師 A：ミリナー，ブレット　ELF センター准教授 、ディモスキ，ブラゴヤ　ELF センター助教

講演 B：Ethical Issues regarding usage of Machine Translation in the setting of Japanese University.

講師 B：　ヴルーベル，マルチン　ELF センター非常勤講師

3)ハラスメント防止研修　特別講演会

講演：大学におけるハラスメント問題

実施日：令和元年 5 月 10 日（金） 17：00～18：00

講師：玉川学園顧問弁護士

④講演会、CELF Special FD 特別講演会の評価

ELF センターの FD Special Lecture Event のテーマについては教員の興味のあるものを中心に選択しているが、普段は直接話を聞く機会のない著名な研究者に単発的に講演をお願いすることもあり、そのような機会が教員の動機づけの向上にもつながっている。毎回 20～30 名の参加者があり、参加者が多く ELF 研究と教育への応用に関する非公式な議論が ELF センターの教員間ででき、英語教育、国際共通語としての英語に関する知識を深める機会となっている。

ハラスメント防止研修特別講演会では、ハラスメントにはどのようなものがあるか、問題の防止策、対処法、大学で起こる可能性のある事例について、顧問弁護士から話を聞いた。解決策や、ハラスメント問題の防止策・対処法・解決策に関する知識を深めることができた。

（２）研究会・研修会・ワークショップなど

①概要

・Blackboard の使い方に関しての理解を深めるワークショップや講演会を開催した。

・ELF の理念に関する講義や意見交換を実施した。

②達成目標

・非常勤講師が Blackboard の仕組みを理解し、円滑に利用できるようになる。

・ELF の授業においてブレンド型学修（通常授業にオンラインを取り入れる学修）や自主的学修を積極的に取り入れることができるようになる。

・ELF 研究について最先端の知識を深める。

・ELF の理念について教員間で知識を深める。

・言語教育について教員間で知識を深める。

③活動内容

1)ワークショップ・講演会等

・Blackboard ワークショップ（4 回）

実施日：平成 31 年 4 月 22 日（月）・23 日（火）、令和元年 10 月 15 日（火）・16 日（水） 17：00～18：00

講師：ミリナー，ブレット　ELF センター准教授、コーテ，トラヴィス　観光学部准教授 、チャイクル，ラサミ　ELF センター助教

・M-Reader FD ワークショップ：多読と M-Reader の円滑な利用（2 回）

実施日：平成 31 年 4 月 17 日（水）・19 日（金）17：00～18：00

講師：ミリナー，ブレット　ELF センター准教授、チャイクル，ラサミ　ELF センター助教

・成績評価 and UNITAMA FD　講演会、ワークショップ（2 回）

実施日：令和元年 7 月 22 日（月）・23 日（火）17：00～18：00

講師：マクブライド，ポール　ELF センター准教授、チャイクル，ラサミ　ELF センター助教

・春学期 ELF Lunch Time Meeting（2 回）

実施日：令和元年 7 月 29 日（月）・30 日（火）12：10～12：50

講師：チャイクル，ラサミ　ELF センター助教

・秋学期 ELF Lunch Time Meeting（4 回）
実施日：令和 2 年 1 月 20～22 日（月～水）・24 日（金）12：10～12：50
講師：チャイクル，ラサミ　ELF センター助教

④評価

ELF センターの教員は Blackboard を学内で活用し多用している。非常勤講師も同様であり、ほぼ全ての ELF の授業でこのシステムを授業内の活動、評価、ブレンド型学修の目的で使用している。Blackboard に関するワークショップが効果的であることが見てとれる。ELF 教員の多読と M-Reader の仕組みの理解と円滑な利用をサポートする ELF および言語意識に関するワークショップは、教員の授業に対するアプローチに良い影響を与えてきた。ELF 所属教員対象のアンケート調査では、教員のほとんどが ELF の理念や概念をどのように授業に活かすかについて考慮していることがわかった。これらの教授方法の効果は学生の授業評価からも見ることができた。

さらに、ELF クラスの授業見学が行われた。CELF では、ELF モジュールのデモンストレーションをキャンパス全体の大学 FD および SD の授業参観期間の一環として、7 月 8 日（月）～10 日（水）、12 日（金）に専任教員が教える 14 のクラス、10 月 7 日（月）～9 日（水）に同 7 クラス、秋学期と春学期で 21 クラスの見学会を行った。玉川大学の教員や職員が興味を持って参加してくださり、大多数の見学参加者からの感想は好感触だった。

令和元年 11 月 9 日（土）・10 日（日）、合計 12 の ELF モジュールのデモンストレーションが、玉川大学のコスモス祭で実施された。ELF モジュールデモンストレーション FD の目的は、ELF コンセプトと大学の語学教育の基盤として、また ELF 教育を促進するために、研究、および専門能力開発することである。コスモス祭期間中に約 190 名の教員、卒業生、学生、一般来場者が、ELF モジュールデモンストレーション FD に参加した。

ELF Lunch Time Meeting は昨年度から新しく FD セッションとなり、ELF センターの FD 担当と非常勤講師が、クラス管理、ELF 教育法、学生評価の質問、問題、問題解決について、直接話し合うことができ、また、さまざまな研究テーマや　FD の感想や次年度の提案を聞くことができた。

（3）ELF センター教員オリエンテーション

①概要

・ELF センター教員のオリエンテーションを実施した。この行事は単に学期前の教員ガイダンスという要素だけではなく、ディスカッショングループ活動などさまざまな FD 活動を含んだ内容となっている。

②達成目標

・ELF 研究について最先端の知識を深める。
・ELF の理念について教員間で知識を深める。

・ELF クラスを効果的に運営する知識を深める。

③活動内容

ELF 教員の次年度オリエンテーション

・令和元年度秋学期 ELF 教員のオリエンテーション①

実施日：令和元年 9 月 17 日（火）13：00～15：30

新任非常勤講師のオリエンテーション（13：00～15：30）

非常勤講師を含む全 ELF 教員のオリエンテーション（14：00～15：30）

講師：マクブライト，ポール　ELF センター准教授、ELF センター専任教員

・令和 2 年度春学期 ELF 教員の次年度オリエンテーション②

実施日：令和 2 年 3 月 23 日（月）10：00～15：30

新任非常勤講師のオリエンテーション（10：00～12：30）

非常勤講師を含む全 ELF 教員のオリエンテーション（14：00～15：30 オンラインビデオ）

講師：祐乗坊 由利 ジョディー　ELF センター助教、ディモスキ, ブラゴヤ　ELF センター助教、黒嶋 智美　ELF センター助教、石川 友和　ELF センター助教

④評価

秋学期開始前の 9 月 17 日と次年度春学期開始前の 3 月 25 日に開催された。午前のセッションでは各教員に ELF プログラム、教科書、およびカリキュラム、CELF チューター制度、クラス管理、テクノロジー指向が提供された。午後のセッションでは、プログラム説明、年間授業計画に関する説明、教員の育成、クラスの管理と評価、広範囲にわたる読書、新たな ELF のオリエンテーションに関する情報、そしてキャンパスツアーに焦点を当てた。参加者にとっては非常に有意義な機会となった。オリエンテーション後、専任教員で実施内容についての改善点を協議することにしている。

当日参加できなかった非常勤講師は、後日別途実施するため、参加率は 100%となる。年度途中の新任講師へのオリエンテーションも実施している。

（4）学生による授業評価アンケート

①概要

令和元年度の秋学期の最後に、ELF センター独自のオンライン授業評価アンケートを実施した。学生は授業の中でスマートフォンまたはパソコンを使用してアンケートに回答するように指示された。アンケートは 18 項目あり、学生は、教科書、教授方法、Blackboard システム、TOEIC、ELF 教育、ELF Study Hall 2015 に関する意識、チューター制度、多読などについて評価した。調査結果は教育プログラム策定の基礎資料となり、それぞれの教員にも自身の授業運営改善のために共有されている。

②達成目標

授業評価アンケート調査の目標は学生の ELF プログラムや教員の教授アプローチに対する観点や評価を得ることにあった。また、調査結果はそれぞれの教員に自分の教授法に対する学生の評価をフィードバックするという目的もあった。

③活動内容

秋学期授業評価アンケートは、1,666 名（全学生 2,800 名の 59.5%）から回答を得た。

④評価

これらのアンケートのデータは ELF プログラムに対する評価として使用され、令和 2 年度の教育プログラムの構築のために使用される。おおむね学生は授業に対してとても満足しているという結果であった。例えば、Q5.この ELF プログラムで学んだ事は有意義だった（34.01%大いにそう思う、48.96%そう思う）、Q7.この ELF プログラムに満足している（27.76%大いにそう思う、45.43%そう思う)などである。

令和 2 年度は授業評価アンケート調査を春学期と秋学期（年 2 回）に行い、それぞれの教員に学生 からの評価を配付し、自身の指導の改善に役立ててもらう。

（5）教員による授業内容アンケート

①概要

令和元年度の秋学期の最後に、ELF センター独自のオンライン授業評価アンケートを実施した。アンケートは 14 項目あり、教員は、教科書、教授方法、Blackboard システム、TOEIC、ELF に対する意識、ELF センターから受けるサポートの質について評価した。調査結果は教育プログラムの改善計画や研究の目的で使用される。

②達成目標

・多様な教員のニーズにどのように応え、より効果的にサポートを行うかについての情報を収集すること。

・カリキュラムを改革すること。

③活動内容

秋学期アンケートは 24 名（40.6%）から回答を得た。

④評価

今年度も全教員から回答を得ることはできなかった。平成 30 年度の秋学期と同様にアンケートはメールに埋め込んだところ、回答数は若干増えたが、半数以上の教員が回答しなかった。ELF センターとしてどのように非常勤講師をサポートすれば良いかについて有意義な情報を得られる機会であるため、今後はより多くの回答を得られるようにアンケートへの協力を喚起したい。しかしながら今回のアンケートから得られた情報は教科書の選定に役立ち、教員のサポートをどのように効果的に行うかについて知ることができた。 Q. I am satisfied with the training and support I have received as a teacher in the ELF program.（54.1%大いにそう思う、45.83%そう思う）。また、教員の ELF に対する理解が深まっていることがアンケートから知ることができた。

（６）他大学との言語教育交換研究会

①概要

大学の言語教育および英語カリキュラム、日本の教育の課題と展望について今後の教員養成における指導や教育実践に活かすため、他大学と連携を図り言語教育交換研究会を実施した。

②達成目標

・ELF 研究について互いに最先端の知識を深める。
・ELF の理念について互いに知識を深める。
・ELF センターの教育法を効果的に運営する知識を深める。
・ELF センターの教育法を効果的に運営する知識を広める。
・参加者同士のネットワークを築くことを目標とする。

③活動内容

・他大学との言語教育交換研究会①

意見交換者：三村 千恵子　国立大学法人宇都宮大学基盤教育センター英語部門教授・プログラムコーディネーター、阿部 容子　同基盤教育センター助教、峯 恵理菜　同助教、峯 愛隣　同助教

実施日：令和元年 11 月 20 日（水）13：00～15：30

講師：チャイクル，ラサミ　ELF センター助教

・他大学との言語教育交換研究会②

意見交換者：三宅 ひろ子 東京家政大学人文学部英語コミュニケーション学科准教授、Robert J. Lowe　東京家政大学人文学部英語コミュニケーション学科・東京家政大学大学院人間生活学総合研究科英語教育研究専攻講師、Tom Edwards　同講師

実施日：令和 2 年 2 月 27 日（木）12：00～15：00

講演：ELF とその先：玉川学園の戦略としての ELF

講師：小田 眞幸　ELF センター長・文学部英語教育学科教授

④評価

他大学との外国語プログラムの知識交換については初めての試みであり、非常に重要なことを再認識した。特に言語教育に関する講義や意見交換を実施する機会ができた。ELF センターの言語教育プログラムは、日本において世界の共通語としての英語を学べる ELF 教育がよく知られており、さまざまな大学から研究や知識交換の提案をいただく。今年度は宇都宮大学英語プログラム（EPUU）の教員と ELF センターの専任教員による特別コラボレーションイベントが開催された。開会の挨拶として、小田眞幸 ELF センター長が歓迎のスピーチと ELF の紹介を行った。そして宇都宮大学英語プログラム（EPUU）コーディネーターの三村千恵子教授が EPUU 英語プログラムについて発表を行った。

東京家政大学人文学部英語コミュニケーション学科の三宅ひろ子准教授、Robert J. Lowe 講師、Tom Edwards 講師が 2 月 27 日の「他大学との言語教育交換研究会」に参加した。小田センター長が「ELF とその先：玉川学園の戦略としての ELF」を発表し、その後活発な意見交換もできた。

続いて、東京家政大学人文学部英語コミュニケーション学科と宇都宮大学英語プログラム EPUU と ELF センターの教員が英語の教育と学習について意見交換を行った。この機会に互いの言語教育プログラムの活動内容や知識を交換し、また参加者同士のネットワークを構築するという目標も達成できた。

（7）ジャーナルの出版

ジャーナルを出版することは、ジャーナルの論文が数多く引用をされた場合、玉川大学が世界におけるランキングをアップグレードするのに役立つため、大学名を国内および国際レベルで宣伝するための重要なツールになる。

①概要

令和 2 年 3 月、2 名の査読者（外部 1 名）がそれぞれの投稿論文を審査し、The Center for ELF Journal の第 6 号を発行した。

②達成目標

・授業運営を改善する。
・自発的学修についてのアイディアを共有する場を設ける。
・教員間で高い学識を探究する。
・ELF に対する学識を共有する。
・ELF センター所属の教員に効果的な FD の場を設ける。

③活動内容

・The Center for ELF Journal 第 6 号を発行した。

The Center for ELF Journal 第 6 号は論文の本数が多いため、今年度は昨年度より部数を減らして 70 部を出版し、学内や学外に配付した。例年どおり、国会図書館、玉川大学教育学術情報図書館にも寄贈し、玉川大学学術リポジトリにおいて公開し、ELF センターのホームページにも PDF 版を掲載する。さらに、教員のアカデミックポータル（academia.edu, REAP, Google Scholar, Research Gate など）にも掲載する。

④評価

The Center for ELF Journal は各教員に配付され、投稿者自身も満足度が高いものになった。このジャーナルをオンラインで閲覧できるようにすることで、より多くの研究者が我々の論文を手に取ることができ、他の論文にも引用されるようになると考えられる。

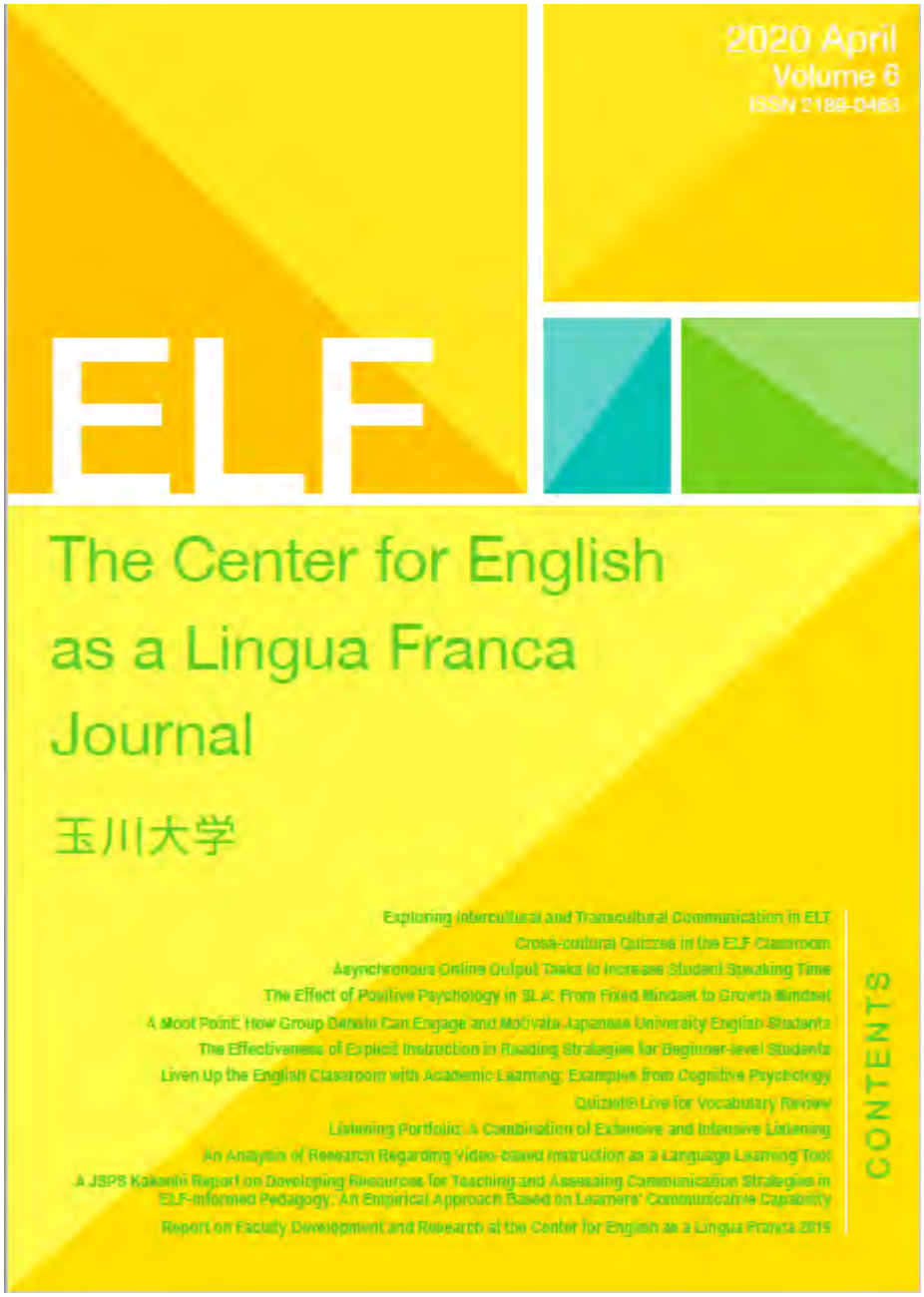


図 1. The Center for ELF Journal 第 6 号

4　今年度（令和元年度）に提案された予定・課題の達成度について

今年度初めに提出された全ての予定・課題が実施された。FD Workshop に関しては、少なくとも毎月 1 回行い、特に、ハラスメントの対応方法の勉強会の開催、日々の教育課題について非常勤講師と共に話し合える場を設けるなど、新たな取り組みを行った。今年度の ELF センター発刊のジャーナルでは ELF Pedagogy に焦点を当て、活発な研究活動を記載している。表 1 は令和元年度の ELF 専任教員の研究活動をまとめたものである。

表 1. 令和元年度４－９月の ELF 専任教員の研究活動

発表・出版	数
国際発表	21
国内発表	17
論文を投稿・出版	20
科学研究費助成事業	12

表 2. 令和元年度の ELF 専任教員の論文を投稿・出版

査読の有無	論文･著書	著者
有	Milliner, B. (2019). Comparing extensive reading to extensive reading-while-listening on smartphones: Impacts on listening and reading performance for beginning students. The Reading Matrix, 19(1), 1-19. Retrieved from http://www.readingmatrix.com/files/20-81br6g10.pdf	Brett Milliner
無	Chaikul, R., & Milliner, B. (2019). A report on faculty development and research at the Center for English as a Lingua Franca. The Center for English as a Lingua Franca Journal, 5, 54-82. Retrieved from http://hdl.handle.net/11078/1363	Rasami Chaikul & Brett Milliner
有	Ishikawa, T., & Jenkins, J. (2019). What is ELF? Introductory questions and answers for ELT professionals. The Center for English as a Lingua Franca Journal, 5, 1-10. Retrieved from: http://hdl.handle.net/11078/1359	Tomokazu Ishikawa & Jenifer Jenkins
有	Dimoski, B., & Milliner, B. (2019). Three bottom-up listening training ideas for the English as a lingua franca classroom. The Center for English as a Lingua Franca Journal, 5, 36-53. Retrieved from http://hdl.handle.net/11078/1362	Blagoja Dimoski & Brett Milliner

有	Yujobo, Y. J. (2019). Reconceptualizing 'Global Jinzai' from a (B)ELF Perspective. The Center for English as a Lingua Franca Journal, 5, 11-22. Retrieved from http://hdl.handle.net/11078/1360	Yuri Jody Yujobo
有	Okada, T. (2018). Voices of language learners in improvisations. *The Center for English as a Lingua Franca Journal, 4,* 26-35. Retrieved from http://www.tamagawa.ac.jp/celf/research/pdf/celf_journal_final4_03.pdf	Takanori Sato, Yuri Jody Yujobo, Tricia Okada & Ethel Ogane
有	Ishikawa, T., & McBride, P. (2019). Doing justice to ELF in ELT: Comments on Toh (2016). Journal of English as a Lingua Franca 8(2), 333-345. https://doi.org/10.1515/jelf-2019-2026	Tomokazu Ishikawa & Paul McBride
有	Murata, K., Ishikawa, T., & Konakahara, M. (2020). Introduction: ELF and Applied Linguistics - Broadening a perspective. In K. Murata, T. Ishikawa, & M. Konakahara (Eds.), Waseda Working Papers in ELF (vol. 8), 1-12. Tokyo: ELF Research Group, Waseda University.	Kumiko Murata, Tomokazu Ishikawa & Mayu Konakahara
有	Ishikawa, T. (2018). From native-speakerism to multilingualism: A conceptual note. *JACET ELF SIG Journal, 2*, 9-17.	Tomokazu Ishikawa
有	Ishikawa, T. (2020). Complexity of English as a multilingua franca: Place of monolingual standard English. In M. Konakahara & K. Tsuchiya (Eds.), English as a lingua franca in Japan: Towards multilingual practices (pp. 91-109). Basingstoke: Palgrave Macmillan.	Tomokazu Ishikawa
有	Cote, T., & Milliner, B. (2019). Digital literacies and study abroad: A review of Japanese students in Australia. CALL-EJ, 20(3), 44-61.	Travis Cote & Brett Milliner

有	Milliner, B., & Dimoski, B. (2019). Explicit listening strategy training for ELF learners. The Journal of Asia TEFL, 16(3), 833-858. http://dx.doi.org/10.18823/asiatefl.2019.16.3.5.833.	Brett Milliner & Blagoja Dimoski
無	Milliner, B., Okuyama, L.,Okuyama, Y. ,Hayashi, G., Bower, C., Sato, A., & Gildart, S. (2019). Yokohama JALT MyShare2018 [Specialissue]. AccentsAsia,11(2),1-32.	Brett Milliner
有	Ishikawa, T. (2020). EMF awareness in L1-shared classrooms. ELT Journal.	Tomokazu Ishikawa
有	Dimoski, B., Kuroshima, S., Okada, T., Chaikul, R., & Yujobo, Y. J. (2019). The initial stages of developing resources for teaching communication strategies in ELF-informed pedagogy. Waseda Working Papers in ELF, 8, 105-128.	Blagoja Dimoski, Satomi Kuroshima, Tricia Okada, Rasami Chaikul & Yuri Jody Yujobo
有	Mishina-Mori, S., Nakano, Y., & Yujobo, Y. J. (2019). Conceptual transfer in connecting events in Japanese-English bilingual teenagers' narratives. In E. Babatsouli (Ed.), Proceedings of the International Symposium on Monolingual and Bilingual Speech 2019 (pp. 80-85). Chania, Greece: ISMBS.	Satomi Mishina-Mori, Yuki Nakano & Yuri Jody Yujobo
有	Milliner, B., & Barr, B. (2020). Computer assisted language tests and learner mindsets. In M. Freiermuth & N. Zarrinabidi (Eds.), Technology and the Psychology of Second Language Learners and Users (pp.XX-XX). New York: Palgrave MacMillan.	Brett Milliner & Blair Barr

有	Oda, M. (2020). Learning English because of the Olympics?: A Critical Inquiry. In M. Konakahara & K. Tsuchiya (Eds.), English as a lingua franca in Japan: Towards multilingual practices (pp. 301-311). Basingstoke: Palgrave Macmillan.	Masaki Oda
有	Oda, M. (2019). Behind the sand castle: Implementing English language teaching policies in Japan. In X. Gao (Ed.), Second Handbook of English Language Teaching (pp.1-21). Switzerland: Springer, Cham. https://doi.org/10.1007/978-3-319-58542-0_4-1	Masaki Oda
有	佐野富士子、小田寛人編『授業力アップのための英語教師必携自己啓発マニュアル』東京：開拓社、2019 年 ISBN 978-4-7589-1355-3	Masaki Oda
有	Oda, M. (2020). Groundless beliefs: Language learners and media discourse. In S. Madya, W. A. Renandya, M. Oda, D. Sukiyadi, A. Triastuti, Ashadi, E. Andriyanti, N. Hidayanto P.S.P (eds.), English Linguistics, Literature, and Language Teaching in a Changing Era (pp.14-19). London: Routledge. https://doi.org/10.1201/9780429021039	Masaki Oda

５　今後（令和 2 年度以降）の予定・課題について

令和元年度には、全ての学部・学科が ELF 科目を履修することになり、ELF の授業規模が拡大した。全 8 学部・17 学科で ELF プログラムの履修が必修化され、約 2,800 名の学生の英語教育を担うことになった。令和 2 年度、ELF センターは 4 名の新しい教員を迎え入れることになり、専任教員 10 名、非常勤講師 48 名、兼担教員 2 名、計 60 名の多彩な国籍の教員陣で構成されることになる。

FD 活動はこれらの背景を考慮した試みが必要であると認識している。我々は以下の項目の実施によって ELF プログラムをより効果的に運営するよう努めたい。

FD 活動はこれらの背景を考慮した試みが必要であると認識している。我々は以下の項目の実施によって ELF プログラムをより効果的に運営するよう努めたい。

1. ELF センター主催の FD ワークショップを学内公開
2. Open Journal of Englishes in Practice ジャーナル出版
3. ELF の概念に関する講義
4. ELF の概念を生かした教授法に関する講義
5. 言語教育に関する講義や意見交換を実施する機会
6. 学会と共同で実施される英語教育に関する研究会
7. 学生や教員による授業評価アンケート

8. 効果的な教員オリエンテーション
9. 他大学との言語教育交換研究会
10. オンライン授業のサポート

５．ユニバーシティ・スタンダード科目の「授業評価アンケート」

１．アンケート実施概要

（１）概要

令和元年度春学期・秋学期において、それぞれ最終授業日にて実施（一部、科目担当者の都合等により補講・定期試験期間中に実施）した。対象科目はユニバーシティ・スタンダード（以下、US）科目である。

春学期：US 科目（但し、実験・実習・実技科目、工学部開講の US 科目、教育学部開講の一部の科目は除く）
秋学期：US 科目（但し、実験・実習・実技科目、工学部開講の US 科目は除く）

実施担当者数、実施開講クラス数及び回答学生数は次のとおりであった。

実施担当者数：春学期＝248 名／256 名（96.9%）
秋学期＝243 名／249 名（97.6%）
実施開講クラス数：春学期＝400 クラス／425 クラス（94.1%）
秋学期＝396 クラス／405 クラス（97.8%）
回答学生数：春学期＝14,391 名／17,406 名（82.7%）
秋学期＝13,927 名／16,681 名（83.5%）

（２）実施時期

春学期：7 月 17 日（水）～7 月 23 日（火）
秋学期：1 月 20 日（月）～1 月 24 日（金）
※春・秋学期ともに一部の科目については補講・試験期間中に実施。

（３）実施方法

春学期・秋学期ともに、科目担当者がアンケート用紙を配付､実施した。回答用紙の回収についてはクラスの代表（科目担当者が指名）が回収し、最寄りの事務室に提出することとした。

（４）調査用紙　（p.146 参照）

２．集計結果及び公表

集計は前年度及び今後のデータの比較分析を考慮し、クラス別及び次の分類別に行った。

US 科目全体、玉川教育・FYE 科目群「一年次セミナー101」／「一年次セミナー102」、人文科学科目群、社会科学科目群、自然科学科目群、学際科目群、言語表現科目群、教職関連科目群、資格関連科目群

また、集計結果は、クラス別集計については科目担当者及び FD 担当者にフィードバックし、科目群ごとの平均値をホームページで公表している。

令和元年度　春学期　学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目全体

回答数（全体）：　14391

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅰ	1　1回分の授業外の学修（予習、復習、課題など）にかけた時間	2.0	177

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅱ	2　この授業に積極的に参加した。	3.9	15
	3　この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.6	42
	4　学生の自主的・発展的な学修内容　※【Ⅱ】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

分野	この授業の進め方について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅲ	5　各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	52
	6　教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	18
	7　映像視覚教材（ビデオ、書画装置、パワーポイントなど）や板書が授業の理解に役立った。	4.1	22
	8　教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	22

分野	この授業を受けてみて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅳ	9　新しい考え方・発想に触れた。	4.1	12
	10　基本的知識が得られた。	4.2	17
	11　多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	20
	12　自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	25
	13　科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	18
	14　学問的興味をかきたてられた。	3.9	30

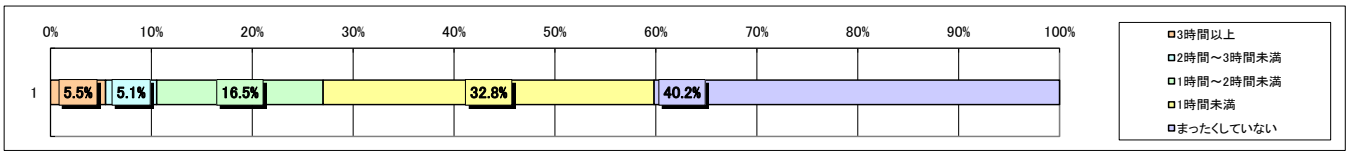
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の平均値	無効回答数
Ⅴ	15　授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	32
	16　授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	20
	17　この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	39

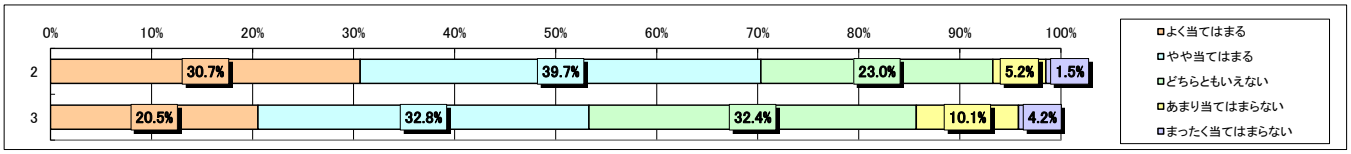
分野	その他	この授業の平均値	無効回答数
Ⅵ	18　この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	36
	19　この授業の受講者数は適切であった。	4.2	36

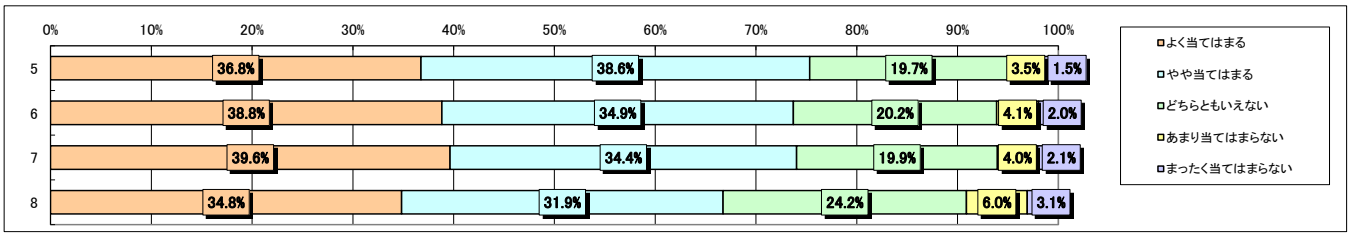
集計・分析結果	Ⅱ-4　学生の自主的・発展的な学修内容　（複数回答可）	
	授業の内容について友人と議論をした。	51.6%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	20.1%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	43.6%
	その他	5.1%

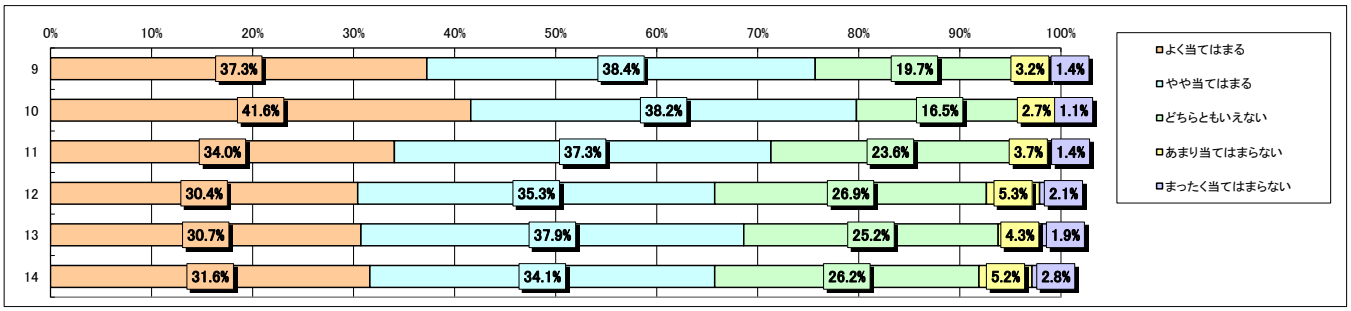
◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値＝（「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1）/回答数小数点第2位四捨五入

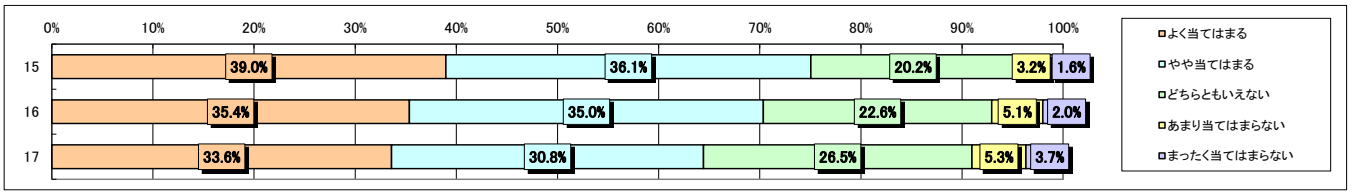
◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

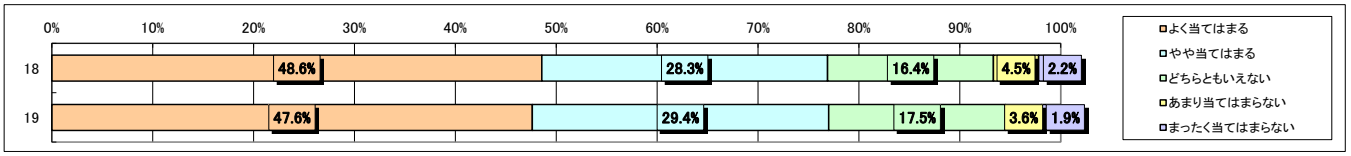

1
5.5%
5.1%
16.5%
32.8%
40.2%
3時間以上
2時間～3時間未満
1時間～2時間未満
1時間未満
まったくしていない

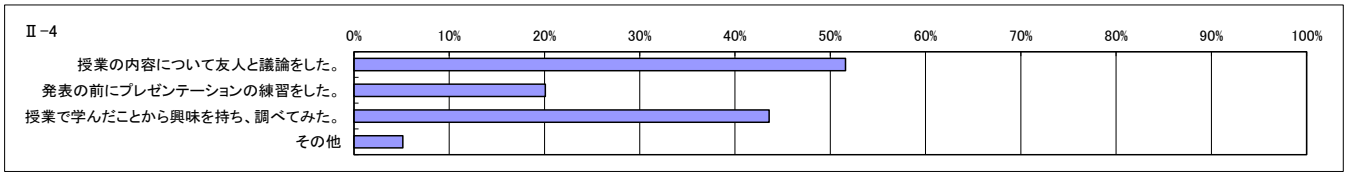

2
30.7%
39.7%
23.0%
5.2%
1.5%
3
20.5%
32.8%
32.4%
10.1%
4.2%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない

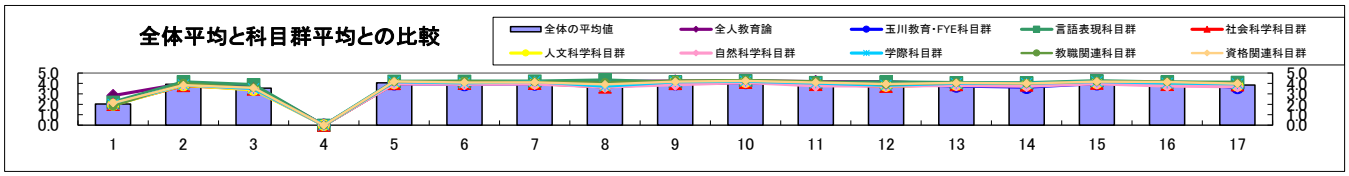

5
36.8%
38.6%
19.7%
3.5%
1.5%
6
38.8%
34.9%
20.2%
4.1%
2.0%
7
39.6%
34.4%
19.9%
4.0%
2.1%
8
34.8%
31.9%
24.2%
6.0%
3.1%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


9
37.3%
38.4%
19.7%
3.2%
1.4%
10
41.6%
38.2%
16.5%
2.7%
1.1%
11
34.0%
37.3%
23.6%
3.7%
1.4%
12
30.4%
35.3%
26.9%
5.3%
2.1%
13
30.7%
37.9%
25.2%
4.3%
1.9%
14
31.6%
34.1%
26.2%
5.2%
2.8%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


15
39.0%
36.1%
20.2%
3.2%
1.6%
16
35.4%
35.0%
22.6%
5.1%
2.0%
17
33.6%
30.8%
26.5%
5.3%
3.7%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


18
48.6%
28.3%
16.4%
4.5%
2.2%
19
47.6%
29.4%
17.5%
3.6%
1.9%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


Ⅱ－4
授業の内容について友人と議論をした。
発表の前にプレゼンテーションの練習をした。
授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。
その他


全体平均と科目群平均との比較
全体の平均値
全人教育論
玉川教育・FYE科目群
言語表現科目群
社会科学科目群
人文科学科目群
自然科学科目群
学際科目群
教職関連科目群
資格関連科目群

令和元年度　春学期　学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目　玉川教育・FYE科目群　一年次ｾﾐﾅｰ 101

回答数（全体）：　1725

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅰ	1　1回分の授業外の学修（予習、復習、課題など）にかけた時間	2.0	22

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅱ	2　この授業に積極的に参加した。	4.0	4
	3　この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.5	4
	4　学生の自主的・発展的な学修内容　※【Ⅱ】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

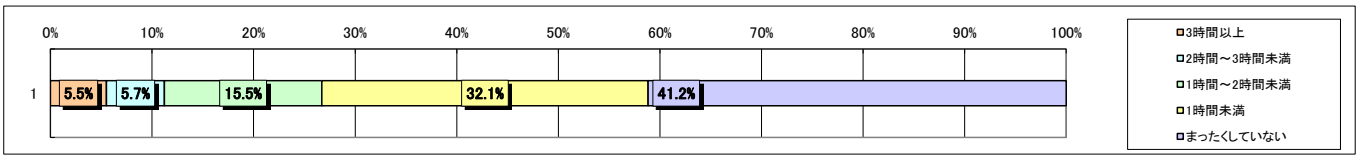
分野	この授業の進め方について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅲ	5　各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	14
	6　教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	3.9	7
	7　映像視覚教材（ビデオ、書画装置、パワーポイントなど）や板書が授業の理解に役立った。	3.9	6
	8　教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.0	5

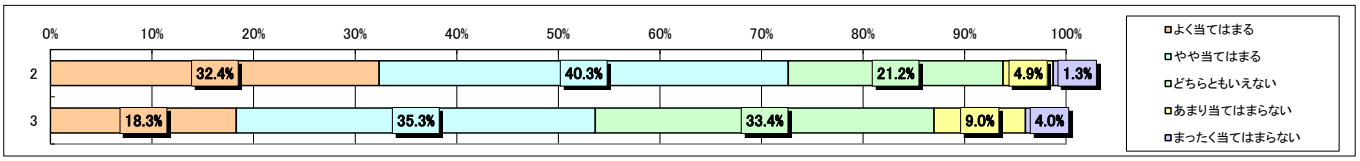
分野	この授業を受けてみて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅳ	9　新しい考え方・発想に触れた。	3.9	3
	10　基本的知識が得られた。	4.1	6
	11　多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	5
	12　自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	6
	13　科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.7	4
	14　学問的興味をかきたてられた。	3.6	8

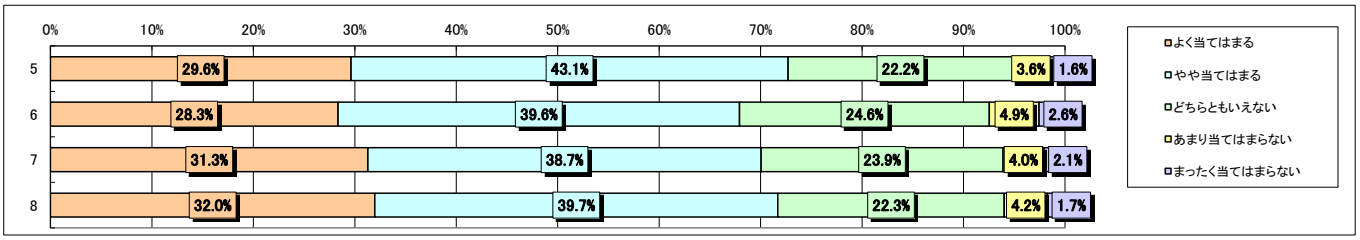
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の平均値	無効回答数
Ⅴ	15　授業全体の目標・内容が明確であった。	3.9	3
	16　授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	3
	17　この授業をほかの学生に薦めたい。	3.5	4

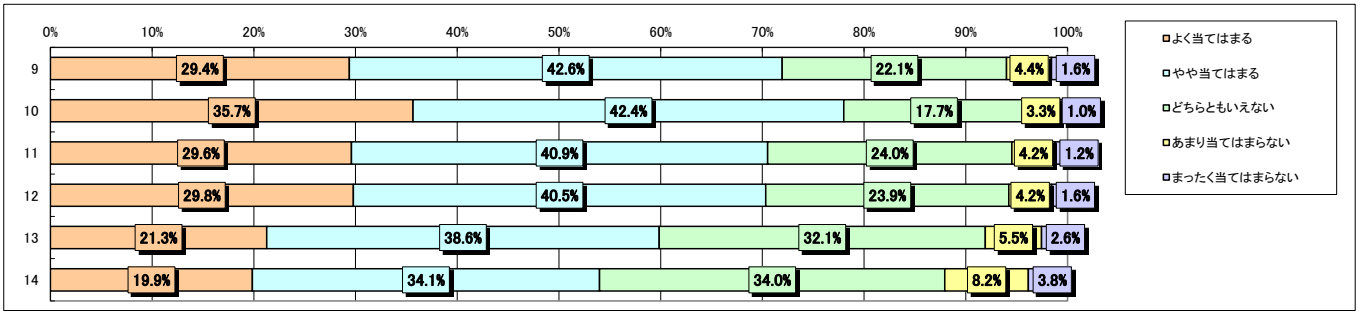
分野	その他	この授業の平均値	無効回答数
Ⅵ	18　この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	8
	19　この授業の受講者数は適切であった。	4.3	6

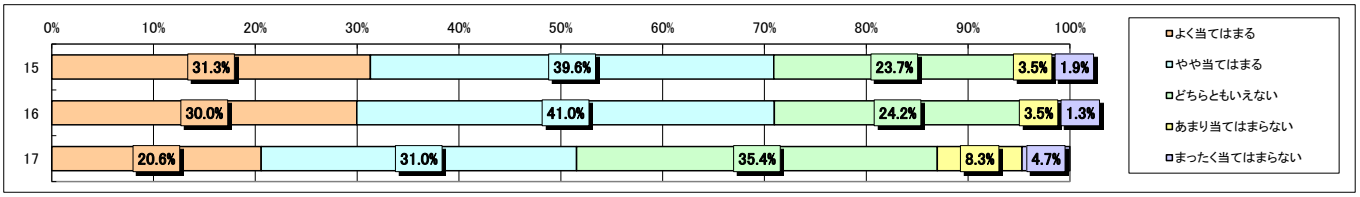
集計・分析結果	Ⅱ-4　学生の自主的・発展的な学修内容　（複数回答可）	
	授業の内容について友人と議論をした。	49.9%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	35.2%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	33.5%
	その他	3.4%

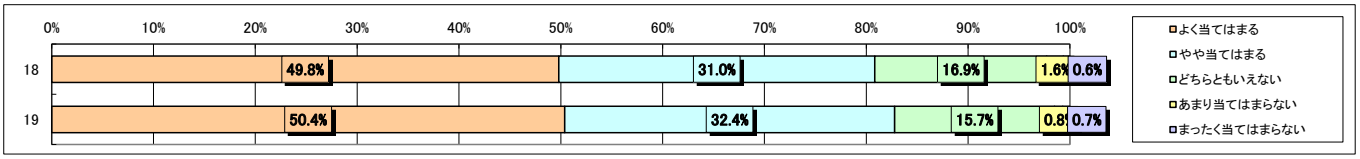

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
1
5.5% 5.7% 15.5% 32.1% 41.2%
3時間以上
2時間～3時間未満
1時間～2時間未満
1時間未満
まったくしていない

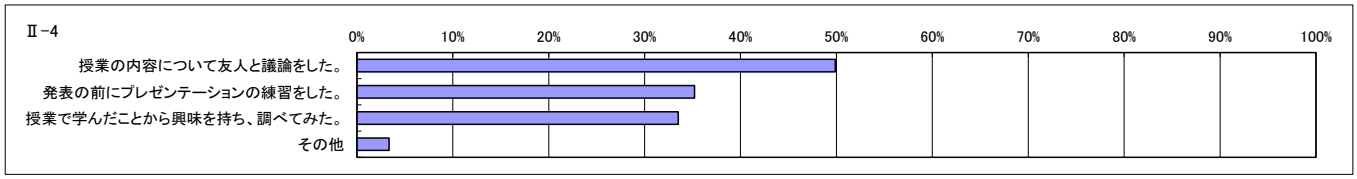

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
2
32.4% 40.3% 21.2% 4.9% 1.3%
3
18.3% 35.3% 33.4% 9.0% 4.0%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
5
29.6% 43.1% 22.2% 3.6% 1.6%
6
28.3% 39.6% 24.6% 4.9% 2.6%
7
31.3% 38.7% 23.9% 4.0% 2.1%
8
32.0% 39.7% 22.3% 4.2% 1.7%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
9
29.4% 42.6% 22.1% 4.4% 1.6%
10
35.7% 42.4% 17.7% 3.3% 1.0%
11
29.6% 40.9% 24.0% 4.2% 1.2%
12
29.8% 40.5% 23.9% 4.2% 1.6%
13
21.3% 38.6% 32.1% 5.5% 2.6%
14
19.9% 34.1% 34.0% 8.2% 3.8%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
15
31.3% 39.6% 23.7% 3.5% 1.9%
16
30.0% 41.0% 24.2% 3.5% 1.3%
17
20.6% 31.0% 35.4% 8.3% 4.7%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
18
49.8% 31.0% 16.9% 1.6% 0.6%
19
50.4% 32.4% 15.7% 0.8% 0.7%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


Ⅱ－4
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
授業の内容について友人と議論をした。
発表の前にプレゼンテーションの練習をした。
授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。
その他

令和元年度　春学期　学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目　人文科学科目群

回答数（全体）：　2650

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅰ	1　1回分の授業外の学修（予習、復習、課題など）にかけた時間	1.9	29

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅱ	2　この授業に積極的に参加した。	3.8	0
	3　この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.4	4
	4　学生の自主的・発展的な学修内容　※【Ⅱ】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

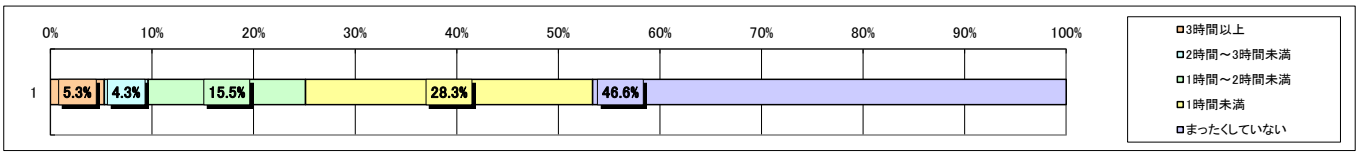
分野	この授業の進め方について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅲ	5　各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	8
	6　教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	3
	7　映像視覚教材（ビデオ、書画装置、パワーポイントなど）や板書が授業の理解に役立った。	4.0	1
	8　教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.8	2

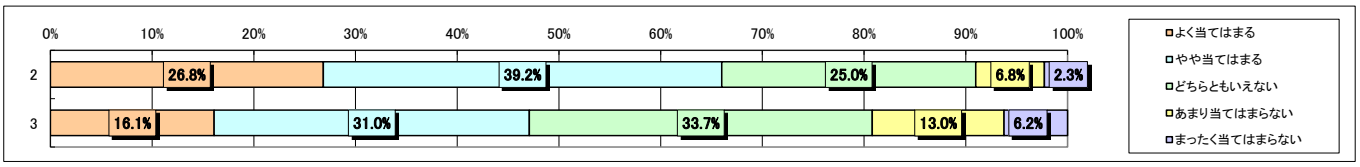
分野	この授業を受けてみて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅳ	9　新しい考え方・発想に触れた。	4.1	2
	10　基本的知識が得られた。	4.1	1
	11　多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	2
	12　自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	5
	13　科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	4
	14　学問的興味をかきたてられた。	3.9	4

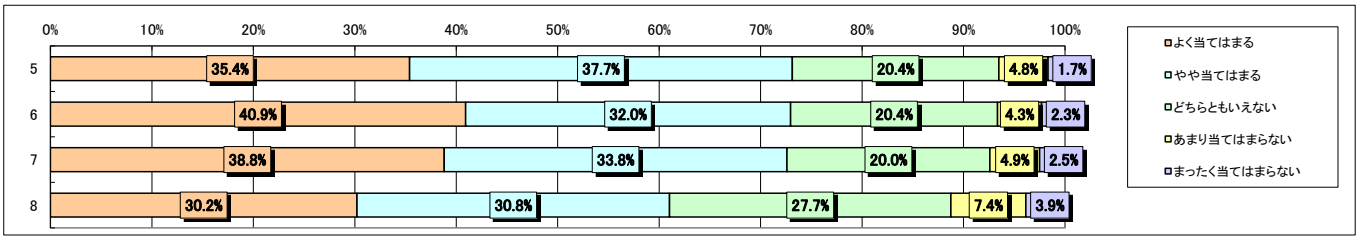
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の平均値	無効回答数
Ⅴ	15　授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	5
	16　授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	3
	17　この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	7

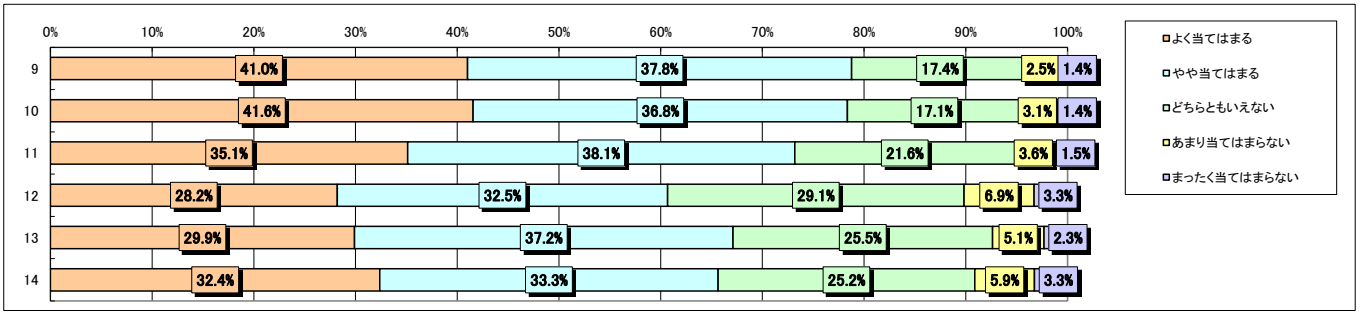
分野	その他	この授業の平均値	無効回答数
Ⅵ	18　この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	4
	19　この授業の受講者数は適切であった。	4.0	4

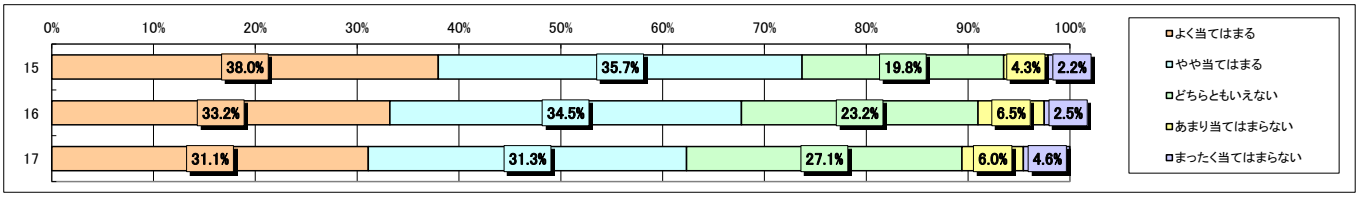
集計・分析結果	Ⅱ-4　学生の自主的・発展的な学修内容　（複数回答可）	
	授業の内容について友人と議論をした。	48.1%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	3.1%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	56.2%
	その他	5.1%

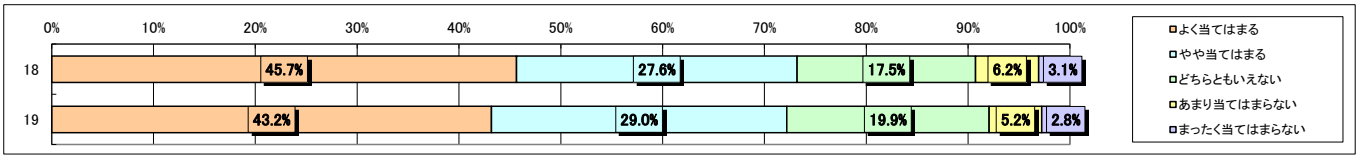

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
1
5.3% 4.3% 15.5% 28.3% 46.6%
3時間以上
2時間～3時間未満
1時間～2時間未満
1時間未満
まったくしていない

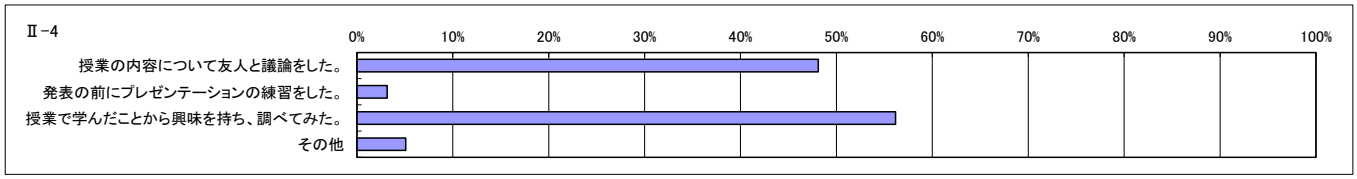

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
2
26.8% 39.2% 25.0% 6.8% 2.3%
3
16.1% 31.0% 33.7% 13.0% 6.2%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
5
35.4% 37.7% 20.4% 4.8% 1.7%
6
40.9% 32.0% 20.4% 4.3% 2.3%
7
38.8% 33.8% 20.0% 4.9% 2.5%
8
30.2% 30.8% 27.7% 7.4% 3.9%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
9
41.0% 37.8% 17.4% 2.5% 1.4%
10
41.6% 36.8% 17.1% 3.1% 1.4%
11
35.1% 38.1% 21.6% 3.6% 1.5%
12
28.2% 32.5% 29.1% 6.9% 3.3%
13
29.9% 37.2% 25.5% 5.1% 2.3%
14
32.4% 33.3% 25.2% 5.9% 3.3%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
15
38.0% 35.7% 19.8% 4.3% 2.2%
16
33.2% 34.5% 23.2% 6.5% 2.5%
17
31.1% 31.3% 27.1% 6.0% 4.6%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
18
45.7% 27.6% 17.5% 6.2% 3.1%
19
43.2% 29.0% 19.9% 5.2% 2.8%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


Ⅱ－4
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
授業の内容について友人と議論をした。
発表の前にプレゼンテーションの練習をした。
授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。
その他

令和元年度　春学期　学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目　社会科学科目群

回答数（全体）：　2202

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅰ	1　1回分の授業外の学修（予習、復習、課題など）にかけた時間	2.0	25

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅱ	2　この授業に積極的に参加した。	3.8	1
	3　この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.5	9
	4　学生の自主的・発展的な学修内容　※【Ⅱ】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

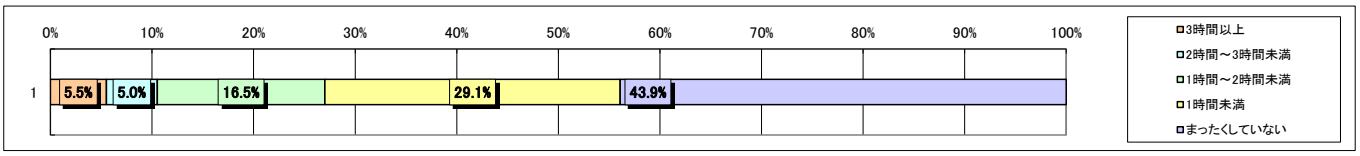
分野	この授業の進め方について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅲ	5　各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	5
	6　教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	1
	7　映像視覚教材（ビデオ、書画装置、パワーポイントなど）や板書が授業の理解に役立った。	4.0	1
	8　教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.7	1

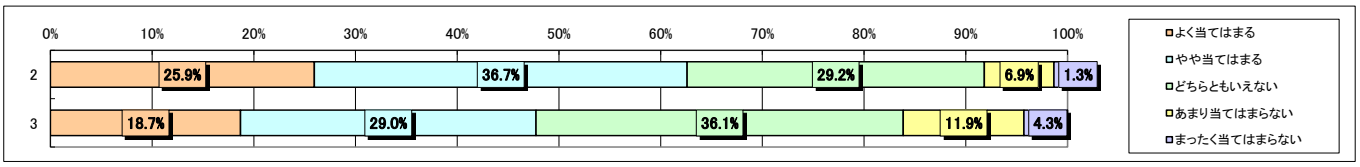
分野	この授業を受けてみて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅳ	9　新しい考え方・発想に触れた。	4.0	1
	10　基本的知識が得られた。	4.1	2
	11　多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	4
	12　自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.7	4
	13　科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	0
	14　学問的興味をかきたてられた。	3.8	4

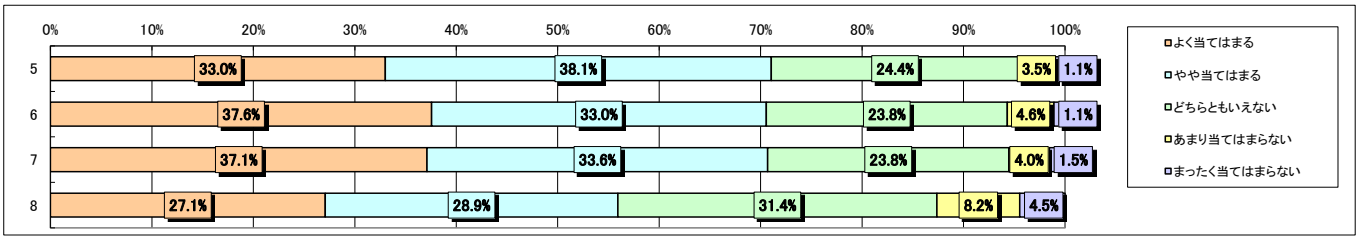
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の平均値	無効回答数
Ⅴ	15　授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	4
	16　授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	4
	17　この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	10

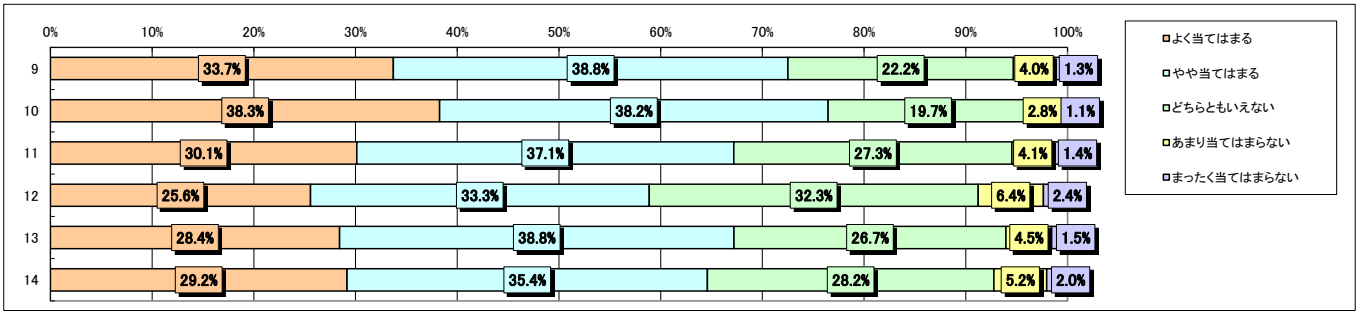
分野	その他	この授業の平均値	無効回答数
Ⅵ	18　この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	6
	19　この授業の受講者数は適切であった。	4.0	6

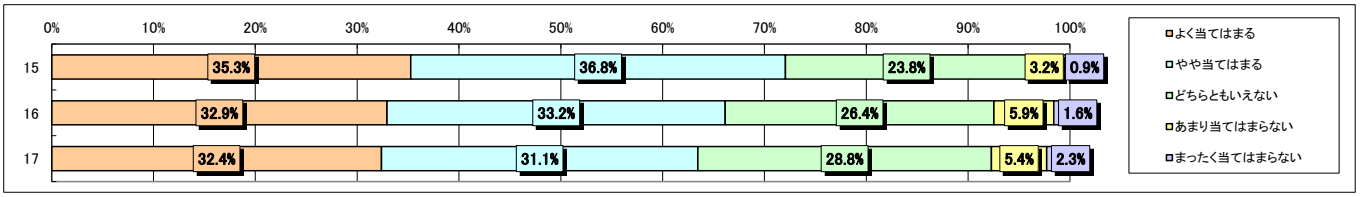
集計・分析結果	Ⅱ-4　学生の自主的・発展的な学修内容　（複数回答可）	
	授業の内容について友人と議論をした。	50.6%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	8.1%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	52.0%
	その他	3.1%

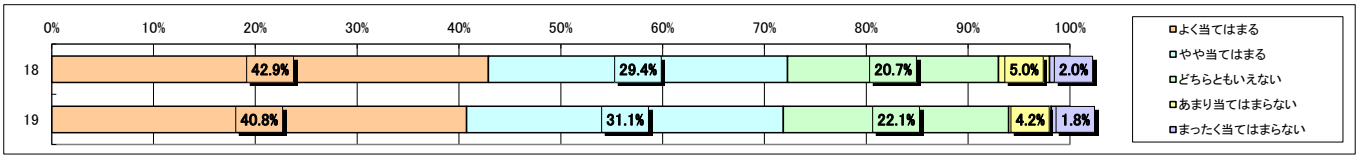

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
1
5.5% 5.0% 16.5% 29.1% 43.9%
3時間以上
2時間～3時間未満
1時間～2時間未満
1時間未満
まったくしていない

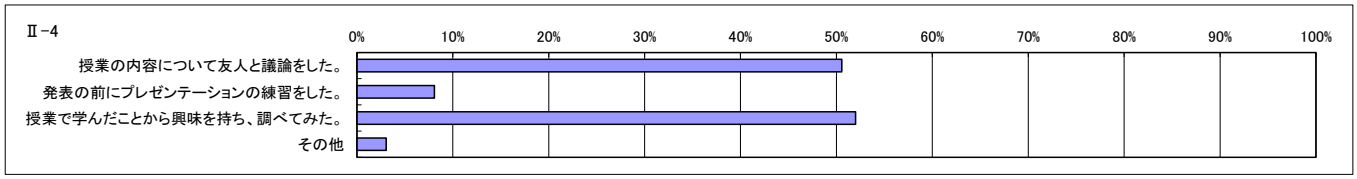

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
2
25.9% 36.7% 29.2% 6.9% 1.3%
3
18.7% 29.0% 36.1% 11.9% 4.3%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
5
33.0% 38.1% 24.4% 3.5% 1.1%
6
37.6% 33.0% 23.8% 4.6% 1.1%
7
37.1% 33.6% 23.8% 4.0% 1.5%
8
27.1% 28.9% 31.4% 8.2% 4.5%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
9
33.7% 38.8% 22.2% 4.0% 1.3%
10
38.3% 38.2% 19.7% 2.8% 1.1%
11
30.1% 37.1% 27.3% 4.1% 1.4%
12
25.6% 33.3% 32.3% 6.4% 2.4%
13
28.4% 38.8% 26.7% 4.5% 1.5%
14
29.2% 35.4% 28.2% 5.2% 2.0%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
15
35.3% 36.8% 23.8% 3.2% 0.9%
16
32.9% 33.2% 26.4% 5.9% 1.6%
17
32.4% 31.1% 28.8% 5.4% 2.3%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
18
42.9% 29.4% 20.7% 5.0% 2.0%
19
40.8% 31.1% 22.1% 4.2% 1.8%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


Ⅱ－4
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
授業の内容について友人と議論をした。
発表の前にプレゼンテーションの練習をした。
授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。
その他

令和元年度　春学期　学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目　自然科学科目群

回答数（全体）：　2302

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅰ	1　1回分の授業外の学修（予習、復習、課題など）にかけた時間	2.0	35

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅱ	2　この授業に積極的に参加した。	3.9	2
	3　この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.5	5
	4　学生の自主的・発展的な学修内容　※【Ⅱ】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

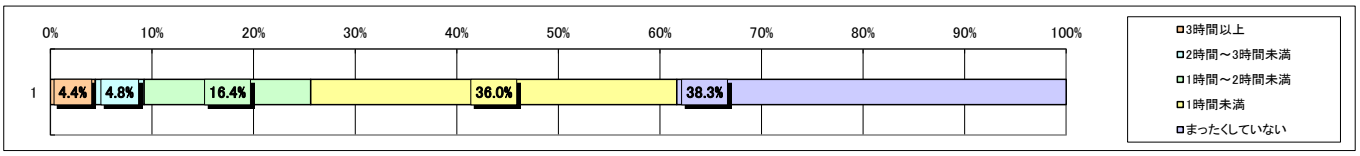
分野	この授業の進め方について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅲ	5　各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	6
	6　教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	3.9	2
	7　映像視覚教材（ビデオ、書画装置、パワーポイントなど）や板書が授業の理解に役立った。	3.9	6
	8　教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.7	2

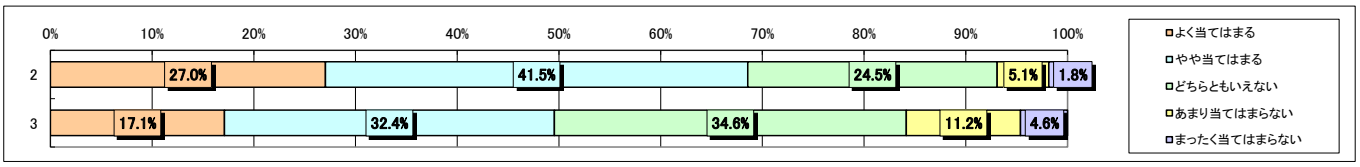
分野	この授業を受けてみて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅳ	9　新しい考え方・発想に触れた。	3.9	2
	10　基本的知識が得られた。	4.1	2
	11　多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.8	2
	12　自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.7	4
	13　科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	5
	14　学問的興味をかきたてられた。	3.7	7

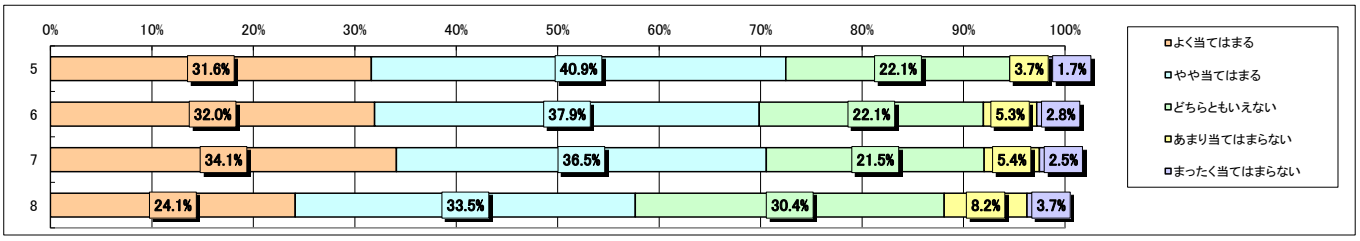
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の平均値	無効回答数
Ⅴ	15　授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	5
	16　授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	2
	17　この授業をほかの学生に薦めたい。	3.7	4

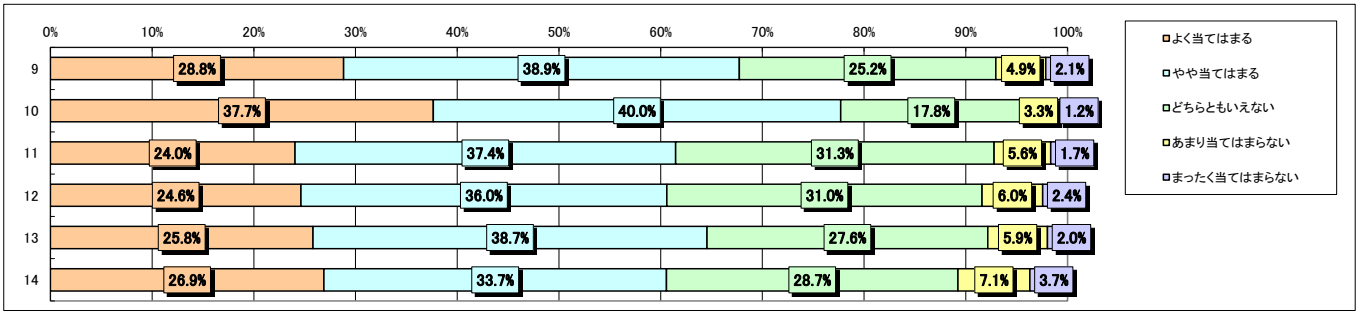
分野	その他	この授業の平均値	無効回答数
Ⅵ	18　この授業の教室の大きさは適切であった。	4.0	5
	19　この授業の受講者数は適切であった。	4.0	5

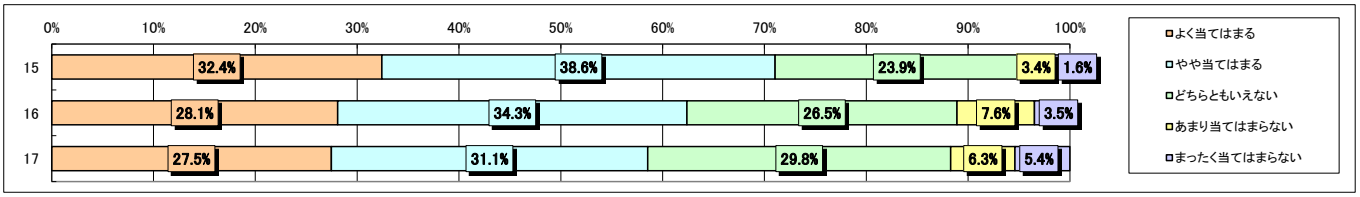
集計・分析結果	Ⅱ-4　学生の自主的・発展的な学修内容　（複数回答可）	
	授業の内容について友人と議論をした。	50.5%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	13.7%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	41.9%
	その他	6.6%

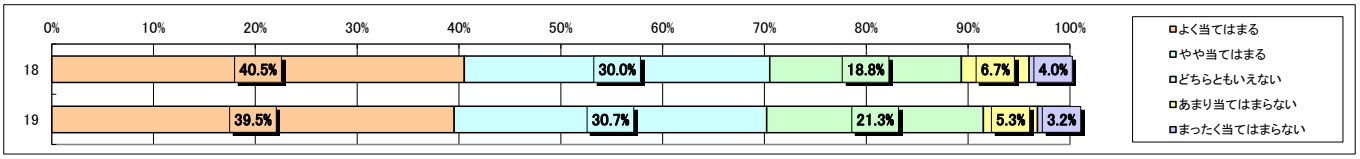

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
1
4.4% 4.8% 16.4% 36.0% 38.3%
3時間以上
2時間～3時間未満
1時間～2時間未満
1時間未満
まったくしていない

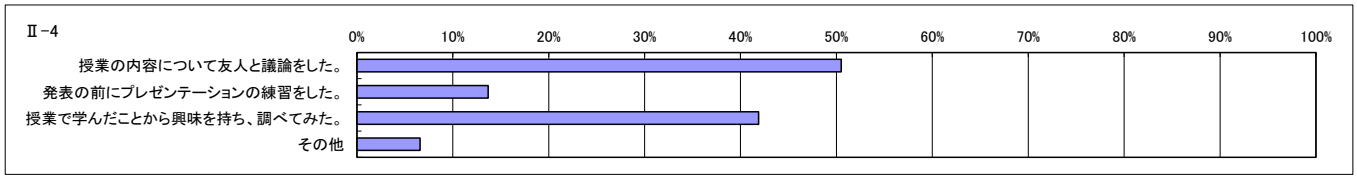

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
2
27.0% 41.5% 24.5% 5.1% 1.8%
3
17.1% 32.4% 34.6% 11.2% 4.6%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
5
31.6% 40.9% 22.1% 3.7% 1.7%
6
32.0% 37.9% 22.1% 5.3% 2.8%
7
34.1% 36.5% 21.5% 5.4% 2.5%
8
24.1% 33.5% 30.4% 8.2% 3.7%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
9
28.8% 38.9% 25.2% 4.9% 2.1%
10
37.7% 40.0% 17.8% 3.3% 1.2%
11
24.0% 37.4% 31.3% 5.6% 1.7%
12
24.6% 36.0% 31.0% 6.0% 2.4%
13
25.8% 38.7% 27.6% 5.9% 2.0%
14
26.9% 33.7% 28.7% 7.1% 3.7%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
15
32.4% 38.6% 23.9% 3.4% 1.6%
16
28.1% 34.3% 26.5% 7.6% 3.5%
17
27.5% 31.1% 29.8% 6.3% 5.4%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
18
40.5% 30.0% 18.8% 6.7% 4.0%
19
39.5% 30.7% 21.3% 5.3% 3.2%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


Ⅱ－4
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
授業の内容について友人と議論をした。
発表の前にプレゼンテーションの練習をした。
授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。
その他

令和元年度　春学期　学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目　学際科目群

回答数（全体）：　983

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅰ	1　1回分の授業外の学修（予習、復習、課題など）にかけた時間	2.0	17

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅱ	2　この授業に積極的に参加した。	3.9	2
	3　この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.5	7
	4　学生の自主的・発展的な学修内容　※【Ⅱ】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

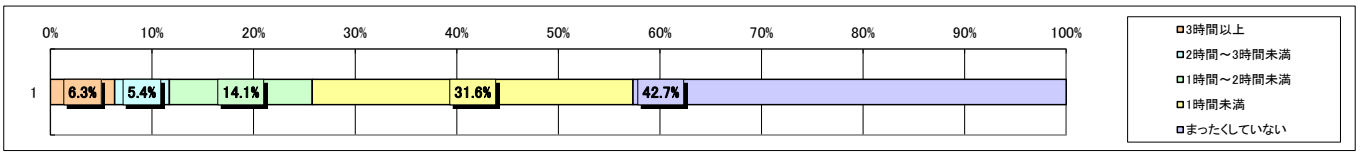
分野	この授業の進め方について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅲ	5　各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.2	7
	6　教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	2
	7　映像視覚教材（ビデオ、書画装置、パワーポイントなど）や板書が授業の理解に役立った。	4.2	4
	8　教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.7	4

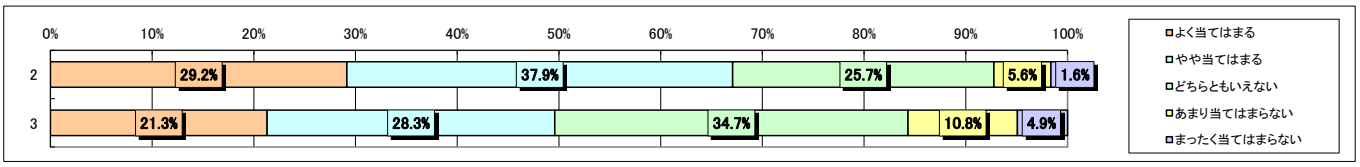
分野	この授業を受けてみて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅳ	9　新しい考え方・発想に触れた。	4.2	2
	10　基本的知識が得られた。	4.2	2
	11　多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	2
	12　自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	3
	13　科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	3
	14　学問的興味をかきたてられた。	4.0	3

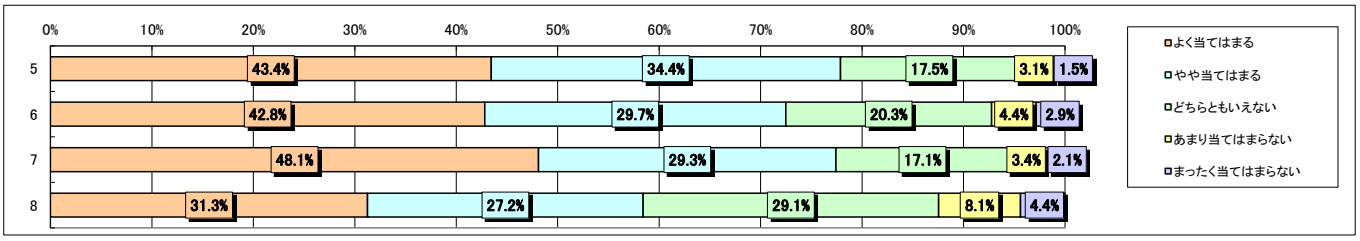
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の平均値	無効回答数
Ⅴ	15　授業全体の目標・内容が明確であった。	4.2	5
	16　授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	2
	17　この授業をほかの学生に薦めたい。	4.0	3

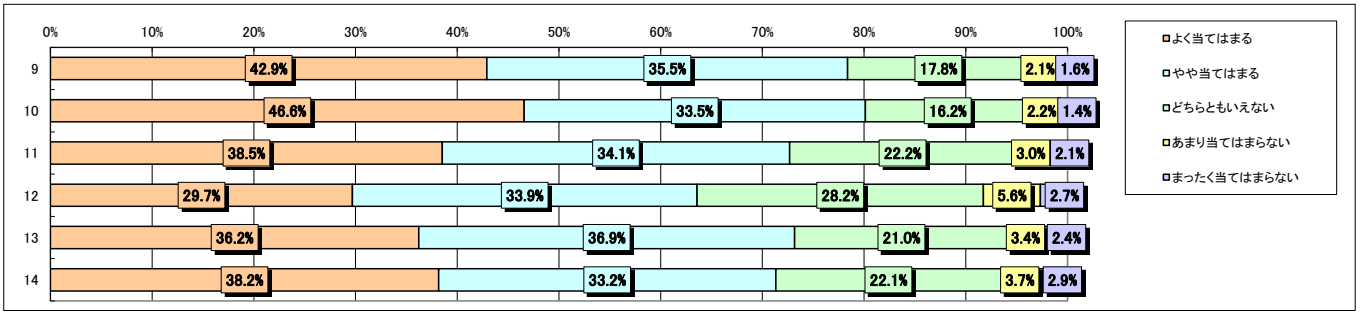
分野	その他	この授業の平均値	無効回答数
Ⅵ	18　この授業の教室の大きさは適切であった。	3.9	3
	19　この授業の受講者数は適切であった。	3.9	3

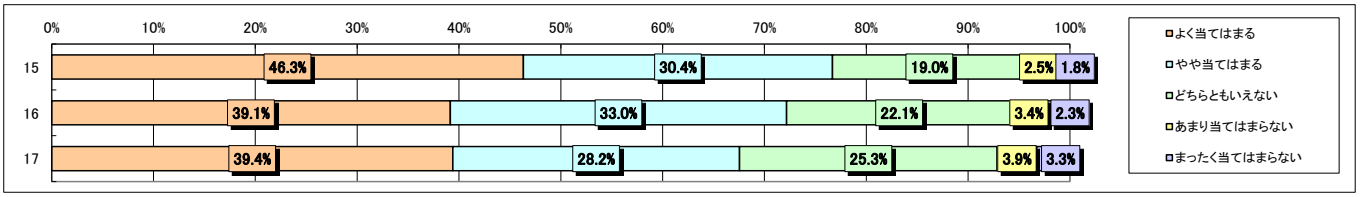
集計・分析結果	Ⅱ-4　学生の自主的・発展的な学修内容　（複数回答可）	
	授業の内容について友人と議論をした。	47.8%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	4.8%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	62.9%
	その他	2.5%

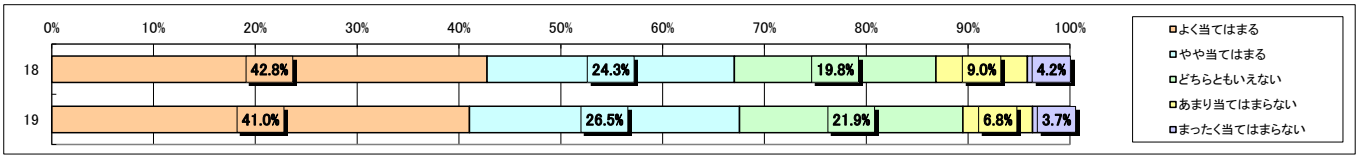

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
1
6.3% 5.4% 14.1% 31.6% 42.7%
3時間以上
2時間～3時間未満
1時間～2時間未満
1時間未満
まったくしていない

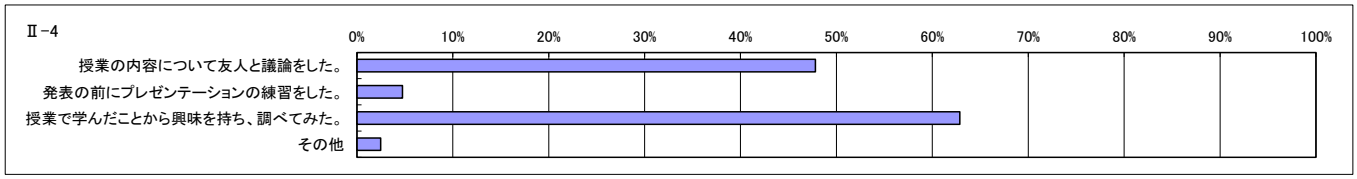

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
2
29.2% 37.9% 25.7% 5.6% 1.6%
3
21.3% 28.3% 34.7% 10.8% 4.9%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
5
43.4% 34.4% 17.5% 3.1% 1.5%
6
42.8% 29.7% 20.3% 4.4% 2.9%
7
48.1% 29.3% 17.1% 3.4% 2.1%
8
31.3% 27.2% 29.1% 8.1% 4.4%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
9
42.9% 35.5% 17.8% 2.1% 1.6%
10
46.6% 33.5% 16.2% 2.2% 1.4%
11
38.5% 34.1% 22.2% 3.0% 2.1%
12
29.7% 33.9% 28.2% 5.6% 2.7%
13
36.2% 36.9% 21.0% 3.4% 2.4%
14
38.2% 33.2% 22.1% 3.7% 2.9%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
15
46.3% 30.4% 19.0% 2.5% 1.8%
16
39.1% 33.0% 22.1% 3.4% 2.3%
17
39.4% 28.2% 25.3% 3.9% 3.3%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
18
42.8% 24.3% 19.8% 9.0% 4.2%
19
41.0% 26.5% 21.9% 6.8% 3.7%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


Ⅱ－4
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
授業の内容について友人と議論をした。
発表の前にプレゼンテーションの練習をした。
授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。
その他

令和元年度　春学期　学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目　言語表現科目群

回答数（全体）：　2380

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅰ	1　1回分の授業外の学修（予習、復習、課題など）にかけた時間	2.2	24

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅱ	2　この授業に積極的に参加した。	4.2	3
	3　この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.9	6
	4　学生の自主的・発展的な学修内容　※【Ⅱ】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

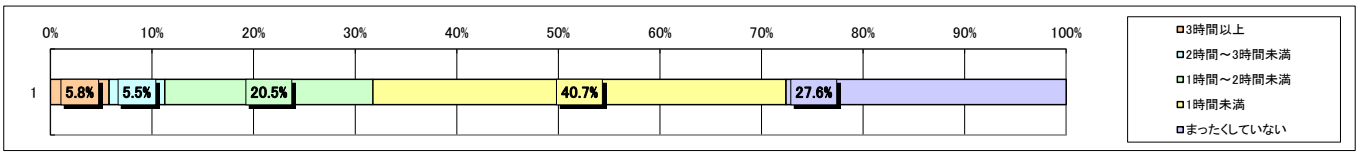
分野	この授業の進め方について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅲ	5　各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.2	7
	6　教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.2	1
	7　映像視覚教材（ビデオ、書画装置、パワーポイントなど）や板書が授業の理解に役立った。	4.2	1
	8　教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.3	4

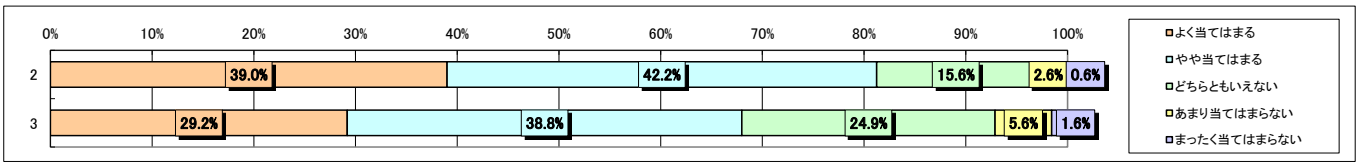
分野	この授業を受けてみて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅳ	9　新しい考え方・発想に触れた。	4.1	1
	10　基本的知識が得られた。	4.3	3
	11　多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.1	3
	12　自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.2	2
	13　科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.1	2
	14　学問的興味をかきたてられた。	4.1	4

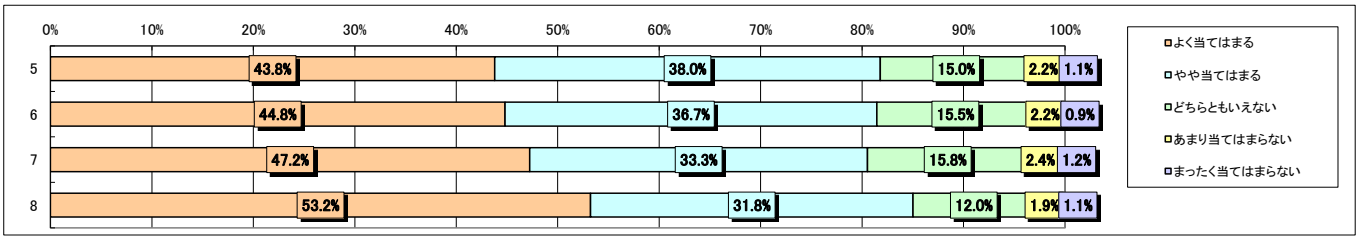
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の平均値	無効回答数
Ⅴ	15　授業全体の目標・内容が明確であった。	4.3	6
	16　授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.1	2
	17　この授業をほかの学生に薦めたい。	4.1	6

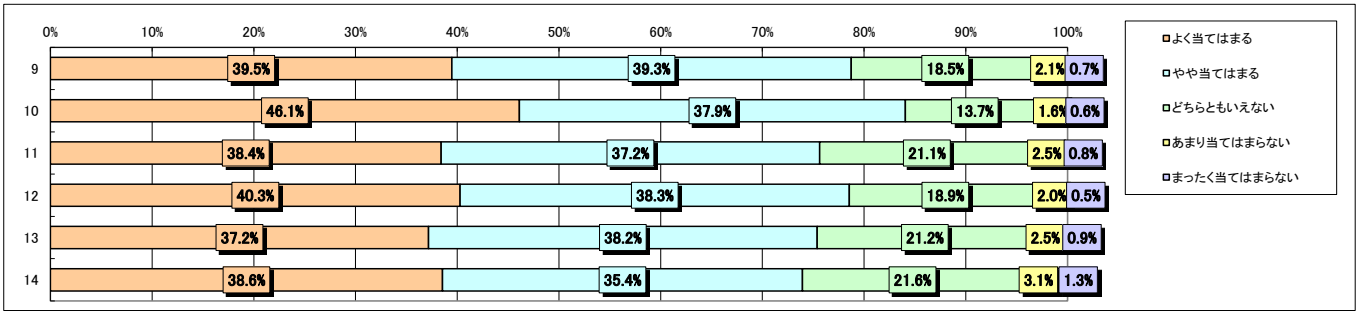
分野	その他	この授業の平均値	無効回答数
Ⅵ	18　この授業の教室の大きさは適切であった。	4.4	5
	19　この授業の受講者数は適切であった。	4.4	7

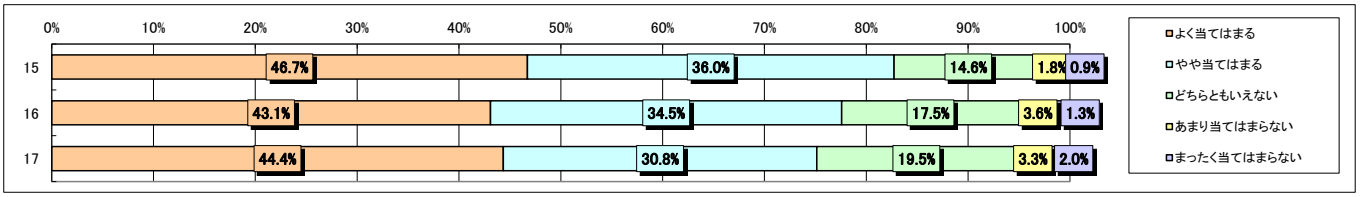
集計・分析結果	Ⅱ-4　学生の自主的・発展的な学修内容　（複数回答可）	
	授業の内容について友人と議論をした。	50.8%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	51.2%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	29.3%
	その他	8.3%

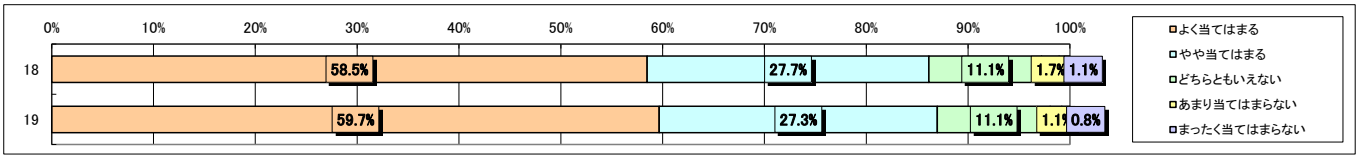

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
1
5.8% 5.5% 20.5% 40.7% 27.6%
3時間以上
2時間～3時間未満
1時間～2時間未満
1時間未満
まったくしていない

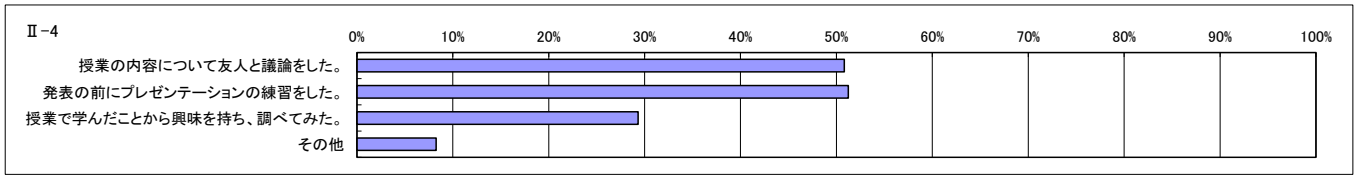

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
2
39.0% 42.2% 15.6% 2.6% 0.6%
3
29.2% 38.8% 24.9% 5.6% 1.6%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
5
43.8% 38.0% 15.0% 2.2% 1.1%
6
44.8% 36.7% 15.5% 2.2% 0.9%
7
47.2% 33.3% 15.8% 2.4% 1.2%
8
53.2% 31.8% 12.0% 1.9% 1.1%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
9
39.5% 39.3% 18.5% 2.1% 0.7%
10
46.1% 37.9% 13.7% 1.6% 0.6%
11
38.4% 37.2% 21.1% 2.5% 0.8%
12
40.3% 38.3% 18.9% 2.0% 0.5%
13
37.2% 38.2% 21.2% 2.5% 0.9%
14
38.6% 35.4% 21.6% 3.1% 1.3%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
15
46.7% 36.0% 14.6% 1.8% 0.9%
16
43.1% 34.5% 17.5% 3.6% 1.3%
17
44.4% 30.8% 19.5% 3.3% 2.0%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
18
58.5% 27.7% 11.1% 1.7% 1.1%
19
59.7% 27.3% 11.1% 1.1% 0.8%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


Ⅱ－4
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
授業の内容について友人と議論をした。
発表の前にプレゼンテーションの練習をした。
授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。
その他

令和元年度　春学期　学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目　教職関連科目群

回答数（全体）：　1378

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅰ	1　1回分の授業外の学修（予習、復習、課題など）にかけた時間	1.8	11

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅱ	2　この授業に積極的に参加した。	4.0	1
	3　この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.6	4
	4　学生の自主的・発展的な学修内容　※【Ⅱ】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

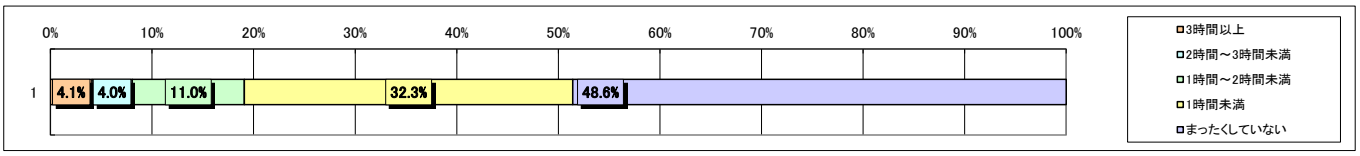
分野	この授業の進め方について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅲ	5　各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.2	3
	6　教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.2	0
	7　映像視覚教材（ビデオ、書画装置、パワーポイントなど）や板書が授業の理解に役立った。	4.2	1
	8　教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.1	1

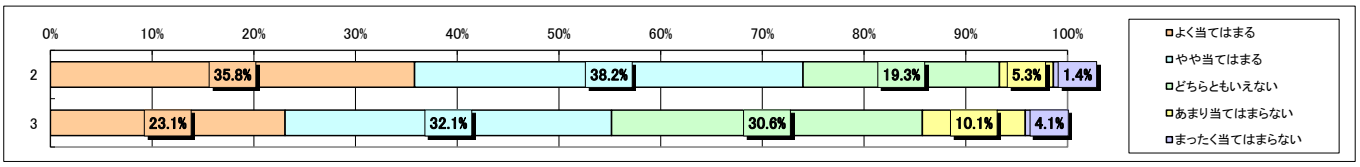
分野	この授業を受けてみて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅳ	9　新しい考え方・発想に触れた。	4.3	0
	10　基本的知識が得られた。	4.3	1
	11　多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.2	1
	12　自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	0
	13　科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.1	0
	14　学問的興味をかきたてられた。	4.0	0

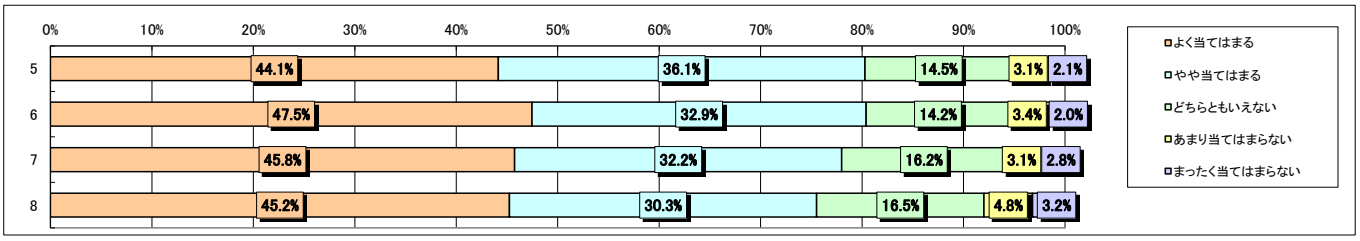
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の平均値	無効回答数
Ⅴ	15　授業全体の目標・内容が明確であった。	4.2	3
	16　授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.2	4
	17　この授業をほかの学生に薦めたい。	4.1	3

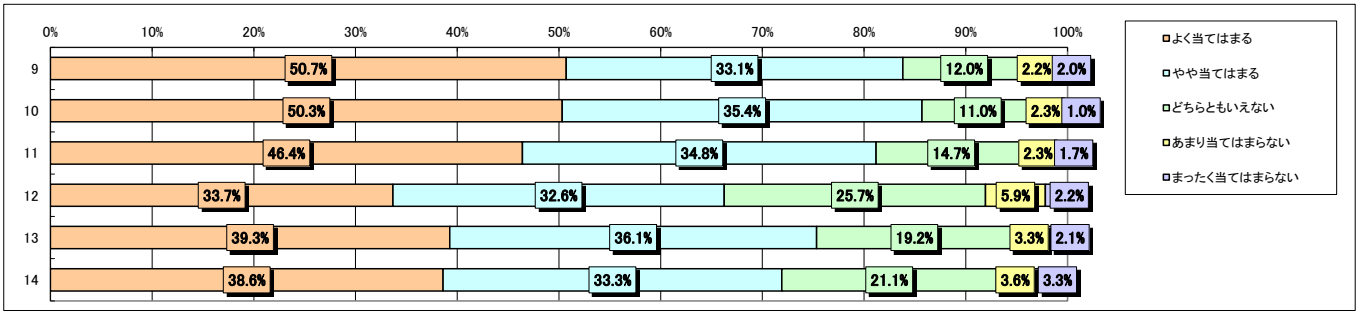
分野	その他	この授業の平均値	無効回答数
Ⅵ	18　この授業の教室の大きさは適切であった。	4.5	2
	19　この授業の受講者数は適切であった。	4.4	1

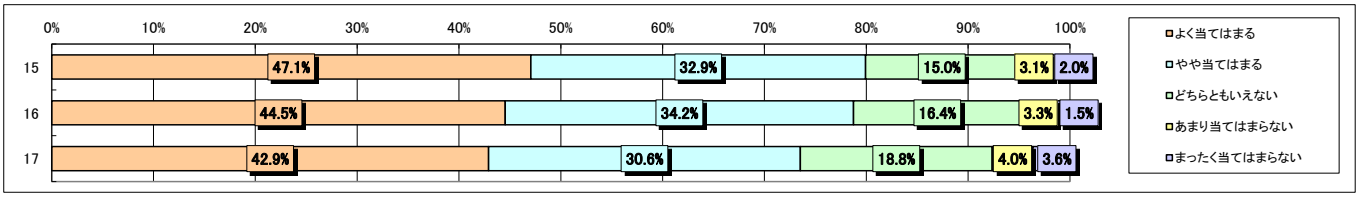
集計・分析結果	Ⅱ-4　学生の自主的・発展的な学修内容　（複数回答可）	
	授業の内容について友人と議論をした。	64.3%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	11.2%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	39.5%
	その他	4.3%

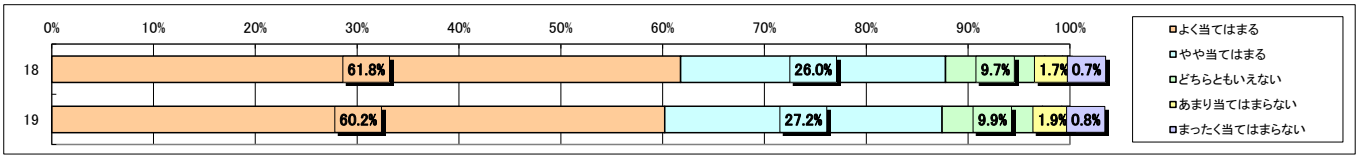

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
1
4.1% 4.0% 11.0% 32.3% 48.6%
3時間以上
2時間～3時間未満
1時間～2時間未満
1時間未満
まったくしていない

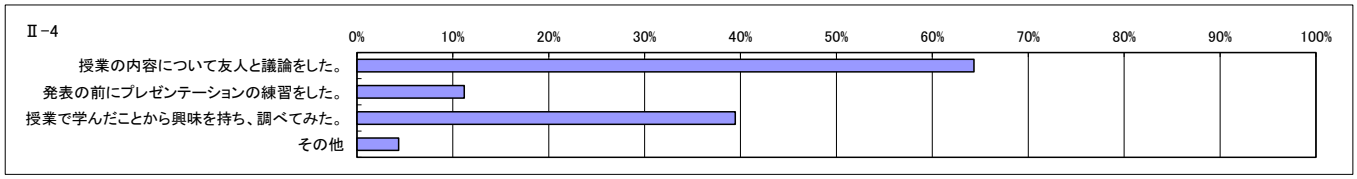

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
2
35.8% 38.2% 19.3% 5.3% 1.4%
3
23.1% 32.1% 30.6% 10.1% 4.1%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
5
44.1% 36.1% 14.5% 3.1% 2.1%
6
47.5% 32.9% 14.2% 3.4% 2.0%
7
45.8% 32.2% 16.2% 3.1% 2.8%
8
45.2% 30.3% 16.5% 4.8% 3.2%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
9
50.7% 33.1% 12.0% 2.2% 2.0%
10
50.3% 35.4% 11.0% 2.3% 1.0%
11
46.4% 34.8% 14.7% 2.3% 1.7%
12
33.7% 32.6% 25.7% 5.9% 2.2%
13
39.3% 36.1% 19.2% 3.3% 2.1%
14
38.6% 33.3% 21.1% 3.6% 3.3%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
15
47.1% 32.9% 15.0% 3.1% 2.0%
16
44.5% 34.2% 16.4% 3.3% 1.5%
17
42.9% 30.6% 18.8% 4.0% 3.6%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
18
61.8% 26.0% 9.7% 1.7% 0.7%
19
60.2% 27.2% 9.9% 1.9% 0.8%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


Ⅱ－4
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
授業の内容について友人と議論をした。
発表の前にプレゼンテーションの練習をした。
授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。
その他

令和元年度　春学期　学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目　資格関連科目群

回答数（全体）：　292

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅰ	1　1回分の授業外の学修（予習、復習、課題など）にかけた時間	2.1	5

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅱ	2　この授業に積極的に参加した。	3.8	1
	3　この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.6	1
	4　学生の自主的・発展的な学修内容　※【Ⅱ】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

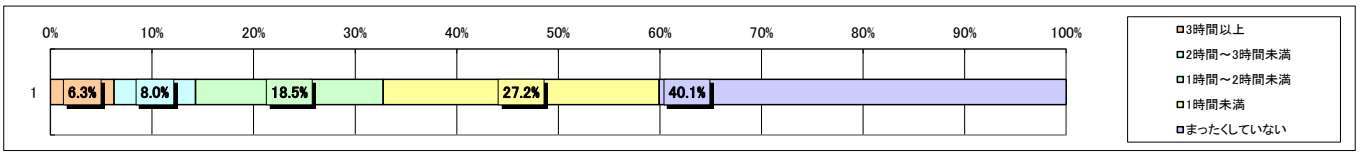
分野	この授業の進め方について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅲ	5　各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.2	1
	6　教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	1
	7　映像視覚教材（ビデオ、書画装置、パワーポイントなど）や板書が授業の理解に役立った。	4.1	1
	8　教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	1

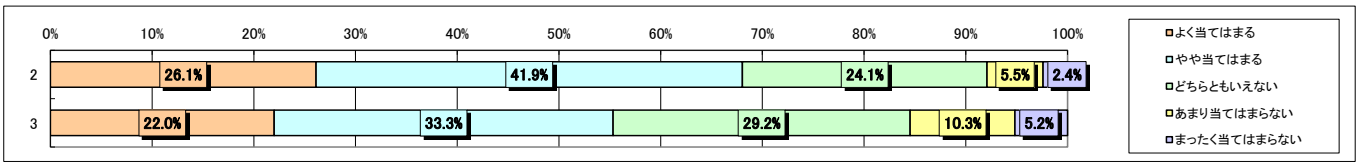
分野	この授業を受けてみて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅳ	9　新しい考え方・発想に触れた。	4.2	0
	10　基本的知識が得られた。	4.3	0
	11　多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.1	1
	12　自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	1
	13　科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	0
	14　学問的興味をかきたてられた。	4.0	0

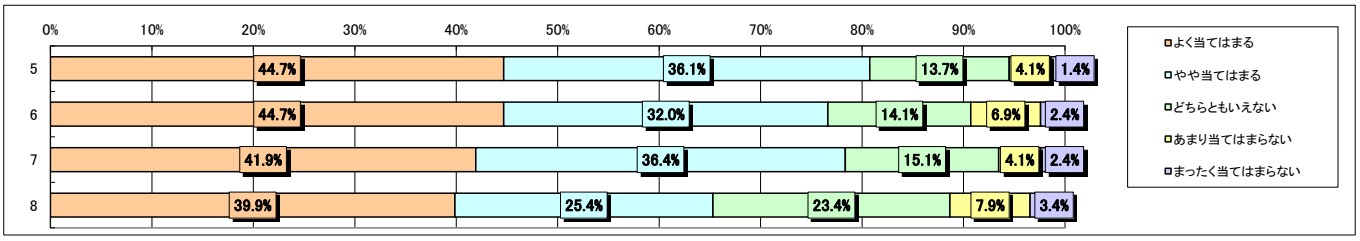
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の平均値	無効回答数
Ⅴ	15　授業全体の目標・内容が明確であった。	4.2	0
	16　授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.1	0
	17　この授業をほかの学生に薦めたい。	4.0	2

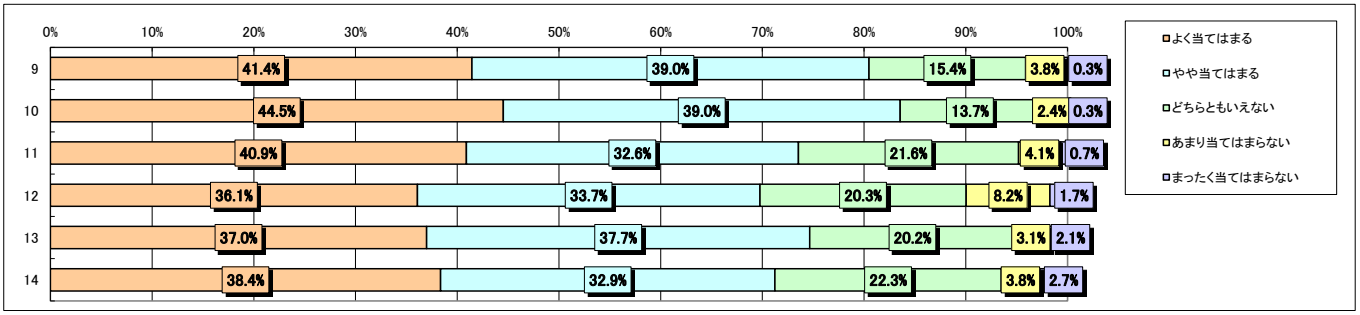
分野	その他	この授業の平均値	無効回答数
Ⅵ	18　この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	3
	19　この授業の受講者数は適切であった。	4.3	3

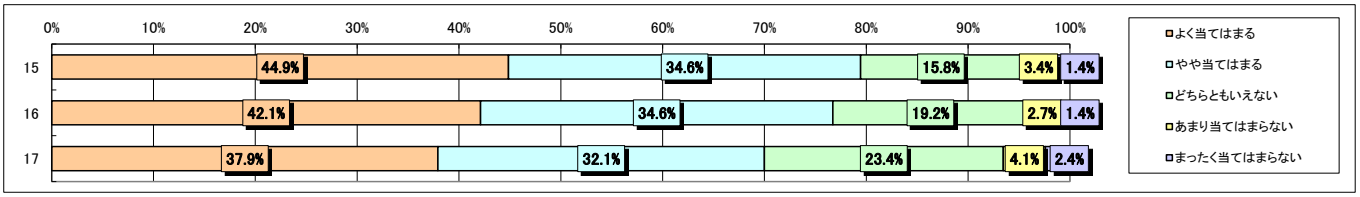
集計・分析結果	Ⅱ-4　学生の自主的・発展的な学修内容　（複数回答可）	
	授業の内容について友人と議論をした。	44.1%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	16.4%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	57.1%
	その他	5.6%

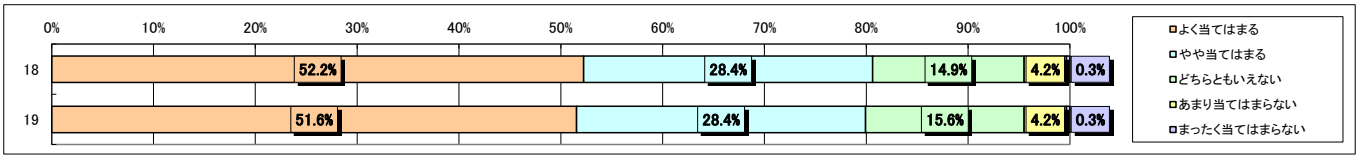

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
1
6.3% 8.0% 18.5% 27.2% 40.1%
3時間以上
2時間～3時間未満
1時間～2時間未満
1時間未満
まったくしていない

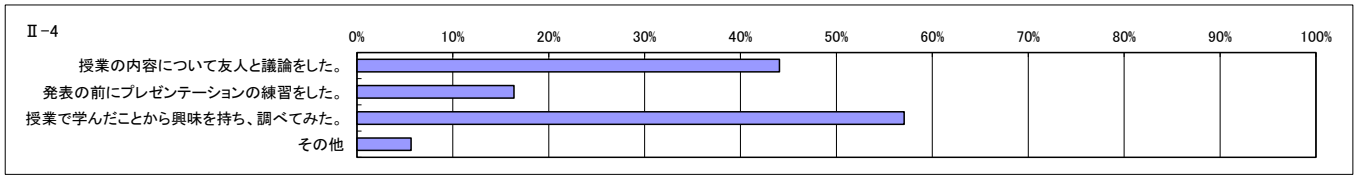

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
2
26.1% 41.9% 24.1% 5.5% 2.4%
3
22.0% 33.3% 29.2% 10.3% 5.2%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
5
44.7% 36.1% 13.7% 4.1% 1.4%
6
44.7% 32.0% 14.1% 6.9% 2.4%
7
41.9% 36.4% 15.1% 4.1% 2.4%
8
39.9% 25.4% 23.4% 7.9% 3.4%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
9
41.4% 39.0% 15.4% 3.8% 0.3%
10
44.5% 39.0% 13.7% 2.4% 0.3%
11
40.9% 32.6% 21.6% 4.1% 0.7%
12
36.1% 33.7% 20.3% 8.2% 1.7%
13
37.0% 37.7% 20.2% 3.1% 2.1%
14
38.4% 32.9% 22.3% 3.8% 2.7%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
15
44.9% 34.6% 15.8% 3.4% 1.4%
16
42.1% 34.6% 19.2% 2.7% 1.4%
17
37.9% 32.1% 23.4% 4.1% 2.4%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
18
52.2% 28.4% 14.9% 4.2% 0.3%
19
51.6% 28.4% 15.6% 4.2% 0.3%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


Ⅱ－4
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
授業の内容について友人と議論をした。
発表の前にプレゼンテーションの練習をした。
授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。
その他

令和元年度　秋学期　学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目全体

回答数（全体）:　13927

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅰ	1　1回分の授業外の学修（予習、復習、課題など）にかけた時間	2.1	223

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅱ	2　この授業に積極的に参加した。	3.9	17
	3　この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.6	52
	4　学生の自主的・発展的な学修内容　※【Ⅱ】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

分野	この授業の進め方について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅲ	5　各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	75
	6　教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	19
	7　映像視覚教材（ビデオ、書画装置、パワーポイントなど）や板書が授業の理解に役立った。	4.1	22
	8　教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	27

分野	この授業を受けてみて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅳ	9　新しい考え方・発想に触れた。	4.1	16
	10　基本的知識が得られた。	4.2	15
	11　多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	25
	12　自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	30
	13　科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	34
	14　学問的興味をかきたてられた。	3.9	44

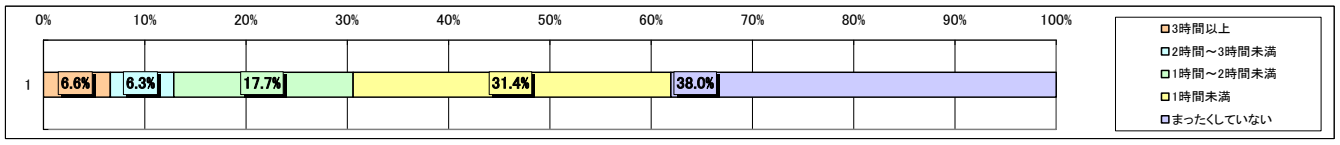
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の平均値	無効回答数
Ⅴ	15　授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	28
	16　授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	33
	17　この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	55

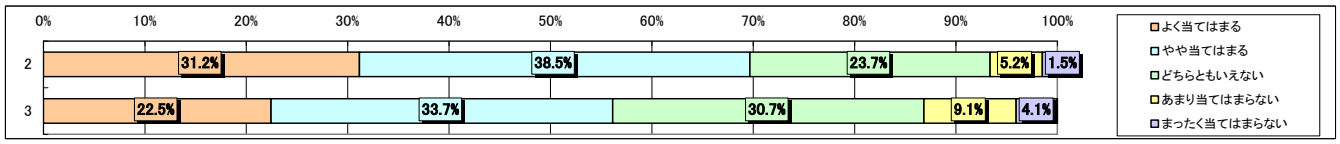
分野	その他	この授業の平均値	無効回答数
Ⅵ	18　この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	51
	19　この授業の受講者数は適切であった。	4.2	59

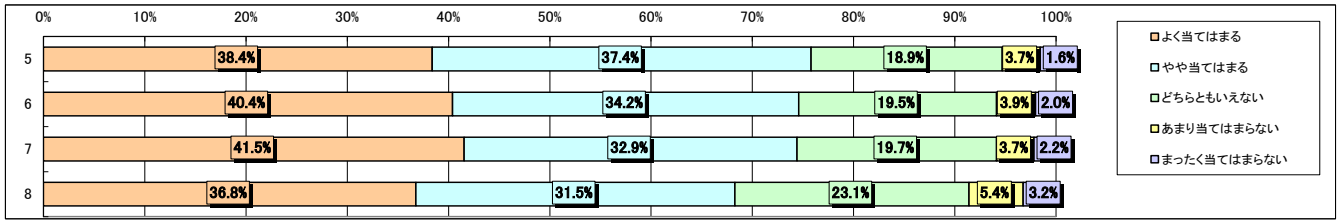
集計・分析結果	Ⅱ-4　学生の自主的・発展的な学修内容　（複数回答可）	
	授業の内容について友人と議論をした。	49.2%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	22.4%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	46.1%
	その他	4.4%

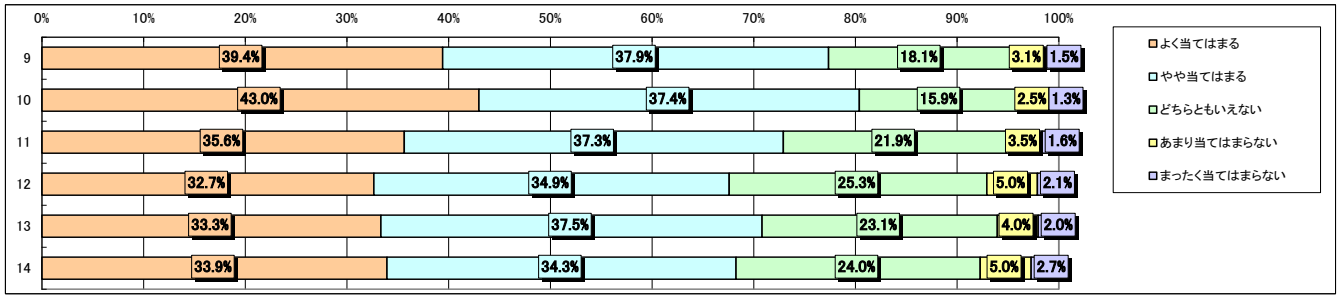
◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値＝（「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1）/回答数小数点第2位四捨五入

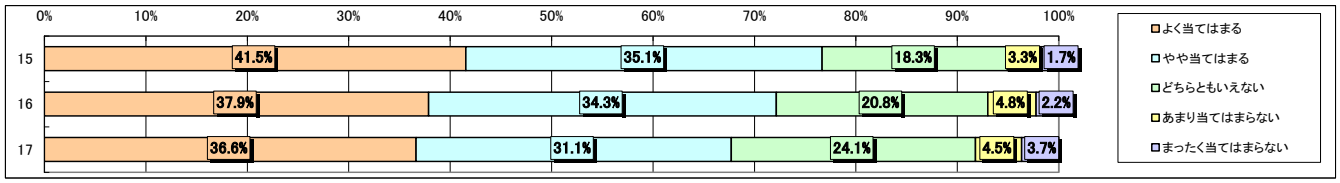
◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

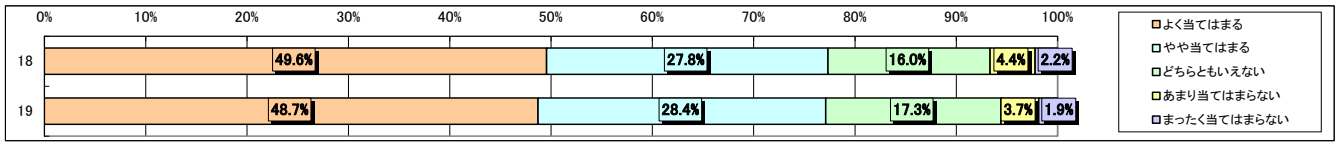

1
6.6%
6.3%
17.7%
31.4%
38.0%
3時間以上
2時間～3時間未満
1時間～2時間未満
1時間未満
まったくしていない

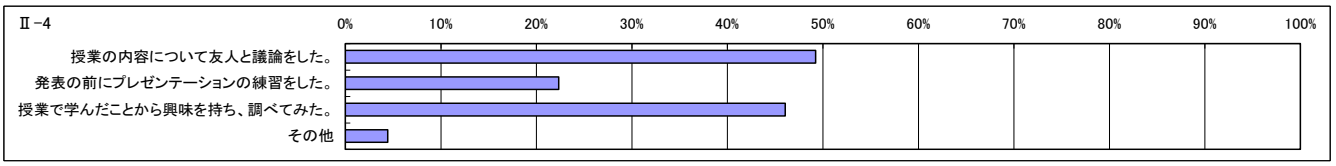

2
31.2%
38.5%
23.7%
5.2%
1.5%
3
22.5%
33.7%
30.7%
9.1%
4.1%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない

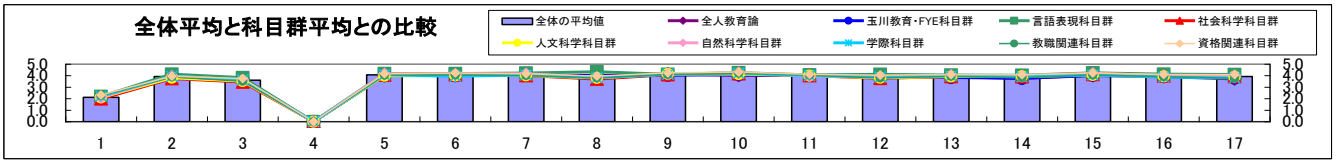

5
38.4%
37.4%
18.9%
3.7%
1.6%
6
40.4%
34.2%
19.5%
3.9%
2.0%
7
41.5%
32.9%
19.7%
3.7%
2.2%
8
36.8%
31.5%
23.1%
5.4%
3.2%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


9
39.4%
37.9%
18.1%
3.1%
1.5%
10
43.0%
37.4%
15.9%
2.5%
1.3%
11
35.6%
37.3%
21.9%
3.5%
1.6%
12
32.7%
34.9%
25.3%
5.0%
2.1%
13
33.3%
37.5%
23.1%
4.0%
2.0%
14
33.9%
34.3%
24.0%
5.0%
2.7%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


15
41.5%
35.1%
18.3%
3.3%
1.7%
16
37.9%
34.3%
20.8%
4.8%
2.2%
17
36.6%
31.1%
24.1%
4.5%
3.7%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


18
49.6%
27.8%
16.0%
4.4%
2.2%
19
48.7%
28.4%
17.3%
3.7%
1.9%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


Ⅱ－4
授業の内容について友人と議論をした。
発表の前にプレゼンテーションの練習をした。
授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。
その他


全体平均と科目群平均との比較
全体の平均値
全人教育論
玉川教育・FYE科目群
言語表現科目群
社会科学科目群
人文科学科目群
自然科学科目群
学際科目群
教職関連科目群
資格関連科目群

令和元年度　秋学期　学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目　玉川教育・FYE科目群　一年次ｾﾐﾅｰ 102

回答数（全体）：　1717

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅰ	1　1回分の授業外の学修（予習、復習、課題など）にかけた時間	2.0	26

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅱ	2　この授業に積極的に参加した。	4.0	1
	3　この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.7	8
	4　学生の自主的・発展的な学修内容　※【Ⅱ】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

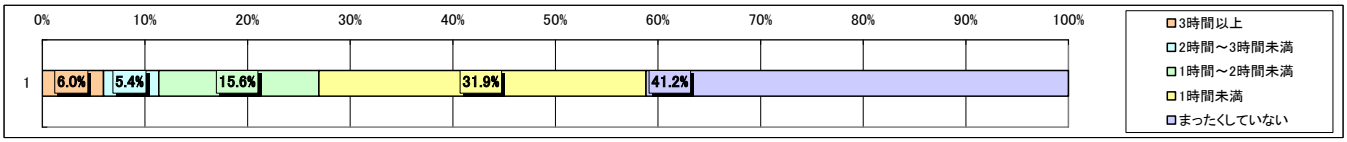
分野	この授業の進め方について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅲ	5　各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	7
	6　教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	1
	7　映像視覚教材（ビデオ、書画装置、パワーポイントなど）や板書が授業の理解に役立った。	4.0	0
	8　教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.0	1

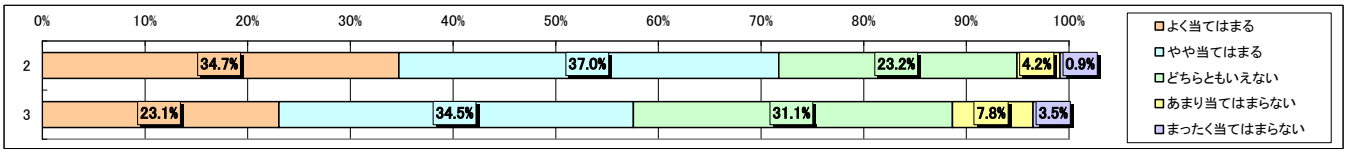
分野	この授業を受けてみて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅳ	9　新しい考え方・発想に触れた。	4.0	2
	10　基本的知識が得られた。	4.1	1
	11　多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	2
	12　自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.0	3
	13　科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	3
	14　学問的興味をかきたてられた。	3.7	6

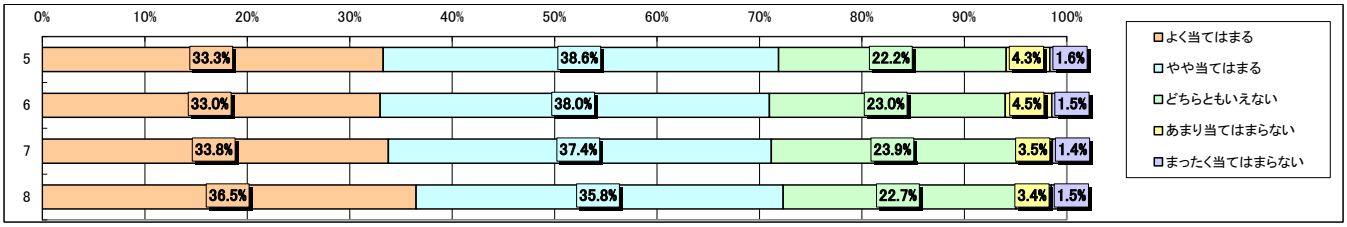
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の平均値	無効回答数
Ⅴ	15　授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	2
	16　授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.1	5
	17　この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	6

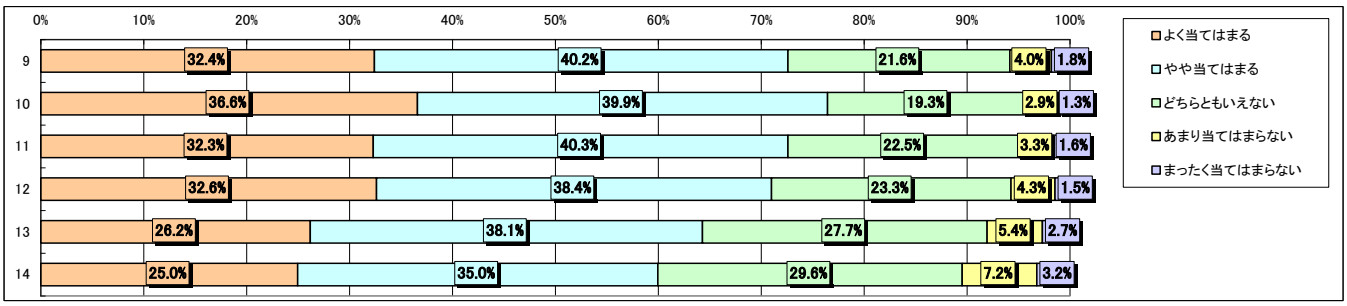
分野	その他	この授業の平均値	無効回答数
Ⅵ	18　この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	3
	19　この授業の受講者数は適切であった。	4.3	3

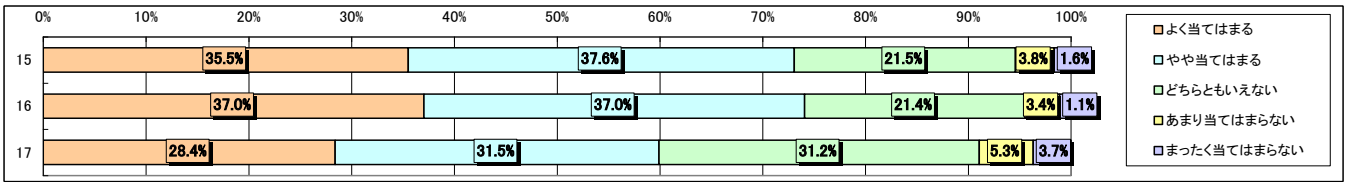
集計・分析結果	Ⅱ-4　学生の自主的・発展的な学修内容　（複数回答可）	
	授業の内容について友人と議論をした。	50.3%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	44.6%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	34.2%
	その他	2.3%

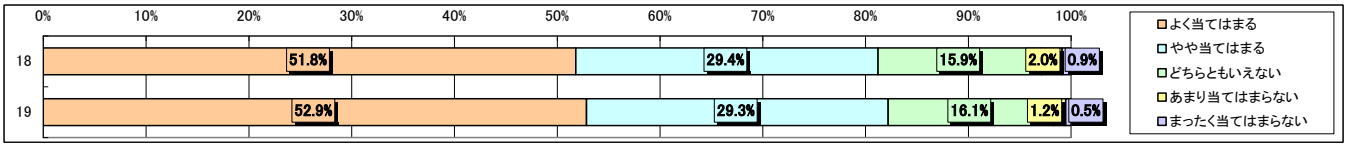

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
1
6.0% 5.4% 15.6% 31.9% 41.2%
3時間以上
2時間～3時間未満
1時間～2時間未満
1時間未満
まったくしていない

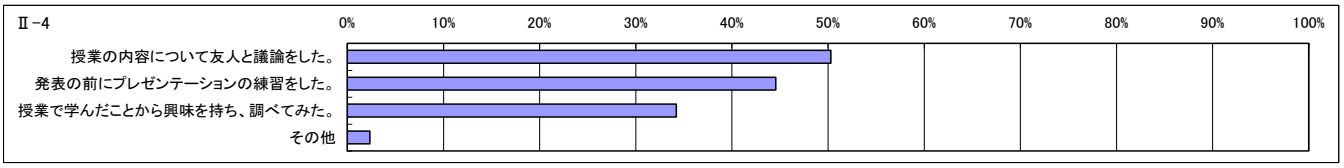

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
2
34.7% 37.0% 23.2% 4.2% 0.9%
3
23.1% 34.5% 31.1% 7.8% 3.5%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
5
33.3% 38.6% 22.2% 4.3% 1.6%
6
33.0% 38.0% 23.0% 4.5% 1.5%
7
33.8% 37.4% 23.9% 3.5% 1.4%
8
36.5% 35.8% 22.7% 3.4% 1.5%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
9
32.4% 40.2% 21.6% 4.0% 1.8%
10
36.6% 39.9% 19.3% 2.9% 1.3%
11
32.3% 40.3% 22.5% 3.3% 1.6%
12
32.6% 38.4% 23.3% 4.3% 1.5%
13
26.2% 38.1% 27.7% 5.4% 2.7%
14
25.0% 35.0% 29.6% 7.2% 3.2%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
15
35.5% 37.6% 21.5% 3.8% 1.6%
16
37.0% 37.0% 21.4% 3.4% 1.1%
17
28.4% 31.5% 31.2% 5.3% 3.7%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
18
51.8% 29.4% 15.9% 2.0% 0.9%
19
52.9% 29.3% 16.1% 1.2% 0.5%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


Ⅱ－4
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
授業の内容について友人と議論をした。
発表の前にプレゼンテーションの練習をした。
授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。
その他

令和元年度　秋学期　学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目　人文科学科目群

回答数（全体）：　2602

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅰ	1　1回分の授業外の学修（予習、復習、課題など）にかけた時間	2.1	29

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅱ	2　この授業に積極的に参加した。	3.8	1
	3　この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.5	8
	4　学生の自主的・発展的な学修内容　※【Ⅱ】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

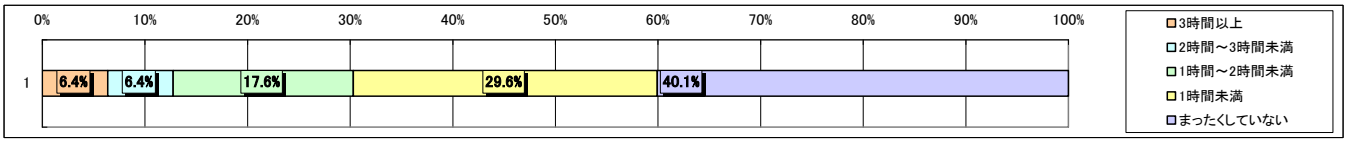
分野	この授業の進め方について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅲ	5　各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	14
	6　教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	2
	7　映像視覚教材（ビデオ、書画装置、パワーポイントなど）や板書が授業の理解に役立った。	4.0	1
	8　教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.8	3

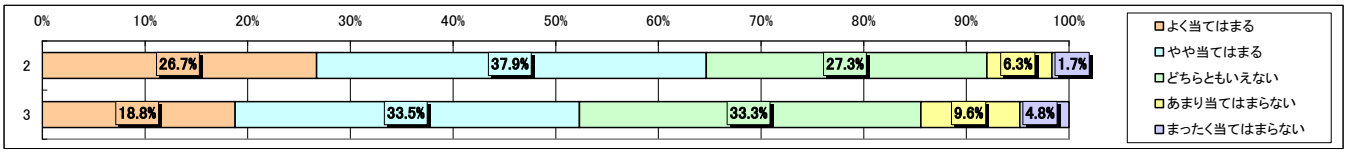
分野	この授業を受けてみて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅳ	9　新しい考え方・発想に触れた。	4.2	2
	10　基本的知識が得られた。	4.1	2
	11　多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	3
	12　自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	5
	13　科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	5
	14　学問的興味をかきたてられた。	3.9	9

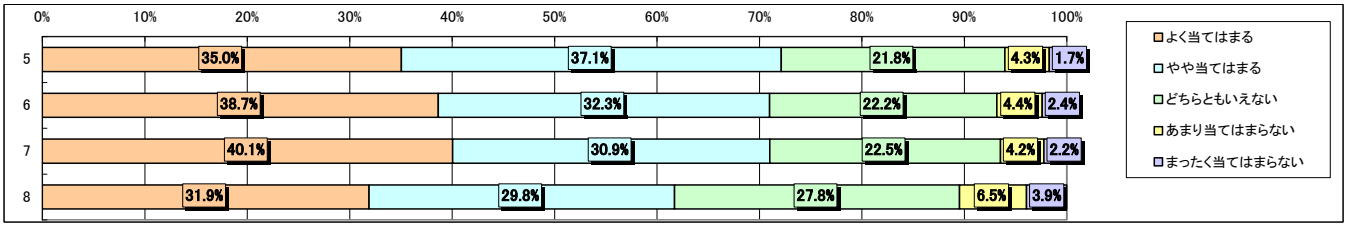
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の平均値	無効回答数
Ⅴ	15　授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	2
	16　授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	4
	17　この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	10

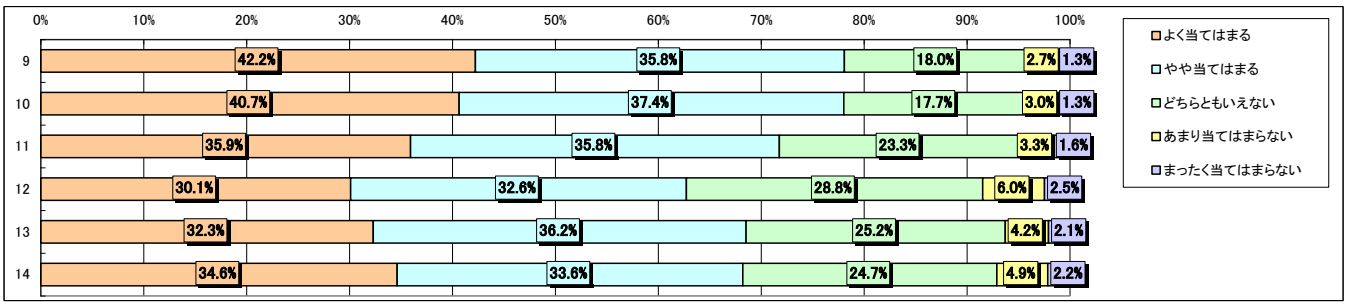
分野	その他	この授業の平均値	無効回答数
Ⅵ	18　この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	10
	19　この授業の受講者数は適切であった。	4.1	11

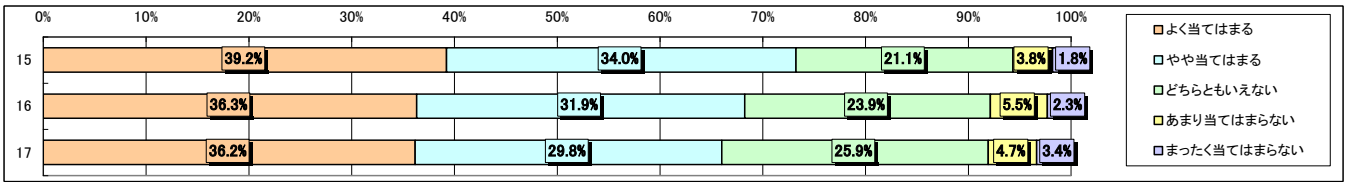
集計・分析結果	Ⅱ-4　学生の自主的・発展的な学修内容　（複数回答可）	
	授業の内容について友人と議論をした。	43.7%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	4.7%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	61.0%
	その他	3.8%

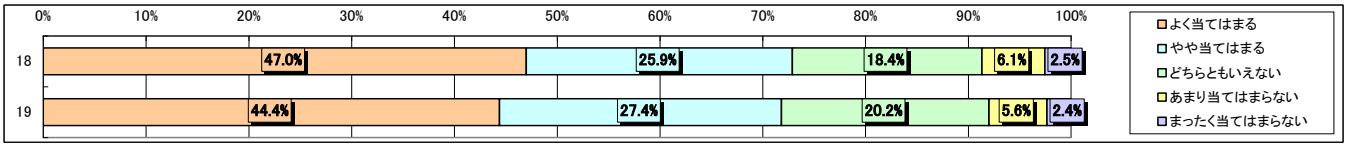

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
1
6.4% 6.4% 17.6% 29.6% 40.1%
3時間以上
2時間～3時間未満
1時間～2時間未満
1時間未満
まったくしていない

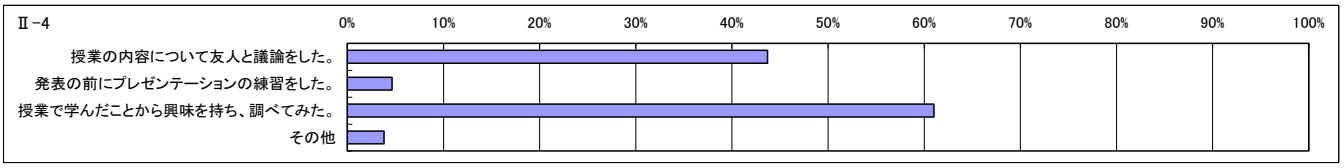

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
2
26.7% 37.9% 27.3% 6.3% 1.7%
3
18.8% 33.5% 33.3% 9.6% 4.8%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
5
35.0% 37.1% 21.8% 4.3% 1.7%
6
38.7% 32.3% 22.2% 4.4% 2.4%
7
40.1% 30.9% 22.5% 4.2% 2.2%
8
31.9% 29.8% 27.8% 6.5% 3.9%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
9
42.2% 35.8% 18.0% 2.7% 1.3%
10
40.7% 37.4% 17.7% 3.0% 1.3%
11
35.9% 35.8% 23.3% 3.3% 1.6%
12
30.1% 32.6% 28.8% 6.0% 2.5%
13
32.3% 36.2% 25.2% 4.2% 2.1%
14
34.6% 33.6% 24.7% 4.9% 2.2%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
15
39.2% 34.0% 21.1% 3.8% 1.8%
16
36.3% 31.9% 23.9% 5.5% 2.3%
17
36.2% 29.8% 25.9% 4.7% 3.4%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
18
47.0% 25.9% 18.4% 6.1% 2.5%
19
44.4% 27.4% 20.2% 5.6% 2.4%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


Ⅱ－4
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
授業の内容について友人と議論をした。
発表の前にプレゼンテーションの練習をした。
授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。
その他

令和元年度　秋学期　学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目　社会科学科目群

回答数(全体)：　2161

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅰ	1　1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.0	41

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅱ	2　この授業に積極的に参加した。	3.7	2
	3　この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.4	5
	4　学生の自主的・発展的な学修内容　※【Ⅱ】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

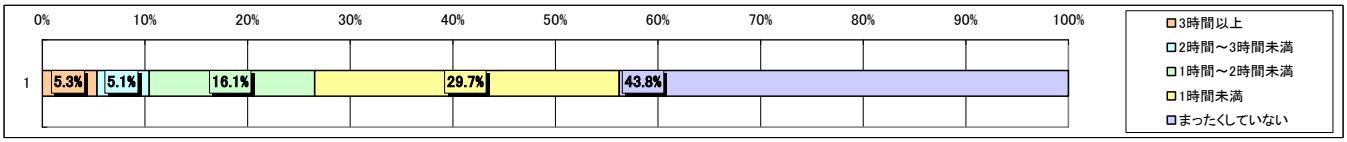
分野	この授業の進め方について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅲ	5　各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	7
	6　教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	3
	7　映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	7
	8　教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.7	6

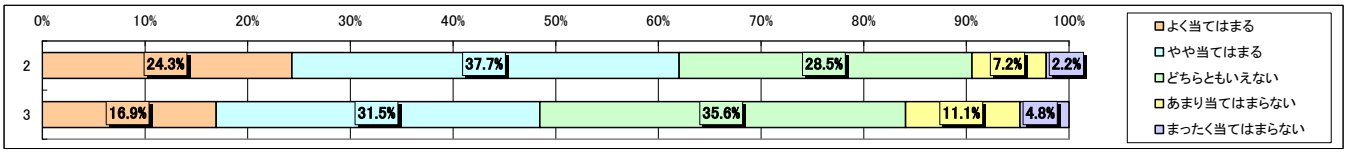
分野	この授業を受けてみて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅳ	9　新しい考え方・発想に触れた。	4.1	1
	10　基本的知識が得られた。	4.2	1
	11　多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	4
	12　自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	5
	13　科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	5
	14　学問的興味をかきたてられた。	3.9	7

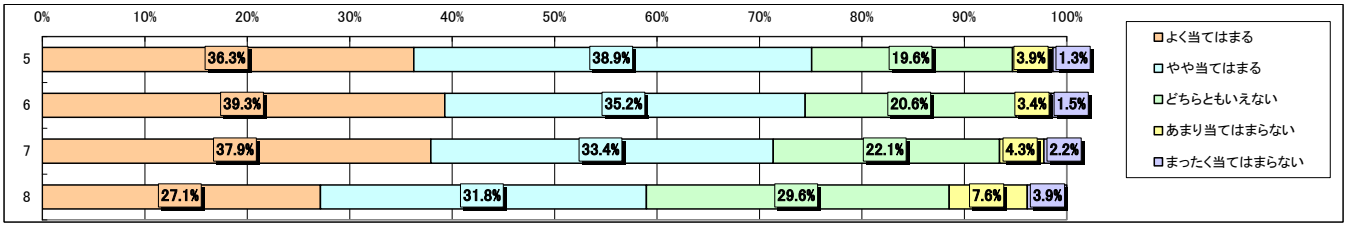
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の平均値	無効回答数
Ⅴ	15　授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	7
	16　授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	6
	17　この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	9

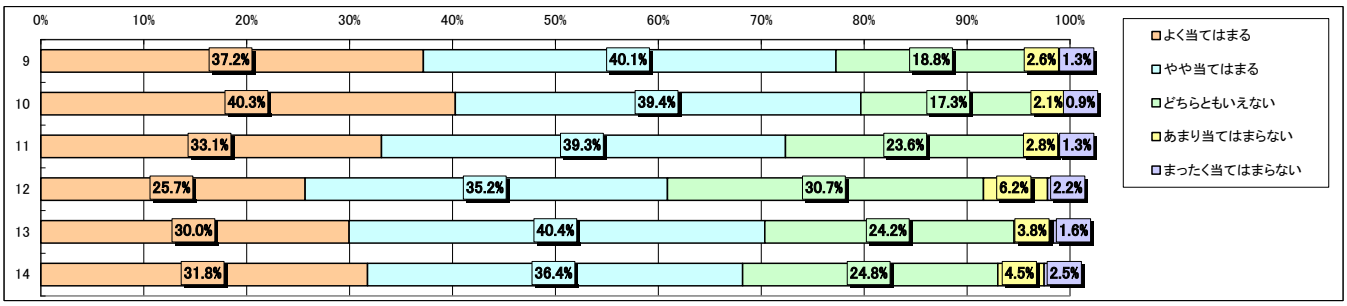
分野	その他	この授業の平均値	無効回答数
Ⅵ	18　この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	9
	19　この授業の受講者数は適切であった。	4.0	10

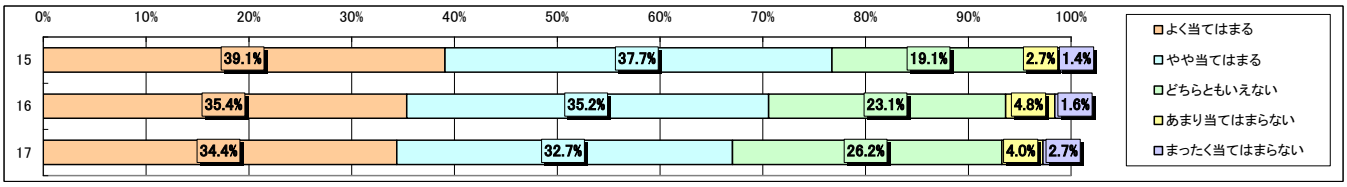
集計・分析結果	Ⅱ-4　学生の自主的・発展的な学修内容　(複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	47.9%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	9.3%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	50.4%
	その他	4.6%

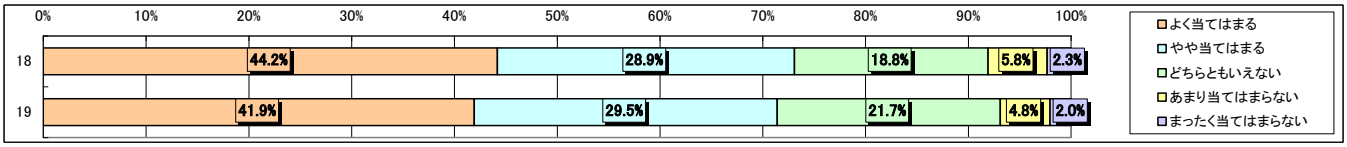

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
1
5.3% 5.1% 16.1% 29.7% 43.8%
3時間以上
2時間～3時間未満
1時間～2時間未満
1時間未満
まったくしていない

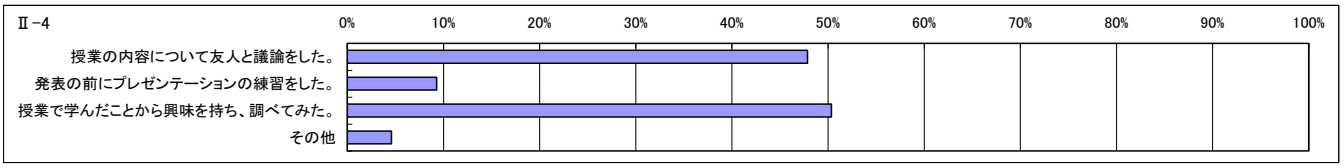

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
2
24.3% 37.7% 28.5% 7.2% 2.2%
3
16.9% 31.5% 35.6% 11.1% 4.8%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
5
36.3% 38.9% 19.6% 3.9% 1.3%
6
39.3% 35.2% 20.6% 3.4% 1.5%
7
37.9% 33.4% 22.1% 4.3% 2.2%
8
27.1% 31.8% 29.6% 7.6% 3.9%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
9
37.2% 40.1% 18.8% 2.6% 1.3%
10
40.3% 39.4% 17.3% 2.1% 0.9%
11
33.1% 39.3% 23.6% 2.8% 1.3%
12
25.7% 35.2% 30.7% 6.2% 2.2%
13
30.0% 40.4% 24.2% 3.8% 1.6%
14
31.8% 36.4% 24.8% 4.5% 2.5%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
15
39.1% 37.7% 19.1% 2.7% 1.4%
16
35.4% 35.2% 23.1% 4.8% 1.6%
17
34.4% 32.7% 26.2% 4.0% 2.7%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
18
44.2% 28.9% 18.8% 5.8% 2.3%
19
41.9% 29.5% 21.7% 4.8% 2.0%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


Ⅱ－4
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
授業の内容について友人と議論をした。
発表の前にプレゼンテーションの練習をした。
授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。
その他

令和元年度　秋学期　学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目　自然科学科目群

回答数（全体）：　1836

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅰ	1　1回分の授業外の学修（予習、復習、課題など）にかけた時間	2.1	35

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅱ	2　この授業に積極的に参加した。	4.0	7
	3　この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.6	8
	4　学生の自主的・発展的な学修内容　※【Ⅱ】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

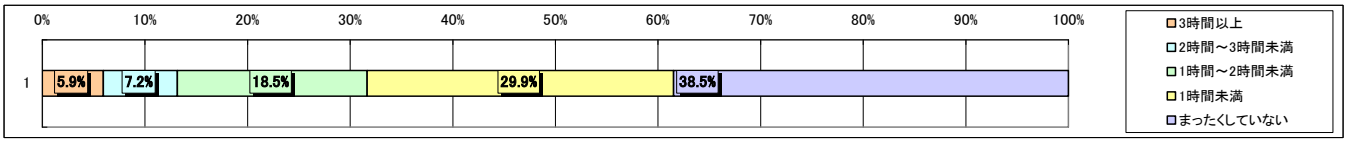
分野	この授業の進め方について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅲ	5　各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.2	13
	6　教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	6
	7　映像視覚教材（ビデオ、書画装置、パワーポイントなど）や板書が授業の理解に役立った。	4.2	5
	8　教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	6

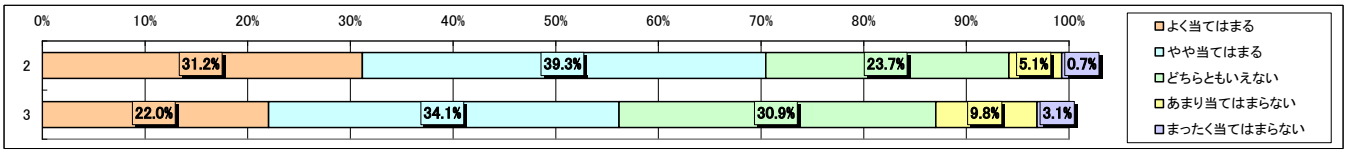
分野	この授業を受けてみて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅳ	9　新しい考え方・発想に触れた。	4.1	5
	10　基本的知識が得られた。	4.3	5
	11　多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	6
	12　自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	6
	13　科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	7
	14　学問的興味をかきたてられた。	4.0	11

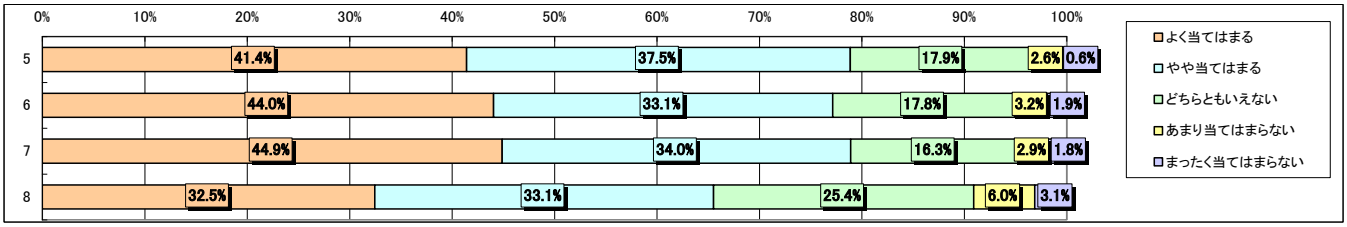
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の平均値	無効回答数
Ⅴ	15　授業全体の目標・内容が明確であった。	4.2	9
	16　授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	8
	17　この授業をほかの学生に薦めたい。	4.0	10

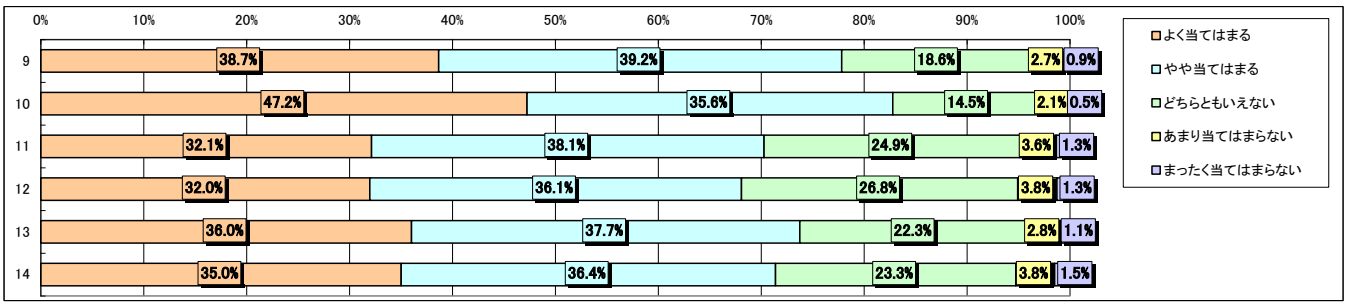
分野	その他	この授業の平均値	無効回答数
Ⅵ	18　この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	11
	19　この授業の受講者数は適切であった。	4.0	13

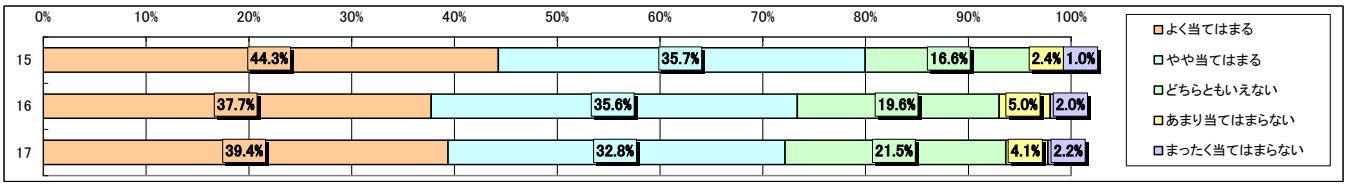
集計・分析結果	Ⅱ-4　学生の自主的・発展的な学修内容　（複数回答可）	
	授業の内容について友人と議論をした。	45.8%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	13.5%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	52.5%
	その他	6.1%

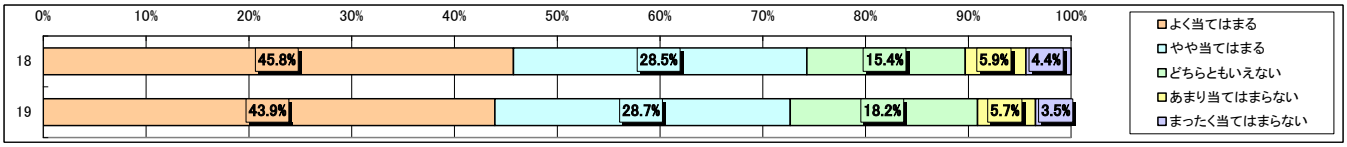

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
1
5.9% 7.2% 18.5% 29.9% 38.5%
3時間以上
2時間～3時間未満
1時間～2時間未満
1時間未満
まったくしていない

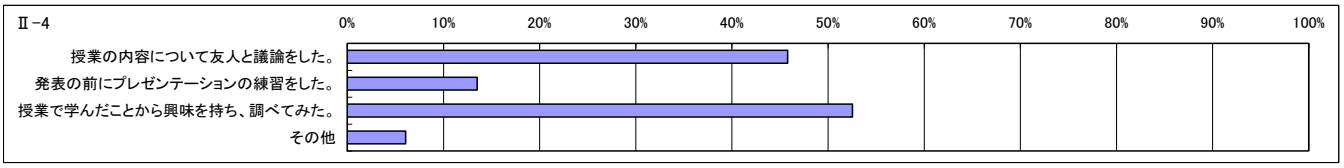

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
2
31.2% 39.3% 23.7% 5.1% 0.7%
3
22.0% 34.1% 30.9% 9.8% 3.1%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
5
41.4% 37.5% 17.9% 2.6% 0.6%
6
44.0% 33.1% 17.8% 3.2% 1.9%
7
44.9% 34.0% 16.3% 2.9% 1.8%
8
32.5% 33.1% 25.4% 6.0% 3.1%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
9
38.7% 39.2% 18.6% 2.7% 0.9%
10
47.2% 35.6% 14.5% 2.1% 0.5%
11
32.1% 38.1% 24.9% 3.6% 1.3%
12
32.0% 36.1% 26.8% 3.8% 1.3%
13
36.0% 37.7% 22.3% 2.8% 1.1%
14
35.0% 36.4% 23.3% 3.8% 1.5%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
15
44.3% 35.7% 16.6% 2.4% 1.0%
16
37.7% 35.6% 19.6% 5.0% 2.0%
17
39.4% 32.8% 21.5% 4.1% 2.2%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
18
45.8% 28.5% 15.4% 5.9% 4.4%
19
43.9% 28.7% 18.2% 5.7% 3.5%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


Ⅱ－4
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
授業の内容について友人と議論をした。
発表の前にプレゼンテーションの練習をした。
授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。
その他

令和元年度　秋学期　学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目　学際科目群

回答数（全体）：　958

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅰ	1　1回分の授業外の学修（予習、復習、課題など）にかけた時間	2.2	13

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅱ	2　この授業に積極的に参加した。	3.9	0
	3　この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.6	6
	4　学生の自主的・発展的な学修内容　※【Ⅱ】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

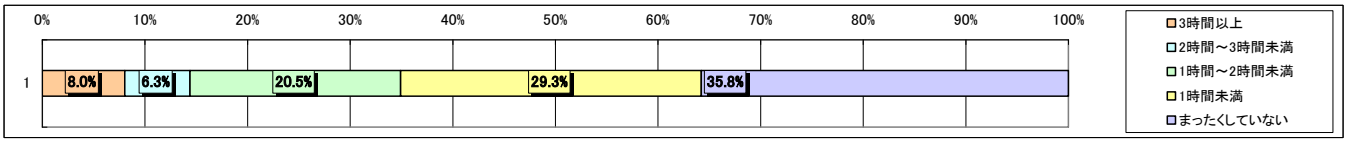
分野	この授業の進め方について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅲ	5　各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	4
	6　教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	1
	7　映像視覚教材（ビデオ、書画装置、パワーポイントなど）や板書が授業の理解に役立った。	4.0	1
	8　教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.8	1

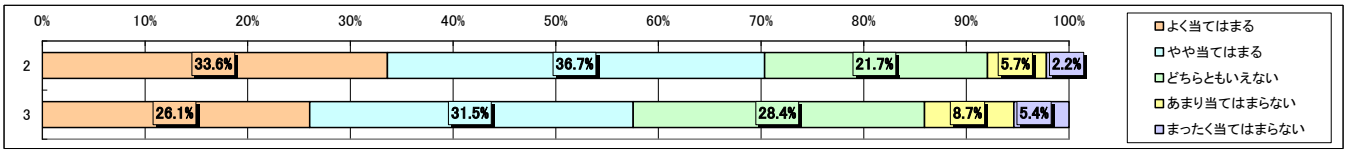
分野	この授業を受けてみて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅳ	9　新しい考え方・発想に触れた。	4.1	1
	10　基本的知識が得られた。	4.2	0
	11　多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	0
	12　自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	0
	13　科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	2
	14　学問的興味をかきたてられた。	3.9	1

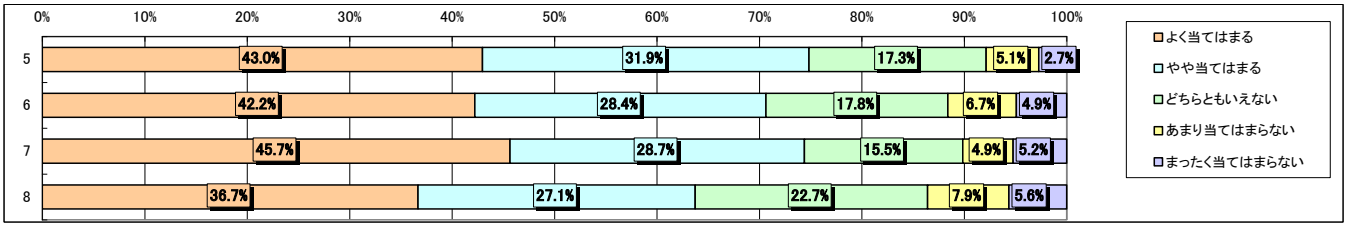
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の平均値	無効回答数
Ⅴ	15　授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	0
	16　授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	2
	17　この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	4

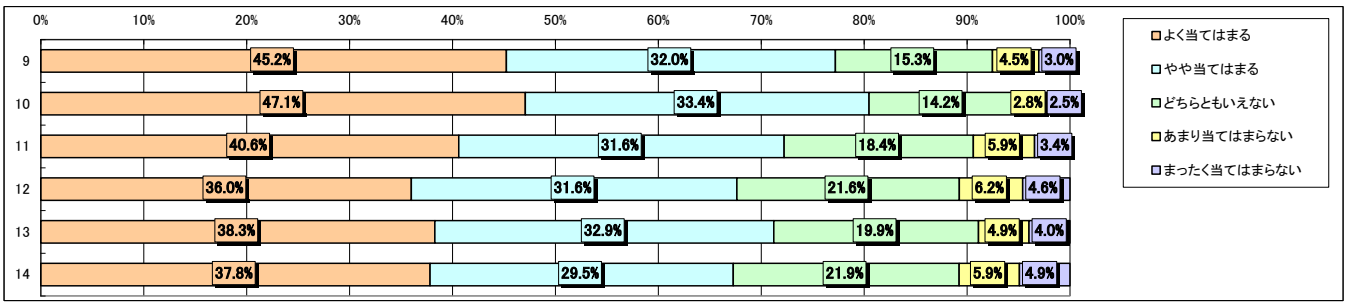
分野	その他	この授業の平均値	無効回答数
Ⅵ	18　この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	2
	19　この授業の受講者数は適切であった。	4.1	5

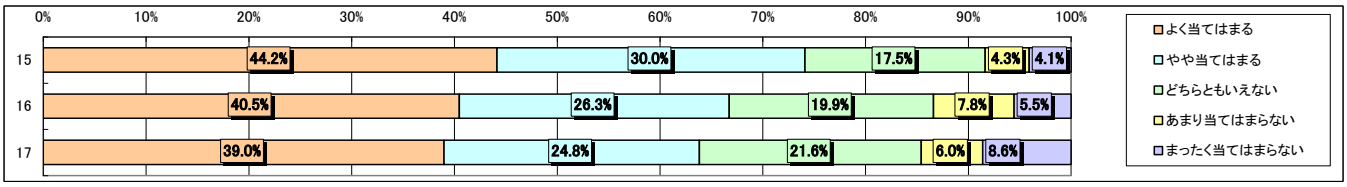
集計・分析結果	Ⅱ-4　学生の自主的・発展的な学修内容　（複数回答可）	
	授業の内容について友人と議論をした。	39.5%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	11.5%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	65.5%
	その他	3.0%

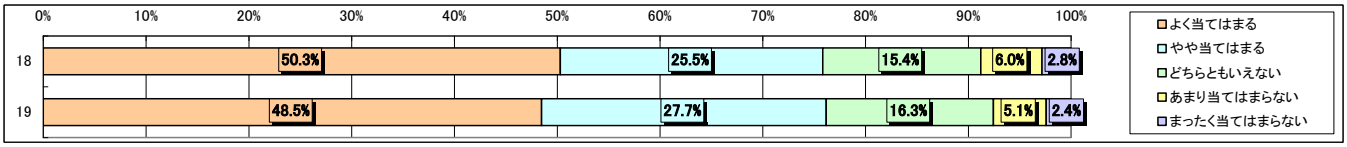

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
1
8.0% 6.3% 20.5% 29.3% 35.8%
3時間以上
2時間～3時間未満
1時間～2時間未満
1時間未満
まったくしていない

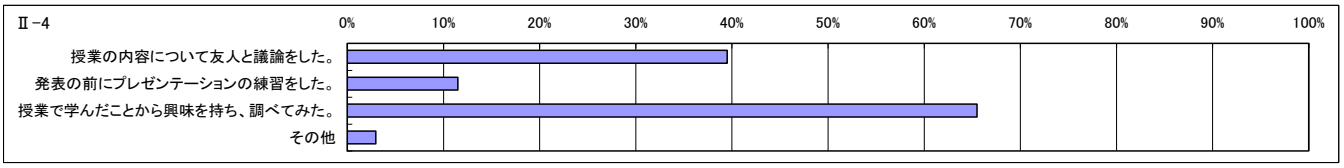

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
2
33.6% 36.7% 21.7% 5.7% 2.2%
3
26.1% 31.5% 28.4% 8.7% 5.4%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
5
43.0% 31.9% 17.3% 5.1% 2.7%
6
42.2% 28.4% 17.8% 6.7% 4.9%
7
45.7% 28.7% 15.5% 4.9% 5.2%
8
36.7% 27.1% 22.7% 7.9% 5.6%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
9
45.2% 32.0% 15.3% 4.5% 3.0%
10
47.1% 33.4% 14.2% 2.8% 2.5%
11
40.6% 31.6% 18.4% 5.9% 3.4%
12
36.0% 31.6% 21.6% 6.2% 4.6%
13
38.3% 32.9% 19.9% 4.9% 4.0%
14
37.8% 29.5% 21.9% 5.9% 4.9%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
15
44.2% 30.0% 17.5% 4.3% 4.1%
16
40.5% 26.3% 19.9% 7.8% 5.5%
17
39.0% 24.8% 21.6% 6.0% 8.6%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
18
50.3% 25.5% 15.4% 6.0% 2.8%
19
48.5% 27.7% 16.3% 5.1% 2.4%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


Ⅱ－4
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
授業の内容について友人と議論をした。
発表の前にプレゼンテーションの練習をした。
授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。
その他

令和元年度　秋学期　学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目　言語表現科目群

回答数（全体）：　2382

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅰ	1　1回分の授業外の学修（予習、復習、課題など）にかけた時間	2.2	33

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅱ	2　この授業に積極的に参加した。	4.1	0
	3　この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.8	7
	4　学生の自主的・発展的な学修内容　※【Ⅱ】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

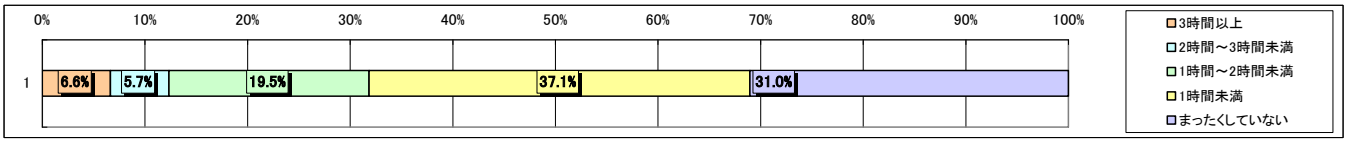
分野	この授業の進め方について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅲ	5　各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.2	15
	6　教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.2	2
	7　映像視覚教材（ビデオ、書画装置、パワーポイントなど）や板書が授業の理解に役立った。	4.2	2
	8　教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.3	4

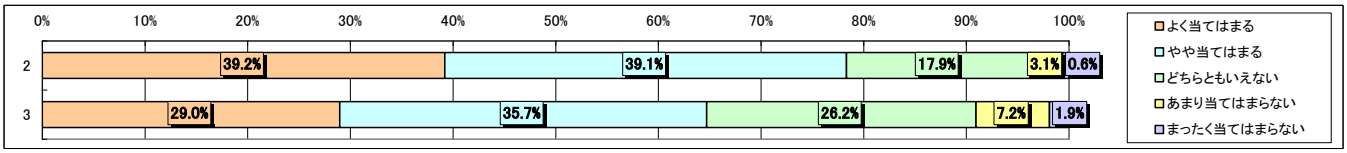
分野	この授業を受けてみて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅳ	9　新しい考え方・発想に触れた。	4.1	0
	10　基本的知識が得られた。	4.3	0
	11　多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.1	3
	12　自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.1	1
	13　科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.1	3
	14　学問的興味をかきたてられた。	4.0	0

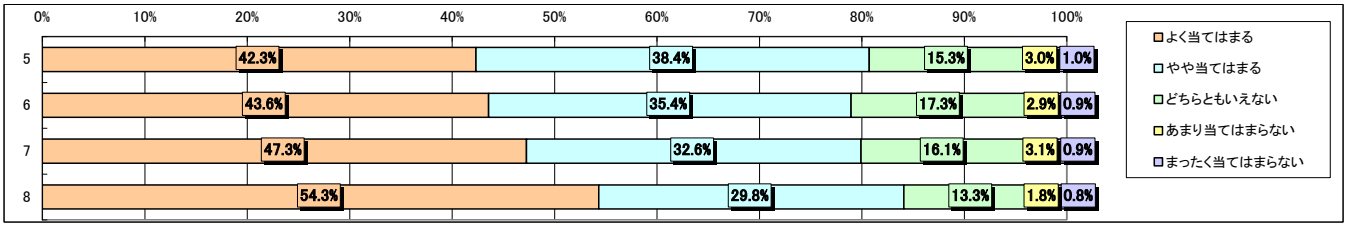
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の平均値	無効回答数
Ⅴ	15　授業全体の目標・内容が明確であった。	4.2	2
	16　授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.1	1
	17　この授業をほかの学生に薦めたい。	4.1	6

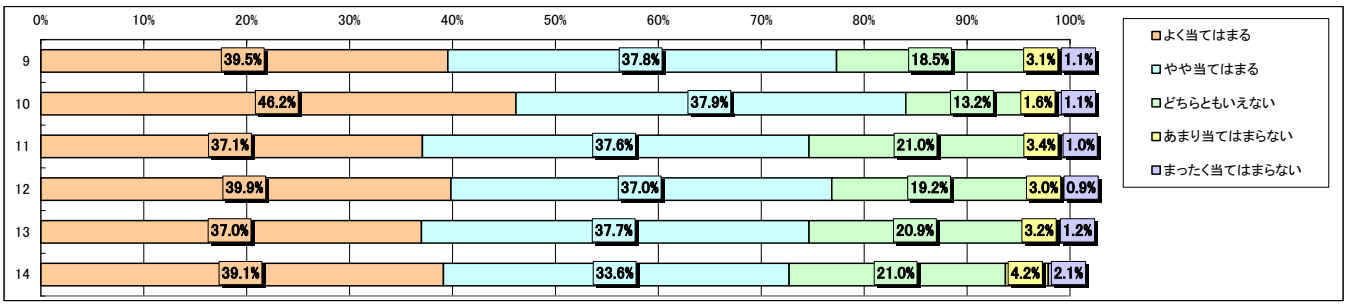
分野	その他	この授業の平均値	無効回答数
Ⅵ	18　この授業の教室の大きさは適切であった。	4.4	5
	19　この授業の受講者数は適切であった。	4.4	5

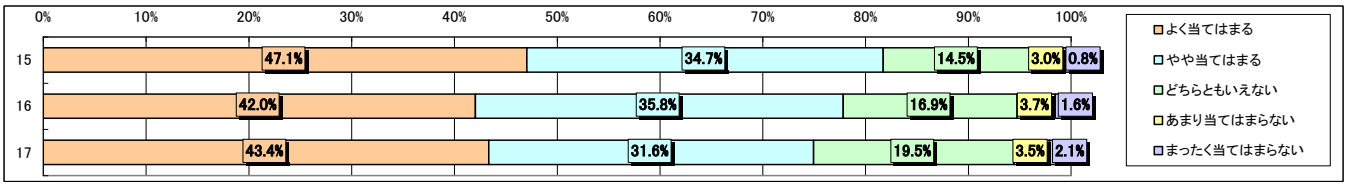
集計・分析結果	Ⅱ-4　学生の自主的・発展的な学修内容　（複数回答可）	
	授業の内容について友人と議論をした。	48.8%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	50.9%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	29.1%
	その他	7.0%

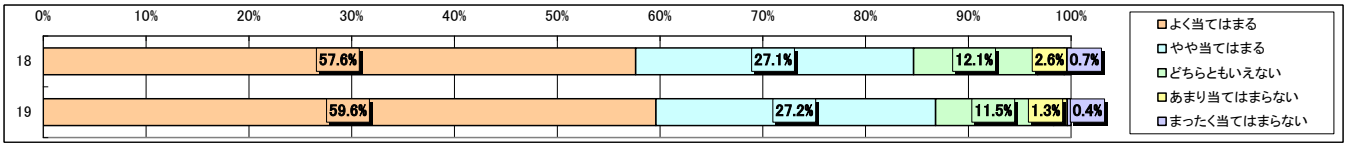

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
1
6.6% 5.7% 19.5% 37.1% 31.0%
3時間以上
2時間～3時間未満
1時間～2時間未満
1時間未満
まったくしていない

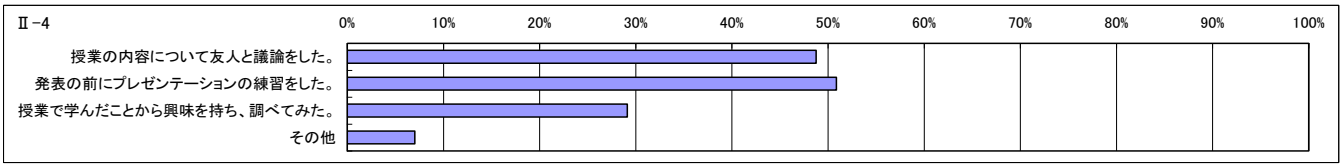

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
2
39.2% 39.1% 17.9% 3.1% 0.6%
3
29.0% 35.7% 26.2% 7.2% 1.9%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
5
42.3% 38.4% 15.3% 3.0% 1.0%
6
43.6% 35.4% 17.3% 2.9% 0.9%
7
47.3% 32.6% 16.1% 3.1% 0.9%
8
54.3% 29.8% 13.3% 1.8% 0.8%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
9
39.5% 37.8% 18.5% 3.1% 1.1%
10
46.2% 37.9% 13.2% 1.6% 1.1%
11
37.1% 37.6% 21.0% 3.4% 1.0%
12
39.9% 37.0% 19.2% 3.0% 0.9%
13
37.0% 37.7% 20.9% 3.2% 1.2%
14
39.1% 33.6% 21.0% 4.2% 2.1%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
15
47.1% 34.7% 14.5% 3.0% 0.8%
16
42.0% 35.8% 16.9% 3.7% 1.6%
17
43.4% 31.6% 19.5% 3.5% 2.1%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
18
57.6% 27.1% 12.1% 2.6% 0.7%
19
59.6% 27.2% 11.5% 1.3% 0.4%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


Ⅱ－4
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
授業の内容について友人と議論をした。
発表の前にプレゼンテーションの練習をした。
授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。
その他

令和元年度　秋学期　学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目　教職関連科目群

回答数(全体)：　1192

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅰ	1　1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.3	17

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅱ	2　この授業に積極的に参加した。	3.9	1
	3　この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.5	3
	4　学生の自主的・発展的な学修内容　※【Ⅱ】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

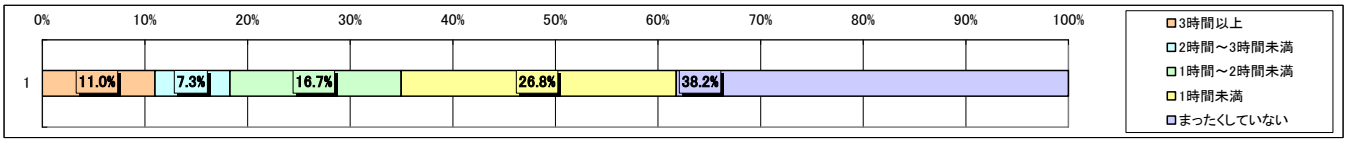
分野	この授業の進め方について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅲ	5　各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	6
	6　教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	0
	7　映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	1
	8　教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.8	1

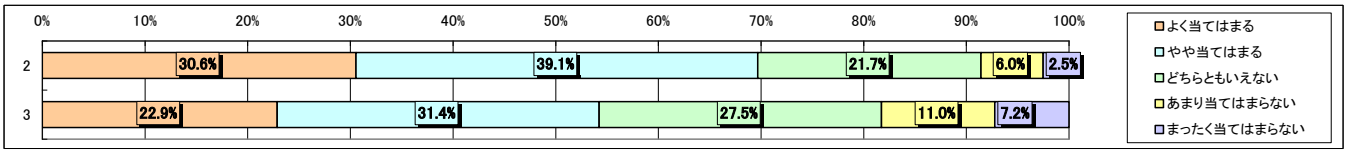
分野	この授業を受けてみて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅳ	9　新しい考え方・発想に触れた。	4.1	0
	10　基本的知識が得られた。	4.2	1
	11　多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	1
	12　自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	0
	13　科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	3
	14　学問的興味をかきたてられた。	3.8	5

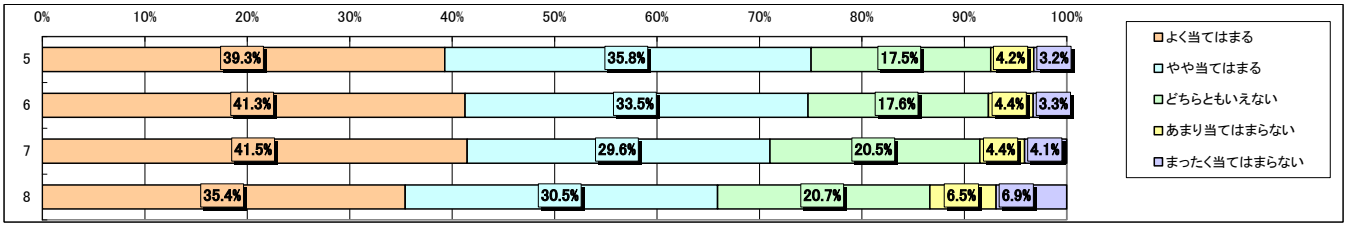
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の平均値	無効回答数
Ⅴ	15　授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	0
	16　授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	1
	17　この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	1

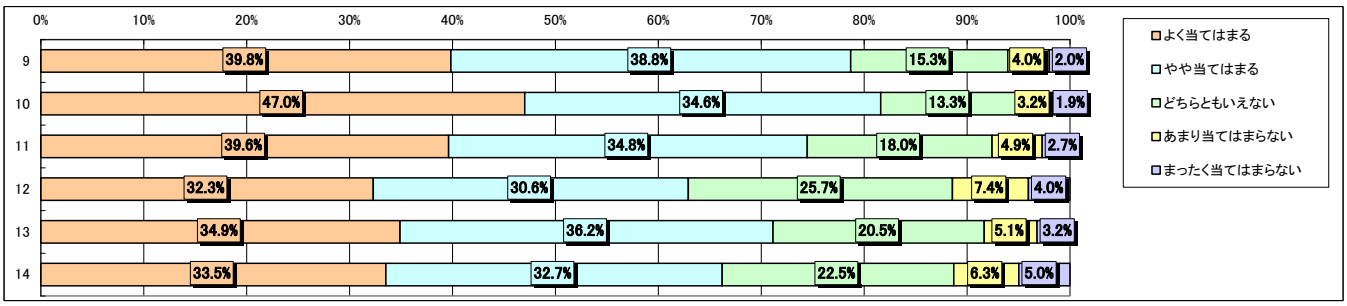
分野	その他	この授業の平均値	無効回答数
Ⅵ	18　この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	3
	19　この授業の受講者数は適切であった。	4.3	4

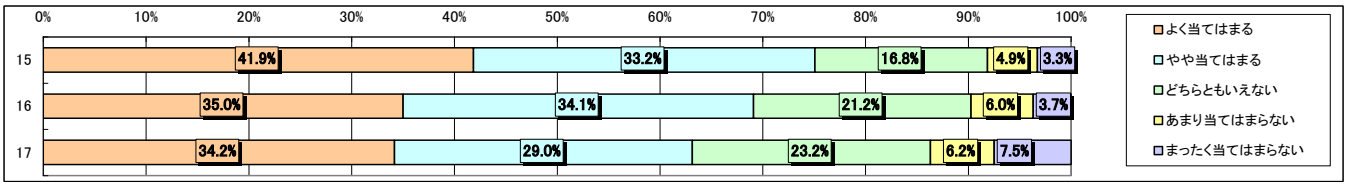
集計・分析結果	Ⅱ-4　学生の自主的・発展的な学修内容　(複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	64.6%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	7.2%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	43.5%
	その他	3.3%

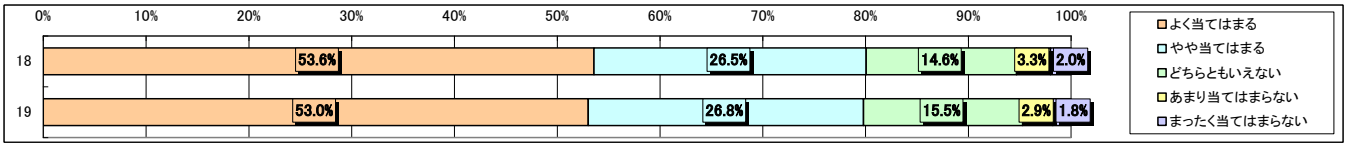

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
1
11.0% 7.3% 16.7% 26.8% 38.2%
3時間以上
2時間～3時間未満
1時間～2時間未満
1時間未満
まったくしていない

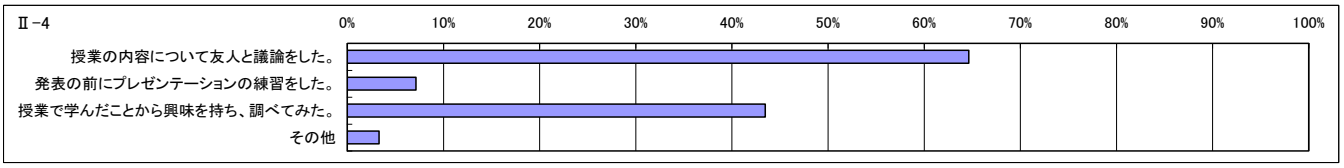

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
2
30.6% 39.1% 21.7% 6.0% 2.5%
3
22.9% 31.4% 27.5% 11.0% 7.2%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
5
39.3% 35.8% 17.5% 4.2% 3.2%
6
41.3% 33.5% 17.6% 4.4% 3.3%
7
41.5% 29.6% 20.5% 4.4% 4.1%
8
35.4% 30.5% 20.7% 6.5% 6.9%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
9
39.8% 38.8% 15.3% 4.0% 2.0%
10
47.0% 34.6% 13.3% 3.2% 1.9%
11
39.6% 34.8% 18.0% 4.9% 2.7%
12
32.3% 30.6% 25.7% 7.4% 4.0%
13
34.9% 36.2% 20.5% 5.1% 3.2%
14
33.5% 32.7% 22.5% 6.3% 5.0%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
15
41.9% 33.2% 16.8% 4.9% 3.3%
16
35.0% 34.1% 21.2% 6.0% 3.7%
17
34.2% 29.0% 23.2% 6.2% 7.5%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
18
53.6% 26.5% 14.6% 3.3% 2.0%
19
53.0% 26.8% 15.5% 2.9% 1.8%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


Ⅱ－4
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
授業の内容について友人と議論をした。
発表の前にプレゼンテーションの練習をした。
授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。
その他

令和元年度　秋学期　学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目　資格関連科目群

回答数（全体）：　331

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅰ	1　1回分の授業外の学修（予習、復習、課題など）にかけた時間	2.3	12

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅱ	2　この授業に積極的に参加した。	4.0	1
	3　この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.7	1
	4　学生の自主的・発展的な学修内容　※【Ⅱ】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

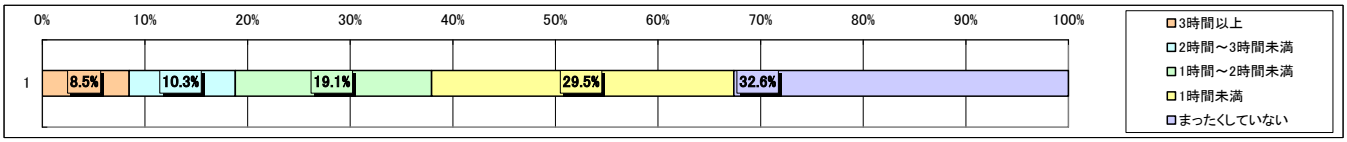
分野	この授業の進め方について	この授業の平均値	無効回答数
Ⅲ	5　各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.2	3
	6　教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.2	1
	7　映像視覚教材（ビデオ、書画装置、パワーポイントなど）や板書が授業の理解に役立った。	4.2	1
	8　教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.0	1

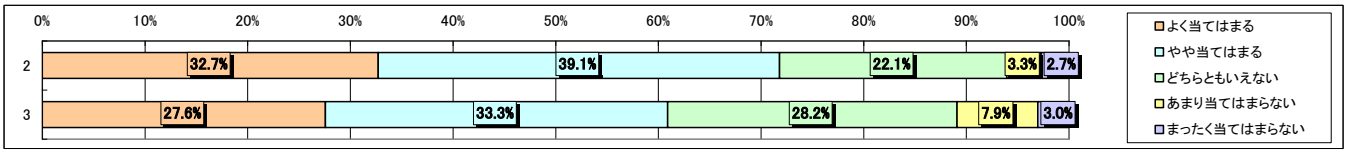
分野	この授業を受けてみて	この授業の平均値	無効回答数
Ⅳ	9　新しい考え方・発想に触れた。	4.2	2
	10　基本的知識が得られた。	4.3	2
	11　多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.1	2
	12　自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.0	3
	13　科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.1	2
	14　学問的興味をかきたてられた。	4.1	2

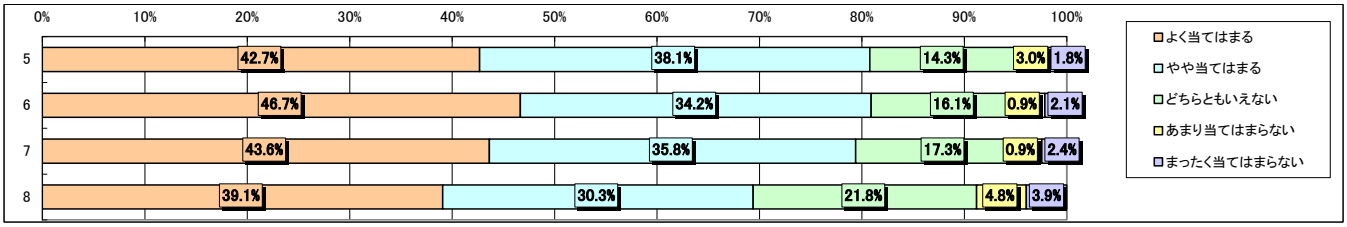
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の平均値	無効回答数
Ⅴ	15　授業全体の目標・内容が明確であった。	4.2	2
	16　授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.1	2
	17　この授業をほかの学生に薦めたい。	4.1	4

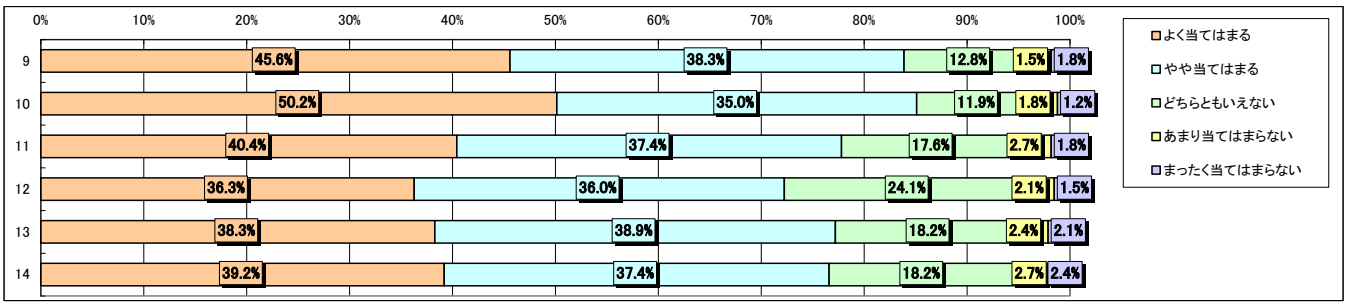
分野	その他	この授業の平均値	無効回答数
Ⅵ	18　この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	4
	19　この授業の受講者数は適切であった。	4.2	3

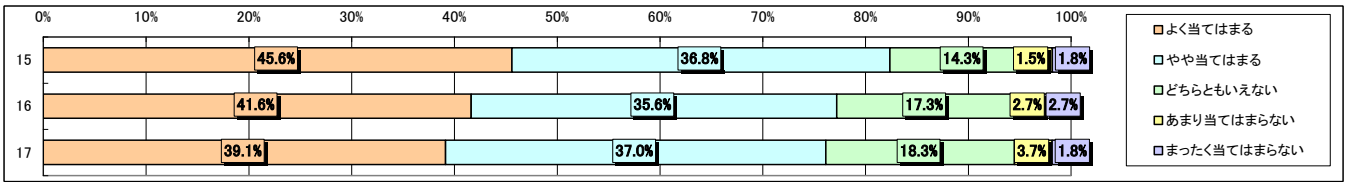
集計・分析結果	Ⅱ-4　学生の自主的・発展的な学修内容　（複数回答可）	
	授業の内容について友人と議論をした。	48.7%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	19.8%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	56.1%
	その他	3.7%

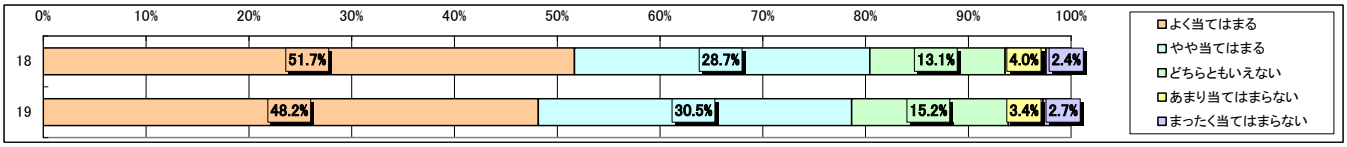

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
1
8.5% 10.3% 19.1% 29.5% 32.6%
3時間以上
2時間～3時間未満
1時間～2時間未満
1時間未満
まったくしていない

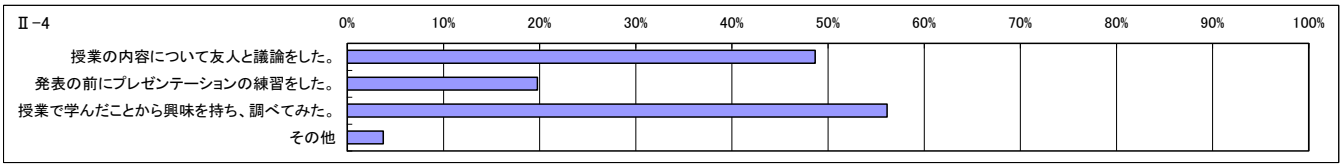

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
2
32.7% 39.1% 22.1% 3.3% 2.7%
3
27.6% 33.3% 28.2% 7.9% 3.0%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
5
42.7% 38.1% 14.3% 3.0% 1.8%
6
46.7% 34.2% 16.1% 0.9% 2.1%
7
43.6% 35.8% 17.3% 0.9% 2.4%
8
39.1% 30.3% 21.8% 4.8% 3.9%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
9
45.6% 38.3% 12.8% 1.5% 1.8%
10
50.2% 35.0% 11.9% 1.8% 1.2%
11
40.4% 37.4% 17.6% 2.7% 1.8%
12
36.3% 36.0% 24.1% 2.1% 1.5%
13
38.3% 38.9% 18.2% 2.4% 2.1%
14
39.2% 37.4% 18.2% 2.7% 2.4%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
15
45.6% 36.8% 14.3% 1.5% 1.8%
16
41.6% 35.6% 17.3% 2.7% 2.7%
17
39.1% 37.0% 18.3% 3.7% 1.8%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
18
51.7% 28.7% 13.1% 4.0% 2.4%
19
48.2% 30.5% 15.2% 3.4% 2.7%
よく当てはまる
やや当てはまる
どちらともいえない
あまり当てはまらない
まったく当てはまらない


Ⅱ－4
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
授業の内容について友人と議論をした。
発表の前にプレゼンテーションの練習をした。
授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。
その他

Ⅱ　大学院 FD 活動報告

＜文学研究科＞

（1）授業評価の実施

履修者が 4 名以上のすべての授業において、下記の通り、授業評価アンケートを実施し、結果を得た。全授業において、おおむね評価が高かった。秋学期の授業においては、「自分の研究と関連づけられたか」という設問 2、4、5 については低い評価も見られたが、これは 500 番台科目として受講している学部生も回答していたためであり、まだ研究が身近に感じられない学部生には授業内容と自分自身の研究とを関連づけることが難しかったためと考えられる。今後は、匿名性を確保しながら院生と学部生の回答を区別する方法を検討したい。

		ｱｶﾃﾞﾐｯｸ･ﾘﾃﾗｼｰ	英語教育研究	英語教育研究方法論	言語教育政策研究	多文化社会研究	英語授業演習
		5 人	4 人	4 人	7 人	9 人	6 人
1	この授業の専門分野に関する知識やスキルが高まった。	4.0	4.0	3.8	3.9	3.9	3.7
2	この授業で学修したことを、自分の研究課題に関連付けることができた。	3.4	3.3	3.5	3.4	2.8	3.5
3	この授業を通して、自分の研究を遂行するための論理的思考力が高まった。	3.8	4.0	3.8	4.0	3.6	3.2
4	この授業を通して、自分の研究を遂行するために必要な知識やスキルを身に付けることができた。	4.0	3.5	4.0	3.7	3.4	3.0
5	この授業を通して、自分の研究課題に関する新たな視点を発見することができた。	3.2	3.0	4.0	3.8	3.4	3.4

（4　とても当てはまる／3　やや当てはまる／2　あまり当てはまらない／1　まったく当てはまらない）

（2）院生に対する研究倫理教育の実施

全学生（人間学専攻 1 名・英語教育専攻 6 名）に eL CoRE の受講を義務づけることとした。年度初めの 4 月中に全学生が受講を終え、受講証明書を提出した。

また、院生自身が実際にデータ収集を行う際に適切なプロセスを踏んでいるかどうかを確認するため、eL CoRE の学習内容、及び関連学会の研究倫理を参考にしながら、研究倫理チェックリストの試案を作成した。来年度以降にさらに改良を加える予定である。

（3）「玉川大学英語教育セミナー」の開催

令和元年度も例年通り、「玉川大学英語教育セミナー」を夏に開催したが、今回はプログラム

の中で、大学院生の発表枠が設けられなかったため、修士論文の内容について助言や指導を得る機会にはならなかった。ただし、過去の修了生の発表を聞いたり、参加者との情報を交換する中で、自身の研究テーマや研究手法の見直しの機会にはなった。来年度以降、このセミナーの中で大学院生の発表の機会を積極的に作っていくことを行いたい。

（4）学会発表の推奨および発表の成果の検証

令和元年度は英語教育専攻の学生 3 名が海外の学会で発表を行った。参加学生には共通の「学会発表報告書」のフォーマットを渡し、自身の発表の評価を記述してもらった。さらに、その評価を受けて、指導担当教員が、学生の今回の発表から考えられる今後の研究指導の改善点等を記述した。来年度は、この共通フォーマットの見直しをするとともに、今回の報告書から得られた示唆を、英語教育専攻の学生の指導担当教員で共有し、指導の改善に当たることを試みたい。

（5）FD 研修会の開催

令和元年度の計画として、大学院での学修が現在どのように役に立っているか、また、大学院で学修しておくべきだったことなどを話してもらうための機会を設ける予定であったが、予算化ができていなかったことから、来年度に予算化をし、実現を試みたい。予定していた研修会は設定できなかったが、英語教育専攻の指導担当者間の指導経験および現在の課題認識を共有したところ、来年度は「英語教育専攻の授業科目の見直し」に取り組むことが課題として挙げられた。これは、現在の修士 1 年目の学生は英語教育学科の 1 期生であり、これまでの比較文化学科の学生とは、学部 4 年間で、留学の必修化など異なる制度の下で学修をしてきたことから、大学院で育成すべき資質・能力を再確認した上で、より適切な授業科目の設定が必要であることが背景となっている。来年度は、英語教育専攻の課題をより具体化した上で、カリキュラム全体も含めた、科目設定の見直しをしていく予定である。

（6）令和 2 年度に向けた FD 活動の予算化

FD 研修会には経費がかかることから、令和 2 年度の研究科予算において、FD 活動費を計上した。これにより、（5）に挙げた令和 2 年度の FD 研修会を充実させることができると期待される。

＜農学研究科＞

活動計画

（1）入学定員充足に向けた進学説明会と研究発表会の充実
（2）英語による授業と大学院生の英語による学会発表等の指導
（3）授業アンケートの実施と授業の改善
（4）学士・修士 5 年一貫教育プログラム（仮称）の導入検討
（5）農学と工学の連携・融合を目指した研究発表会の開催

活動計画（1）入学定員充足に向けた進学説明会と研究発表会の充実について

農学研究科への進学説明会を 2 回（令和元年 6 月 7 日・11 月 1 日）、所属教員および外部講師による研究談話会を 5 回（令和元年 7 月 5 日・8 月 9 日・10 月 31 日・11 月 4 日・12 月 5

日）それぞれ開催した。進学説明会では、学部 3・4 年生を中心に述べ約 30 名の進学希望者が参加し、農学研究科の特色、研究分野と研究内容、指導教員、研究環境、進路等を詳しく説明した。一方、5 回開催された研究談話会では、教員延べ 50 名、大学院生延べ 20 名、学部生延べ 36 名が参加し、教員・学生を問わず積極的な質疑応答や意見交換が交わされ、極めて充実した研究発表会を行うことができた。

令和 2 年度は、FD 活動計画に掲げた数値目標を上回る新入生（修士課程 16 名、博士課程 2 名）を迎えることができ、進学説明会と研究談話会に参加した学部生も多数見受けられた。特に本学の農学部生を多数進学させ、入学定員を上回る進学者を常に確保するためにも、さらに魅力的な進学説明会と研究談話会を継続して開催していく。

活動計画（2）英語による授業と大学院生の英語による学会発表等の指導について

英語のみを使用言語とした授業の実践には至っていない。大学院生によるプレゼンテーション型の授業や、ディスカッション型の授業では一部英語による授業が行われた。英語による学会発表の指導も行われており、これらは今後も継続していく。FD 活動計画に掲げた数値目標は達成できたが、さらに英語による授業を充実していく必要がある。

活動計画（3）授業アンケートの実施と授業の改善について

専門性の高い講義が行われている反面、バックグラウンドの異なる院生が授業に参加していることもあった。基礎的な知識に差がある場合の対応は昨年度に引き続き課題が残された。

活動計画（4）学士・修士 5 年一貫教育プログラム（仮称）の導入検討について

「学士・修士 5 年一貫教育プログラム（仮称）」を導入する際のカリキュラムの策定、選考時期、選考方法について、農学研究科教務担当者会および農学部主任会で検討を行ったが、具体案を作成して農学研究科会で審議するには至っていない。

活動計画（5）農学と工学の連携・融合を目指した研究発表会の開催について

農学部／農学研究科と工学部／工学研究科の連携・融合を推進し、教育研究活動の深化を図ることを目的として研究交流会を企画した。令和元年 11 月 22 日に第 1 回研究交流会を実施し、活発な意見交換が交わされた。次年度も引き続き研究交流会を開催する予定である。

＜工学研究科＞

令和元年度工学研究科 FD 活動として、大学院生による授業評価アンケートの実施と授業改善の推進、「専門演習 I」の実施と効果分析による実践的技術力指導の改善および大学院教育活動の質向上を目的とした 2 つの FD 研修会を計画に沿って実施した。以下に活動の報告とその成果および課題についてまとめた。

（1） 大学院生による授業評価アンケートの実施と授業改善の推進

・実施時期：春学期・秋学期

・対象科目：工学研究科の大学院生が受講している全科目

春学期および秋学期において大学院生による授業評価アンケートを実施した。春学期は、従来通り大学院生にアンケート用紙を配付し、教務担当が回収してデータを入力した。しかし、これは集計作業にかかる労力が大きいため、秋学期では新しい取り組みとして、アンケートを電子化し、大学院生が PC やスマートフォンを用いてオンラインで入力した回答を、匿名性を確保した上で収集する方法を開発し、全面的に実施した。

各科目の授業評価アンケートの結果は、授業改善に活用してもらうため、授業担当教員にフィードバックした。さらに、教務担当者会で各科目の結果および全体の集計結果について議論した後、全体の集計結果は工学研究科会で全教員に報告した。

この活動の成果として、授業評価アンケートの実施から評価、公表、改善への活用までの一連のプロセスを実施することができた。集計結果を見ると、いずれの授業科目においても特に問題は見出されず、良好であることが確認された。また、電子化によって集計の労力が大幅に効率化され、大学院生による回答率も上昇した。

次年度も開発したオンライン方式による授業評価アンケートを実施し、授業の改善活動を継続していく。さらに、アンケート結果に基づいた授業の改善とその効果の記録については、どのような方法が可能か引き続き検討していく。

（２）「専門演習Ｉ」の実施と効果分析による実践的技術力指導の改善

工学研究科の必修科目である「専門演習Ｉ」は、修士課程 1 年生を対象とし、工学研究科の全教員がその内容と評価に関わる科目である。この科目の狙いは、装置の製作等の実際的な課題による工学の基礎的な知識および技術の修得と、「大学院技術発表会」における発表・質疑応答を通した技術者および研究者に必要なコミュニケーション能力の向上である。

技術発表会は令和元年 9 月 19 日（木）に開催され、大学院生の発表 12 件に対して、教員 13 名、大学院生 2 名および学部生 25 名の計 40 名の参加者が訪れた。ほとんどの発表でポスターと製作物の展示が行われ、参加した教員および他の学生との間で活発な質疑応答が行われた。科目の実施概要および発表会の審査結果は、工学研究科会で全教員に報告された。

成果としては、前年度から引き続き教員だけでなく博士課程の TA（本年度は 1 名）を活用した実習指導を強化したことによって、前年度よりもさらに実際的な課題に取り組んだ質の高い発表内容が多く見られ、研究科全体として継続的に大学院生の実践力強化のための教育方法の改善に努めていくことができた。

次年度への課題として、履修者がより早い時期に具体的なテーマを決めて課題に取り組むように促すため、新入生ガイダンスでの説明や TA による指導を改善していく方策について教務担当者会で議論し、実施していくこととなった。

（３） 大学院教育活動の質向上を目的とした FD 研修会の実施

1) 知的財産権と研究・技術者倫理に関する FD 研修会

テーマ：知的財産セミナー 知的財産が必要な理由

実施日：令和元年 7 月 25 日（木） 17：30～18：30

場所：大学 8 号館第 2 会議室

講師：本谷 孝夫 氏（弁理士）

工学部との合同で弁理士の方を招き、知的財産に関して特許・意匠・商標といった産業財産権を中心に、大学・大学院の教育・研究活動で注意すべき点についての講演会を開催した。工学研究科および工学部の多くの教員が出席した。

成果として、産業財産権における特許・意匠・商標の違いやそれらに関する紛争や判例、さらには申請について、大学教員として必要な知識を共有することができた。

次年度への課題としては、出席者の名簿や感想を残していなかったことがあるので、今後のFD 研修会では活動成果を記録として残していく必要がある。また、次年度も FD 活動としてふさわしいテーマの講演会を企画したい。

2) 社会発信手法研修会

テーマ：「今、大学が求められるもの、発信すべきもの」

～選ばれる大学になるための効果的な広報活動の展開～

実施日：令和元年 10 月 31 日（木）17：30～18：30

場所：大学 8 号館第 2 会議室

講師：菊池 泰功 氏（PR クエスト株式会社 代表取締役 広報コンサルタント）

工学部との合同で大学広報コンサルタントの方を招き、理工系の大学の広報活動に関する講演会を開催した。本講演では、講師が他大学で取り組んだ事例を挙げながら、大学の特色的な教育・研究活動が社会に認知・評価され、受験生に「選ばれる大学」となるための効果的な広報を行うポイントが紹介された。工学研究科・工学部の多くの教員だけでなく、入試広報に関する職員が出席した。

成果として、教職員が大学の広報に関する基本的な情報を共有し、前向きな意識を共有することができた。さらに、この講演も参考にして、STREAM Hall 2016 と工・農・芸 3 学部の連携に関連した広報活動を行うことができた。

次年度への課題としては、出席者の名簿や感想を残していなかったことがあるので、今後のFD 研修会では活動成果を記録として残していく必要がある。さらに、今後さらに各教員の広報活動に対する意識を高め、プレスリリースなどの発信を増やしていきたい。

＜マネジメント研究科＞

（1）院生と共同の FD 会を開催

【報告】

令和元年度はスクール・マネジメント研究コース（8 名）、グローバル・ツーリズムコース（1 名）の大学院生へ指導を実施した（会計学コースの 1 名は春セメ終了時に依願退学）。特に、スクール・マネジメント研究コースの大学院生は本学職員であることから、大学院生の声をもとにコースのカリキュラムや授業改善に関する検証を行った。具体的には 7 月 31 日に大学院生、教員、人事部スタッフ参加によるカジュアルな FD 会を実施した。この機会を利用して大学院生の授業に対する要望、大学業務とのバランス等について意見を収集し、さらには今後の学業に対するアドバイスを行った。

【成果・課題】

グローバル・ツーリズムコースに初めての大学院生を迎え、修士論文の執筆に取り組んだ。無事に修士論文を提出し、合格の判定を得たことから、教員の指導が適切であったと考える。FD 会

での意見収集において、授業や研究指導に対して大学院生からの不満はなく、院生のレベルに合わせた適切な指導がなされたことを確認した。次年度も FD 会などの機会を設けて大学院における授業の在り方や指導内容について検討する。

（2）課題研究セミナーⅠ・Ⅱの指導方法検証

【報告】

今年度は 3 名のスクール・マネジメント研究コースの院生が大学院を修了した。学位取得に向けて、課題研究の指導方法に関していくつかの課題を共有した。この課題をどのように解決すべきかを次年度も引き続き共有し、解決の方策を教員間で共有したい。

【成果・課題】

スクール・マネジメント研究コースの院生が課題研究報告書を執筆するにあたり、アンケートに基く定量的な分析が行われるケースを確認した。指導教員からの報告として、アンケートを実施すること自体に困難が伴うそうである。特に学内関係者にアンケートを実施する際には部署長間でのコミットメントが必須であり、次年度からは研究科長を通じたアンケート協力の依頼が必要であるとの認識を得た。

（3）大学院生による授業評価アンケートの実施

【報告】

各セメスター終了後に全授業に対する記述式アンケートを実施した。回収したアンケートを担当教員へフィードバックし、授業改善に役立ててもらった。

【成果・課題】

記述式アンケートの内容をレビューしたところ、授業に対して特別に不満を感じていることはないのを確認した。授業評価アンケートについては、次年度も継続して実施し、大学院生からの要望を把握するために実施したい。また、アンケートの結果を授業改善の PDCA に十分反映されているかは調査しきれていない。授業改善の工夫を紹介し合う場を設けるのも一手段である。

（4）教員の研究倫理に関する啓蒙

【報告】

平成 30 年度から継続して研究倫理の啓蒙活動を試行する計画を立案した。具体的な内容として、例えば外部講師を招聘しての講演会（他研究科との共同開催）、研究倫理に関するグループ・ディスカッション、研究倫理の書籍を利用した啓蒙などが考えられた。今年度については全学的に研究倫理に関する e-learning の受講が試行されたため、これ以上の啓蒙活動は実施していない。

【成果・課題】

次年度も引き続き研究倫理の啓蒙を深めたい。単に e-learning の受講に留まるのではなく、外部講師の招聘の可能性などを検討する。

＜教育学研究科＞

（1）【活動計画】FD 委員会の開催（年 6 回程度）

・研究科会後に FD 委員会を 7 回開催。（5/8、6/26、7/24、9/18、10/30、12/25、2/19）

【成果・課題】

・授業開講期間中、ほぼ毎回 FD 委員会を行うことで授業改善の意識を教員全体で共有することができた。

（２）【活動計画】授業研究のための相互授業見学と研究会（各教員、各学期、1 回を目標）

・各教員による授業見学を行い、事後、研究会を行う。ほぼ全教員が 1 回の授業見学を実施。

【成果・課題】

・特に秋学期の場合には、下記（３）で記す「授業工夫」を意識して各授業参観を行うことでより具体的な形で授業形態を把握でき、それを多くの教員が自らの授業にも取り入れ、授業改善に役立てることができた。

（３）【活動計画】授業工夫内容の提出と研究会（春学期提出・配付、秋学期研究会）

・春学期に各教員が担当の授業においてどのような工夫をしているかを文書にて提出。

【成果・課題】

・授業工夫一覧をもとに研究科会後の FD 委員会にて質疑応答の機会を設け、さらに必要に応じて教員間での意見交換を行った。

（４）【活動計画】学期終了後の授業アンケートの実施及び分析

・春学期、秋学期終了後に授業アンケートの実施及び分析。（7/24、2/19）

【成果・課題】

・アンケート内容を「教員に対する意見・要望」と「事務職員に対する意見・要望」に分けて分析し全教員と担当事務に配付。学生の率直な意見に耳を傾け今後の授業改善、事務運営にいかすことにした。

（５）【その他】修士論文に関する評価基準の検討。

【成果・課題】

・修論評価基準を本研究科のディプロマ・ポリシーに基づいて詳細に作成した。

＜教職大学院＞

（１）教職大学院 OBOG フォローアップ研修について

本年度は次の 2 回の日程で実施した。

① 6 月 22 日（土）　佐藤 修 教授による研究報告
　教職大学院 OBOG による実践報告
　報告者：橋本 祐樹 氏
　白石 桃子 氏

② 11 月 30 日（土）　久保田 善彦 教授による研究報告
　教職大学院 OBOG による実践報告

報告者：現職 7 期：仲村 康太郎 氏
現職 7 期：島村 雄次郎 氏

佐藤教授からは新学習指導要領の改訂を受けて「プログラミング教育」をどのように進めていくのか、具体的な事例を通しながら分かりやすく教えていただいた。久保田教授からは、ICT を有効に活用しながらの理科の授業の進め方を、参加者が主体的に学べる授業形式で示唆いただいた。その後は、例年通りグループに分かれてサークルディスカッションを行った。OBOG からの発表と教授からの発表について、活発な意見交換が行われた。

①成果

毎年のフォローアップ研修が、教職大学院 OBOG の学びの継続として、また年次の異なる大学院生のつながりを作る場として機能していることが、また本年度も引き続き確認された。近々の課題を交流しあうサークルディスカッションも好評であった。教職大学院の教員が毎回発表し、その発表についての意見交換を実施することで、本学の講義の質を高める FD としての効果も引き続きねらっている。また、来場した OBOG からはアンケートを実施し、大学院のどの講義が教育現場で役立ったかなどについて答えてもらうようにしている。教職大学院 OBOG の実践報告は、現場に出てからの修了生たちが教職大学院での学びをどのように生かしているのか、またどういった点に悩み克服しようとしているのかを、教授陣も知ることができる貴重な場となっている。サークルディスカッションにおいても、教職大学院の講義が OBOG たちのその後の仕事にどのように役立っているか、また今後どのような講義が求められているか等を確認することのできる貴重な機会となっている。この場の議論をもとに、各教員も自分たちの講義の内容と方法との改善に努めている。

②課題

OB・OG の参加者がやや少ない点が今後の課題である。メールによる連絡網等を整備し、定期的に情報を流すなどの工夫はしているが、現職として活躍している修了生たちの多忙さもあり、休日のフォローアップに参加しにくい状況もある。

（2）FD 授業研究について

以下の 2 回の授業研究を実施した。

① 4 月 25 日（木）15：00～16：40（担当：谷 和樹 教授）
「国語科・社会科指導の計画・実践・評価」
② 11 月 7 日（木）15：00～16：40（担当：坂野 慎二 教授）
「教科授業技術の研究と実践（中）」
「教育法規の理論と実践」

①成果

谷教授の研究授業では、社会科において内容の限定された資料の取り扱い方として、絵、写真、グラフなどの取り扱い方を演習的に講義した。資料をもとに院生たちに発問を考えさせながら進むアクティブ・ラーニングの典型的な授業として成果があった。今後は大きな単元構造の設計の仕方をどのように身につけさせて行くか等が課題として出された。坂野教授の研究授業では、教育と法の関係について、学校教育活動が国の法令でどのような内容で規定され、地方公共団体がどのような条例や規則等に基づいているのか、そして学校で裁量できる範囲がどのようなものか

を、具体的な事例に則して検討された。院生の経験に基づかせながら研修制度を振り返らせることにより、主体的・対話的で深い学びが実現されていた。

全体を通して、①「理論と実践の往還」のための授業づくりや教材開発の具体的な方策について、②新学習指導要領に対応した内容について、③ストレート・マスターの実践経験不足を補う指導法について、④現職教員院生の実践経験を活用した指導法、等々についての議論が、昨年度に引き続いて活発になされた。教授陣も毎年必ず授業研究を行い研鑽に努めているという事実が、毎年、教職大学院の院生たちに良い印象を与えている。

②課題

現職院生とストレート・マスターとの経験の差異を講義の中でどのように扱っていくかという課題が毎年出されている。

（3）教授陣に対する調査について

FD の一環として、ストレート・マスターや現職教員院生の学修理解等に関する教員の所感を例年どおり調査した。アンケートは 4 点法で実施され、全 19 の項目について得点化している。調査結果は教職大学院会で公表され、データをもとに議論がなされる。今年度のアンケート結果についてはまだ集約途上だが、全教員についての各質問に対する傾向を把握し、昨年度と今年度との比較をしながら、学生の評価が高かった項目と、課題が残る項目とについて検討する予定である。

①成果

例年、ほとんどの項目が 3.6 以上であり、記述式の内容では「全てが満足」「実践に生かせる内容だった」など、肯定的な記述が多い結果となっている。

②課題

一部には改善が必要な指摘もなされているため、シラバス全体の内容と重点の置き方、演習的な講義のあり方等について来年度以降さらに検討し、改善を重ねていくことを共通理解している。

（4）相互授業参観について

各教員の授業を可能な範囲で相互に自由に参観している。

①成果

その際の学び・感想等を記録として残すようにし、互いの学びを蓄積されることによって次年度へ活かせるようにしている。

②課題

今年度は数回の実施に留まったため、まだ蓄積が少ない。今後どのように継続していくかが課題である。

（5）FD 委員会における情報交換

例年、毎月の教職大学院会終了後に FD 委員会を開催し、院生に関する諸問題、指導方針の確認と教授陣間における連携の取り方、教職大学院のカリキュラムや組織のあり方について検討している。

①成果

家庭的に問題をかかえている院生や、メンタルな面に不安がある院生についての教員の対応、

学校課題研究の進捗状況やその適切な指導のあり方、院生が学修しやすい環境の構築、課題の出し方についての基本的な考え方の確認等々について、活発な情報交換がなされ、それぞれの場面での方策についてよりよいあり方を検討することができている。

②課題

特に大きな課題はない。今後も定期的に継続していく予定である。

＜脳科学研究科＞

（1） 令和 2 年 2 月 15～17 日に玉川大学脳科学ワークショップを実施した（研修特化型施設レクトーレ湯河原；神奈川県湯河原町）。昨年度まで脳科学研究所の主催で研究点検活動（RD）に重点をおいて実施し、脳科学研究科の FD や大学院生教育などを併催の形式で実施してきたが、本年度は FD・研究教育アセスメント・院生キャリアパス講演に重点を置き、脳科学研究科の主催で実施した。全大学院生の研究発表に関して、教員全員で評価し、最終日に開催した FD 審査委員会において、評価結果を確認した上で、今後の研究指導へ反映する内容を確認した。また、同発表内容に関して擬似ピアレビューを開始した。年度を越えて 4 月中には完了する予定である。

（2）平成 30 年度に実施した玉川大学総合人間科学ワークショップにおける大学院生の研究発表を元に擬似ピアレビューを実施した（令和元年 6 月完了）。その結果を全教員で共有し議論した上で、効果的な研究指導のあり方を検討し、今後の研究指導に反映することを確認した。

（3）平成 31 年 2 月 13～15 日に開催された玉川大学総合人間科学ワークショップ（ホテルラヴィエ川良；静岡県伊東市）において実施された各大学院生の研究発表に関して、教員全員で評価し、最終日に開催した FD 審査委員会において、評価結果を確認した上で、今後の研究指導へ反映する内容を確認した。また、同発表内容に関して擬似ピアレビューを開始した。年度を超えて 4 月中には完了する予定である。

（4）大学院生が発表した学術論文の紹介ページを追加した。

（5）研究科評価アンケートについて、平成 30 年度から匿名性と回収率を両立するため、進級時に新年度の履修登録提出と共にアンケートを提出する形式を採用した。したがって、修了生が対象から外れてしまうというデメリットがあるが、進級生に関しては 100%の回収率を実現できた。なお、修了生に関しては匿名性を諦め、対面で脳科学研究科の教育に関する問題点を指摘してもらった。令和元年度もこの形式を採用することにし、令和 2 年度 4 月の履修登録時に回収する予定である。

Ⅲ　教員研修

新任教員研修会

令和2年度採用の新任教員（助教以上）総勢12名に対し、大学FD委員会の主催により、関係各部の協力・連携のもと研修会を実施した。この研修会は、今年度で18回目の開催となった。

日　　時：令和2年3月26日（木）　10：00～16：30
場　　所：大学教育棟 2014　620教室
対　　象：令和2年度採用教員（助教以上）
研修目的：玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を理解する。
　　専任教員としての業務に必要な知識を得る。
到達目標：玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を他者に説明することができるようになる。
　　専任教員としての業務を理解し、遂行することができるようになる。

（1）研修プログラム内容

10:00	開始／研修説明	教学部教務課
10:05	新任教員自己紹介	
10:20	講演「玉川大学の教育理念」	稲葉 興己 高等教育担当理事
11:10	大学教員の勤務について	人事部人事課
11:20	本学の ICT を活用した教育	学生支援センター 学修支援課
11:50	Notes システムと Notes 掲示板の活用	総務部 情報基盤システム課
12:10	昼食	
13:10	教学システム（UNITAMA）について	教学部 授業運営課・教務課
13:30	玉川学園のコンプライアンス方針	監査室
13:45	玉川学園の個人情報保護方針	総務部 総務課
14:00	休憩	
14:10	教学事項に関して	教学部 教務課・学務課・授業運営課
14:40	学生支援について	渡邊 透 学生支援センター長
15:00	休憩	
15:10	講演「これからの大学に必要なこと」	中村 好雄 教学部長
16:00	質疑応答	
	各種事務手続き	教学部 教務課
16:10	①写真撮影（キャンパスカード用） ②契約内容の説明等	人事部 人事課
16:30	研修会終了	

（２）配付資料・参考資料

資料	担当
令和２年度新任教員研修会＜研修プログラム＞	玉川学園人事部人事課
令和２年度新任教員研修会　名簿	
小原國芳『全人教育論』（任意）	玉川大学出版部
玉川学園編『愛吟集』（任意）	
「全人」2020 年３月号	
玉川大学の教育	稲葉 興己 玉川学園高等教育担当理事
大学教員の勤務について 看護休暇・介護休暇申出書 出勤簿 新規加入者向けリーフレット 私学共済制度 新規加入者向けリーフレット 身上異動届	玉川学園人事部人事課
玉川大学における ICT 活用	渡邊 透 学生支援センター長
教学システム UNITAMA について －担当授業、教室確認、シラバス、学生ポートフォリオ－ UNITAMA 教員業績について ～目的と操作方法～	教学部 授業運営課・教務課
コンプライアンス方針について コンプライアンスについて（冊子）	玉川学園監査室
学校法人玉川学園における個人情報保護の取組みについて 個人情報保護法ハンドブック 研修受講報告書	総務部総務課 （個人情報事務局）
学校法人玉川学園組織機構、玉川大学の概要 担当業務等について 学校法人玉川学園組織機構図（令和２年４月１日施行） 教学部の役割（学校法人玉川学園組織事務分掌細則） 教員ハンドブック『学部運営組織』抜粋資料	教学部教務課
ご着任にあたって 各種事務手続きについて 令和２年度 個人研究費説明会について	教学部学務課
令和２年度 新任教員研修会 教務事項 令和２年度 年間授業計画 「授業を通して修得できる力」のコモン・ルーブリック	教学部授業運営課
学生支援について	学生支援センター 学生支援課
これからの大学教員に必要なこと	中村 好雄 教学部長

（３）実施の成果

本学園で研究・教育活動を行うために必要となる事項について、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、各研修プログラムを縮小し、本来２日をかけて行う研修を１日で実施した。

本学における教育について、高等教育のコンテクストから参加者に理解を促すため、２つの講演「玉川大学の教育理念」、「これからの大学教員に必要なこと」を実施した。これにより、専任教員としての業務に必要な、教学事項や学生指導、個人情報保護に関する事項等だけではなく、大学で働く教員に期待されていることが何かを伝えることができた。

また、監査室による「玉川学園のコンプライアンス方針について」、総務部総務課による「学校法人玉川学園における個人情報保護の取組みについて」を実施し、教育・研究機関に勤務する教職員として自覚を促すことができた。

（４）課題と改善点

今年度は、プログラムの縮小によりこれまでとは違った研修となり、以下の課題と改善点が明らかとなった。

① これまでも各プログラムにおいては、限られた時間の中で、新任教員にとって必要な情報を提供できるように行っていたが、今回さらに凝縮され情報が精査された。しかし、研修日程が１日では、受講者にとって情報量がとても多くなってしまったため、２日が妥当だと考える。

② 新型コロナウイルス感染症防止のためキャンパスツアーは中止となったが、学内の施設把握は、本学園で研究・教育活動を行うために重要であるため、今後も継続した実施が必要である。

以上

参 考 資 料

参考資料１．大学 FD 委員会の議事内容

第 1 回大学 FD 委員会

日　時　：　令和元年 5 月 17 日（金）17：15～18：00
場　所　：　大学教育棟 2014　793 会議室 A
議　案　：　(1)　会議日程に関する件
　　(2)　FD 研修会等計画に関する件
　　(3)　学生による授業評価アンケートの実施について
報　告　：　(1)　各学部　今年度 FD 活動計画および授業参観計画の提出について
　　(2)　「平成 30 年度　ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の配付方法について
　　(3)　平成 30 年度大学教育再生加速プログラム事業報告および令和元年度事業計画について
　　(4)　他大学等提供のシンポジウム等および資料提供について

第 2 回大学 FD 委員会

日　時　：　令和元年 7 月 11 日（木）17：15～18：00
場　所　：　大学研究室棟　B104 会議室
議　案　：　(1)　各学部の FD 活動計画に関する件
報　告　：　(1)　各学部授業参観計画について
　　(2)　他大学開催 FD･SD フォーラムについて

第 3 回大学 FD 委員会

日　時　：　令和元年 9 月 13 日（金）15：00～16：00
場　所　：　大学教育棟 2014　793 会議室 A
議　案　：　(1)　授業改善への取組みに関する件
報　告　：　(1)　授業評価アンケートについて
　　(2)　FD･SD 研修の実施ならびに参加について
　　(3)　各学部秋学期授業参観計画について

第 4 回大学 FD 委員会

日　時　：　令和元年 11 月 19 日（火）17：15～18：00
場　所　：　大学教育棟 2014　793 会議室 B
議　案　：　(1)　大学教育力研修実施計画に関する件
　　(2)　新任教員研修会実施計画に関する件
報告・確認　：　(1)　学生による授業評価アンケートの実施について
　　(2)　ヨコハマ FD フォーラム開催のご案内について

第 5 回大学 FD 委員会

日　時　：　令和 2 年 1 月 22 日（水）17：15～18：15
場　所　：　大学教育棟 2014　793 会議室 B
議　案　：　(1)　大学教育力研修　分科会座長の選出に関する件
報告・確認　：　(1)　大学教育力研修日程について
　　(2)　令和元年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書作成スケジュールについて
　　(3)　アクティブ・ラーニング ワークショップの実施報告（12 月 17 日）について
　　(4)　令和 2 年度 新任教員研修会の日程について
　　(5)　令和 2 年度 非常勤教員研修会の日程について
　　(6)　玉川大学 AP フォーラム 2019 について
　　(7)　FD 担当者のための FD 丸わかりセミナーについて

第 6 回大学 FD 委員会

日　時　：　令和 2 年 3 月 16 日（月）15：00～16：00

場　所　：　大学教育棟 2014　793 会議室 A

議　案　：　(1)　授業評価アンケートに関する件

(2)　令和 2 年度 新任教員研修会の実施変更に関する件

報告・確認　：　(1)　令和元年度 大学教育力研修（2 月 21 日）実施報告について

(2)　令和元年度 非常勤教員研修会（3 月 19 日予定）の開催中止について

(3)　玉川大学 AP フォーラムの開催報告について

(4)　TP 研究会総会&プレ・ポスト WS のご案内について

参考資料２．大学院 FD 委員会の議事内容

第 1 回大学院 FD 委員会

日　　時　：　令和元年 5 月 22 日（水）10：00～11：00
場　　所　：　大学教育棟 2014　793 会議室 A
議　　案　：　(1)　年間会議日程に関する件
　　(2)　各研究科 FD 活動計画の作成に関する件
報　　告　：　(1)　「平成 30 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の配付について
　　(2)　資料の掲載方法について

第 2 回大学院 FD 委員会

日　　時　：　令和元年 8 月 8 日（木）15：00～16：00
場　　所　：　大学教育棟 2014　793 会議室 A
議　　案　：　(1)　今年度各研究科 FD 活動計画の中間報告に関する件
　　(2)　FD・授業評価の結果活用に関する監査結果および改善計画に関する件
報　　告　：　なし

参考資料３．ユニバーシティ・スタンダード科目「授業評価アンケート」様式

記入日　　月　　日	回答者学年　①1年　②2年　③3年　④4年　⑤その他

授業科目名

開講時限　　曜日　　限

担当教員名

Ⅰ．この授業に対するあなたの学修時間について

		5	4	3	2	1
		4時間以上	3時間～4時間未満	2時間～3時間未満	1時間～2時間未満	1時間未満
1	1回分の授業外の学修（予習、復習、課題など）にかけた時間	5	4	3	2	1

Ⅱ．この授業に対するあなたの取り組みについて

		5	4	3	2	1
		よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
2	この授業に積極的に参加した。	5	4	3	2	1
3	この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	5	4	3	2	1
4	どのような自主的・発展的な学修をしましたか。 □発表の前にプレゼンテーションの練習をした。 □授業の内容について友人と議論をした。 □授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。 □その他（　　）					

Ⅲ．この授業の進め方について

5	各回の授業のねらい・内容は明確であった。	5	4	3	2	1
6	教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	5	4	3	2	1
7	映像視覚教材（ビデオ、書画装置、パワーポイントなど）や板書が授業の理解に役立った。	5	4	3	2	1
8	教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	5	4	3	2	1

		5	4	3	2	1
		よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
Ⅳ. この授業を受けてみて						
9	新しい考え方・発想に触れた。	5	4	3	2	1
10	基本的知識が得られた。	5	4	3	2	1
11	多角的な視点から見る姿勢が身についた。	5	4	3	2	1
12	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	5	4	3	2	1
13	科目のもつ学問的意義を読み取れた。	5	4	3	2	1
14	学問的興味をかきたてられた。	5	4	3	2	1
Ⅴ. この授業を総合的に振り返って						
15	授業全体の目標・内容が明確であった。	5	4	3	2	1
16	授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	5	4	3	2	1
17	この授業をほかの学生に薦めたい。	5	4	3	2	1
Ⅵ. その他						
18	この授業の教室の大きさは適切であった。	5	4	3	2	1
19	この授業の受講者数は適切であった。	5	4	3	2	1

その他、意見、感想等を記述してください。
授業改善につながる建設的な意見をお願いします。授業評価と直接関連しない意見や誹謗中傷は控えてください。

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

参考資料４．玉川大学 FD 委員会規程

（平成 15 年４月１日　制定）
（平成 21 年４月１日　改正）
（平成 31 年４月１日　改正）

（目的）
第１条　玉川大学（以下「本大学」という。）教員の、教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として、大学ＦＤ（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「ＦＤ」という。）委員会（以下「本委員会」という。）を置く。
（組織）
第２条　本委員会は、委員長、委員、事務担当をもって構成する。
２　前項の委員長は教学部長とする。
３　委員は、各学部のＦＤ担当があたる。
４　委員等は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。
５　委員長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。
６　本委員会には学部ごとの分科会を設けることができる。
７　前項による分科会のまとめ役及び委員は学部長が選任する。
（任期）
第３条　委員の任期は１か年とする。ただし、再任を妨げない。
（運営）
第４条　本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。
２　委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。
（審議事項）
第５条　本委員会は、次の事項を審議する。
（１）　教育研究活動改善の方策に関する事項
（２）　初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
（３）　学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項
（４）　ＦＤに関する教員への各種コンサルティングに関する事項
（５）　教員のＦＤ活動の指針に関する冊子及びＦＤ活動報告書の刊行
（６）　部会からの報告・審議に関する事項
（７）　その他ＦＤに関連する事項
（分科会）

第６条　各分科会は、ＦＤ担当が取りまとめ、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。

２　各分科会にはＦＤ活動を円滑に進めるため、ＦＤｅｒ（ファカルティ・ディベロッパー）（以下、「ＦＤｅｒ」）を置く。ＦＤｅｒはＦＤ担当が兼ねることができる。

（答申）

第７条　委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。

（実施事項の決定）

第８条　前条の答申内容の実施については、大学部長会の議を経て学長が決定する。

（実施事項の運用）

第９条　前条により決定した実施事項に関する実際的運用に関しては、教務委員会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。

（事務主管）

第10条　本委員会に係る事務主管は、教学部が行う。

附　則

この規程は、平成 15 年４月１日から施行する。

附　則

この規程は、平成 21 年４月１日から施行する。

附　則

この規程は、平成 31 年４月１日から施行する。

参考資料５．玉川大学大学院 FD 委員会規程

（平成 19 年４月１日　制定）
（平成 29 年４月１日　改正）

（目的）
第１条　玉川大学大学院（以下「本大学院」という。）教員の研究教育活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として大学院ＦＤ（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「ＦＤ」という。）委員会（以下「本委員会」という。）を置く。
（組織）
第２条　本委員会は、委員長並びに委員、アドバイザー及び事務担当をもって構成する。
２　前項の委員長及び委員等は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。
３　学長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。
４　本委員会には研究科（専門職学位課程は専攻）ごとの分科会を設けることができる。
５　前項による分科会のまとめ役は研究科長（教職大学院科長含む）が選任する。
（任期）
第３条　委員の任期は１か年とする。ただし、再任を妨げない。
（運営）
第４条　本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。
２　委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。
（審議事項）
第５条　本委員会は、次の事項を審議する。
（１）　教育研究活動改善の方策に関する事項
（２）　初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
（３）　学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項
（４）　ＦＤに関する教員への各種コンサルティングに関する事項
（５）　教員のＦＤ活動の指針に関する冊子及びＦＤ活動報告書の刊行
（６）　分科会からの報告・審議に関する事項
（７）　その他ＦＤに関連する事項
（分科会）
第６条　各分科会は、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。
（答申）
第７条　委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。
（実施事項の決定）

第８条　前条の答申内容の実施については、大学院研究科長会の議を経て学長が決定する。

（実施事項の運用）

第９条　前条により決定した実施事項に関する実際的運用に関しては、研究科会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。

（事務主管）

第 10 条　本委員会に係る事務主管は、教学部が行う。

附　則

この規程は、平成 19 年４月１日から施行する。

附　則

この規程は、平成 29 年４月１日から施行する。

令和元年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉川大学 大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会
令和 2 年 7 月 発行
〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1

令和 2 年 7 月発行
発行　　玉川大学　大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会
〒194-8610　東京都町田市玉川学園 6-1-1
Tel ： 042-739-8802（教学部教務課）